

小松市中海遺跡

県営ほ場整備事業小松東部地区関係
埋蔵文化財調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター

小松市中海遺跡

県営ほ場整備事業小松東部地区関係
埋蔵文化財調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター

序

地域の人びとがさりげなく言い伝えている地名の中には、しばしば遠い過去の事実を秘めていることがある。先年、小松市八幡町地内の通称キヨミズデラで行った発掘調査では、伝承の通り古代寺院跡が出現したのみならず、「浄水寺」と書いた墨書土器が検出され、地名伝承のもつ意義の大きさに驚かされたものである。「末」「洲衛」「末坂」などの地名が須恵器生産地を示す場合が多く、「国府」「古府」「国分」などは国の中枢地を現すものとして重視される。地名はよく吟味して用いれば、かなり重要な過去の情報を提供してくれるものであり、その意味では、大切な歴史的遺産の一つだといえよう。

中海遺跡はかなり広大な範囲を占め、縄文時代集落跡に始まり、弥生時代後期以降は中世に至る各時期の遺構・遺物を検出している。とりわけ、重要なのは平安時代後期（一二世紀代）に属する遺構群の発見であろう。調査は圃場整備を原因としており、発掘は水路部分を対象としたトレンチ法に限定したが、その狭小な発掘区域内に、かなりの密度で掘立柱建物跡や土壇などの遺構を検出している。出土品には中国製の白磁の椀や皿も含まれていた。この時期には相当数の建物が集中していた地域であった。

平安時代後期の梯川流域は、『和名類聚抄』にも現れる軽海郷が存在した。中海もその一角を占めていた可能性が高い。当時の軽海郷は、白山信仰の拠点だった白山宮の支配を強く受けていた地域でもあり、いわゆる中宮八院（中宮の末寺）のうち、七ヶ寺までが同郷に所在したといわれる。これら白山宮勢力は梯川上流域の山間に点在し、その水源を握る形で、国衙勢力（国司）と対立関係にあり、安元二年（一一七六）には、八院の一つ鶴川の湧泉寺が焼き打ちされ、ついに国司藤原（近藤）師高らが解任される事態（安元事件）を惹起している。

中海遺跡の範囲内（第3地点）に、通称チョウガンジもしくはチョガンジと呼ばれる地点がある。上述の中宮八院の寺名は「白山八院衆徒等申状案」（金沢文庫蔵）に記されるが、その中に「長寛寺」の名がみえる。今ただちに、当遺跡の一角をもって八院の一つ長寛寺跡と断定することは妥当でなく、今後も十分な検討を重ねねばならない。今回の発掘によっても、寺院跡だとの確証を得てはいないのである。しかし、年代的にもまた遺構の状況からいっても、否定すべき論拠もとくに見出だしていないのであり、むしろ、今度の発掘調査の結果、長寛寺跡として最も有力な候補地を探り当てたと言うべきであろう。

文末であるが、執筆の労をとられた米沢義光氏を始め、関係各位に心からお礼申しあげたい。

所長 橋本澄夫

例 言

1. 本書は石川県小松市中海町地内に所在する中海^{なかうみ}遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業小松東部地区中海工区施工に関係し、同課の依頼により、昭和56年度に第1次調査を、昭和57年度に第2次調査を計画し、石川県立埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3. 本遺跡の調査は、ほ場整備事業に伴う排水路設置箇所をその主対象とし、田面部に存在する遺跡については、事前の分布調査結果にもとづき工法の変更等の処置をとって現状保存をはかっている。調査の期間、面積および担当者は次の通りである。

第1次調査 昭和56年5月20日～6月20日、約410㎡

東 泰三（県立埋蔵文化財センター主事、現在加賀市立山代中学校教諭）

湯尻修平（県立埋蔵文化財センター主査）

第2次調査 昭和57年5月9日～6月28日、約460㎡

米沢義光（県立埋蔵文化財センター主事、現在県立松任農業高校教諭）

なお、第1次調査では北野博司（県立埋蔵文化財センター調査員、現在埋蔵文化財センター主事）、滝上秀明（埋蔵文化財センター長期研修生、現在能美郡辰口町社会教育課主事）、第2次調査では中村英洋（県立埋蔵文化財センター調査員、現在七尾市御成中学校教諭）の補助と協力を得た。記して各氏に感謝したい。

4. 本遺跡の調査費は、昭和56・57年度は文化庁の補助を受け、昭和60・61年度に実施した遺物整理および本報告書の刊行については、耕地整備課の費用負担と一部を文化庁の補助事業とした。
5. 調査の実施にあたり、地元中海町はもとより本書第2章に記した各機関および個人のほかの方々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県小松土地改良事務所、小松市教育委員会社会教育課、社団法人石川県埋蔵文化財整理協会

高堀勝喜（石川考古学研究会常任顧問）、小林達雄（国学院大学助教授）、小島俊彰（金沢市立美術工芸大学助教授）、藤 則雄（金沢大学教育学部教授）、渡辺 誠（名古屋大学助教授）

6. 出土遺物の整理作業は、(社)石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。

辻森由美子、勝島栄蔵、北田琴美、馬場正子、正木直子、山瀬千奈美が担当した。

写真撮影は各担当者と調査員の他、山本直人（埋蔵文化財センター主事）、安宅 務（埋蔵文化財センター調査員）が分担した。図版作成は湯尻、米沢、山本が分担し、安宅、本田秀生（埋蔵文化財センター調査員）が補佐した。

7. 石器の石質同定については、藤 則雄氏に依頼し、石器の材質に関する玉稿を受けている。
8. 本書の編集は湯尻があたり、次のように分担して執筆した。なお、米沢氏と藤氏には御多忙

にもかかわらず原稿の執筆を快諾していただき、深く感謝したい。

湯尻修平（第1章、第2章、第3章第1・2節、第4章第1節）

米沢義光（第2章第3節、第5章、第6章、第7章）

山本直人（第3章第3・4・5・6・7節、第4章第3・4節）

藤 則雄（第4章第2節）

9. 本書の遺構等の挿図は、方位は全て磁北を表示し、水平基準は海拔高で表示してある。
10. 本遺跡の発掘調査で得た諸記録や写真、出土遺物等の資料は、県立埋蔵文化財センターにおいて一括保管している。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境…………… (湯尻) …… 1
- 第2節 歴史的環境…………… (湯尻) …… 1

第2章 調査に至る経緯と経過

- 第1節 調査に至る経緯…………… (湯尻) …… 5
- 第2節 第1次調査の経過…………… (湯尻) …… 5
- 第3節 第2次調査の経過…………… (湯尻・米沢) …… 6

第3章 第1次調査の遺構と遺物

- 第1節 排水路調査区の遺構と出土土器…………… (湯尻) …… 10
- 第2節 再分布調査の遺構と出土土器…………… (湯尻) …… 20
- 第3節 11-514T区・11-516T区・11-518T区出土土器 …… (山本) …… 27
- 第4節 土製品…………… (山本) …… 49
- 第5節 石 器…………… (山本) …… 50
- 第6節 石製品…………… (山本) …… 63
- 第7節 動物遺体…………… (山本) …… 63

第4章 第1次調査のまとめ

- 第1節 遺 構…………… (湯尻) …… 64
- 第2節 中海遺跡からの石器の石質についての考察…………… (藤) …… 65
- 第3節 北陸における縄文中期中葉の炉…………… (山本) …… 70
- 第4節 石川県における縄文時代の網漁業…………… (山本) …… 76

第5章 第2次調査の層序と遺構

- 第1節 第1地点の層序と遺構…………… (米沢) …… 81
- 第2節 第2地点の層序と遺構…………… (米沢) …… 93
- 第3節 第3地点の層序と遺構…………… (米沢) …… 93

第6章 第2次調査の出土遺物

- 第1節 第1地点の遺物…………… (米沢) …… 96
- 第2節 第2地点の遺物…………… (米沢) …… 102
- 第3節 第3地点の遺物…………… (米沢) …… 102

第7章 第2次調査のまとめ

- 第1節 第1地点の遺構と遺物について…………… (米沢) …… 131
- 第2節 第3地点の遺構と遺物について…………… (米沢) …… 132

図版目次

- 図版 1 上 遺跡周辺の航空写真
下 第1次調査区遠景(東より)
- 図版 2 第1次調査 全景(西より)
全景(東より)
- 図版 3 第1次調査 上 排水路調査区A区発掘状況(西より)
下 第1号住居跡(南より)
- 図版 4 第1次調査 上 排水路調査区C区ピット・土壌群(西より)
下 排水路調査区C区10~13号土壌(北より)
- 図版 5 第1次調査 上 排水路調査区D区凹部と分布調査トレンチ(北より)
下 D区凹部全景(西より)
- 図版 6 第1次調査 上 D区凹部全景(北より)
下 D区凹部全景(西より)
- 図版 7 第1次調査 上 11-514T区全景
下左 11-514T区炉跡検出状況
下右 11-514T区炉内浅鉢出土状態
- 図版 8 第1次調査 上 11-514T区炉跡完掘状況
下左 11-514T区炉跡完掘状況
下右 11-514T区炉跡上の礫群
- 図版 9 第1次調査 上 11-514T区炉跡周辺土器出土状態
下左 11-514T区土器出土状態
下右 11-514T区土器出土状態
- 図版10 第1次調査 上 11-516T区方形石組状遺構
下左 11-516T区土器出土状態
下右 11-516T区土器出土状態
- 図版11 第1次調査 上左 11-518T区土器出土状態(北より)
上右 11-518T区土器出土状態(南より)
下左 11-518T区完掘状況
上右 11-518T区土器・石器出土状態
- 図版12 第1次調査 上 11-516T区包含層II(上層)断層(西より)
中 11-518T区土器出土状態(東より)
下左 11-518T区土器出土状態
下右 11-518T区土器出土状態
- 図版13 第1次調査 上 深鉢(第14類)
下 深鉢(第25類)
- 図版14 第1次調査 上 浅鉢(第9類)
下左 台付土器の台部分
下右 台付土器の台部分
- 図版15 第1次調査 上 11-514T区出土土器(縮尺1/3)
下 その他の試掘区出土土器(縮尺1/3)
- 図版16 第1次調査 11-516T区出土土器(縮尺1/3)
- 図版17 第1次調査 11-518T区出土土器 1(縮尺1/3)
- 図版18 第1次調査 11-518T区出土土器 2(縮尺1/3)
- 図版19 第1次調査 11-518T区出土土器 3(縮尺1/3)

- 図版20 第1次調査 上 C・D区出土土器(縮尺1/3)
下 土製品・手捏土器(実大)
- 図版21 第1次調査 上左 網代圧痕Ⅰ類(縮尺1/3)
下左 網代圧痕Ⅱ類(縮尺1/3)
下右 網代圧痕Ⅳ類(縮尺1/3)
- 図版22 第1次調査 上 打製石斧(縮尺1/3)
下 磨製石斧(縮尺1/3)
- 図版23 第1次調査 上 磨石・敲石(縮尺1/3)
下 石皿(縮尺1/3)
- 図版24 第1次調査 上 切目石錘(縮尺1/2)
下 礫石錘(縮尺1/2)
- 図版25 第1次調査 上 石鏃・石錐・石匙(実大)
下 器種・用途不明石器・不定形石器(縮尺1/2)
- 図版26 第2次調査 上 第1地点1・2区(西より)
下 第1地点3・4区(東より)
- 図版27 第2次調査 上 第1地点1号土壙・2号溝
下 第1地点3号土壙
- 図版28 第2次調査 上 第1地点4号土壙(東より)
下 第1地点4号土壙遺物出土状況(西より)
- 図版29 第2次調査 上 第1地点6号溝(北より)
下 第1地点5号溝(西より)
- 図版30 第2次調査 上 第1地点竪穴状遺構(南より)
下 第1地点9区下層(整地層)完掘状況(東より)
- 図版31 第2次調査 上左 第1地点9区下層(整地層)土師器出土状況
上右 8区包含層須恵器出土状況
中 第1地点9区下層(整地層)土師器出土状況
下 6・7区落ち込み遺物出土状況
- 図版32 第2次調査 上左 第3地点9区完掘状況
中右 2号柱列西端柱根
下左 2号柱列東端P-11柱根出土状況
下右 9区遺物出土状況
- 図版33 第2次調査 出土土器
- 図版34 第2次調査 出土土器
- 図版35 第2次調査 出土土器
- 図版36 第2次調査 出土土器
- 図版37 第2次調査 出土土器
- 図版38 第2次調査 出土土器
- 図版39 第2次調査 出土土器
- 図版40 第2次調査 出土土器
- 図版41 第2次調査 出土土器
- 図版42 第2次調査 出土土器
- 図版43 第2次調査 出土土器・石器

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

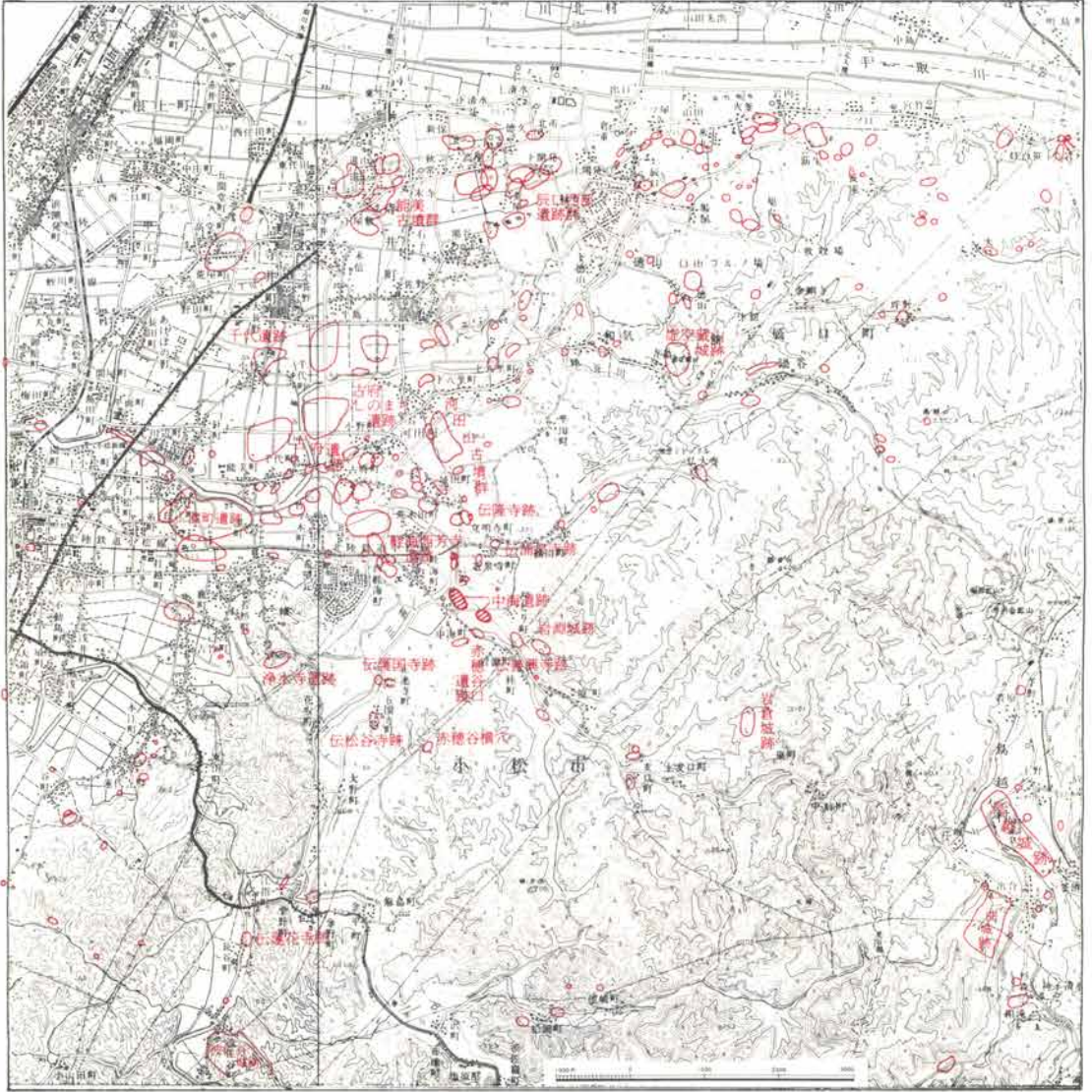
小松市は県西南部に位置する石川県第2の都市で、人口10万余を数える。南は福井県、西は加賀市に接し、西北は日本海に臨む。市の東南部は白山連峰に連なる丘陵・山岳地帯で、^{かけはしがわ}梯川水系と手取川支流の大日川水系に分けられる。西部は加賀平野の一部をなし、市西部の梯川流域の沖積平野に市街地が発達する。梯川支流の西俣川、大杉谷川、郷谷川、^{かすかみかわ}淬上川、鍋谷川などが南部の大日山系の山間部に源を発し、小規模な河岸段丘を中心とする丘陵地帯をぬって北あるいは西に流れる。中海遺跡の所在する中海町は、市の北部に位置している。丘陵地を西南から梯川、東南から支流の淬上川が流れ、中海集落北端の軽海新橋付近で合流して、平野部へと抜ける。淬上川は、小松市と石川郡鳥越村の境界にある^{ひとぼしやま}火燈山西麓から流出し、原町を経て中海町で合流する。この間、典型的な河岸段丘が発達し、原始・古代においても格好の居住区域を形成している。また、中海町と鳥越村を結ぶ道路は、古来より交通の要路として重視されてきたところでもある。中海町の南・西北・東北は丘陵地で、集落や耕地は谷底上の平野を中心に広がる。現在の中海町は、旧中海村の中心集落であった大字中^{なか}が、昭和30年の小松市編入の際、中海町と改称したのであって、淬上川の左岸に集落が存在する。中海遺跡は、淬上川右岸の河岸段丘上に立地する、縄文時代から中世に至る長期の複合集落遺跡である。

第2節 歴史的環境

梯川流域を中心とした小松市の東部域は、県内でも遺跡の密集度が極めて高い地域の一つである。近年の開発事業に伴う埋蔵文化財の緊急調査も多く実施されており、特に古墳時代から中世に至る良好な考古資料が蓄積されてきている。

縄文時代の遺跡の調査例はまだ少ないが、中海遺跡の北西約1.5kmの軽海西芳寺遺跡は、中期中葉から後葉にかけての集落遺跡である。埋蔵文化財センターが昭和60年に実施した発掘調査では、縄文中期後葉の石組炉をもつ竪穴住居跡1棟と多数の土壌群が発掘されている。中海集落背後の狭小な河岸段丘上に位置する赤穂谷口遺跡は、縄文後・晩期の遺跡で赤穂谷温泉入口の畑地一帯に土器・石器が散布している。昭和41年に中海町史編さん委員会によって発見されており、採集された縄文土器、石器などは、中海町公民館に保管されている。

弥生時代の遺跡は、周辺地域を含めても確認調査された遺跡は少ない。しかし、梯川中流域における遺跡の発掘調査によって断片的な資料が得られつつあり、白江念仏堂遺跡、白江梯川遺跡、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡などから弥生後期後半の土器が出土している。梯川中流域において遺跡が爆発的に増えるのは、古墳時代前期以降のことであって漆町遺跡、白江梯川遺跡などで

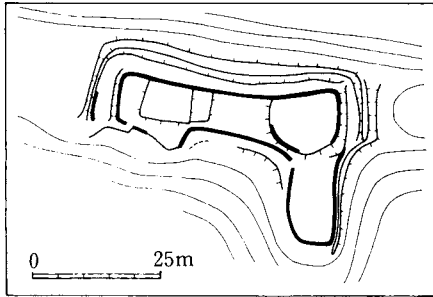


第1図 周辺の遺跡

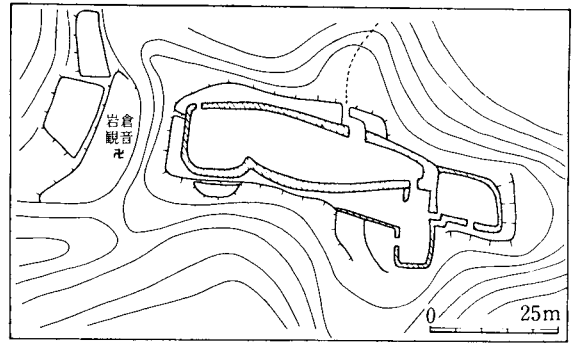
は大規模な集落が形成されている。遺跡の分布状態も拡大しており、中海遺跡でも少量ではあるが古墳前期の土師器が出土している。一方、古墳時代の象徴ともいえるべき古墳群の存在も多い。中でも東部丘陵に所在する河田山古墳群と埴田古墳群は、重要である。河田山古墳群は、団地造成に関係して市教育委員会が現在も調査を継続中であるが、前方後方墳1基・前方後円墳1基を含む総数50基以上で構成される前期から後期の一大古墳群である。埴田古墳群も数基の円墳からなる古墳群であるが、後明神山古墳からは短甲、冑、直刀、環鈴などが出土し、無常堂古墳からは四獣鏡、短甲、眉庇付冑、短剣、刀子、鉄鏃、勾玉、櫛が出土している。古墳中期を中心とした群とみられる。また、八幡町地内に現存する八幡大塚は、古式の前方後方墳とみることも可能

であり、注目しておきたい。古墳時代も後期以降になると、遺跡数および規模は減少し、漆町遺跡の一部と佐々木ノテウラ遺跡、中海遺跡などで断片的に確認されるにすぎない。

奈良時代の中頃には、加賀地方でも初期荘園が少数ながら成立したようで、条里制も佐々木町周辺および対岸の古府台地一帯と、鍋谷川を挟んで北方の平地に施行されたようである。平安時代前期の弘仁14年(823)には、越前国より分離して加賀国が立国する。加賀国府の所在地については諸説があるが、古府台地周辺説が現在のところ有力である。台地上の十九堂山遺跡では布目瓦の出土から、加賀国分寺としての可能性が説かれ、梯川に臨む古府遺跡で平安中期(10世紀中葉)の軒平瓦が出土していることなどによる。これと対応するかのように、平安中期(10世紀前～中葉)以降の梯川中流域の遺跡は、飛躍的な発展を示す。古府しのまち遺跡、古府遺跡、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などの発掘調査結果からの結論であるが、この段階での国府所在地として相応の遺跡動態を物語るようである。また、昭和59年に埋文センターが調査を実施した八幡町の浄水寺跡きよみずでらの調査は、平安中期から後期(10世紀中葉から11世紀末頃)の地方寺院のあり方を示す重要な成果をもたらした。大規模な造成地に建物群を計画的に配し、大量の墨書土器、木造僧形像、仏具、輸入陶磁器類など多彩な出土遺物を検出している。これは従来の認識を変える衝激的な発見であった。平安中期から後期にかけて、漆町遺跡や浄水寺跡の成果からみても、この地域における在地有力者の台頭が顕著であり、同時に律令体制の根幹も大きく揺れ動いたとみられる。寛弘9年(1012)、加賀守源政職の悪政を加賀の百姓等が訴え出た事件にも象徴されている。梯川中流域と湊上川などの支流による河谷部を含め、「和名抄」にみる能美郡の「加流美」郷に比定されるが、長寛元年(1163)に原型が成立されたとする「白山之記」⁽¹⁾に「乃美郡軽海郷」の地名が見える。また、「白山之記」には、白山の加賀馬場中宮の末寺群である「中宮八院」について、「中宮八院ハ、護国寺 昌隆寺 松谷寺 蓮花寺 善興寺 長寛寺 涌泉寺 隆明寺 隆明寺外七院ハ軽海郷内也」とあって、軽海郷の中に八院中の七院が存在したことがわかる。安元2年(1176)に八院のうちの涌泉寺で起きた安元事件は、加賀における古代秩序の決定的崩壊となった。事件は、加賀守近藤師高の目代である弟の近藤師高が、白山宮の圧力を排除する目的で、涌泉寺に立ち入ってこれを焼き打ちにしたのである。白山宮と本寺である延暦寺の強訴により、近藤兄弟の解任、配流という決着をみたが、鹿ヶ谷事件を誘発して、治承・寿永の内乱の導火線となっている。中宮八院の所在地については、考古学的な調査例もなく、伝承の域を出ないが、軽海郷の東境の大日山系を超える三坂峠(中海一鳥越村別宮)、三谷越(沢一鳥越村別宮)、五十谷越(観音下一鳥越村別宮)などの山道によって、白山宮加賀馬場の領域である手取谷とのつながりが深かったことは、地理的条件からみても十分納得できる。軽海郷は嘉暦4年(1329)に武蔵国の称名寺領となるが、金沢文庫の文書に、護国寺、昌隆寺、松谷寺、長寛寺、蓮華寺、涌泉寺と末寺岩蔵寺の敷地界が11世紀中葉から12世紀中葉頃に定められたとの記事がみえる⁽²⁾。中海遺跡の第2次調査第3地点で得た12世紀中頃の遺跡は、あるいはこの中宮八院と関連する遺跡であるのかも知れない。いずれにしろ、平安時代中期以降において、軽海郷とその中に設けられた寺院群は、国府を取り囲む形で配置されていた可能性が高く、梯川の源をおさえると



第2図 岩淵城跡略図（石川考古学研究会原図）



第3図 岩倉城跡略図（石川考古学研究会原図）

ともに、白山加賀馬場への要路に存在することに注目すべきであろう。

鎌倉時代以降における中世の考古資料は、漆町遺跡、白江梯川遺跡などで調査されているが、中海町周辺では、淬上川をややさかのぼった右岸丘陵上にある岩淵城跡と、さらに上流の山の頂上にある岩倉城跡が知られる。石川考古学研究会の実施している城館跡調査の成果の一部を第2・3図に参考として掲げた⁽³⁾。特に岩倉城跡は、その規模こそ小さいが立派な土塁をめぐらせた遺存状態の良好な城跡である。中海町から三坂峠を超えると、手取谷の一向一揆の最後の拠点となった鳥越城跡とその支城である二曲城跡が位置する。鳥越城跡は三次にわたる発掘調査によって、連郭式の構造をもつ大規模な城跡であることが判明した。天文8年（1539）3月、本願寺顕如が織田信長に屈して石山合戦が終わり、同年4月に加賀一向一揆の中核、金沢御坊が織田方の柴田勝家によって落とされるが、能美丘陵と白山麓は一向一揆の拠点となって頑強な抗戦を展開した。しかし、天文11年（1542）11月、鳥越城・二曲城ともに落城し、戦国時代の加賀国の歴史を動かした一向一揆は、終焉をつげたのである。岩淵城・岩倉城はその位置からみて、この一向一揆に関する城とみられるが、今後の調査が待たれる。中海町地内では、集落背後の谷合いに赤穂谷横穴群（4～6基）と松の木谷横穴群（6基）の存在が知られているが、赤穂谷横穴群の観察から、中世の横穴遺構に含まれるものとみておきたい。

註

- (1) 「白山之記」は白山比咩神社所蔵文書であるが、日本海文化研究室編『白山史料集上巻』57頁の記事による。
- (2) 県立図書館伊林永幸氏の教示による。
浅香年木 1981年 『治承・寿永の内乱論序説』 法政大学出版局130頁以降に金沢文庫所蔵文書について論考がある。
- (3) 石川考古学研究会は、県内の城館跡の調査を継続中であり、追って詳細な報告書が刊行される予定である。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

石川県農林水産部耕地整備課は、小松市の東部域にあたる地域の水田195haを対象に、県営ほ場整備事業小松東部地区の実施を策定した。事業の目的は、基盤整備により1筆30a区画の大型ほ場とし、用排水路の改良を進めて稲作労働の大型機械化をはかり、営農体系の近代化によって農業経営の安定をはかることにある。事業の期間は昭和46年から61年度までであった。当該事業にかかる埋蔵文化財の調査は、昭和48年度に小松市古府町地内の通称しのまち一帯に所在する、古府しのまち遺跡の発掘調査が、県教育委員会と小松市教育委員会によって実施され、平安時代後期の良好な土器資料が発掘された。ほ場整備事業は昭和56年度から中海町地内にも進められることになったが、事業の予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である中海遺跡が所在したため、その年の4月に県小松土地改良事務所から埋蔵文化財センターに対して照会があった。センターでは10月下旬に分布調査を実施したが、縄文時代（A地区）と古墳時代（B地区）の2カ所の遺跡を確認し、田面の設計高と埋蔵文化財の保護について協議を行った。遺跡の存在する範囲で影響が生じる範囲については盛土施工の処置で対応することで合意した。12月8日に分布調査結果をもとに変更した設計書ができあがったが、遺跡の保護のための客土工事を行った場合、かなりの工事費増が見込まれる結果となった。センターでは工事費増による地元負担経費の増が生じないように協議を続けることにした。保存処置の範囲はA地区1.9ha、B地区4.4haである。昭和57年2月4日に至り、土地改良事務所担当技師と地元代表の方が訪ずれ、予想外に遺跡の範囲が広く、地元としては整備後の換地が問題になっているとの説明があった。換地作業を予定通り行うためには、遺跡の範囲を更に細かく確定する必要があることと、県道の北側も整備事業を進めたいので、この区域についても分布調査を実施して欲しいと要望があった。センターでは、これを受けて4月上旬に分布調査を実施し、平安時代後期～中世の遺跡（C地区）を確認した。A地区とB地区の遺跡について、田面部は盛土施工により保存する処置を取り、排水路部分は2カ年に分けて発掘調査を実施することになった。また、A・B両地区の範囲再確認調査とC地区の調査は、この発掘調査と併行して行うことで合意した。

第2節 第1次調査の経過

第1次調査は、協議の結果をもとにA地区（通称イシボトケ）のほぼ中央を東西に縦断する排水路部分と、田面部の再分布調査を実施した。調査期間は昭和56年5月20日から6月30日までであったが、全体で約410㎡の調査を行った。A地区では、縄文時代中期後葉の遺構と遺物を多く発掘したが、一部で古墳時代後期の遺構・遺物を確認した。

昭和57年5月20日、現地で小松土地改良事務所苗代指導係長と打ち合わせ。現場小屋の設置。機材等搬入の準備作業。5月22日から発掘作業着手。2×20mを大区画とし、A～F区とする。A～C区では縄文土器、石器が多く出土。5月27日にはD～F区にも作業進行。ここでは須恵器・土師器も出土。Pitなども存在する。5月31日からA～C区の遺構検出作業を進め、順次発掘を行なう。D区では礫の少ない凹部が確認され、掘り下げを進める。6月7日から発掘作業と併行して、実測図の作成と写真撮影を行なう。6月11日～13日には断面図の作成作業と写真撮影作業を断続的に行なう。13日には排水路部分の調査終了。6月14日からトレンチを設定して分布調査に着手。11-514・11-516・11-518トレンチなどで多くの縄文土器・石器出土。11-518トレンチでD区からの落ち込み部を確認。11-516トレンチで中期中葉の炉跡1基検出。トレンチ埋戻しの後、6月30日をもって調査終了。この間、分布調査結果の報告説明を土地改良事務所に行なう。また、6月28日に現地で新聞記者発表。調査の結果から縄文時代中期後葉の大溝が存在する可能性を指摘。

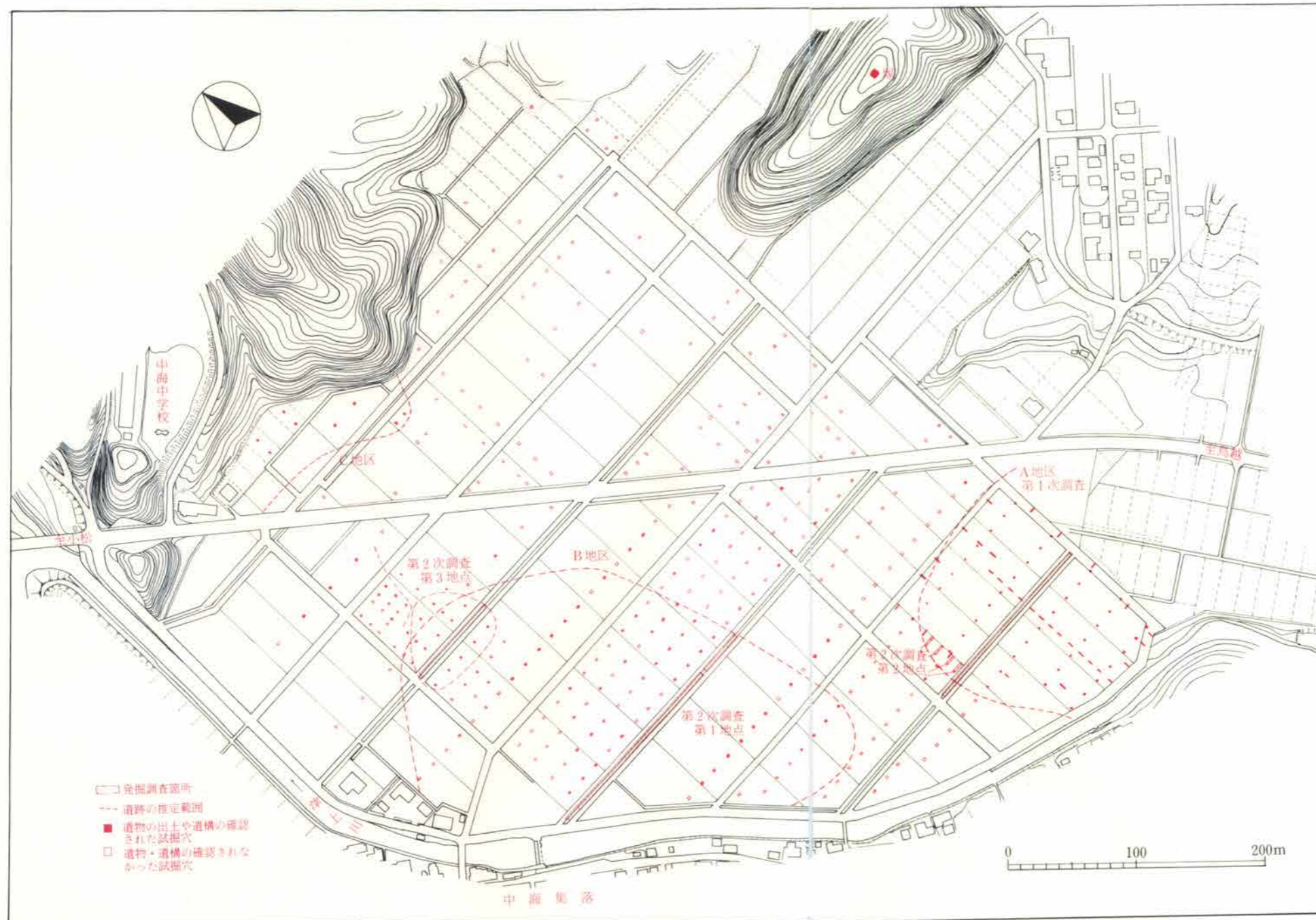


調査関係者(職名は当時) 田嶋明人(埋文センター係長)、湯尻修平、東 泰三(埋文センター主事)、滝上秀明(埋文センター長期研修生・辰口町教育委員会主事)、北野博司(埋文センター調査員)、苗代秀治(小松土地改良事務所指導係長)、嶋田弘行(中海工区工区長)、北川力造、野村そと、源 政次、松登そと、市森石松、嶋田たみ、竹内弘幸、大丸敏子、野村昭子、田島澄子、市森ゆき、亀田きみえ、野村みか、木道 夏、藤田綾子、吉岡武雄、加藤久太郎、村田喜作、中田茂雄、中田きく、亀田幸太郎

第3節 第2次調査の経過

第2次調査は、B地点の排水路部分を中心に調査を実施した。土地改良事務所と打ち合わせを進めながら調査の実施順に第1～第3地点と呼称した。3地点での発掘総面積は約460㎡である。第1地点では、幅2m、延長164mのトレンチを排水路部分に設定したが、調査区の東半部では古墳時代前期と古墳時代後期(7世紀代)の遺構・遺物を確認し、西半部では古墳時代後期(6世紀代)と平安時代後期の遺構・遺物が





第4図 調査区の位置図

多く存在した。第2地点は第1次調査地の西端部にあたる箇所でのトレンチ調査であった。古墳時代の手づくね土器が出土している。第3地点は、第1地点の北約160mに平行する排水路部分に設定した幅1.5m、延長164mのトレンチである。平安時代後期の遺構・遺物が、まとまった状態で出土している。付近の通称名をチョウカンジとかチョガンジとかいう場所である。

昭和58年5月9日～13日、現地で小松土地改良事務所苗代指導係長と打合わせ。現場小屋の設置。機材等の搬入、第1地点での準備作業。5月12日にC地区として立ち合い調査を実施することで合意していた、中海小学校背後の遺跡が、仮排水の掘削工事により一部破壊される。土地改良事務所に事態を連絡するが、工事は完了に近くどうしようもない。嚴重に注意する。5月18日から第1地点の発掘作業に着手。24日までに1～9区の遺物包含層の掘り下げと、遺構検出作業と遺構の発掘を進める。掘りあがった遺構から順に写真撮影と実測作業を行なう。6月に入って6～9区の発掘と遺構検出作業に着手。7日から9区堅穴状遺構の実測と写真撮影を行ない、6月10日で第1地点の調査を終了する。

11日に第2地点の調査実施。土器は出土するが遺構は検出されない。周辺の分布調査を補足的に行って調査を終了。6月13日から第3地点の発掘作業に着手。15日から8・9区の掘り下げ。9区で多角柱に面取りした柱根2点出土。平安後期の遺物が多い。13日以降は梅雨となり、晴れ間をみて調査続行。18日から24日まで8・9区の遺構検出と発掘作業を継続。24日に7区を発掘する。遺物は出土するが、遺構は存在しない。第3地点の調査終了。25日から27日に第3地点周辺の分布調査を実施。この地点の平安時代の遺跡分布範囲が約80m×60mであることが明らかとなった。6月28日に試掘穴の土層観察等の作業の後、埋め戻しを行い、午後は現場からの機材を撤収する。以上で第2次調査の全日程を終了する。

調査関係者（職名は当時） 米沢義光（埋文センター主事）、中村英洋（埋文センター調査員）、苗代秀治（小松土地改良事務所指導係長）、嶋田弘行（中海工区工区長）、中田茂雄、市森石松、源 政次、亀田幸太郎、田中貞雄、東 みよ、中田きく、嶋田たみ、松登そと、入口利一、田島澄子、中田ミナ



第3章 第1次調査の遺構と遺物

第1節 排水路調査区の遺構と出土土器

第1次の調査は、A地区（通称イシボトケ）とし縄文時代中期を中心とする集落遺跡を対象とした。発掘調査は遺跡のほぼ中央を東西に縦断する排水路部分約260m²の調査区と、田面部におけるトレンチ31カ所、約150m²の再分布調査を行っている。排水路予定地での調査は、幅2mの調査区を長さ20m単位の大区画として、東から西（湊上川方向）へA～G区とし、更に各々を2m画の小区画として1～10まで呼称した。再分布調査においては、排水路調査区センターを中心に5m画の方眼を設定した上で、東西方向に0～30、南北方向に500～535の番号を付し、その交点を各トレンチの名称とした。（別添全体図参照）

排水路部分の調査区では、最西部で既設の排水路によって攪乱された箇所もあったが、遺物包含層の状態は比較的良好であった。基本的な土層々序は、15～20cmの耕土の下に3～10cmの床土が存在し、20cm前後で遺物包含層の上面に到達する。包含層は2層に分かれ、A～C区にかけては暗い茶褐色土層の包含層Iとその下部に存在する黒茶褐色土層の包含層IIが確認された。包含層Iは、縄文土器とともに古墳時代後期を中心とした須恵器や土師器を少量ながら含んでおり、古墳時代後期以降の包含層とみられた。また、包含層Iの状態が西側の湊上川沿いのトレンチでは50cmを超える厚さとなっていたことから、昭和31年に実施されたほ場整備の際に縄文時代の包含層を削って搬んだ層であると判断された。包含層IIは攪乱を受けていない縄文時代の包含層で、厚さが10～15cmとそれ程厚くはないが多くの土器が出土した。調査区のほぼ全面に認められたがE区より西側では、削平を受けてその遺存状態は良くない。包含層IIの下にA・B区とD・E区の一部では厚さ10～20cmの黒色土で多量の凝灰岩礫を含む無遺物層が存在して、これが遺構の基盤となっている。このため、遺構の確認・検出作業はやや困難であった。黒色土の下は凝灰岩礫を多く含む黄褐色の粘質土で、実際の遺構の検出はこの面に至って明確になることが多かった。須恵器・土師器を含む包含層Iから包含層IIを切り込んで造られた古墳時代後期以降の遺構も縄文時代の遺構と重複して存在するのであるが、その識別は黄褐色粘質土まで掘り下げた段階でようやく明確に区別できたものである。別添全体図に排水路調査区の小区画単位における出土土器片点数を示した。当然のことながら遺構密度の高い区画では縄文土器の出土点数も大きくなっている。須恵器・土師器・中世陶器などは、耕土や包含層Iからの出土が殆どで遺構に伴う土器は極く少量の断片である。

以下、A区から西へG区までの主要遺構と出土土器の概要について記し、あわせてトレンチ調査の結果とその出土土器について触れておきたい。なお、土器の分類については次節で取りあげた11-514～11-516T区出土の分類に従って進めることを断っておく。

1号土壙（第5図） A-4区で検出した楕円形の土壙。調査区外に広がっているため完掘

した訳ではないが、長軸で135cm(確認長115cm)、短軸で97cm、深さ30cmを測る。覆土は黒の強い茶褐色土で凝灰岩礫を含む。出土土器は縄文施文の小片が数点出土した。

1号溝(第5図) A-5区で東西方向に伸びる溝。幅約50cm、深さ30cmを測る。覆土は1号土壌と似るが、出土遺物はない。

2号土壌(第5図) A-7区で検出した楕円形の土壌。長軸57.5cm、短軸55cm、深さ10cmの浅い遺構である。深さは基盤の黒色土を除いた段階での計測であるから、本来はもう15cmばかりは深かったものと思われる。

2号溝(第5図) A-8区で基盤である黒色土を掘り下げた結果確認したものであるが、果して遺構であったのかどうか判断としない。茶褐色の砂質土がその覆土であり、あるいは小さな凹みに水の流れた自然流路の可能性が高い。出土遺物は全くない。

3号土壌(第5図) A-10区で検出したが、調査区外に広がっており全形を窮えない。長軸115cm以上、短軸95cm、深さ38cmを測る楕円形の土壌。黒茶褐色の覆土中に凝灰岩礫を多く含む。縄文土器小片が出土。

1号住居跡(第5図、図版3) A-11・12区で検出した東西3.32mの浅い落ち込みである。南北方向は調査区外に広がっている。最深部でも22cmの深さしかなく、平坦な床部分にしっかりと柱穴や炉などの施設を確認した訳でもないから、住居跡と断定するのは早計であるが、調査時には一応住居跡として扱った遺構である。東側に9号土壌がこれを切って重複する。茶褐色の砂質土で礫を殆んど含まない覆土中からは縄文土器片がかなり出土したが、図示した施文のある土器は第10図の1・2の2点にすぎない。1は2条の沈線の間稜杉状の沈線文がある。2は隆帯文をもつ。

9号土壌(第5図) 1号住居跡とした遺構の東側に後出して掘られた楕円形の土壌。調査区外に広がっており、長軸136cm以上、短軸100cm、深さ36cmを測る。覆土はやや明るい黒茶褐色土で、凝灰岩の礫とそれに混じって多くの縄文土器片が出土した。しかし、土器は無文であったり縄文のみ施文の土器片が多く、図示した土器も第10図3の平口縁深鉢断片の1点のみである。

第10図4・5はA区包含層出土の縄文土器の中で図示し得た土器である。4は無文で口唇部に圧痕文をもつ深鉢。5は波状口縁のカーブに沿って1条の沈線と刺突をした隆帯文を孤状に貼付する。

3号溝(第5図) B-5区を中心に、北東から南西方向に伸びる深さ20cm足らずの溝を検出した。2号溝と同様、基盤となる黒色土を掘り下げた段階で確認したものである。幅は約1.5mを測るが、やや不整形で出土遺物も無いことから、遺構であるかどうか不明確ではない。

第10図6・7・10はB区の包含層から出土。6は隆帯による楕円形区画に稜杉状の沈線文を施し、隆帯の外側に刺突を加える。6は口縁部の隆帯に刻目を施す。10は底径13.1cmを測る。外面に細かな縄文を施す。底部の網代痕は第IV類である。

2号住居跡(第5図) C-2~4区で検出した幅4.48m、深さ23cmの浅い落ちこみである。調査区外に南北方向に伸びる。黒茶褐色の覆土からは、縄文土器の小片が出土している。西側に

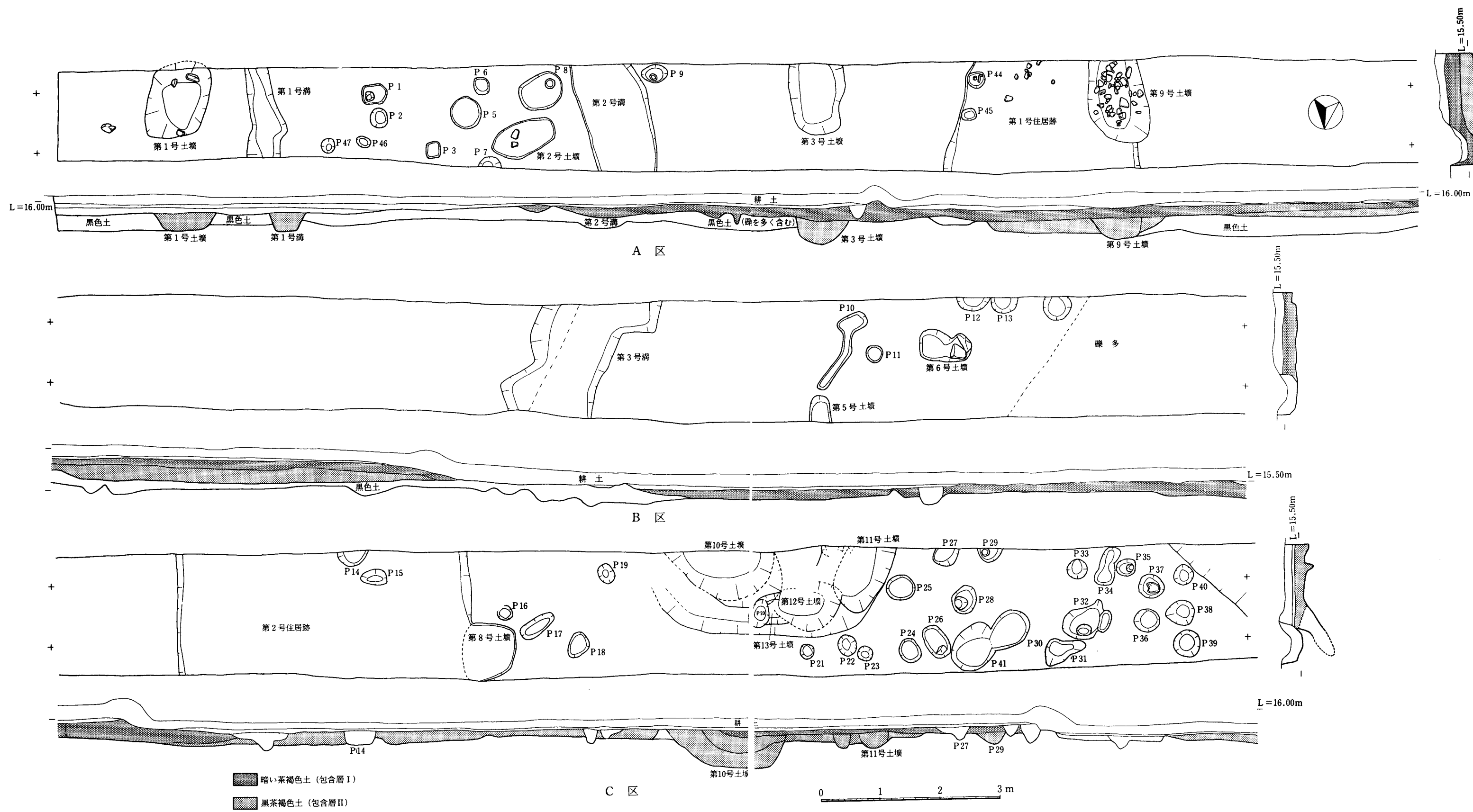
径約100cm、深さ18cmの8号土壌が重複する。これとの前後関係は不明。1号住居跡とした遺構と同様に、柱穴や炉跡なども確認されず住居跡と断定することは難しい。

10～13号土壌（第5図、図版4） C-6・7区で検出した土壌群で、検出時には覆土の色調のわずかな違いから4基の土壌群の重複とみて掘り下げたのであるが、土壌の他にもピットがいくつか重複して存在することが確認された。このため、個々の土壌やピットを十分に区別して発掘することができず、完掘時には最低3基の土壌（10号土壌、11号土壌、12号土壌と13号土壌）が存在したことを確認したにとどまる。また、土壌そのものも調査区外に広がっているため、その全容を把握したものではない。10号土壌は長軸180cm以上、短軸約150cmの楕円形の土壌であり、覆土は2層に分けられる。上層は黒茶褐色土で縄文土器の小片を含むが、下層の黒色砂質土では礫を少量含む程度で、縄文土器片は極く少量であった。土壌の深さは約50cmを測る。11号土壌は10号土壌の西約1mにある楕円形の土壌で、長軸115cm以上、短軸約80cmを測る。10号土壌との間に黄褐色の地山が壁となって残り、重複関係はない。黒茶褐色の覆土は、10号土壌上層の類似して縄文土器の小片を含む。12・13号土壌は掘り下げの過程で明瞭に区別することが困難となり、同一土壌となる可能性が高い。長軸で約130cm、短軸で約80cm、浅さ約30cmを測る。切り合いから10号土壌の後に造られ、一部を土師器小片の出土したピット20に切られている。

C区土壌群の西側にはピット群が集中する。中には覆土が灰色味かかった茶褐色で、土師器の小片が数点出土する明らかに後出のピットも存在するが、その殆どは覆土の色調や出土土器からみて縄文時代の遺構であることが確実である。直径30～40cm、深さ40cm前後のピットが多い。

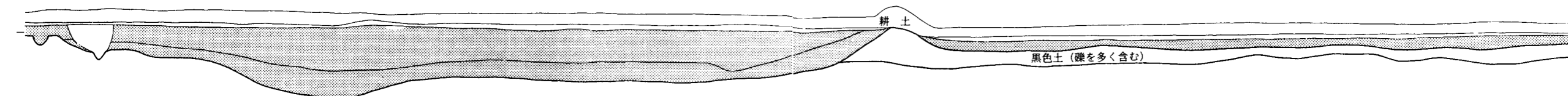
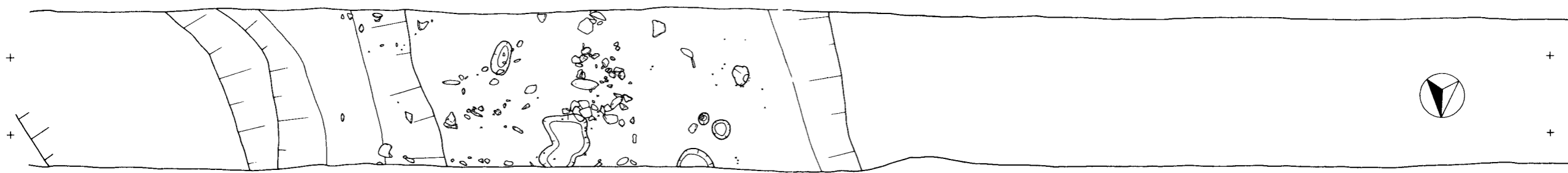
第10図8・9・11～28はC区包含層からの縄文土器である。8は平口縁の深鉢断片。口縁端部を厚くし、LRの縄文を施文する。9はミニチュア土器の底部。底径3.5cmの小形品で、外面に細かい沈線文を施す。11は波状口縁の深鉢とみられ、半隆起線文で飾る。口縁の半隆起線には爪形文がある。明るい橙灰色を示し、古府式に含まれる土器である。12は隆帯とRLの細かい縄文がみられる。淡灰褐色の色調を呈するが、胎土中に最大で3mm大の焼土塊を多く混和する。13は2条の隆帯文の間に短い沈線文を施す。14は無文の深鉢口縁。口縁端部外面に粘土の貼り付け痕がある。15の底部断片に第I類の網代痕がある。16は曲線を描いて巻く半隆起線の文様があり、その一部は爪形文をもつ。17は波状口縁の断片。太い隆帯文の間を沈線と刺突文で埋める。18もC字状の隆帯の両側を沈線で囲み、隆帯に刺突を加える。13・17・18は大杉谷式に含まれる。21は半隆起線文の区画内に縄文を残す。古府式になろうか。23は半隆起線文と弱い爪形文をもつ隆帯文が平行する。24は口唇部に1条の区切った沈線を入れる。25は隆帯上に棒状具で押圧を加える。3条1単位の櫛状具による施文もある。26・27は口唇部を押圧したさざ波状口縁の深鉢。28は底径12.8cmを測る深鉢の底部である。

C区西端部からは古墳時代以降の包含層や再堆積したと思われる包含層Iとした暗い茶褐色土層は、明瞭な状態では存在せず、また、C-10区からD-6区までの約1.05mの間は地山面がなだらかに凹んでいた。凹部は最も深い所でも地表面から約1.05mであったが、耕作土と床上の下には黒茶褐色土の包含層IIが50cmばかりの厚さをもって堆積していた。包含層からは縄文土器片



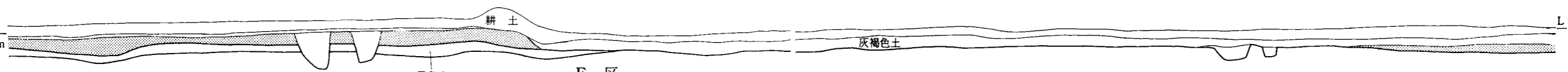
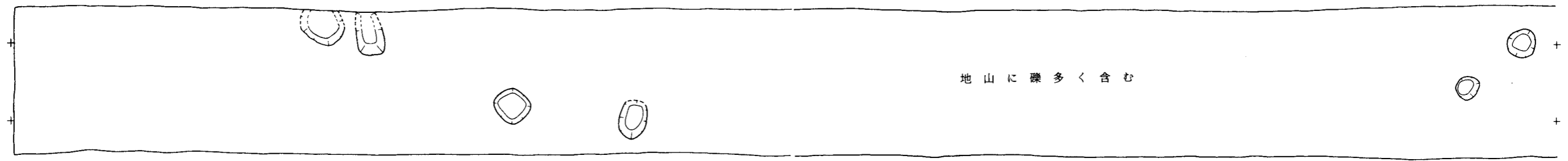
第5図 中海遺跡第1次調査遺構 実測図

凹部



L = 15.00m

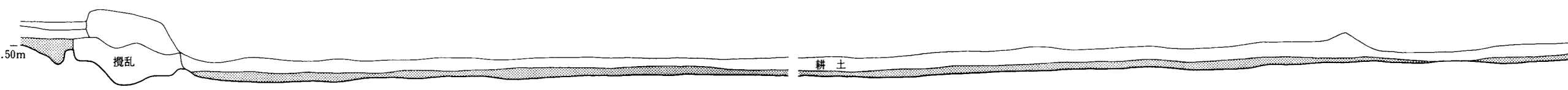
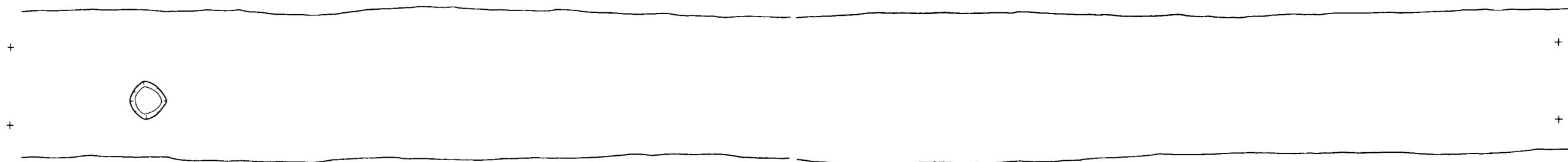
D 区



L = 14.80m

黒色土

E 区



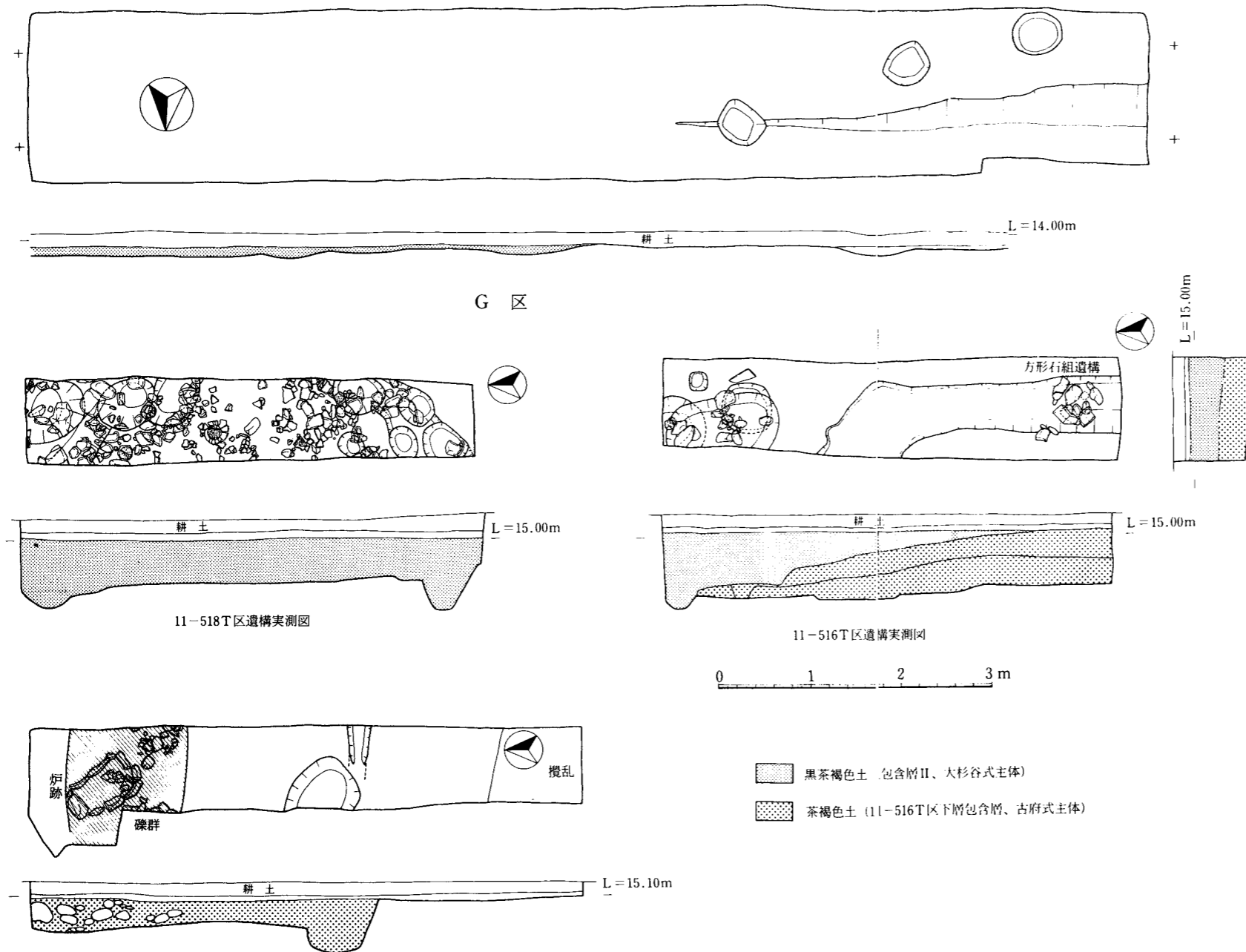
L = 14.30m

- 暗い茶褐色土 (包含層 I)
- 黒茶褐色土 (包含層 II)

F 区



第6図 中海遺跡 第1次調査遺構実測図



11-514T区遺構実測図

第7図 中海遺跡第1次調査遺構実測図

が凝灰岩の礫と混じって出土した。包含層IIの下に黒褐色のしまった土が20～30cmの厚さで存在して、この中からも縄文土器片が出土した。基盤となる礫を多く含む黒色土はこの凹部においては確認されず、黄褐色の地山がその基底をなしていた。D-6区中半付近からこの凹部はゆるく立ち上がり、ここでは不明瞭ながら基盤となる黒色土を切っているような状況を示していた。この凹部はD-2区から3区で最深となったが、その部分からも縄文土器片が出土した。以上のような状態から、この凹部に人工の手が加わっていると推定したのであった。その後、再分布調査時において南北方向に直交する形で試掘トレンチを設定したところ、南へ約1.5m離れた11-518Tでは地表下約70cmで地山面と遺構を確認したが、耕土直下の厚さ45cmの包含層(黒茶褐色土)から中期後葉の大杉谷式の土器が大量に出土した。(第7図、図版5・11・12)更に南へ5m離れて設定した11-516T区でも大量の土器が出土したが、ここでは大杉谷式の土器が上面から出土し、下からは古府式の土器が出土した。土層断面の観察では、上層の黒茶褐色土と下層の茶褐色土、最下層の黒色土が確認された。このことから、上層を大杉谷式の包含層、下層を古府式の包含層として把握することができた。そして、上層の包含層は下層の包含層の上に北へ向かって傾斜していた。上層の黒茶褐色土はトレンチの南側1/3では薄く確認したのみであったが、約3.5m北の箇所では包含層は約60cmの深さとなっていた。(第7図、図版12)このトレンチの南約5mに設定した11-514T区では耕土直下に11-516T区で下層とした包含層が存在し、古府式期の炉跡一基を確認している。

以上の結果をまとめると、11-518T区ではD区の包含層IIと共通する層が存在し、11-516T区では上層で包含層IIと同じ層が北へ傾斜して確認されるとともに、下層ではそれに先行する古府式の包含層が確認され、また、11-514T区では包含層IIは存在せず、先行する古府式の炉跡が検出されたといえるのである。そして、D区でみた凹部の西側斜面が11-516T区での上層の傾斜と関係するものとして把握した時、D区の凹部が単なる自然の地形ではなく、人工的に造られた溝のような遺構となる可能性があるかと判断したのである。しかし、あくまでも限られたトレンチ調査からの結果であり、これが縄文時代の人工的な溝であるとの即断はできない。更に、11-518T区で検出された土壌の存在や、排水路調査区より北側部分での11-522や11-524トレンチ調査の結果からみても、逆にそう考えるには無理な結論を導引かざるを得ない。仮に人工的な遺構であっても、それは自然の凹地を利用した遺構であったことは間違いないであろう。

第10図29～33と第11図1～7はD区の包含層から出土した土器のうち、図化し得たものである。29は口縁部を半載竹管で丸くし、それ以外にLRの縄文を施す。30は2条の太い平行沈線文を引く。31はRLの縄文地に1条の沈線を引きしている。32は半隆起線の上に櫛状具刺突をくり返す。33は口唇部を厚くし、外面に縄文を施す。第11図1は平口縁の深鉢で、隆帯で楕円形の区画を造り、その内側に同じ沈線で囲んだ中に稜杉状の平行沈線文を置く。隆帯の横に沈線の蕨手文を描き、更にその右隣りに隆帯と沈線を巻いて中に刺突を加えている。口縁と平行する沈線とこの隆帯で造った区画の中に斜行沈線文を施して、口縁部を飾る。これらの模様帯の下は縦の平行沈線で埋め、横の沈線で止める。胎土中に多くの荒砂や2mm前後の焼土塊を含む。2・3・7は無文

の深鉢で、口縁部をやや内側へ起こしている。4は表面を不揃いな櫛状具で荒く調整する。胎土中に多くの荒砂を含む。5・6は荒い櫛状具で波状の施文を行なう。5は6条1単位、6は5条1単位である。

E区から南側では極端に遺構が減少し、E・F・G区では10cm足らずの包含層IIとした黒茶褐色土層が確認されるものの、色調も次第に変化して黒色の度合を薄めていく。ピットが散発的に検出されるがその殆どは包含層IIを切り込んだ古墳時代後期以降の所産である。F区から南側で急激に遺構の密度が減少する事実は、過去のほ場整備の際に部分的に削平を受けたとする可能性もないではないが、本来、縄文時代の遺跡の分布がこのあたりを限りとしていたことを示すものと理解できる。

第2節 再分布調査の遺構と出土土器

本節では、ほ場整備事業の工事計画と遺跡の保存についての資料を得るために実施した再分布調査の概要とその際に検出した遺構と遺物について説明を加える。なお、大量の縄文土器が出土した11-514T区、11-516T区、11-518T区の縄文土器については、一括して次節で取りあげることにしたい。なお、各トレンチの配置は別添付図を参照されたい。

1-502T区 湊上川沿いのトレンチである。川の段丘面に大量の客土がなされている。前のほ場整備の際に搬ばれたもので、1.8m掘っても地山は出ない。客土中に多くの縄文土器が含まれていた。第11図8～15に示したのがその一部である。8は口唇部にヘラ状具で斜方向の押圧を加える。口縁には2列の竹管などによる列点文がある。9は口唇部内側をくぼめ、外面に細い半載竹管の刺突を行なう。2条の太い平行線文の下に、別の沈線と半弧の沈線をつないで対置させる。10の口縁はやや内湾気味に立ちあがり、体部にLRの縄文を施す。11は器表にヘラで稜杉状の平行沈線を施文する。12は細かい縄文をうつつに転がしている。13は不揃いな櫛状具で器表を調整する。胎土中には大粒の砂粒を多く含む。14はRLの太い縄文を施している。表面に炭化物(煤)の付着がみられる。15は注口土器の注口部断片。口で径2m、長さ約5mを測る。胎土中に細かい砂粒を多く含み、磨耗している。

3-502T区 縄文の包含層を耕土直下で確認。厚さ約40cmを測る。縄文の遺構(ピットか)も存在する。第11図16は深鉢底部の断片。不揃いな細い櫛状具で稜杉状に施文する。

7-502T区 耕土直下に約20cmの縄文の包含層を搬んで客土としている。その下に20～40cmの包含層IIとした茶褐色土が存在し、更に25cmばかりの縄文の包含層がある。土壌らしき遺構も確認している。土器は客土と包含層から出土している。第11図17は半隆起線文を巴形に組み合わせている。20は脚部断片。隆帯で縦長の区画を造り、中を刺突文で埋める。胴土中に大粒の砂粒を多く含む。18は口唇部に押圧を加え、細かい波状とする。器表にRLの不鮮明な縄文を施す。19は無文の深鉢の底部。底径12.3cmを測る。

11-502T区 このトレンチも前のほ場整備による客土が厚く堆積している。1m掘り下げても

地山は確認できない。客土中から縄文土器や須恵器が混じって出土する。第11図20・21の2点がこの客土からの出土である。21は口縁部を厚くして口縁帯を作り、ここに2条の太い平行沈線とその両脇に沈線で長方形の区画文を入れる。口唇部と区画の中には縄文がみられる。22は大きな波状の口縁になるとみられる。口縁部に1条の沈線がある他は無文である。胎土中に大粒の砂(最大径5mm)石を多く含む。

11-504T区 淳上川方向へ地山が落ちており、トレンチの北側約1m分のみで地山を確認できた。11-502T区と同じく前のほ場整備の時に縄文の包含層を削って搬んでいる。狭い範囲で地山を確認したが、縄文中期のピット1カ所を検出しており、遺跡の南東限をおさえたことになる。客土中から縄文土器片が出土した。第11図23は口縁端部に斜行の櫛状具刺突を加え、その下に3条の半隆起線文がある。胎土中に多くの砂粒を含む。

11-506T区 耕土直下に約15cmの茶褐色土(古府式期の包含層か)があり、地山に至る。茶褐色土から少量の縄文土器片が出土している。第11図24は平口縁の深鉢とみられ、口縁部に1条の半載竹管による押圧文を巡らし、下にLRの縄文を施す。

11-508T区 耕土直下に約15cmの茶褐色土があり、その下は地山となる。11-506T区と同一の状態に縄文土器が若干出土している。第11図25は口縁部に2条の半隆起線文を平行させ、以下にLRの縄文を施す。胎土中に大粒の砂粒を含む。

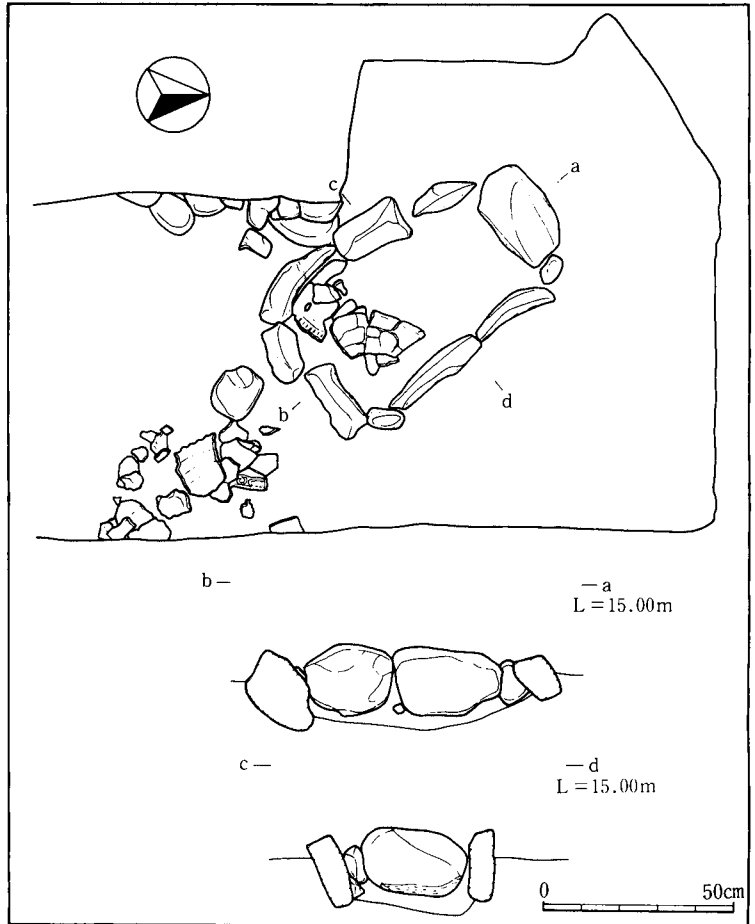
11-510T区 耕土直下で地山となる。土器も全く出土せず、かなりの削平を受けた箇所である。

11-512T区 耕土直下で地山となるが、ピットなど縄文時代の遺構が残存している。耕土中や遺構上面で縄文土器片が若干出土した。第11図26は口唇部に圧痕を加え小さな波状とする。胎土中に多くの凝灰岩砂粒を含む。

11-514T区 先に述べたように本トレンチと11-516T区、11-518T区からの出土遺物については次節で取りあげるので、この3トレンチについては、状況と遺構についてのみ説明する。11-514Tでは、縄文中期の炉跡1基を検出した。(第7・8図、図版7～9)炉跡の部分については一部を拡張してその規模を把握した。耕土と床土を除くと暗茶褐色の包含層が存在した。包含層は15～30cmの厚みをもっていたが、トレンチの南側の1m角は後世の攪乱を受けていた。炉跡は礫を多量に含む包含層を掘り下げていく過程で次第にその姿を明らかにしてきたもので、特に炉跡の上面とその周辺には直径20cm前後の大きな石を含む礫群が検出された。出土時の状態から炉の上に礫を無造作に集めたような印象をもった。炉跡は凝灰岩の河原石を長方形に並べた単式炉で、長軸で86cm、短軸で53cmを測る。炉内には焼土が残り、炉石は焼けていた。炉が埋った後に捨てられた浅鉢や深鉢(第13図1)が出土した。炉から南へ2.25m離れた所に東西方向に伸びる幅26cm、深さ約5cmの浅い溝が検出された。炉を中心とした住居跡の周溝の一部と推定される。溝の西に近接して楕円径の土壌1基が存在する。調査区外に広がっているため、全形は不明であるが、短軸で1.2m、深さ80cmを測る。断面の観察からみてこの土壌も住居跡に伴う遺構と思われた。炉跡の東南部で床から若干浮いた状態で深鉢(第12図)などがまとまって出土している。また、

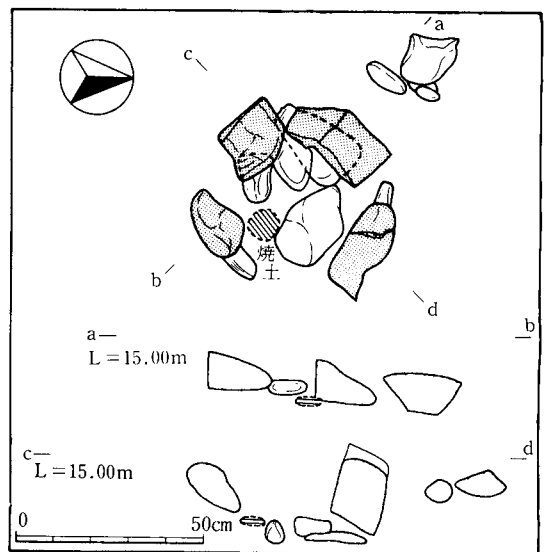
炉の周辺から少量の骨片が出土しており、調査時に縄文人が焼肉でもしたのだろうかと思いをたくましくしたものである。出土した土器は、縄文時代中期の古府式期での新しい様相を示すものが殆どである。

11-516 T 区 このトレンチは、排水路調査区のD区で検出した凹部の性格を考える上で、重要な鍵を握る。先述したように、ここでの層序は耕土・床土の下に黒茶褐色土の上層包含層が南から北へ次第に厚味を増している。出土する土器の主体は中期後半の大杉谷式であった。下層の茶褐色土包含層は11-514 T 区から続く、古府式でも新しい段階の土器が多かった。上層包含層の傾斜状態をD区でみた凹部の西側の立ち上がりと関係させ、また、E区からG区での遺構・遺物分布の希薄さも考慮して、この凹部が人工的な溝ではないかと推定したのであった。11-516 T 区ではトレンチ南端部の下層包含層掘り下げ時に、河原石を4個並べた石組状遺構を検出した。(第7・9図、図版10) 扁平な河原石を数個置いた上に、20~25 cm 位の石を一辺約50cm の方形に近い形で配している。石の隙間の1カ所に径10cm の範囲で少量の焼土が認められたが、この遺構が現在までに報告されている炉跡の報告例と比較しても構造的に異っており、若干の焼土の



第8図 11-514 T 炉跡実測図

層包含層の傾斜状態をD区でみた凹部の西側の立ち上がりと関係させ、また、E区からG区での遺構・遺物分布の希薄さも考慮して、この凹部が人工的な溝ではないかと推定したのであった。11-516 T 区ではトレンチ南端部の下層包含層掘り下げ時に、河原石を4個並べた石組状遺構を検出した。(第7・9図、図版10) 扁平な河原石を数個置いた上に、20~25 cm 位の石を一辺約50cm の方形に近い形で配している。石の隙間の1カ所に径10cm の範囲で少量の焼土が認められたが、この遺構が現在までに報告されている炉跡の報告例と比較しても構造的に異っており、若干の焼土の



第9図 11-516 T 石組状遺構実測図

存在だけではこれを炉跡として扱うことはできない。地山面まで掘り下げた段階で幅約25cm、深さ約5cmの浅いL字形溝と長軸約120cmの楕円形土壌を検出した。溝は上部から掘り込まれた可能性が高い。

11-518 T区 耕土・床土を除くと黒茶褐色の包含層IIが現われ、縄文中期後葉の大杉谷式の土器が大量に出土した。(図版11・12) 位置的にはD区と11-516 T区でみた凹部の中にあたる箇所であった。厚さが50cmにも達する包含層からは、地山面に達するまで全体的に土器が出土したが、包含層の上面、特に10cmばかり下げる間に集中して出土した。凝灰岩の礫も多く混在している。この土器を取り上げると土器の量は急激に減少する傾向をみせていた。土器や石器が包含層の上部で集中して出土する状況からみると、地山から包含層となる黒茶褐色土が30~40cm堆積した段階で、かなりまとめて遺物を廃棄したものと考えられる。土器を取り上げ、地山面まで下げるとピット群が検出された。ピットは全部で8個で、径30cm前後から60cmを超える大形の穴まであったが、検出面からの深さは約20cmから50cmとなった。ピット群が凹部の底に設けられた遺構であることは、穴の中から出土する遺物からも明らかであり、凹部を人工的な溝と考えるとこのピット群が一体どのような目的で掘られたものかが問題になってくる。

11-521 T区 排水路調査区を越えて更に北側に設定した。約20cmの耕土を除くとすぐ地山となる。縄文時代のピットを2箇所検出した。耕土中やピットの覆土上面から縄文土器の小片が出土した。

11-523 T区 ここでも耕土直下に地山面を検出した。ピットと細いL字形の溝を確認したが、遺構の色調の違いから縄文の遺構と古墳時代以降の遺構が混在していることが明らかとなった。

11-525 T区 耕土直下で地山となる。縄文時代の遺構は確認されず、覆土が茶褐色をなす古墳時代後期以降の遺構のみを確認した。

11-527 T区 耕土直下に約20cmの古墳時代以降の包含層を確認し、地山面で同様の覆土をもつピット3個を検出した。覆土上面からは土師器の小片が出土している。

10-529 T区 11ラインの延長部分に畑があったため、東へ移動してトレンチを設定した。耕土直下から礫を大量に含む黒色土となり、遺物も全く出土しない。

10-531 T区 10-529 T区と全く同じ状態で、遺物の出土もない。

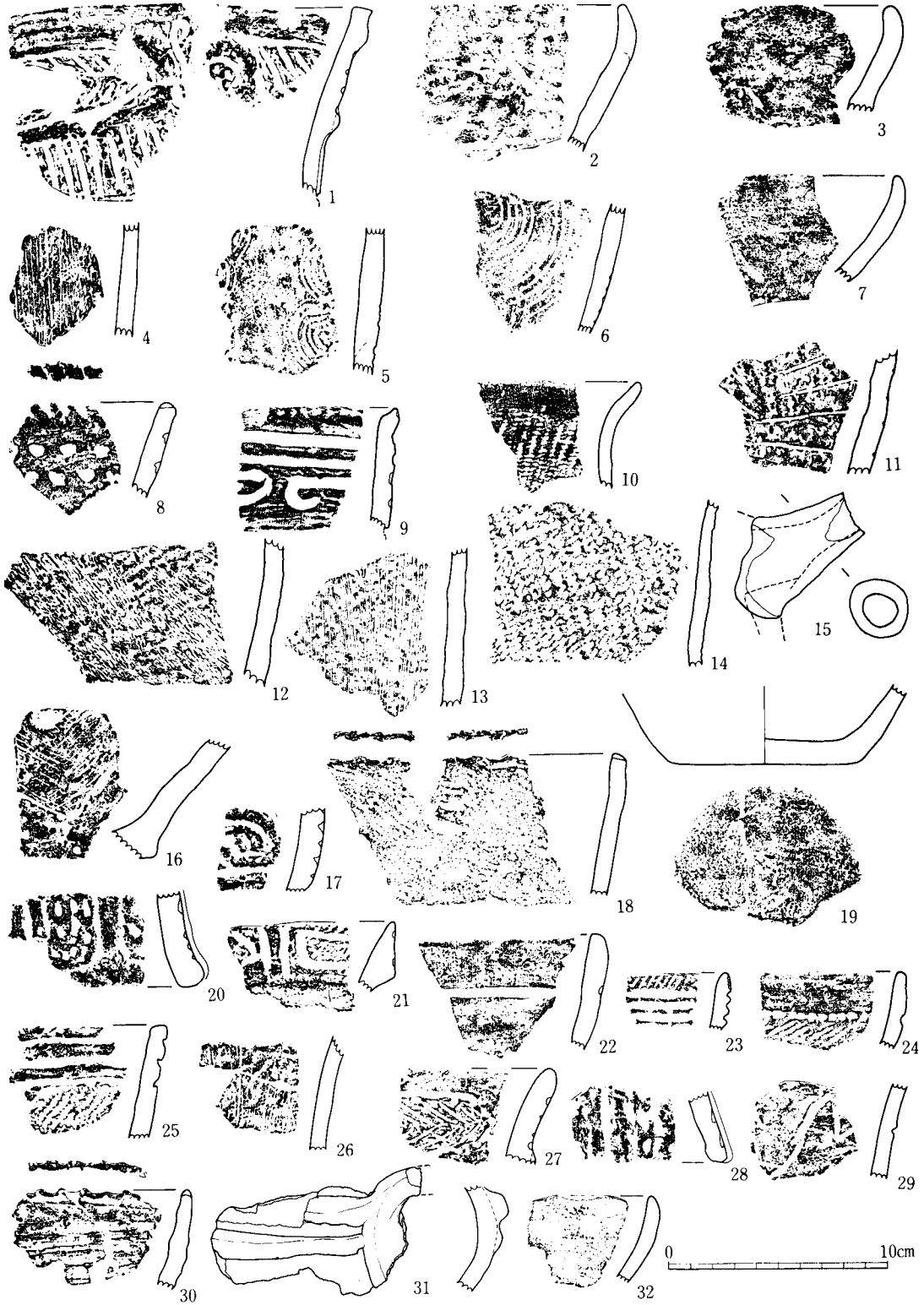
10-534 T区 耕土の下に茶褐色土の包含層があり、下へ行く程黒味を増す。地表下75cmで確認した溝から土師器片が出土している。

21-514 T区 排水路調査区のF区の南方約22mに設定したトレンチ。耕土直下で地山となり、明瞭な包含層はない。南側隅では地山が湊上川に向かって下がっており、そこに盛られた土から縄文土器片が出土した。第11図27は隆帯で楕円形に区画をし、隆帯に沿って沈線と刺突列点文を加える。更にこの区画の中を稜杉状の沈線文で埋めている。28は支脚の断片とみられ、太い隆帯の内側に沈線を引いて区画とし、中に刺突文を加える。29は先に丸みをもつ棒で山形の沈線文を引いている。

16-507 T区 11-508 Tの西方25mに設定したトレンチ。耕土の下に南へ傾斜して約30cmの包含層を盛土した層があり、更に20~30cmの暗茶褐色土(包含層IIとしたものか)が存在して地山



第10図 中海遺跡第1次調査排水路調査区出土土器(1)



第11図 中海遺跡第1次排水路調査区出土土器(2)、再分布調査出土土器

となる。縄文土器の小片が出土している。

1-508 T 区 調査対象区域の東端部に設定したトレンチ。耕土直下で地山となっており、遺物の出土は少ない。東に向って地山がゆるく下がり、約20cmの黒色土が確認される。

0-516 T 区 耕土・床土の下に地山が確認される。西側隅が下がって約20cmの黒茶褐色土（包含層IIとしたもの）があつて、縄文土器小片が出土した。

0-524 T 区 耕土・床土の下に灰茶褐色から暗茶褐色の層が、20～50cmの厚さで確認され、弥生時代後期後葉の土器数片が出土した。その下に厚さ約30cmの黒茶褐色土（包含層II）があつて地山となる。縄文土器片が出土したが小片である。第11図30は無文の深鉢口縁である。径25cmのピット1個が検出されている。

0-529 T 区 耕土の下に60cmばかりの客土がなされておられ、地山が北側へ下がっていくと思われた。地山上に約25cmの暗茶褐色土があつて古墳時代前期後葉の土器が若干出土した。地山面で浅いピット状の遺構を検出している。

3-534 T 区 耕土下に約75cmの客土が存在し、15cm程度の黒色土を除くと地山となる。遺物の出土は無い。

15-534 T 区 このトレンチでも50cmばかりの客土が確認された。縄文の包含層を搬んで盛ったようであり、若干の土器が出土した。茶褐色の覆土となる弥生時代後期後葉以降のピットが検出されている。

19-534 T 区 耕土・床土の下に土師器を含む厚さ約50cmの包含層がある。更に15cmの黒色土を除くと地山となった。包含層からの土器の出土量は少ない。

25-534 T 区 耕土・床土の下は厚さ30cm程度の黒色土となる。遺物の出土はない。

25-530 T 区 耕土・床土の下に15cmばかりの黒茶褐色土が確認された。縄文土器が少量出土している。

25-524 T 区 耕土・床土の下に厚さ30cmの黒茶褐色土が確認された。地山は西側へ下がって行く。縄文土器が少量出土している。

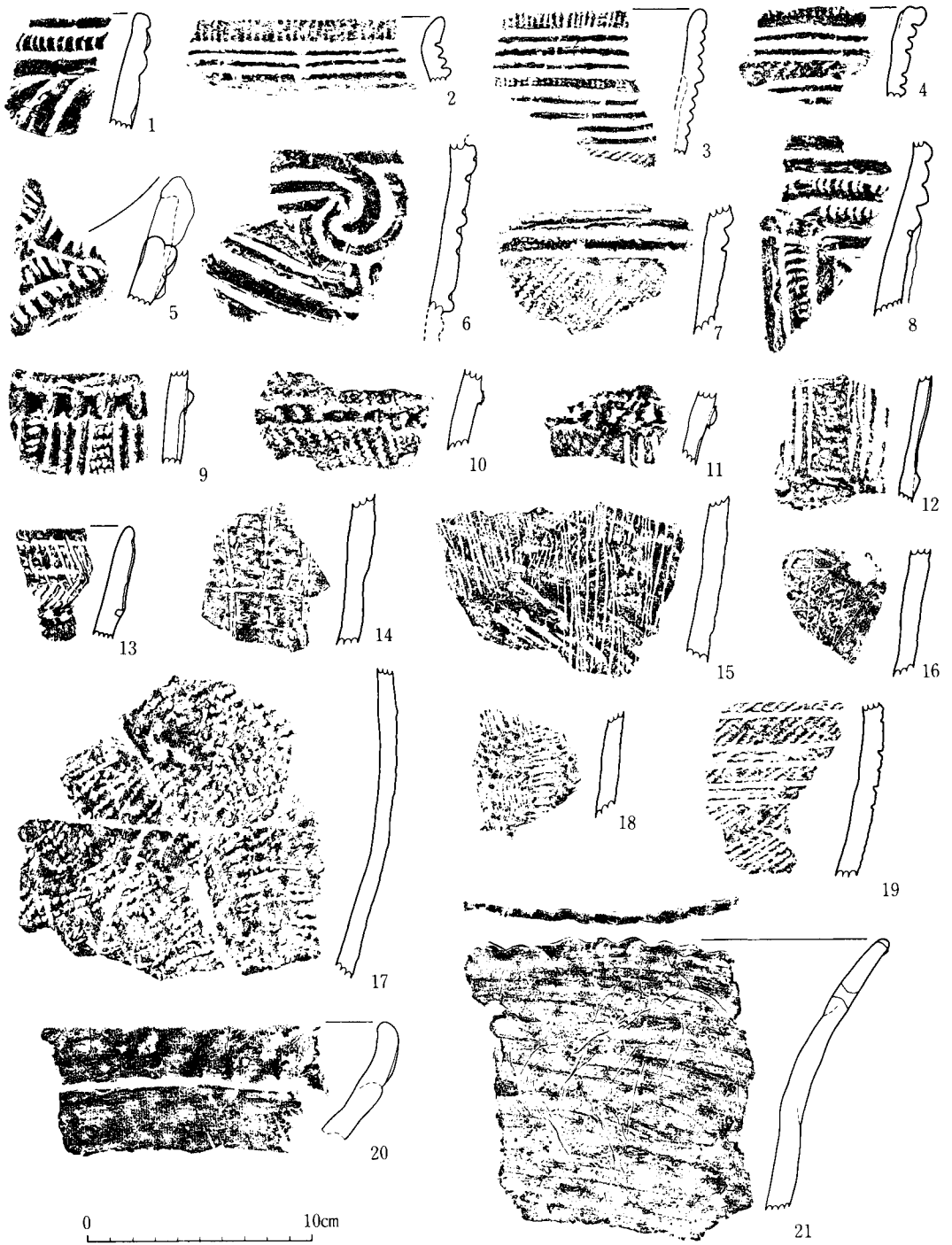
以上の再分布調査結果から、調査対象区域での遺跡の分布状況をまとめてみると、縄文時代中期中葉（古府式期）でも新しい段階の遺跡が11-516 T区より南側へ広がり、11-514 T区では炉跡が検出されていることから、このあたりを中心に分布するものと推定される。縄文時代中期後葉（大杉谷式期）にはそれが北西へ移動し、調査対象区外の岩淵町地内へも伸びていることは確実である。しかし、その北東側への広がりには11-524 T区と0-524 T区を結ぶ線より余り大きくならないとみられ、縄文時代の遺跡の分布は、滓上川に臨む微高地上に東西方向に長く広がるものと推定される。以前のほ場整備の際にはこの遺跡の包含層を削平して滓上川沿いの低地へ客土として運搬されたことは明らかである。古墳時代後期以降の遺跡は、縄文時代中期後葉の遺跡と重複はするものの、その広がりには排水路調査区のC区と11-518 T区そして0-529 T区を結ぶ線あたりに分布するものと思われた。調査対象区の北西側では地山面が下がって厚い客土がなされている。滓上川に沿って伸びる微高地の緩斜面にあたるのだろう。

第3節 11-514T区・11-516T区・11-518T区出土土器

1. 分類

本遺跡第1次調査の遺物のほとんどは縄文時代に属するものであり、土器に関しても縄文中期後半の土器群であり、11-514T区・11-516T区・11-518T区の3調査区からの出土量が多く、これらについて記述を進めていくものである。そして3調査区から出土した土器は施文方法による文様を基準に、次のように分類される。

- 第1類 半隆起線のみで文様が構成されるものである。
- 第2類 半隆起線と隆帯を主文様とするものである。
- 第3類 半隆起線・隆帯・爪形文を主文様とするものである。
- 第4類 半隆起線と爪形文を主文様とするものである。
- 第5類 半隆起線と縄文を主文様とするものである。
- 第6類 半隆起線・櫛状刺突文を主文様とするものである。
- 第7類 半隆起線・縄文・粘土紐貼付文を主文様とするものである。
- 第8類 爪形文・縄文・粘土紐貼付文を主文様とするものである。
- 第9類 粘土紐・貼付文・沈線文・櫛状刺突文を主文様とするものである。
- 第10類 半截竹管の押圧文を主文様とするものである。
- 第11類 沈線文と櫛状刺突文を主文様とするものである。
- 第12類 爪形文ないし刻目文のものである。
- 第13類 隆帯のみで文様が構成されるものである。
- 第14類 隆帯・沈線文・刺突文を主文様とするものである。
- 第15類 隆帯と沈線文を主文様とするものである。
- 第16類 隆帯と刺突文を主文様とするものである。
- 第17類 隆帯と刻目文を主文様とするものである。
- 第18類 沈線文と刺突文を主文様とするものである。
- 第19類 沈線文のみで文様が構成されるものである。
- 第20類 沈線文と縄文を主文様とするものである。
- 第21類 縄文のみのものである。
- 第22類 撚糸文のみのものである。
- 第23類 沈線文と条線文を主文様とするものである。
- 第24類 条線文のみのものである。
- 第25類 無文で口唇部に圧痕文・刻目文のないものである。
- 第26類 無文で口唇部に圧痕文・刻目文があり、さざ波状口縁を呈するものである。



第12図 11-514T区縄文土器拓影（縮尺1/3）

11-514T区・11-516T区・11-518T区のそれぞれの調査区ごとに、各類についての特徴を記すものである。

2. 11-514T区

第1類 半隆起線のみのものである(第13図4)。浅鉢の胴部に半隆起線で隅丸方形の区画が描かれている。両面ともに比較的丁寧に研磨調整がなされている。色調は黒褐色～淡褐色を呈し、器厚5～7mmを測る。

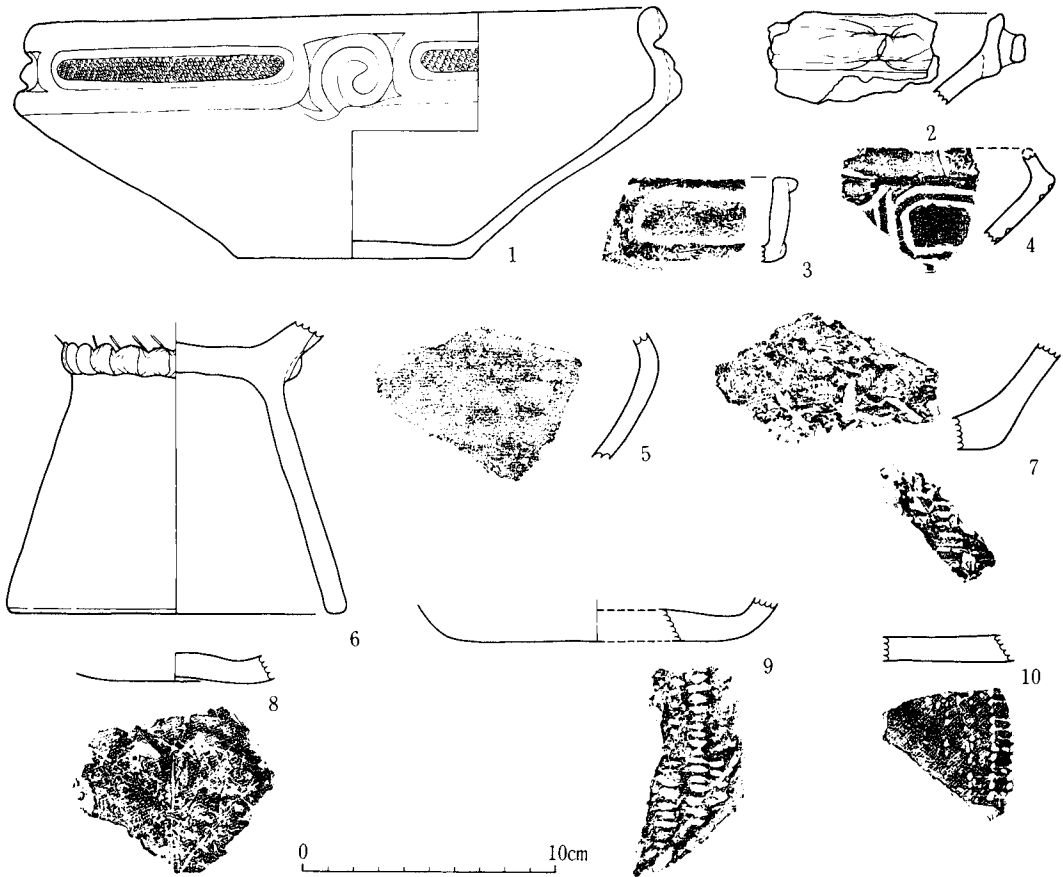
第2類 半隆起線と隆帯を主文様とするものである(第12図6)。

第3類 半隆起線と隆帯に施された爪形文を主文様とするものである(第12図8)。

第4類 半隆起線と爪形文を主文様とするものであり、深鉢の口縁部片である(第12図1)。色調は淡褐色を呈し、器厚10mmを測る。胎土・焼成とも良好である。

第5類 半隆起線と縄文を主文様とするものである(第12図7)。

第6類 半隆起線・櫛状刺突文を主文様とするものであり、器種としては深鉢のみがみられる(第12図2～4・12)。同図2は口縁端部が外反するものであり、同図3・4は口縁部が立ち上が



第13図 11-514T区縄文土器実測図・拓影(縮尺1/3)

る形態をなすものであり、3には隆帯と縄文が、4には縄文が認められる。12は胴部片で隆帯がわずかにみられる。色調は明灰褐色・淡褐色・橙褐色を呈し、器厚8～10mmである。

第7類 半隆起線・縄文に粘土紐を貼付した文様を主文様とする1群であり、粘土紐上には半截竹管の背部によるものか、圧痕文が施されている(第12図5・9～10)。同図5は波状の口縁部片であり、幅12mmの粘土紐上に幅3mm前後の刻目を施し、その底面には条線がみられる。淡褐色を呈し、厚さ15mm前後を測る。10には半隆起線はみられない。

第9類 粘土紐貼付文・沈線文・櫛状刺突文を主文様とするものである(第13図1～3)。

第13図1は、口径24.4cm、器高10cmを測る浅鉢である。底部から外側へ大きく開き、口縁部はまっすぐに立ち上がり、口唇部はやや肥厚している。口縁部文様帯では、粘土紐を貼付して細長い隅丸長方形の区画を作り出し、区画内部にはそれにそって沈線をめぐらし、さらに櫛状刺突文を連続的に施している。区画文と区画文の間には、粘土紐貼付による逆「の」の字状渦巻文がみられ、渦巻の内側はそれにそってえぐられ、沈線文化しており、渦巻文が一層浮き上がって見える。文構成の単位は4単位である。両面とも丁寧に研磨調整され、胴部の器厚は5mmと比較的薄い。色調は暗褐色～明褐色を呈する。

同図2・3も浅鉢であり、3は器厚6～7mm、色調は黄白色を呈する。

第12類 ヘラ状施文具の先端側面部で連続的に刻目を施すものである(第12図18)。

第18類 沈線文と刺突文を主文様とするものであり(第12図13)、具体的文様として口縁部に横位の綾杉文が施文され、その下に刺突文が配される。色調は灰褐色～淡褐色を呈し、器厚9mmを測る。

第19類 沈線のみで文様が構成されるものである(第12図14・16)。ヘラ状施文具の先端部を利用したような沈線であり、幅1～2mmと細く、断面が3角形状を呈している。

第20類 沈線文と縄文を主文様とするものであり、鋭角的な沈線である(第12図19)。

第21類 縄文のみのものである(第12図17)。LRの縄文を施す。

第25類 無文で口唇部に圧痕文・刻目文のないものである(第12図20)。口縁端部が内屈する深鉢であり、接合痕が明瞭に認められる。色調は淡褐色を呈し、器厚10mmを測る。

第26類 無文で口唇部に圧痕文・刻目文のあるものである(第12図21)。口縁は外反し、胴部はやや張る形態をなすと推測される。補修孔が1個所みられる。口唇部には棒状施文具による圧痕が施されてさざ波状口縁をなし、器表は条痕文的な状況を呈している。器厚は9～11mmを測り、色調は暗褐色～淡褐色を呈する。

3. 11-516T区

第2類 半隆起線と隆帯を主文様とするものである(第14図20)。

第3類 半隆起線・隆帯・爪形文を主文様とする1群である(第14図1・7・11～15・21)。同図1は口縁部文様帯を隆帯で区画し、その中を隆帯にそって半隆起線や爪形文で充填しており、口唇部には小突起が付けられている。色調は黄褐色を呈し、器厚は6～7mmを測る。7はやや厚

手で器厚10mmを超える。11は口径32cmを測る平縁の深鉢であり、口縁端部がやや立ち上がり気味になる平縁を呈している。口縁に平行に4条の半隆起線文を走らせ、その下に爪形文を施した隆帯を配している。隆帯上の爪形文は2種類認められることから、施文途中に用具を変えたものと推測される。さらに2本の半隆起線で半円を描いたり、横位の細長い隅丸方形の区画文を構図したりしている。色調は暗褐色～淡褐色を呈し、器厚7～9mmである。13は波状口縁となり、口唇部には刻目が施され、細い沈線を隆帯に平行に何本も引いている。黄褐色、器厚12mmである。

第5類 半隆起線と縄文を主文様とする1群である(第14図2・3・8～10・16～19)。同図2は頸部から外反し、口縁部は短かく立ち上がり、口縁端部は再び外反する形態をなしている。口縁端部に施されたLRの縄文の下に平口縁に平行するように4本の半隆起線を引き、頸部も同じように施文され、その間の器面を縦方向の沈線で占めている。半截竹管を弱くあてて引き、沈線文化しているものと推測される。色調は黒色・橙褐色を呈し、器厚9mmを測る。

第6類 半隆起線・櫛状刺突文を主文様とするものである(第14図4)。波状口縁となり、口縁端部に4本1単位の櫛状刺突文を施文している。橙褐色を呈し、器厚8～10mmである。

第8類 爪形文・縄文・粘土紐貼付文を主文様とするものである(第14図23)。縄文地に貼付された粘土紐上に爪形文を施しており、厚さ6mm、暗褐色を呈する。

第10類 半截竹管の押圧文を主文様とするものである(第14図5・6)。同図5は口縁部がゆるく立ち上がる深鉢であり、口縁端部に半隆起線が1条引かれ、その下に長さ9mmの「C」字形の押圧文が施されるものである。灰褐色を呈し、器厚10mmである。6は隆帯と沈線を伴うものであり、長さ4.5mmの「C」字形の押圧文が施文されている。淡褐色で厚さ4～6mmである。

第11類 沈線文と櫛状刺突文を主文様とするものである(第14図29・30)。同図29は5本1単位の刺突文である。30は4本1単位の刺突文であり、幅3mmの沈線が引かれている。

第13類 隆帯のみで文様が構成されるものである(第14図22)。口縁部は直立する。

第15類 隆帯と沈線文を主文様とするものであり、器種としては短頸壺のみである(第14図26)。口径5.6cmを測り、口唇部には3mm程度の幅広の刻目を押圧している。色調は橙褐色～褐色を呈し、器厚5～7mmである。

第19類 沈線のみで文様が構成されるものである(第14図24)。波状口縁の波頂部に沈線で渦巻状に描かれたものであり、器表には赤彩の痕跡が認められる。器厚10mm、淡褐色を呈する。

第20類 沈線文と縄文を主文様とするものである(第14図27・28)。

第21類 縄文のみのものである(第15図1～7)。同図1は波状の口縁部であり、3には隆帯がみられる。全体的に器厚7～10mmを測り、色調は黒褐色・暗褐色・淡褐色がみられる。

第22類 燃糸文のものである(第15図8)。

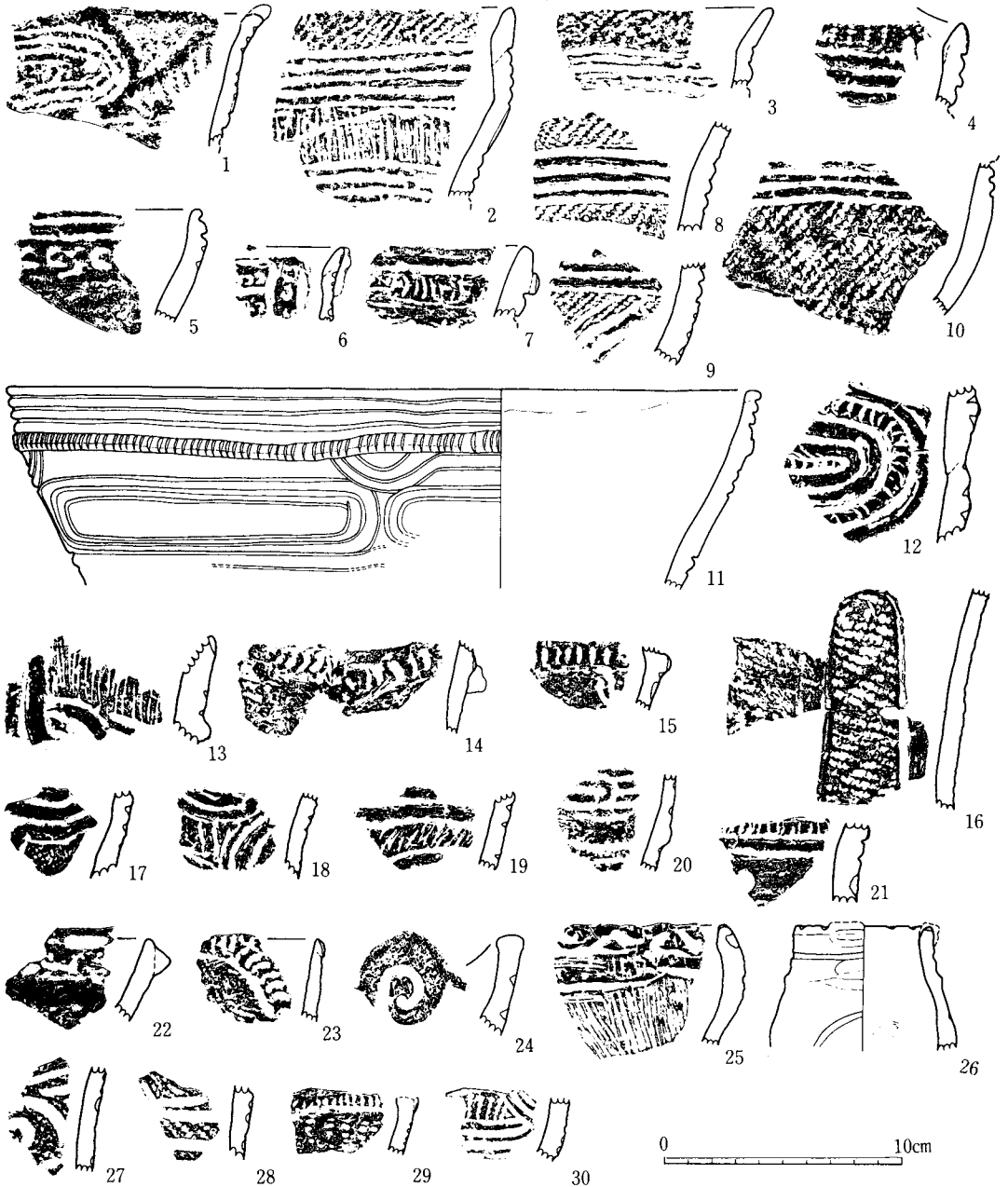
第23類 沈線文と条線文を主文様とするものである(第14図25)。口縁部が内屈する器形を呈し、条線調整した後に、沈線を粗雑に引いて施文している。淡褐色を呈し、器厚7～9mmである。

第24類 条線文のみのものである(第15図9～11)。器厚6～11mmである。

第25類 無文のもので口唇部に圧痕文・刻目文のないものである(第16図1～7)。口縁部は直

立するものがほとんどであり、6はやや外反している。全体的に器厚7~10mmを測り、色調は黒褐色・暗褐色・橙褐色・褐色等を呈している。

第26類 無文のもので口唇部に圧痕文・刻目文のあるものである(第16図8~13)。同図11は口径28cmを測り、直立口縁でその端部はやや外反し、心持ち頸部がくびれ、胴部がゆるく張る形態



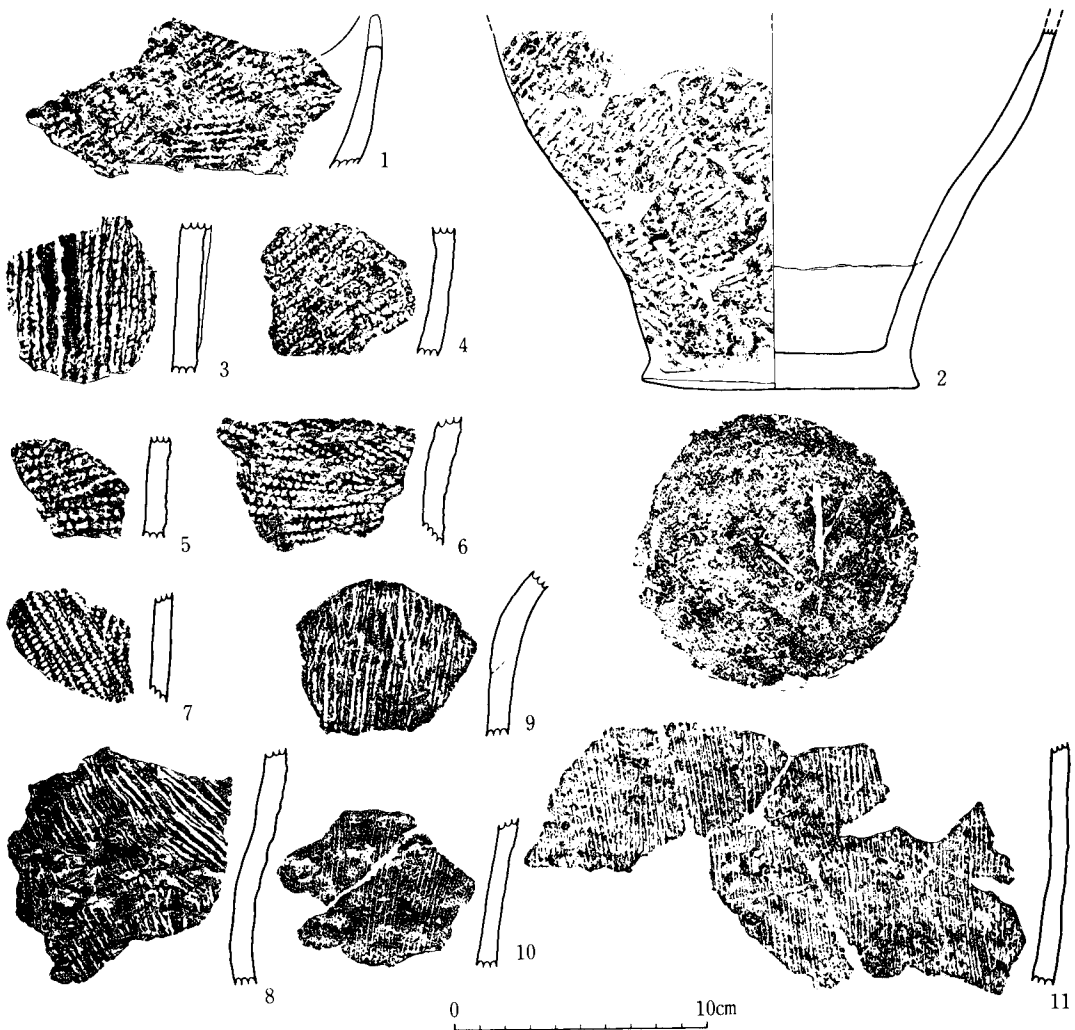
第14図 11-516T区縄文土器実測図・拓影1 (縮尺1/3)

を呈するものである。この類の全体的傾向として、器厚は6～9mmを測り、第25類よりやや薄く、色調では第25類と同様の状況を示している。さざ波状を呈する庄痕文・刻目文については、半截竹管状施文具の背部や先端部を利用し、口唇部に押圧しているものと推測される。

4. 11-518T区

第14類 隆帯・沈線文・刺突文を主文様とするものである（第17図、第18図1、第19図2、第20図1・24～26、第26図1）。器種としては、深鉢と鉢がみられる。

第17図の深鉢は、口径46.4cm、現存の器高54.6cmを測る。器形は頸部でくびれ、口縁部は外反し、胴部がゆるく張る形態を呈する。口縁には高さ3.5cmの波頂部が8個みられ、いずれもやや内屈気味になっている。具体的に描かれている文様としては、口縁部に隆帯で御物石器をうつ伏せ



第15図 11-516T区縄文土器拓影（縮尺1/3）



第16图 11-516T区縄文土器実測図・拓影2 (縮尺1/3)

にしたような隅丸長方形の区画を作り出し、その内部には「レ」の字形の隆帯を施し、隆帯にそってその裾部に沈線をめぐらし、区画内全体を刺突文で充填している。この刺突は器面に対して斜め方向から施されている。さらに頸部には1本の隆帯を貼り付け、そこに縦方向の短い沈線を引いている。胴部は無文である。色調は黄褐色・褐色を呈し、器厚6～10mmを測る。

第18図1は口縁部が大きく外反する深鉢であり、口径は38.6cmを測り、ゆるい波状口縁をなす。口縁部では横位の隆帯をめぐらし、その裾部に刺突文を施している。この刺突は器表に対して垂直に施文されている。胴部では隆帯で縦方向に逆「U」字状の区画を作り、隆帯内側を沈線でなぞり、区画を一層明確なものにしている。その内部は沈線による綾杉文を施し、逆U字状区画文の間を沈線の蕨手文で占めている。幅2～4mmの断面の丸い沈線である。色調は黄褐色を呈し、器厚は10～12mmと厚めである。

第19図2は口径30.2cmを測る鉢形土器である。口縁部には隆帯により横方向の細長い楕円形を区画し、隆帯区画の内側に沈線を引き、その内部に竹管状施文具で刺突文を施している。頸部にはゆるい波形の沈線を1条めぐらし、その波頂部になる個所に対応するようにして胴部に沈線で逆U字状区画文を配置している。その内部は「V」字状になる綾杉文で占められている。また、逆U字状区画文間には蛇行沈線文が施文されている。色調は赤褐色・黒褐色・褐色であり、器厚は7～9mmを測る。

第20図1は波状口縁部片であり、波頂部は内屈している。第17図と同様に口縁部を隆帯で肥厚させて隅丸方形に区画し、内側裾部に沈線をめぐらしており、区画内には「能登半島」形に隆帯を施し、刺突文を充填している。刺突文・沈線文の施文原体は、ともに先端のやや尖り気味の棒状施文具であると推測される。色調は黄褐色を呈し、器厚は10～12mmである。

第26図6は胴部片であり、図の左側が上になるものと考えられる。

第15類 隆帯と沈線文を主文様とするものである(第20図2～7・37～41、第21図1～12)。第20図2～7はいずれも波状口縁の口縁部片であり、2・3には綾杉文が施され、5・6では短線で文様が構成されている。7では隆帯側面に直径1～2mmの刺突文がみられる。全体的に色調は暗褐色・褐色・橙褐色・黄褐色を呈しており、器厚は8～10mmである。

第16類 隆帯と刺突文を主文様とするものであり(第20図8)、口唇部に沈線をめぐらす。

第17類 隆帯と刻目文を主文様とするものである(第20図9・10)。台形を呈する波頂部に隆帯を垂下させ、そこに刻目文を施すものである。器厚8～9mm、橙褐色・暗褐色を呈する。

第18類 沈線文と刺突文を主文様とするものである(第18図2・3)。

同図2は口縁部が大きく外反する深鉢であり、口唇部には円形疿痕文がわずかに認められる。頸部には2本の沈線をめぐらし、その間を円形列点文で施文している。胴部文様帯では、逆U字状区画文を配し、その中を「V」字状の綾杉文で占めつくしている。区画文と区画文の間には、沈線の蕨手文がみられる。色調は橙褐色～暗褐色を呈し、器厚は8～10mmを測る。

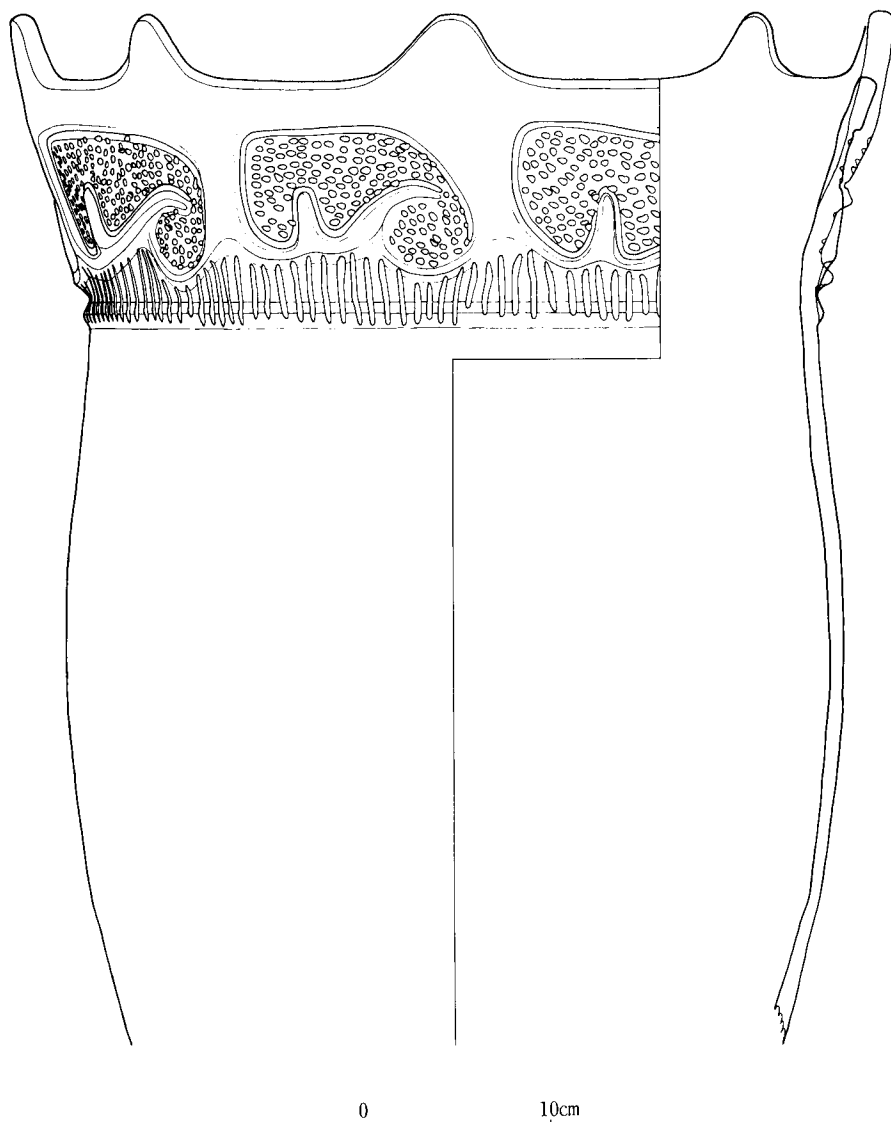
同図3は波状口縁を呈し、口縁部が大きく外反する深鉢である。波頂部には3重の同心円を描き、口縁部文様帯には横に細長い隅丸方形区画文を描出し、その間に短線を引いている。さらに、

刺突文を部分的に施している。頸部には2本の沈線をめぐらし、その間を短い沈線で隙間なく占めている。色調は黒褐色・褐色・黄褐色を呈し、器厚は10mmを測る。

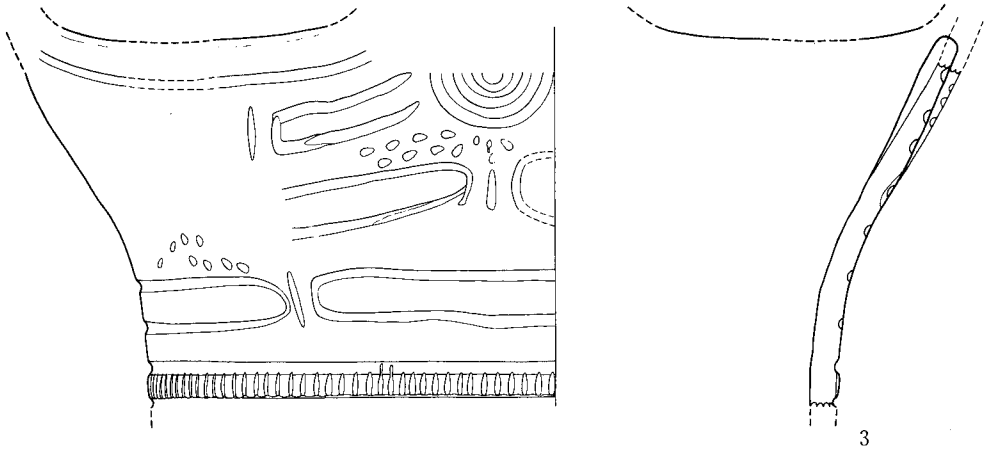
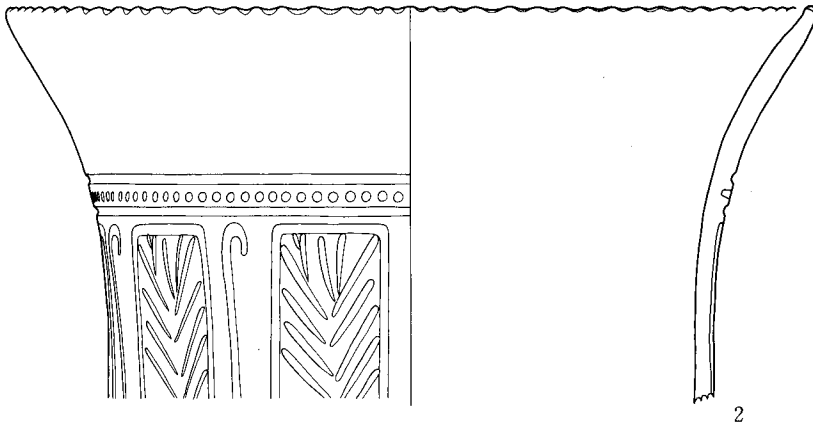
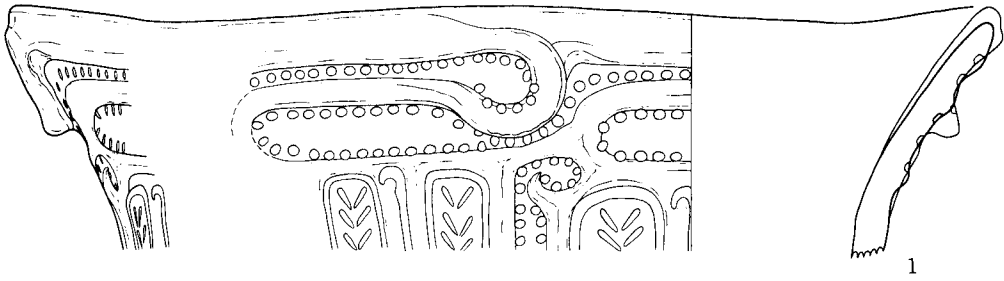
第19類 沈線のみで文様が構成されるものである(第20図11~20、第21図13~39)。第21図11・12は波状縁となるものであり、13~20は平縁である。

第20類 沈線文と縄文を主文様とするものである(第22図1~5・30~32)。5は波状縁であり、他は平縁である。30にはRLの縄文が施されている。

第21類 縄文のみのものである(第22図6~24・29)。同図6は結節縄文である。全体的に、器厚は8・9mmに集中する。

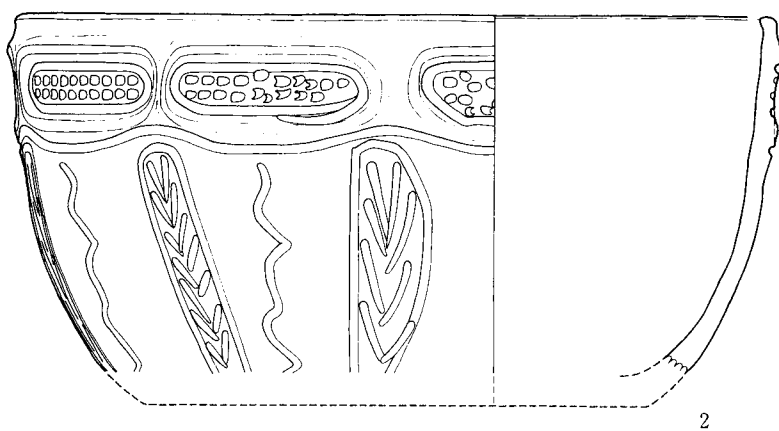
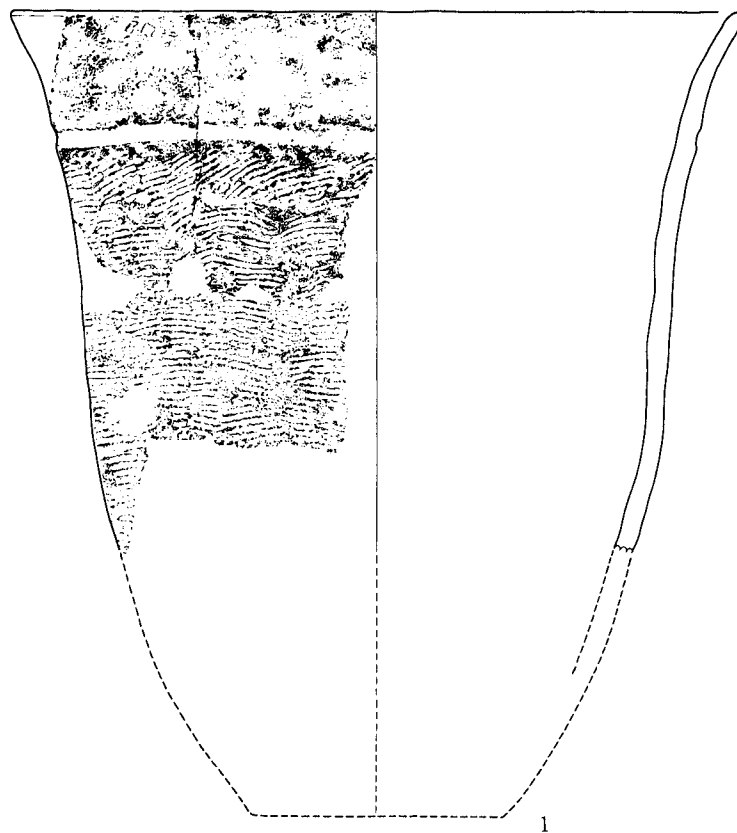


第17図 11-518T区縄文土器実測図1 (縮尺1/4)



0 10cm

第18図 11-518T区縄文土器実測図2 (縮尺1/3)

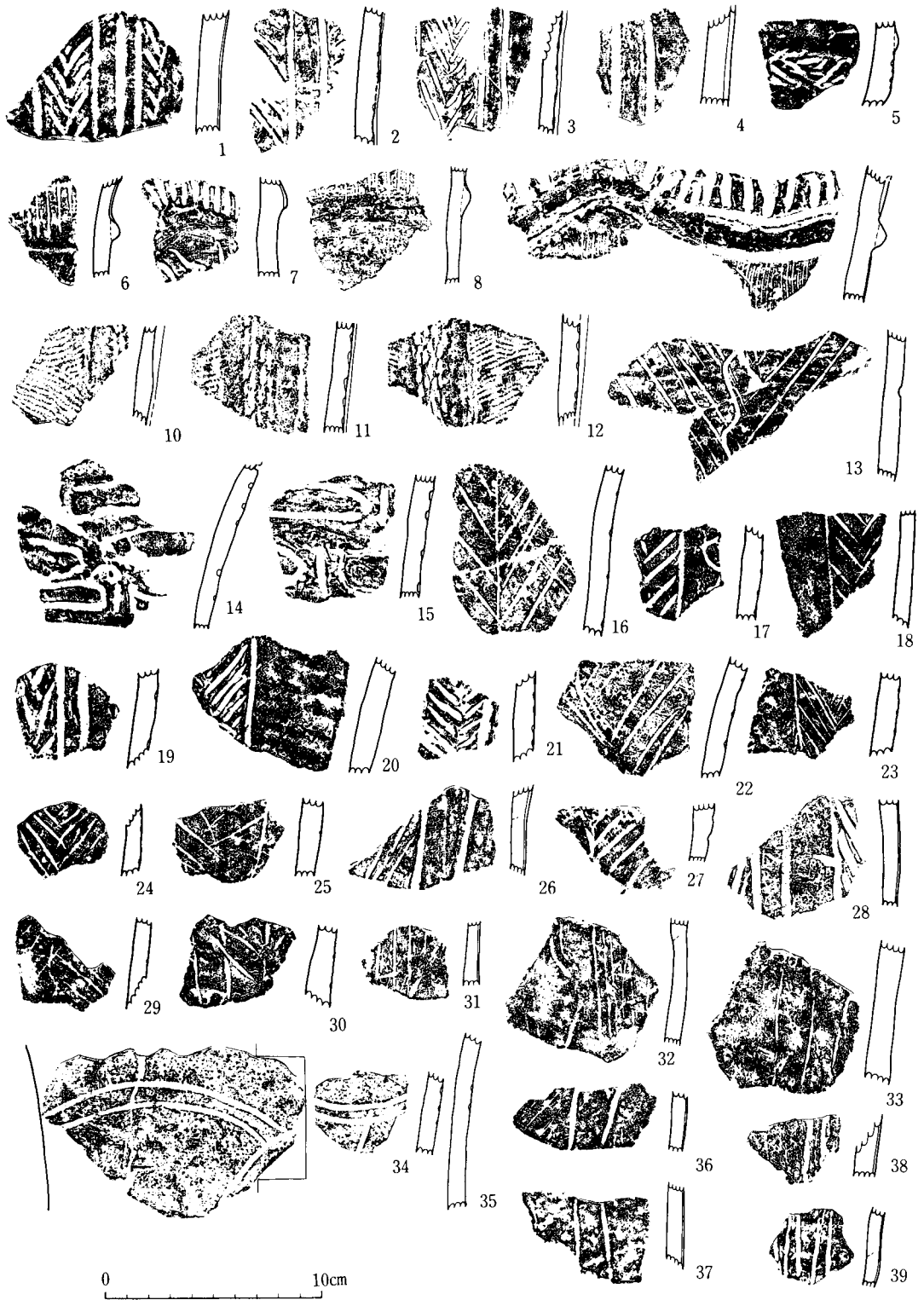


0 10cm

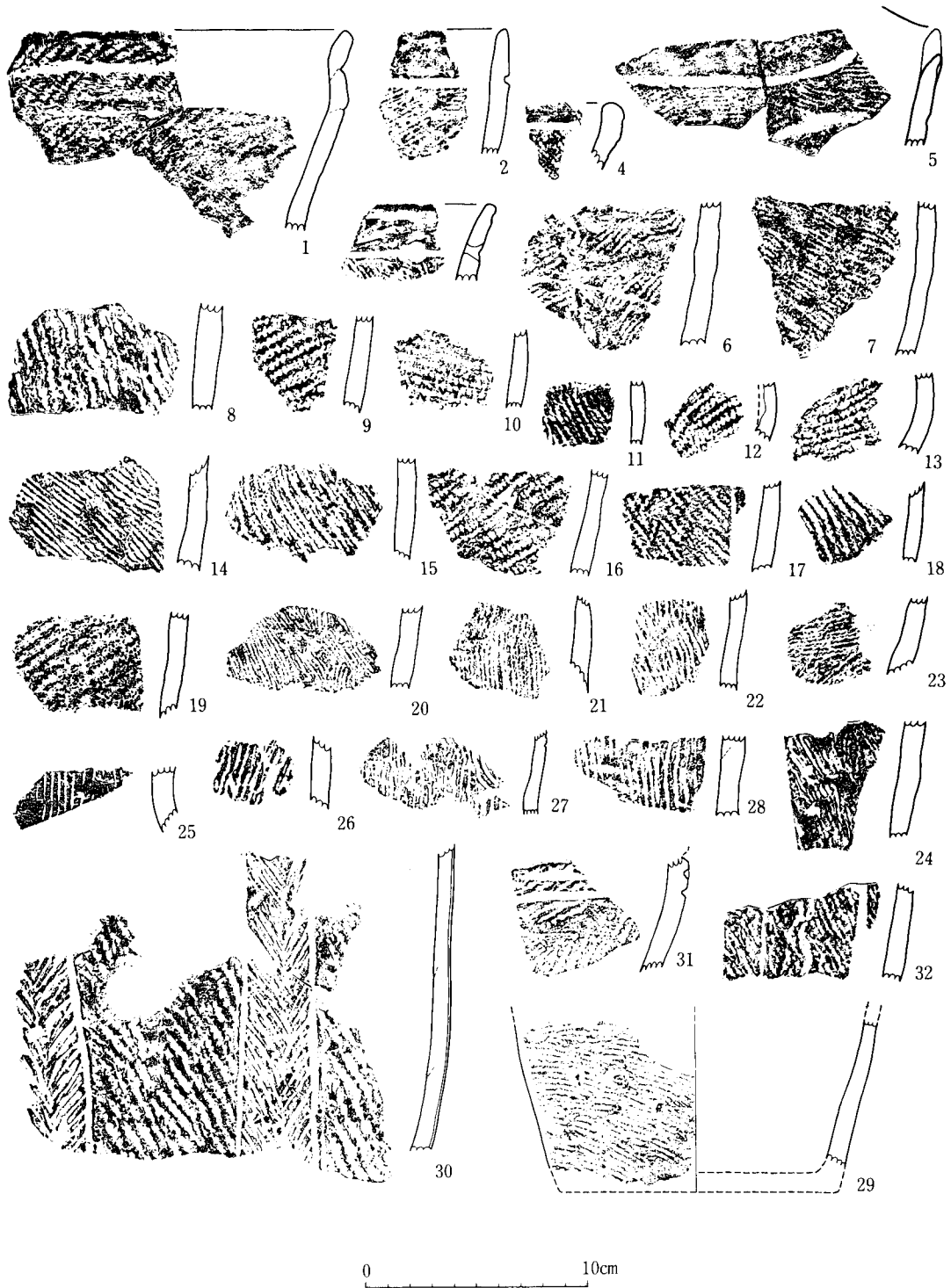
第19図 11-518T区縄文土器実測図3 (縮尺1/3)



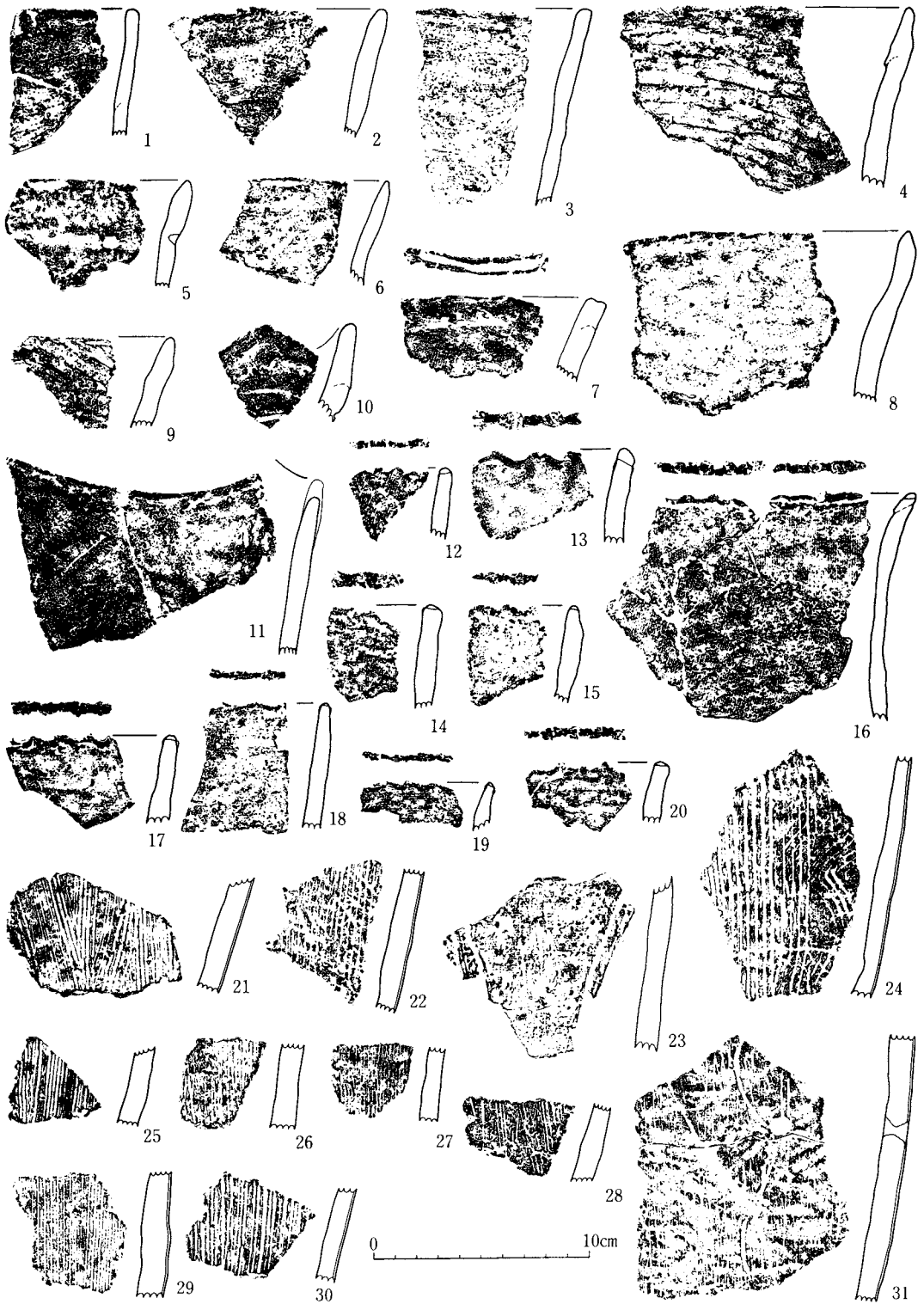
第20図 11-518T区縄文土器拓影1 (縮尺1/3)



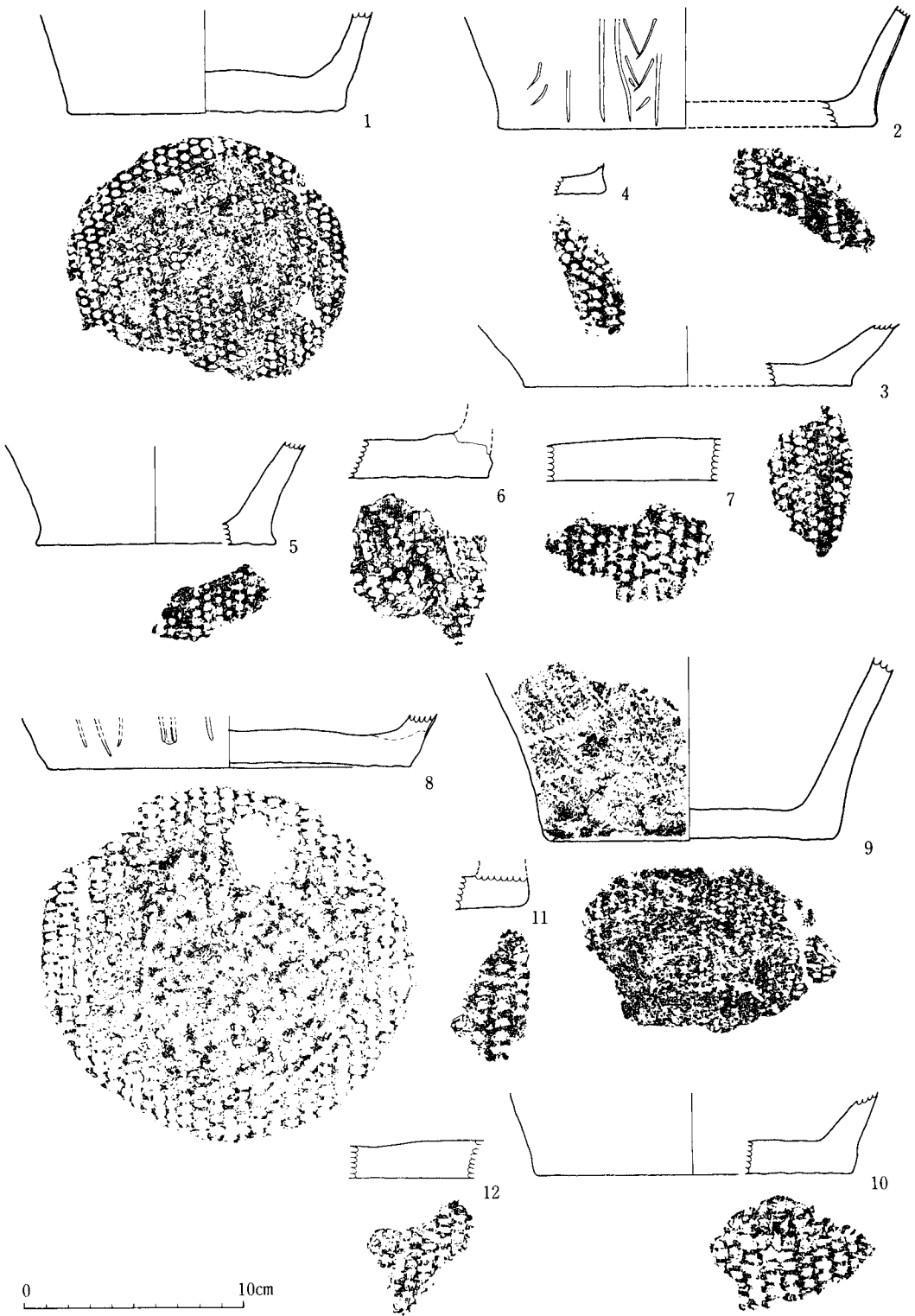
第21図 11-518T区縄文土器拓影2 (縮尺1/3)



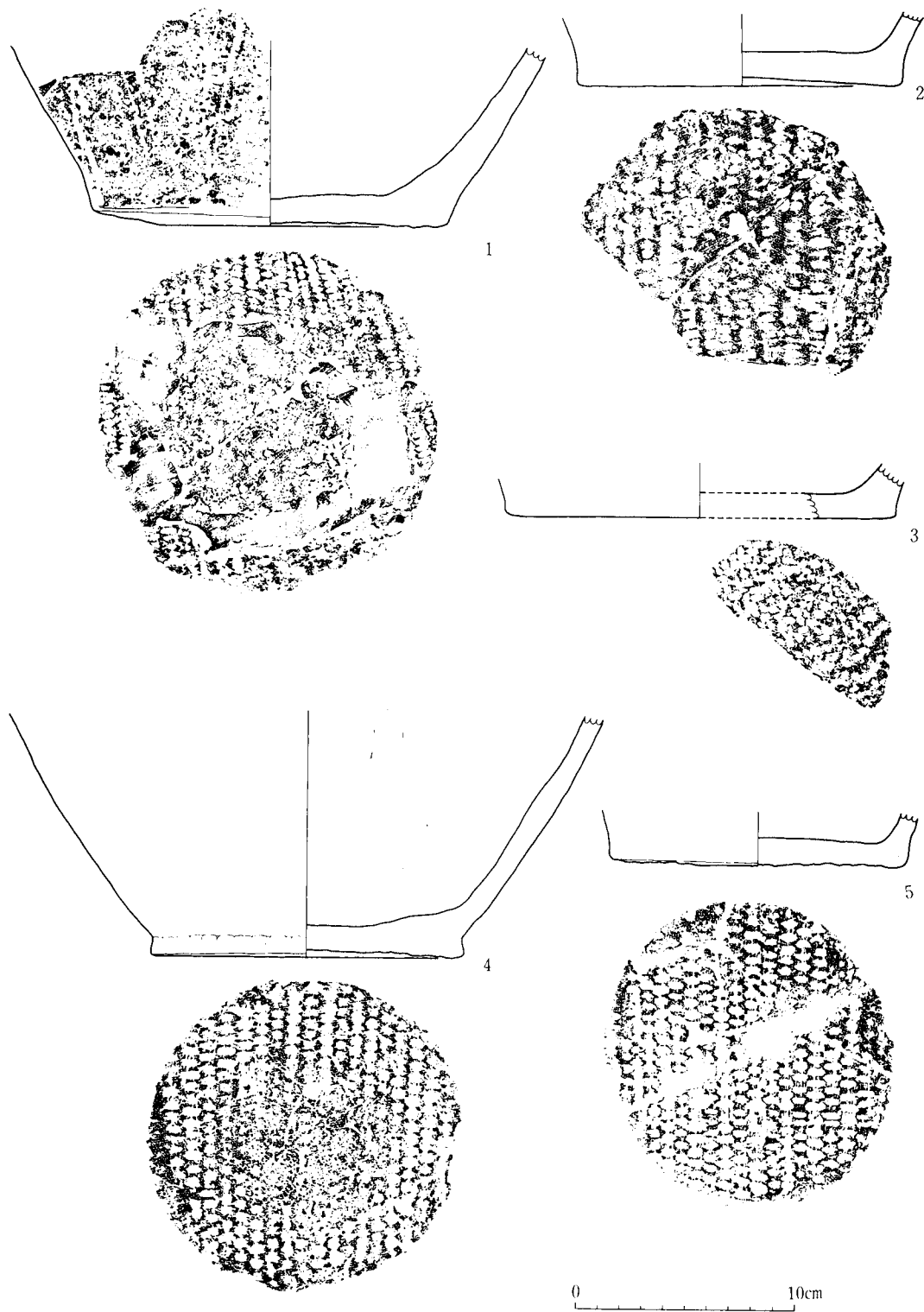
第22図 11-518T区縄文土器拓影3 (縮尺1/3)



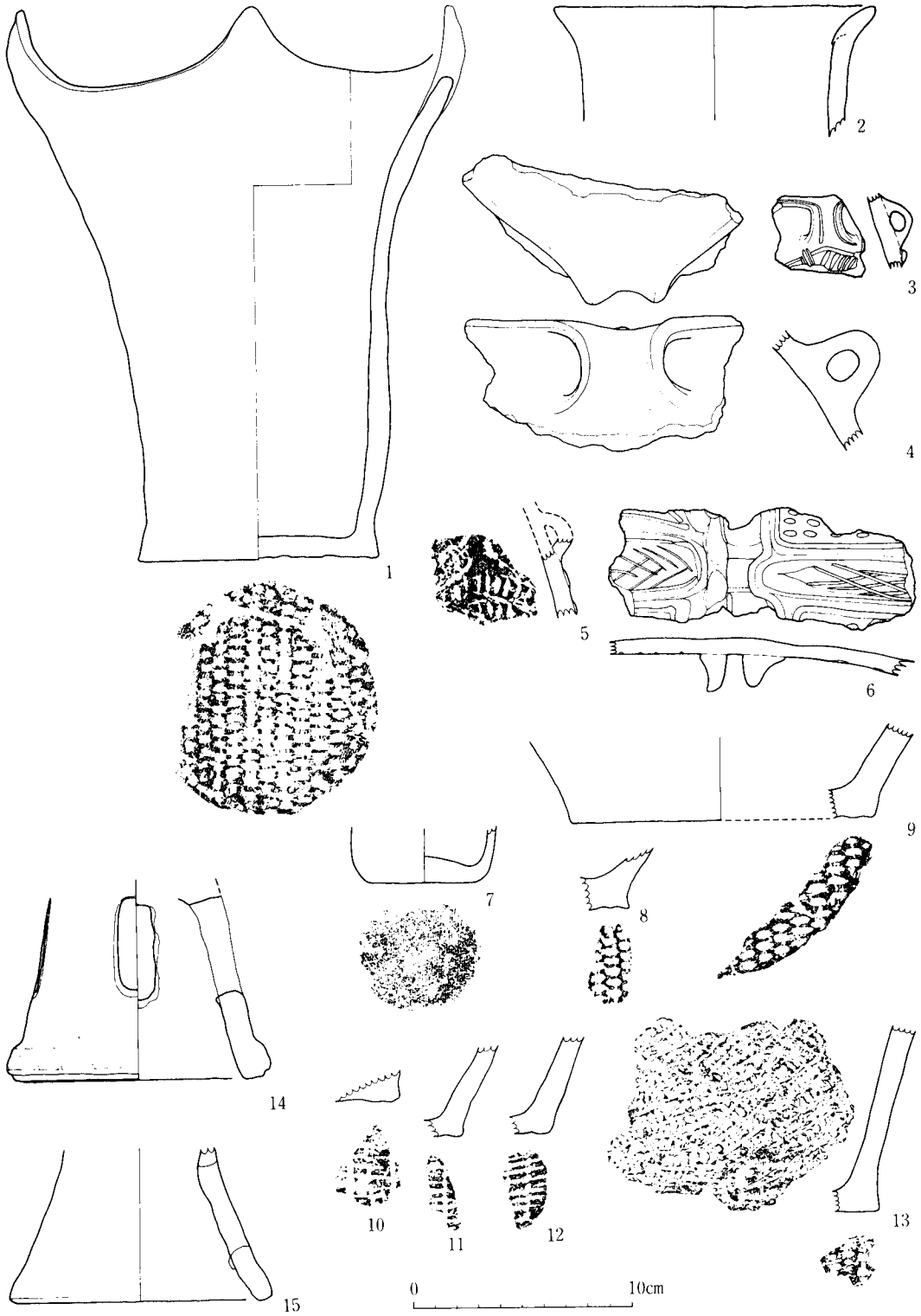
第23圖 11-518T区縄文土器拓影4 (縮尺1/3)



第24図 11-518T区縄文土器拓影5 (縮尺1/3)



第25図 11-518T区縄文土器拓影6 (縮尺1/3)



第26図 11-518T区縄文土器実測図・拓影（縮尺1/3）

第22類 撚糸文のみのものである（第22図25～28）。

第24類 条線文のみのものである（第23図21～31）。器厚8～12mmを測る。

第25類 無文のもので口唇部に圧痕文・刻目文のないものである（第23図1～11、第26図1・2）。第23図10・11は波状縁を呈し、1～9は平縁を呈する。7は口唇部に沈線がみられる。器厚は7～11mmを測る。第26図2は口径14.4cmを測る平縁の深鉢であり、口縁端部が強く外反する。

第26図1は4個の波頂部を有する深鉢であり、波頂部は3角形状を呈し、やや内屈している。口径は19.2cm、器高25cmを測る。色調は黒褐色～橙褐色を呈し、器厚は7～10mmを測る。底部には網代圧痕IV類がみられる。

第26図2は口径14.4cmを測る平縁の深鉢であり、口縁端部が強く外反する。

第26類 無文のもので口唇部に圧痕文・刻目文のあるものである（第23図12～20）。

また、本調査区から把手が3点（第26図3～5）、手捏ね土器が2点（第27図2・3）出土している。

5. 小 結

本遺跡出土の縄文土器は、調査区ごとにある程度土器型式が偏在する傾向が認められる。

11-514T区では、半隆起線文を中心的文様としており、いわゆる古府II式に特徴的な櫛状刺突文もみられる。また、粘土紐を貼付する文様や沈線文がみられる。沈線による具体的文様のなかには口縁部に横位の綾杉文が認められるが、中期後葉の典型的なものとは比べて類縁性はあるものの異質性も認められる。これらのことから本調査区は古府式でも新しい段階の時期に属するものと考えられる。有文の土器に伴出した条線文・無文の土器群も一応この時期に所属するものと推測される。

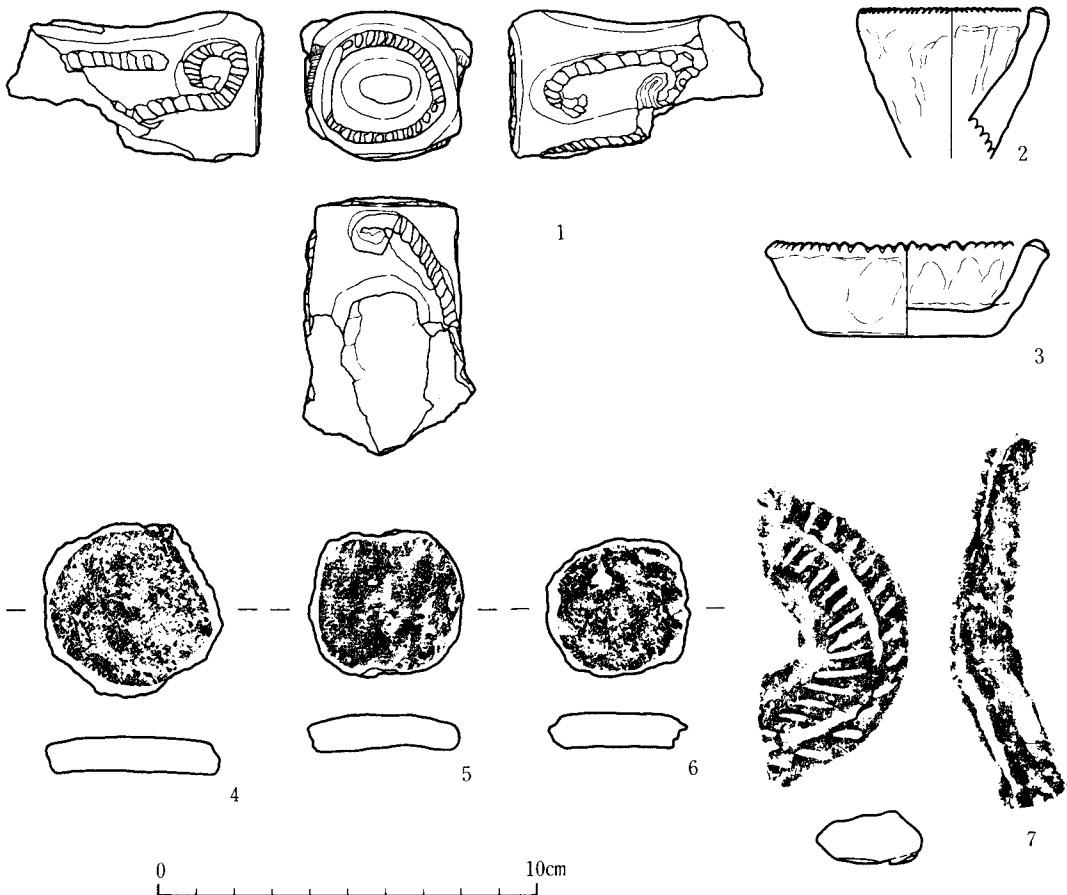
11-516T区でも11-514T区と同じように、文様のある土器の主体は半隆起線文系であり、粘土紐貼付文や沈線文のものもみられる。また、いわゆる古府II式の型式設定の根拠の一つとなっている櫛状刺突文が沈線文とともに文様化されている。ゆえに、この調査区の土器群も古府式の比較的新しい段階であると推測される。縄文・撚糸文・条線文・無文の土器群は時期決定がなかなか困難であるが、有文土器と共伴していることから、該期の所産であると考えられる。

11-518T区出土の土器群は、文様の施文方法・具体的文様・器形等から、縄文中期後葉前半に位置づけられるのは確定的であろう。これらはいわゆる大杉谷式の範ちゅうに含まれるものであり、「大杉谷式」は1957年に能美郡大杉谷村（現在の小松市）大杉遺跡出土の資料をもとに、沼田啓太郎氏により提唱された仮称の型式名である（沼田1957）。一方、上野与一氏によれば、小松市大杉町山崎遺跡から「発見された土器には色々な特徴があって、もう少し詳しい調査をやつてから報告書を発表しようと思つていたら何時のまにか『バンド谷』より出た土器を標準として大杉谷式なる名前が付けられて全国的に通用するようになってしまった。」と報告されており（上野1965）、型式名が設定されるまでの経緯の一端・側面を物語っているものと考えられる。いずれにしる、鳳至郡能都町宇出津崎山遺跡（高堀1983）出土の土器を標式資料としている「宇出津式」

と並んで、型式名が遺跡名からとられていないケースであり、こうした例は全国的に見ても数少ないものと推測される。同時期の山崎遺跡と崎山遺跡であり、混乱を避けるために大杉谷式と宇出津式になったのであろうか。

南加賀における縄文中期後葉の土器編年の現状については、かつて小島俊彰氏が「南加賀は、南加賀で独自の編年を組み立てて見るべきである」と指摘した（小島1974）点は、古くて新しい問題点であり、現在でも大きな課題として残っている。

3調査区の土器組成についてみるために、接合関係を確認したうえで各調査区ごとに口縁部片の数を類別に集計した（第1表）。総数272点出土しており、その内訳は深鉢が263点で96.7%、浅鉢が5点で1.8%、鉢が4点で1.5%である。深鉢において、有文のもの（第1～19類）と無文のもの（第25・26類）を比べた場合、11-514T区と11-516T区では後者は前者と数量的・割合的にそれほど差違はみられないが、11-518T区ではほぼ3倍となっている。また、無文土器で口唇部に圧痕文のないもの（第25類）と圧痕文のあるもの（第26類）とでは、514T区・516T区では第25類は第26類のほぼ5倍となっているが、518T区ではほぼ10倍となっている。



第27図 縄文土器・土製品の実測図・拓影（縮尺1/2）

有文のものと無文のものの器厚・胎土・焼成・色調を比較すると、両者間にはほとんど違いは認められず、精粗の区別をするのは困難である。一方、縄文晩期中屋式期の辰口町岩内遺跡(山本1986)においては、一般に有文土器は半精製土器としてとらえられ、無文土器は粗製土器としてとらえられ、両者間には著しい違いが認められる。それでこの2遺跡について見る限りでは、中期後半では文様の有無により、土器に精粗の区別をつけることがまだ厳密ではなかったと考えられる。

第1表 土器組成表

調査区 類	調査区			合計	
	11-514	11-516	11-518	合 数	計 %
深鉢 (第1~19類)	24	19	34	77	28.31
深鉢 (第20~22類)	15	10	6	31	11.40
深鉢 (第23・24類)	1			1	0.37
深鉢 (第25類)	22	24	90	136	50.00
深鉢 (第26類)	4	5	9	18	6.62
浅鉢	5			5	1.84
鉢	2	1	1	4	1.47
合計	73	59	140	272	100.01

6. 底部と圧痕

11-514T・11-516T・11-518Tの3調査区から出土した縄文土器底部は、総数118点を数える(第2表)。出土状況については、ほとんどのものは茶褐色土層(包含層I)・黒茶褐色土層(包含層II)からの検出である。これらの土器底部から本遺跡の全体的傾向をみていくものである。

3調査区出土の土器底部は、断面形態によりA~Hの8類に大別することができる。

A類……底面から胴部の接合部位まで立ち上がり、そこから外側へ開く形態である(第16図16・17、第24図1・2・5・9・10、第25図2~5、第26図8~13)。

B類……底面から胴部の接合部位まで立ち上がり、外側へ大きく開く形態である(第24図3)。

C類……底面から胴部の接合部位まで立ち上がり、そこから内側へ内曲するようにしながら開く形態である(第15図2)。

D類……底面より外側へ開く形態である(第13図7、第24図8、第25図1)。

E類……底面よりまっすぐ立ち上がる形態である(第26図1)。

F類……底面より大きく開く形態である(第11図1)。

G類……底が少し丸味を帯び、まっすぐに立ち上がる形態である(第26図7)。

H類……底が少し丸味を帯び、外側へ大きく開く形態である(第13図9)。

底径に関しては4~22cm台の範囲に分布し、7~17cm台に集中する傾向が認められる。

圧痕の種類としては、網代圧痕・スダレ状圧痕・木葉圧痕が認められる。

網代圧痕 36点出土しており、底部全体の約30%を占めている。その質感により、I~IVの4類に分類される。編み方は、いずれも「1本超え1本潜り1本ズレ」である。

I類……ヨコ条の圧痕の縁部分が丸味を帯びて円形を呈するものである(第24図1~6)。

II類……ヨコ条の圧痕の縁部分が丸味を帯びて楕円形を呈するものである(第14図16、第25図、第26図8・9)。

III類……ヨコ条の圧痕が細長い楕円形を呈するものである（第13図9）。

IV類……ヨコ条の圧痕が隅丸の正方形や長方形を呈するものである（第16図17、第24図7～12、第26図1・13）。

質感はいずれもポコポコとした感じであり、

I・II類に特にその傾向が著しく、いわゆる東北型網代として分類されるものである（植松1981）。

スタレ状圧痕 4点みられるだけである（第13図10、第24図10～12）。

木葉圧痕 1点のみである（第15図2）。

台付土器の台部分が5点出土しており、その内訳は11-514T区1点（第13図6）、11-516T区2点（第16図14・15）、11-518T区2点（第26図14・15）である。台の高さは、4.5～9.5cmを測り、直径は9～13.5cmである。色調は赤褐色～橙褐色を呈し、器厚は8～11mmを測り、深鉢のそれとほぼ同じである。また、長方形の透孔をもつものも1点みられる（第26図14）。

第2表 圧痕種類・底径別集計表

種類 底径 (cm)	網代圧痕		スタレ状 圧痕	木葉 圧痕	無文	不明	合計	
	1・1・1	不明					数	%
4.0～4.9					1	1	2	1.69
5.0～5.9								
6.0～6.9					2		2	1.69
7.0～7.9	1					4	5	4.24
8.0～8.9					1	6	7	5.93
9.0～9.9						5	5	4.24
10.0～10.9	1			1		14	16	13.56
11.0～11.9	2	2			1	4	9	7.63
12.0～12.9	2	1				5	8	6.78
13.0～13.9	2	1	1			2	6	5.08
14.0～14.9	3		1		1	7	12	10.17
15.0～15.9	2	2				5	9	7.63
16.0～16.9	4		1			2	7	5.93
17.0～17.9	1					3	4	3.39
18.0～18.9		1			1		2	1.69
19.0～19.9	1					1	2	1.69
20.0～20.9		1				3	4	3.39
21.0～21.9		1					1	0.85
22.0～22.9	1						1	0.85
不 明	5	2	1			8	16	13.56
合計	数	25	11	4	1	7	70	99.99
	%	21.19	9.32	3.39	0.85	5.93	59.32	100.00

引用文献

上野与一 「考古篇」『小松市史』第4巻 57～231頁 小松市教育委員会（1965）
 植松なおみ 「東北型網代圧痕について」『古代文化』第33巻第2号 17～26頁 古代学協会（1981）
 小島俊彰 「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第5号 31～53頁 富山考古学会（1974）
 高堀勝喜 「宇出津崎山遺跡」『能都町史』第3巻 52～74頁 石川県能都町役場（1982）
 沼田啓太郎 「石川県の縄文式土器」『県下の貝塚と古墳』 35～58頁 石川県図書館協会（1957）
 山本直人・編 『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター（1986）

第4節 土製品

第27図1は、ヘラ状施文具の先端部で円形・蕨手形に連続的に刺突文を施されたものである。隅丸の直方体で、色調は暗褐色～明褐色を呈し、現存値で長さ6.8cm、幅約4cmを測る。11-518T区からの出土である。

第27図4～6は土製円盤と考えられるものであり、ほぼ円形に整形されている。直径3.5～4.5cmを測り、厚さ9mm程度である。11-518T区からの出土である。

第27図7は把手部分かと推測されるが、一応ここで取り扱った。粘土紐を貼り付け、その上と器面に斜め方向からヘラ状施文具の側面部を押圧して短線状の文様としている。長さ8cm、幅3cm、厚さ1.3cmを測り、暗褐色～明褐色を呈する。11-518T区からの検出である。

第5節 石 器

中海遺跡から発掘された縄文時代の石器は総数110点を数える。出土状況については、ピットなどの遺構に伴うものもみられるが、そのほとんどは包含層I・IIからの検出であり、出土区では11-518T区から最多の31点が出土しており、石器全体の約3割に相当する。次に多いのは11-516T区の7点であり、他の調査区からは数点の検出にとどまっている。

本遺跡の縄文時代の石器の点数と器種の構成比を表したのが、第3表である。また、石器の点数は完形品も欠損品もそれぞれ1点として計算し、接合資料は接合したうえで1点として計算した。

1. 打製石斧

打製石斧は総数35点出土し、石器全体の31.82%を占めている（第4表、第28図）。このうち完形品は7点、欠損品は28点であり、欠損品の内訳は刃部欠5点、頭部欠6点、刃部片2点、頭部片13点、胴部片2点である。出土状態に関しては、第28図14が第2号住居址から検出されている以外、他の石器や土器と同じ出土状況である。

打製石斧の機能は一般に土掘り具として認められており、ここではその機能と最も密接に関係があると考えられる刃部の形態により分類をおこなうものである。形態を特徴づけるのは刃縁の形であり、両側縁部が長軸の中心線で線対称になるようにした時の刃縁の形である。そして中心線で刃部が線対称となるものをA類、線対称にならず偏刃となるものをB類とした。A・B類はそれぞれa～dの4類に細分される（山本1985）。

A a類……刃縁が丸いものである（第28図1～4）。

A b類……刃縁がゆるく外湾するものである（第28図5）。

B a類……偏刃で刃縁が丸いものである（第28図6～9）。

B b類……偏刃で刃縁がゆるく外湾するものである（第28図10～13）。

B d類……偏刃で刃縁がV字状を呈するものである（第28図14）。

本遺跡ではA a・A b・B a・B b・B dの5類がみられ、A a類5点、A b類1点、B a類4点、B b類5点、B d類1点である。B類はA類のほぼ2倍であり、a類が主体である。

完形品7点から本遺跡の打製石斧の平均的な大きさをみてみると、長さは9～14cmに分布して9～12.5cmに集中する。幅は5～6cmに、厚さは1.5～2.5cmに集中する傾向が認められ、重さは85～430gに分布しているが100g台のものが多い。打製石斧は着柄として使用されたと推測され、胴部の最も細い部分の幅が柄の幅と関係あるのではないかと考えられることから、ここではその部位についても計測してみた。第28図で同図9を除く13点については、3.4～6.2cmに分布して4cm台のものが多く、平均4.7cmである。

第3表 石器組成表

石器器種	合 計	
	数	%
打製石斧	35	31.82
石 皿	5	4.55
磨 石	7	6.36
敲 石	6	5.45
切目石錘	6	5.45
有溝石錘	1	0.91
礫石錘	12	10.91
石 鏟	8	7.27
石 匙	1	0.91
石 錐	1	0.91
その他石器	14	12.73
磨製石斧	14	12.73
合 計	110	100.00

第4表 打製石斧一覧表

〔単位はcmおよびg. () を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
排水A3・4-C1	包含層	A a	刃部	細粒砂岩(中生代)	(4.8)	(5.0)	(1.0)	(38.0)	
排水A5-C1	包含層	—	頭部片	粗粒砂岩(中生代)	(7.1)	(6.8)	(2.3)	(136.5)	
排水A6-E1	包含層	B a	完形	輝石安山岩	8.9	5.4	1.4	85.3	第28図 8
排水A10-C1	包含層	B b	頭部欠	安山岩	(9.2)	6.1	2.5	(164.9)	12
排水A11-C2	層位不明	A a	完形	頁岩(中生代)	12.5	5.9	2.6	218.0	1
排水A12-C2	包含層	—	刃部欠	緑色凝灰岩	(11.4)	(5.9)	1.6	(124.8)	
排水A13-C2	包含層	B a	刃部欠	輝石安山岩	13.6	7.1	2.2	(196.3)	6
排水B5-C1	耕土	B b	完形	輝石安山岩	9.7	5.3	1.7	107.7	11
排水B6-C1	包含層	—	胴部片	輝石安山岩	(8.4)	(5.7)	1.8	(105.7)	
排水C7-C1	包含層	A a	頭部欠	安山岩	(9.0)	5.3	1.5	(98.2)	4
排水C7-C1	2号住	B b	頭部欠	角閃石安山岩	8.9	4.2	1.3	(45.0)	13
排水C9-C1	耕土	B a	頭部欠	石英安山岩	(13.2)	5.9	1.9	205.5	7
排水C10-C2	包含層	B b	完形	凝灰質石灰岩	11.2	5.6	2.4	177.7	10
排水D4-C3	包含層	—	頭部片	細粒砂岩(中世代)	(5.2)	(5.0)	(1.5)	(47.2)	
排水F7-C1	包含層	A a	完形	安山岩	11.5	5.3	1.9	143.5	3
0-516-C1	包含層	—	頭部片	凝灰岩	(5.8)	(4.5)	(1.5)	(52.5)	
3-502-C1	盛土	B a	頭部欠	輝石安山岩	(9.1)	(4.4)	(1.8)	(80.5)	9
7-502-C2	盛土	—	頭部片	緑色凝灰岩	(5.2)	(4.7)	(1.0)	(23.5)	
11-502-C1	包含層II	—	頭部片	変朽安山岩	(5.0)	(5.3)	(1.2)	(56.0)	
11-502-C3	盛土	B d	頭部欠	凝灰岩	(8.6)	5.5	2.2	(114.0)	14
11-502-C4	盛土	—	刃部欠	凝灰岩	(7.5)	(4.0)	1.6	(67.1)	
11-502-C5	盛土	—	頭部片	粗粒砂岩(中生代)	(4.7)	(4.5)	(2.1)	(55.1)	
11-512-C1	包含層II	—	刃部欠	凝灰岩	(8.6)	(6.0)	1.6	(81.0)	
11-512-C2	包含層	—	頭部片	細粒砂岩(中生代)	(6.8)	(4.1)	(1.7)	(53.5)	
11-516-C5	包含層II	A a	完形	緑色凝灰岩	12.6	4.5	2.3	143.2	2
11-518-C1	包含層	—	頭部片	珪化凝灰岩	(5.7)	(2.7)	(2.3)	(51.2)	
11-518-C2	包含層II	B b	刃部片	珪化凝灰岩	(5.2)	(5.5)	(1.0)	(43.0)	
11-518-C3	包含層II	—	頭部片	流紋岩	(5.7)	(4.1)	(1.3)	(28.8)	
11-518-C6	包含層	—	頭部片	珪化凝灰岩	(6.8)	(3.0)	(2.6)	(115.5)	
11-518-C7	包含層	—	刃部欠	珪化凝灰岩	(7.9)	(2.2)	(2.0)	(93.9)	
11-518-C8	包含層	—	頭部片	珪化凝灰岩	(3.6)	(4.3)	(1.1)	(21.8)	
11-518-C22	包含層	—	胴部片	珪化凝灰岩	(1.9)	(5.4)	(1.1)	(18.0)	
16-507-C1	包含層	—	頭部片	輝石安山岩	(5.6)	(4.8)	(1.1)	(38.7)	
25-524-C1	層位不明	A b	完形	粗粒砂岩(中生代)	13.7	7.4	3.6	426.5	5
出土区不明-C1	層位不明	—	頭部片	安山岩(第四紀)	(6.5)	(7.0)	(2.5)	(122.0)	

第6表 磨石一覧表

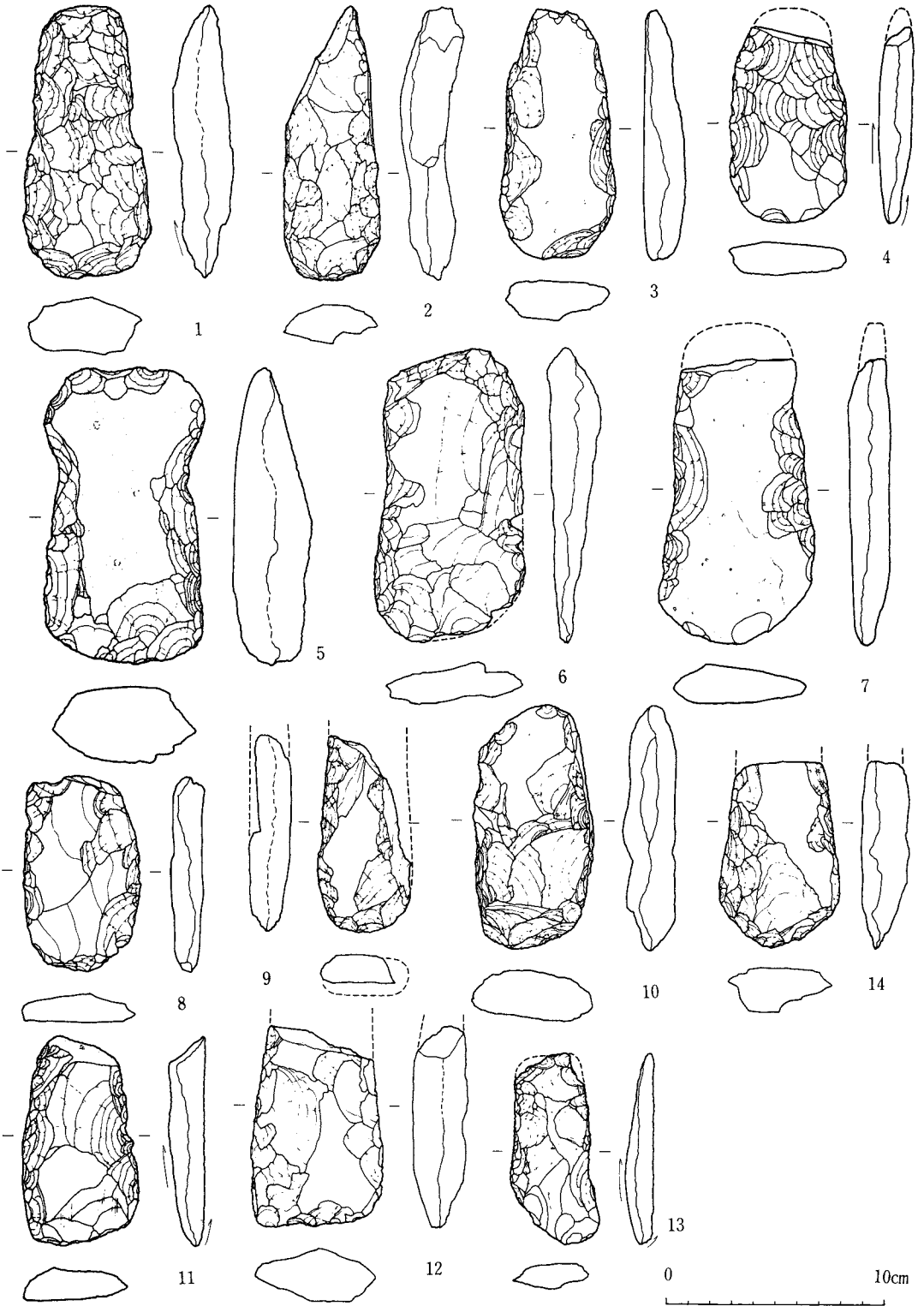
〔単位はcmおよびg. () を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
排水A12-13-C1	包含層	III?	3/4 欠	粗粒砂岩(中生代)	(6.5)	(4.5)	(5.0)	(170.0)	第30図 6
11-516-C6	包含層	II	完形	花崗岩	8.0	6.7	4.4	359.6	4
11-518-C1	層位不明	I	完形	粗粒砂岩(中生代)	9.7	3.6	3.7	431.0	2
11-518-C13	層位不明	I	完形	閃緑岩	8.0	6.9	4.1	346.3	1
11-518-C21	ピット7	II	完形	粗粒砂岩(中生代)	11.0	8.5	4.9	650.0	5
11-518-C23	包含層	II	2/3 欠	緑色凝灰岩	(6.8)	8.9	3.1	(140.9)	7
11-518-C27	包含層	I	1/3 欠	安山岩	(10.3)	(6.1)	(6.0)	(584.3)	3

第7表 敲石一覧表

〔単位はcmおよびg. () を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
11-514-C3	暗茶褐色土層	I?	1/2 欠	緑色凝灰岩	(7.0)	6.7	2.8	(145.3)	第30図13
11-516-C1	包含層II	II	完形	粗粒砂岩(中生代)	8.9	8.0	5.4	534.1	8
11-518-C9	包含層	I?	2/3 欠	凝灰岩	(6.5)	(5.5)	(4.5)	(121.0)	12
11-518-C11	包含層	I?	1/2 欠	安山岩	8.1	(7.1)	(2.0)	(109.1)	10
11-518-C28	包含層	II	完形	粗粒砂岩(中生代)	8.1	7.8	4.2	392.3	9
11-518-C29	包含層	I	完形	白色凝灰岩	10.0	5.7	2.4	145.4	11

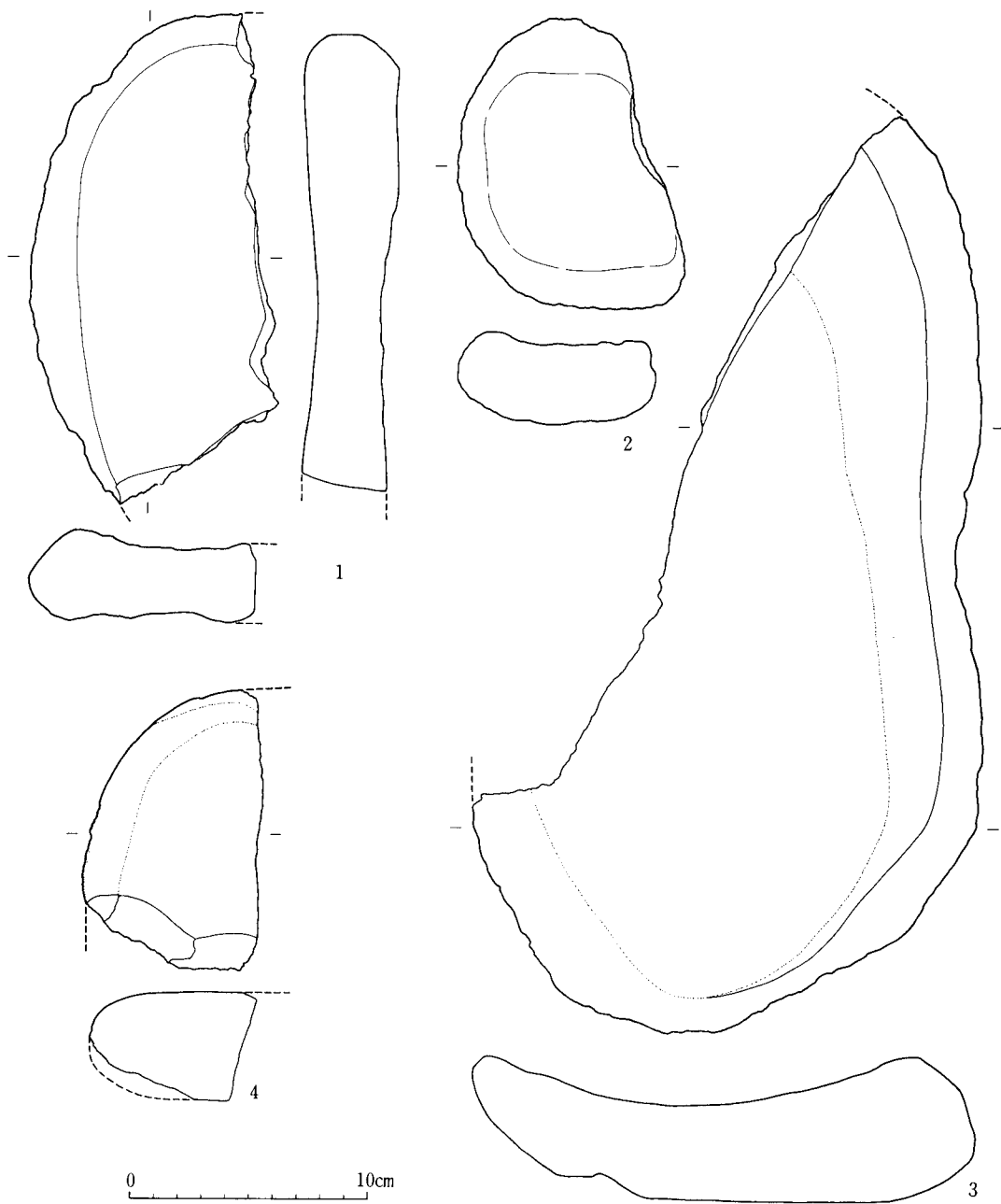


第28図 打製石斧実測図 (縮尺1/3)

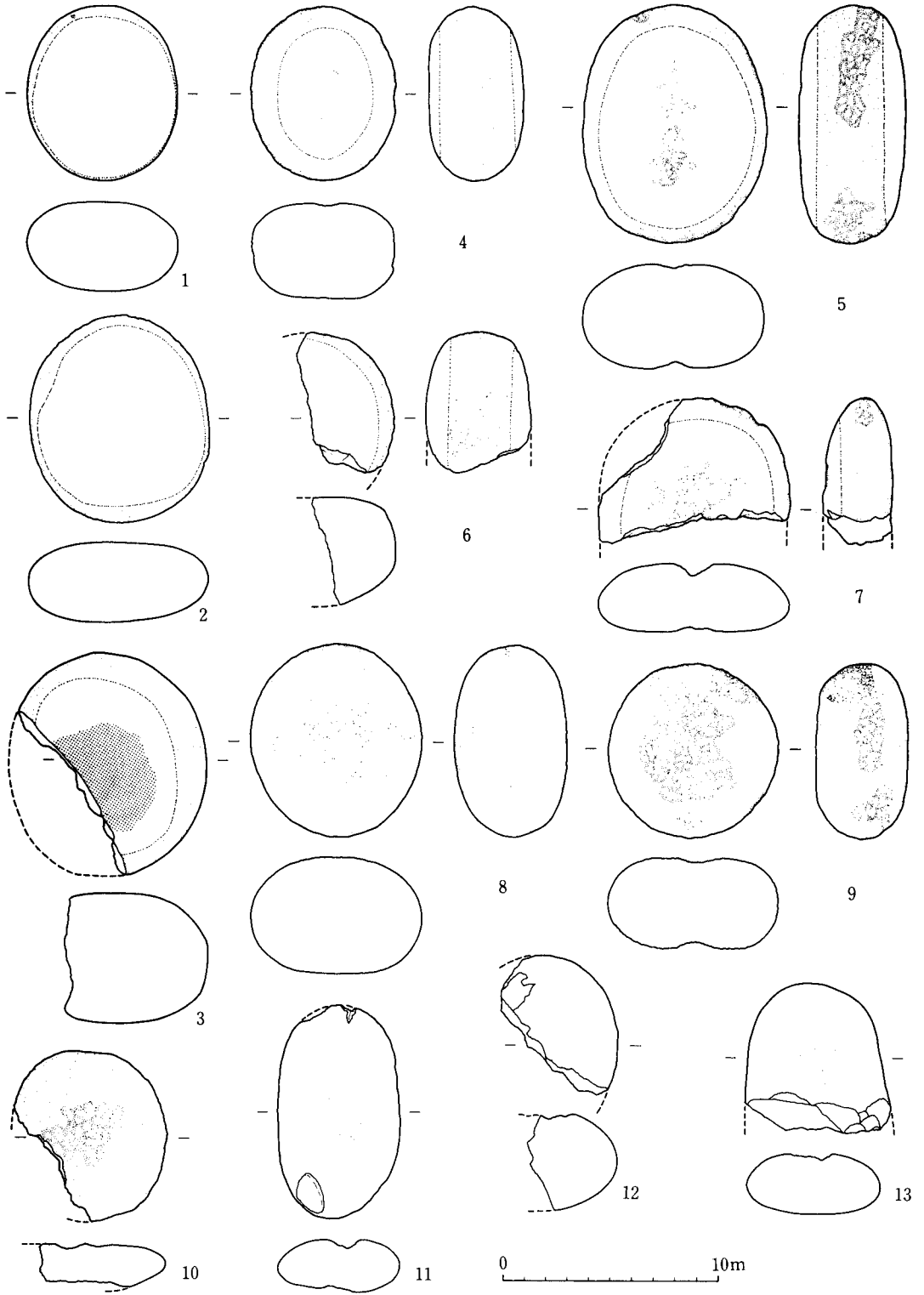
第5表 石皿一覽表

(単位はcmおよびg. () を付したものは現存値を示す)

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
排水C6 -C1	耕土	I	3/5 欠	石英粗面岩	(20.6)	(10.4)	(4.0)	(1075.0)	第29図 1
排水C10 -C1	包含層	II	3/4 欠	砂岩(中生代)	(12.0)	(8.1)	(4.5)	(460.0)	4
排水E1・2 -E1	耕土	I	1/3 欠	凝灰岩	(12.2)	(9.6)	(4.5)	(492.7)	2
11-516 -C4	層位不明	I	1/2 欠	石英粗面岩	(38.8)	(21.4)	(6.2)	(3955.0)	3
11-516 -C7	包含層	II	破片	粗粒砂岩(中生代)	(8.4)	(8.7)	(2.0)	(166.5)	



第29図 石皿実測図 (縮尺1/3)



第30図 磨石・敲石実測図 (縮尺1/3)

2. 石 皿

石皿は総数5点出土し、石器全体の4.55%を占めている(第5表、第29図)。定形化した石皿はほとんどみられず、台石として分類する方が適当であると考えられるものが多い。

石皿は表面の形態により、I・IIの2類に分類される。

I類……周縁から中央にかけてくぼむものである(第29図1～3)。

II類……中央部が高く、周縁に向けて緩く下降気味に傾斜しているものである(第29図4)。

3. 磨 石

磨石は総数7点出土し、石器全体の6.36%を占めている(第6表、第30図1～7)。

磨石は使用痕により、I～IIIの3類に分類され、I類3点、II類3点、III類1点である。

I類……円礫の表面に磨耗痕だけがみられるものである(第30図1～3)。

II類……円礫の表面に磨耗痕と敲打によるくぼみがみられ、周縁部に敲打痕のみみられるものである(第30図4・5・7)。

III類……円礫の表面に磨耗痕のみみられ、周縁部に敲打痕のみみられるものである(第30図6)。

欠損品は完形時の重さを復元した数値をとってみると、磨石の重さは1kgを超えるものもみられるが、200～650gの範囲におさまる。形状は楕円形を呈するものがほとんどである。

4. 敲 石

敲石は総数6点出土し、石器全体の5.45%を占めている(第7表、第30図8～13)。

敲石は使用痕により、I・IIの2類に分類され、I類4点、II類2点である。

I類……円礫の表面に敲打によるくぼみだけがみられるものである(第30図10～13)。

II類……円礫の表面に敲打によるくぼみがみられ、周縁部に敲打痕のみみられるものである(第30図8・9)。

重量について磨石と同様にしてみると、145～535gの範囲内に包括され、磨石よりも一回り小振りである。形状は楕円形のものやほぼ円形に近い楕円形のもの認められる。

5. 切目石錘

切目石錘は総数6点出土し、石器全体の5.45%を占めている(第8表、第31図1～6)。いずれもやや扁平な楕円礫の長軸の両端に切り込みのあるタイプであり、ここではI類と分類する。

完形品5点、欠損品1点である。重さは10～110gに散在的に分布し、欠損品の復元重量値を含めた6点の平均値は66.1gである。加賀の切目石錘の平均重量は47.3gであり(山本1983)、これと比べて約20g重い。切り込み幅は0.2～0.9cmに分布し、平均0.46cmである。

6. 有溝石錘

有溝石錘は1点のみ出土している(第8表、第31図7)。1/3欠けており、推定重量は99.0gを

第8表 切目石錘・有溝石錘一覽表

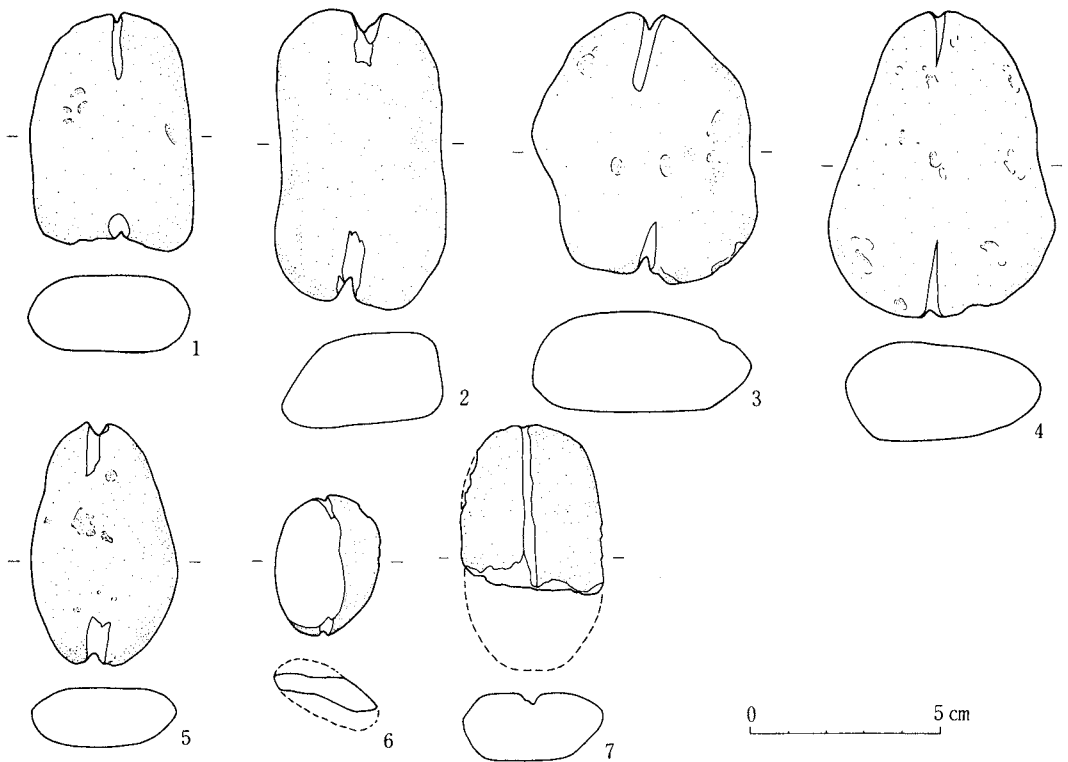
(單位はcmおよびg, () を付したものは現存値を示す, a ≥ bとする)

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	L1	L2	W	a	b	S	重さ	挿図番号
排水D4-C1	包含層	I	完形	白色凝灰岩	6.3	5.5	4.3	0.3	0.2	2.0	54.5	第31図1
7-502-C14	層位不明	I	2/3欠	黒色頁岩	3.8	3.5	(2.8)	0.2	0.2	(0.9)	(8.9)	6
11-518-C15	包含層II	I	完形	白色凝灰岩	6.5	5.8	3.8	0.6	0.5	1.6	39.6	5
11-518-C16	包含層II	I	完形	石英安山岩	8.1	7.7	5.9	0.6	0.5	2.6	108.6	4
11-518-C30	包含層II	I	完形	珪化凝灰岩	7.2	5.9	6.0	0.5	0.4	2.6	107.5	3
11-518-C2	包含層	I	完形	白色凝灰岩	7.9	6.5	4.5	0.9	0.6	2.5	73.1	2
あ5-C2	層位不明	I	1/3欠	凝灰岩	(4.5)	(4.2)	(3.8)	0.2	—	(1.8)	(33.0)	7

第9表 礫石錘一覽表

(單位はcmおよびg, () を付したものは現存値を示す, a ≥ bとする)

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	L1	L2	W	a	b	S	重さ	挿図番号
排水A12-C3	包含層	I	完形	凝灰質砂岩	6.4	6.1	5.4	2.0	1.7	2.3	97.2	第32図5
排水B4-C1	包含層	I	完形	白色凝灰岩	5.7	5.2	4.2	0.6	0.4	2.1	44.4	1
排水C2-C1	耕土	I	完形	軽石凝灰岩	8.4	7.4	7.2	4.3	2.1	2.0	108.4	9
排水D1~3-C1	耕土	I	完形	細粒砂岩	5.1	4.9	3.6	1.8	1.3	1.4	32.9	2
排水D4-C2	落ち込み	I	完形	礫石角閃石安山岩	7.9	7.6	5.9	2.2	1.3	2.3	126.9	10
排水D5-C1	包含層	I	完形	白色凝灰岩	6.3	5.7	5.2	1.7	1.6	1.9	72.5	6
11-516-C3	包含層II	I	完形	角閃石安山岩	5.6	5.3	5.1	2.0	1.4	2.5	80.6	7
11-518-C10	包含層	I	完形	白色凝灰岩	8.8	8.7	4.1	1.1	0.9	2.1	60.1	11
あ5-C1	層位不明	I	完形	粗粒砂岩(中生代)	6.6	6.1	5.9	2.9	2.2	2.2	115.6	8
出土区不明-C2	層位不明	I	完形	中粒砂岩(中生代)	9.5	8.7	6.1	2.8	1.8	1.4	128.3	12
出土区不明-C3	層位不明	I	完形	角閃石安山岩	4.8	4.6	3.7	2.4	1.2	2.2	46.8	3
出土区不明-C4	層位不明	I	完形	砂岩	6.7	5.2	3.7	0.8	0.8	1.9	39.7	4



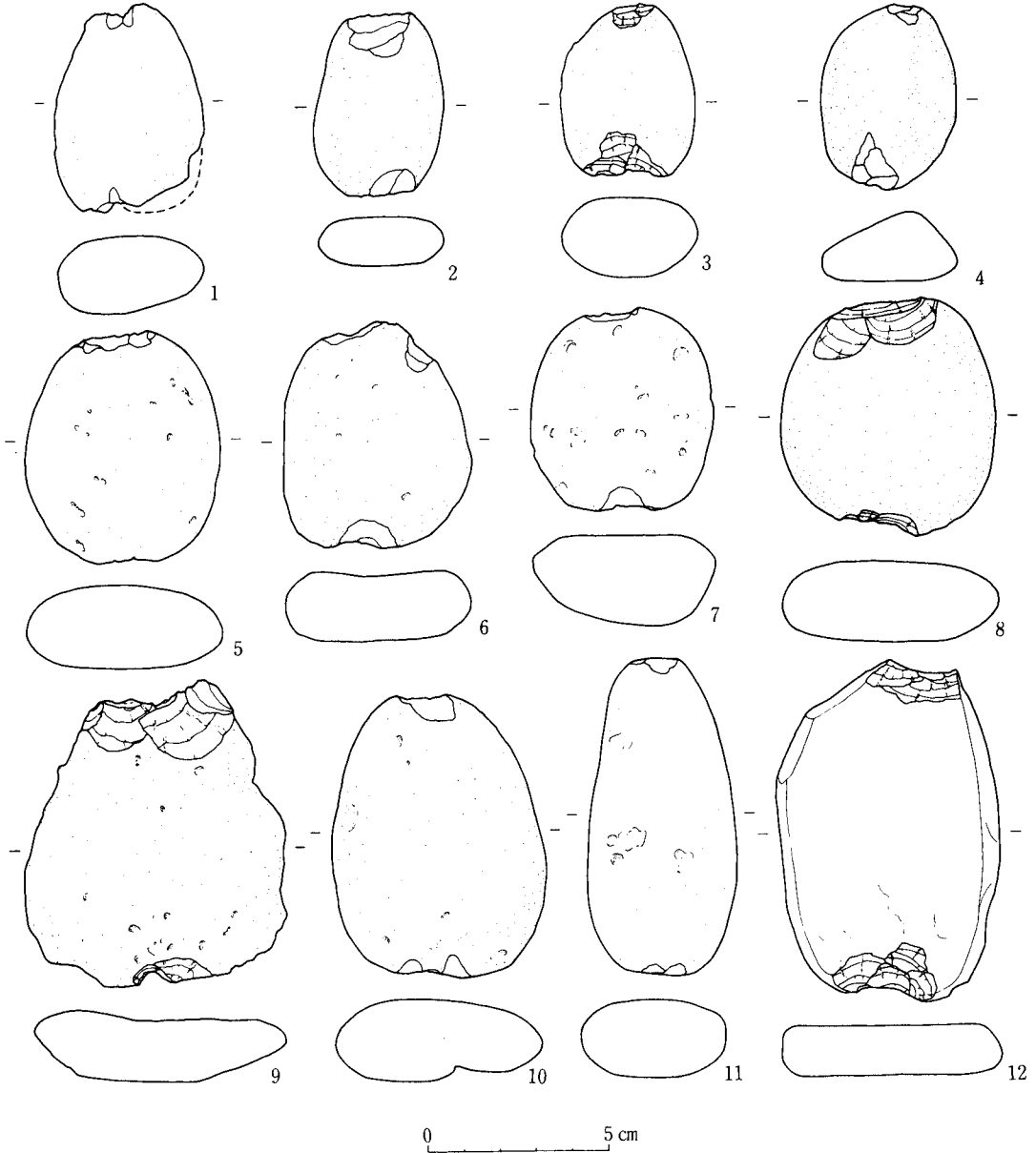
第31図 切目石錘・有溝石錘実測図 (縮尺1/2)

測る。溝の幅は0.2cmである。

7. 礫石錘

礫石錘は総数12点出土し、石器全体の10.91%を占めている（第9表、第32図）。12点すべて完形であり、いずれも扁平な楕円礫の長軸両端に打ち欠きを施す形態のもの（I類）である。

重さは30～130gの範囲全体に分布し、平均79.5gで切目石錘のそれより約13g重い。打ち欠き部の幅は0.4～4.3cmに分布して1.0～3.0cmに集中し、平均1.72cmを測り、切目の約4倍である。

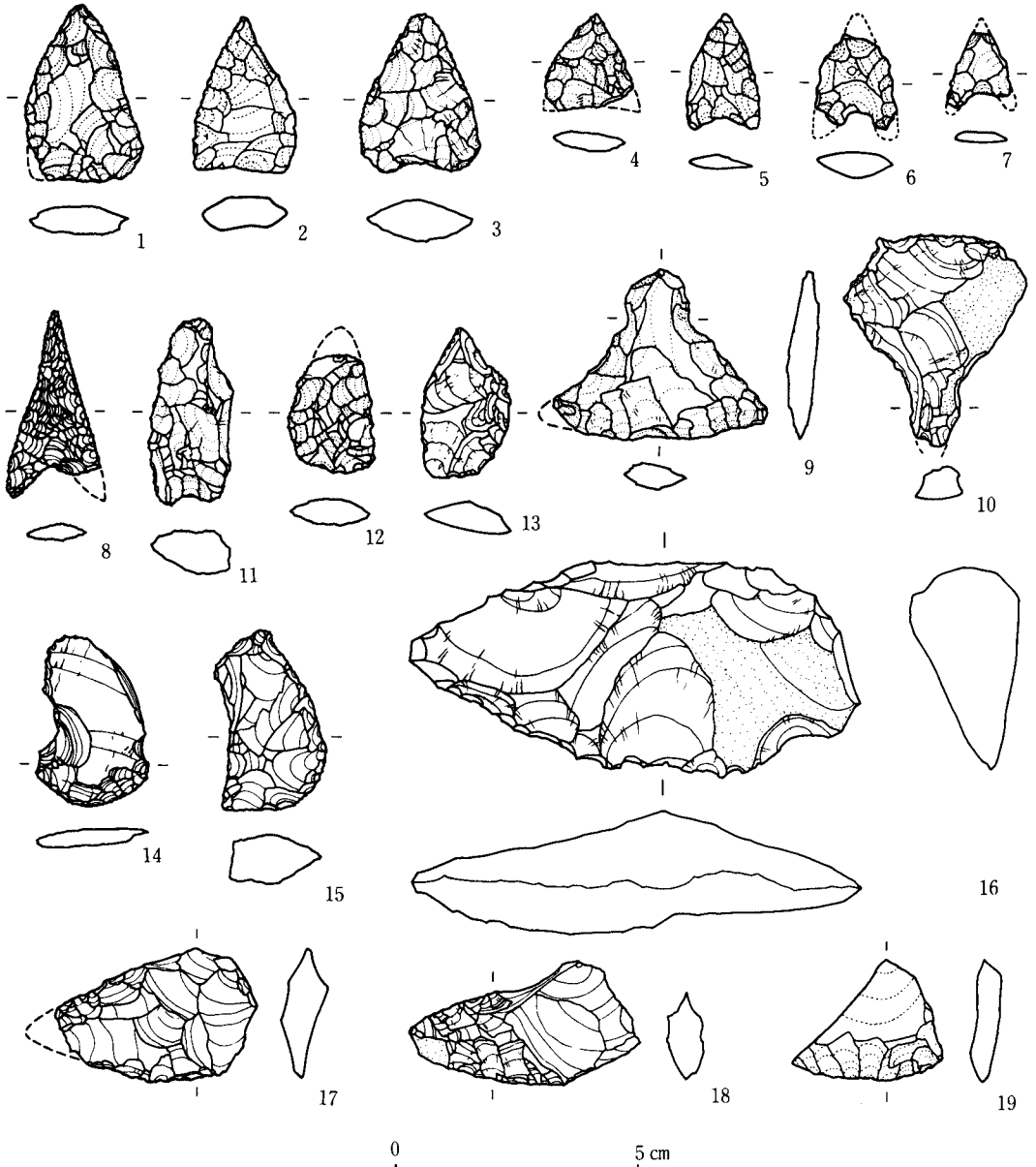


第32図 礫石錘実測図（縮尺1/2）

第10表 石鏃一覽表

[単位はcmおよびg. () を付したものは現存値を示す]

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	先端角度	挿図番号
排水A13-C1	包含層	I a	脚部欠	安山岩	3.6	2.3	0.6	(5.3)	58	第33図 1
排水C8・9-C1	包含層	I b	完形	輝石安山岩	2.4	1.4	0.3	0.9	55	5
11-514-C2	暗茶褐色土層	I c	先端部・脚部欠	流紋岩	(1.9)	(1.7)	(0.5)	(1.5)	51	6
11-518-C17	ピット2	I b	完形	流紋岩	3.2	2.5	0.9	5.6	50	3
11-518-C18	ピット3	III c	脚部欠	黒曜石	3.8	1.9	0.3	(1.3)	23	8
11-518-C24	包含層	I a	完形	フリント	3.2	2.1	0.7	4.3	53	2
出土区不明-C5	層位不明	I b	脚部欠	玉髓	(1.9)	(1.8)	0.4	(1.1)	68	4
出土区不明-C6	層位不明	II c	先端部・脚部欠	安山岩	(1.5)	(1.3)	(0.2)	(0.5)	46	7



第33図 石鏃・石匙・石錐・不定形石器等実測図 (縮尺2/3)

8. 石 鏃

石鏃は総数8点出土し、石器全体の7.27%を占めている(第10表、第33図1～8)。完形品3点、先端部・脚部欠損品2点、脚部欠損品3点である。第33図3はピット2、同図8はピット3からの検出である。

石鏃は平面形態により、I～IIIの3類に分類され、さらに基部の形態によりa～cの3類に細分される。本遺跡では5類確認された。

I a類……2辺がやや外曲した3角形を呈し、基部が直線的なものである(第33図1・2)。

I b類……2辺がやや外曲した3角形を呈し、基部が少し内湾するものである(第33図3～5)。

I c類……2辺がやや外曲した3角形を呈し、基部がくぼむものである(第33図6)。

II c類……2辺が直線的な3角形を呈し、基部がくぼむものである(第33図7)。

III c類……2辺がやや内曲した3角形を呈し、基部がくぼむものである(第33図8)。

形態分類の内訳は、I a類2点、I b類3点、I c類1点、II c類1点、III c類1点であり、I類が最も多く6点を数え、II・III類が各1点づつである。また、a類2点、b・c類は各3点である。

大きさに関しては、欠損品では大きさを復元して推定値を考慮すると、2cm位の1群と3cm台の1群とに分けられる。先端部の角度では、50度台のものが5点で62.5%を占めている。

9. 石 匙

石匙は1点のみ出土している(第33図9)。横形を呈し、刃部が一部欠損しており、現存値で長さ3.5cm、幅4.4cm、厚さ0.6cm、重さ6.9gを測る。

10. 石 錐

石錐も1点のみ出土している(第33図10)。先端部が欠損しており、現存値で長さ4.3cm、幅3.8cm、厚さ0.6cm、重さ13.2gである。

11. 器種・用途不明石器と不定形石器

その他器種・用途不明の石器や不定形石器は総数14点出土し、石器全体の12.73%を占めている(第11表、第33図11～19、第34図1～5)。

これらはI～Vの5類に分類される。

I類……剥片に対して両面から調整剥離を施しているものである(第33図12・13・15・18・19)。

II類……剥片に対して片面から調整剥離を施しているものである(第33図14・16・17)。

III類……長さ6cm余り、幅5cm前後、厚さ2～3cmの隅丸方形に調整剥離されたものである(第34図1～3)。

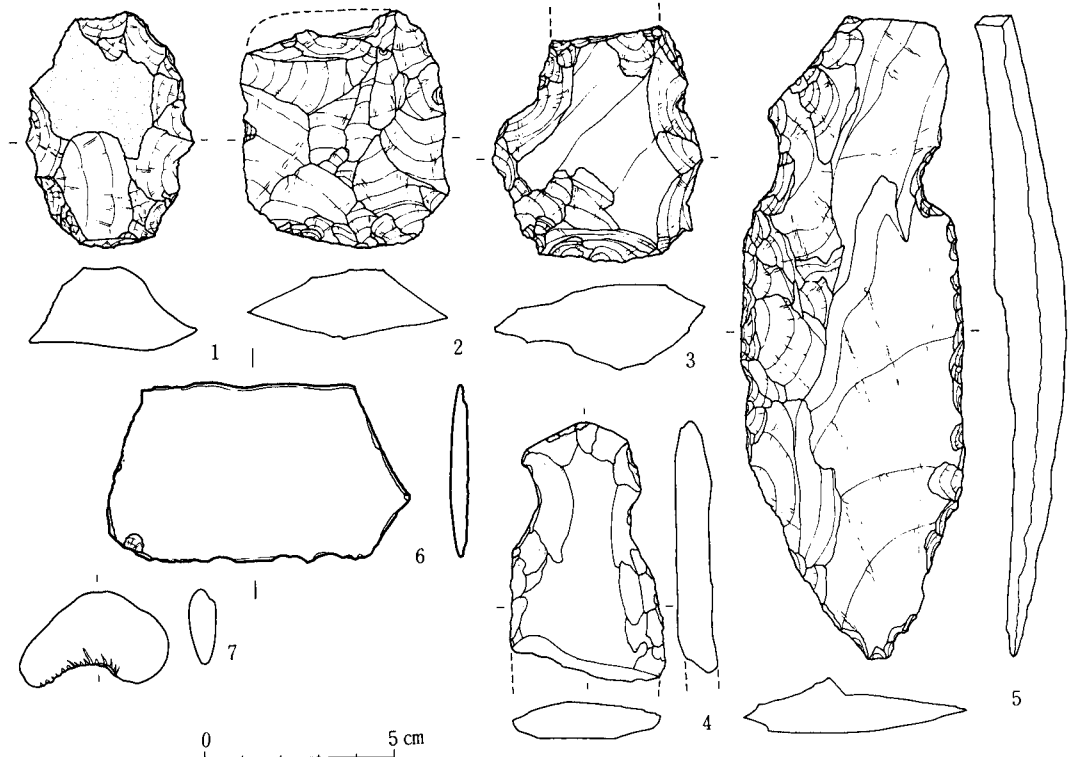
IV類……縦形の石匙のような形態を呈し、長さが10cm以上におよぶものである(第34図4・5)。同図5は比較的軟質な石材である珪化緑色凝灰岩が使われており、片面から調整剝離を施し、刃部を加工している。

V類……細長い2等辺3角形状に調整されたものである(第33図11)。石鏃の未製品と考えられる。

第11表 器種・用途不明石器と不定形石器一覧表

(単位はcmおよびg、()を付したものは現存値を示す)

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号
排水A10 -E1	包含層	III	欠損	流紋岩	(6.3)	5.5	2.0	(63.1)	第34図2
排水A12・13-C2	包含層	II	完形	珪化緑色凝灰岩(中生代)	4.4	9.2	2.4	70.0	第33図16
排水C2 -C2	包含層	I	欠損	流紋岩	(3.7)	(2.0)	1.0	(7.4)	第33図15
排水C10 -C3	包含層	II	完形	フリント	2.7	4.2	0.8	8.1	第33図17
3-502 -E1	包含層I	V	完形	フリント	3.8	1.6	0.9	6.4	第33図11
11-502 -C2	包含層II	IV	欠損	輝石安山岩	(6.9)	(4.1)	(1.0)	(36.5)	第34図4
11-514 -C1	包含層II	I	欠損	フリント	(2.4)	1.7	0.5	(2.5)	第33図12
11-514 -E1	層位不明	I	完形	凝灰岩	2.6	4.8	0.8	7.5	第33図18
11-518 -C20	黒色礫多含層	IV	完形	珪化緑色凝灰岩	17.0	5.8	1.8	150.8	第34図5
11-518 -C25	包含層II	II	完形	フリント	3.5	2.2	0.3	3.4	第33図14
11-518 -C31	層位不明	I	完形	フリント	3.1	1.9	0.6	3.5	第33図13
あ5 -C7	層位不明	I	欠損	流紋岩	(2.5)	(3.1)	(0.6)	(3.7)	第33図19
出土区不明 -E1	層位不明	III	欠損	流紋岩	(6.3)	5.6	2.7	(78.3)	第34図3
出土区不明 -E2	層位不明	III	完形	流紋岩	6.2	4.4	2.2	47.4	第34図1



第34図 石器・石製品実測図(縮尺1/2)

第12表 磨製石斧一覽表

〔単位はcmおよびg、()を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	出土層位	分類	遺存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	挿図番号	
排水A11-C1	包含層	Ⅲ	頭部片	片麻岩	(5.0)	(5.2)	(1.5)	(59.7)	第35図11	
排水A12-C1	包含層	Ⅱ	刃部欠	片麻岩	(10.5)	6.5	2.5	(329.9)		
排水B1-C1	包含層	Ⅲ	頭部欠	片麻岩	(5.9)	(4.7)	1.9	(77.7)		3
排水C6-C2	包含層	Ⅴ	完形	流紋岩質凝灰岩	6.8	4.6	2.2	105.0		1
排水D2-C1	包含層	Ⅲ	刃部欠	凝灰質砂岩	(7.3)	4.5	2.2	112.0		5
排水D3-C1	包含層	Ⅲ	刃部欠	片麻岩	(8.9)	5.8	2.5	(235.8)		7
排水E4-C1	包含層	Ⅲ	刃部欠	火山礫凝灰岩	(8.1)	5.5	2.0	(167.7)		8
11-502-C6	盛土	Ⅳ	頭部欠	含ヒスイ質鉱物珪質岩	(6.0)	3.0	1.3	(39.6)		2
11-516-C2	包含層Ⅱ	—	胴部片	片麻岩(優黒部)	(5.5)	(4.1)	(1.4)	(39.0)		
11-518-C4	包含層Ⅱ	Ⅲ	頭部片	変朽安山岩	(4.6)	4.8	2.2	(72.5)		9
11-518-C5	包含層Ⅱ	Ⅱ	胴部片	凝灰岩	(4.0)	(6.4)	(2.7)	(103.1)		10
11-518-C12	層位不明	Ⅲ	刃部欠	蛇紋岩質珪質岩	(9.0)	4.8	2.2	(157.9)	6	
11-518-C19	層位不明	Ⅰ	頭部欠	花崗片麻岩	(11.8)	(9.2)	3.4	(567.5)	12	
お1-C1	層位不明	Ⅲ	完形	凝灰岩(濃飛流紋岩類)	9.3	5.4	2.3	207.6	4	

12. 磨製石斧

磨製石斧は総数14点出土しており、石器全体の12.73%を占めている(第12表、第35図)。このうち完形品は2点、欠損品は12点であり、欠損品の内訳は刃部欠5点、頭部欠3点、頭部片2点、胴部片2点である。

磨製石斧はⅠ～Ⅴの5類に形態分類される。

Ⅰ類……長さが25cm以上にもおよぶ大型のものである(第35図12)。

Ⅱ類……長さが約15cm、幅が約6.5cmにおよぶものである(第35図10・11)。

Ⅲ類……長さが10～12.5cm、幅が5cm前後のものである(第35図3～9)。

Ⅳ類……長さが8～9cm、幅3cmの細長い長方形を呈するものである(第35図2)。

Ⅴ類……長さ約7cm、幅約4.5cmの台形を呈するものである(第35図1)。

各類の出土点数は、Ⅰ類1点、Ⅱ類2点、Ⅲ類8点、Ⅳ類1点、Ⅴ類1点である。

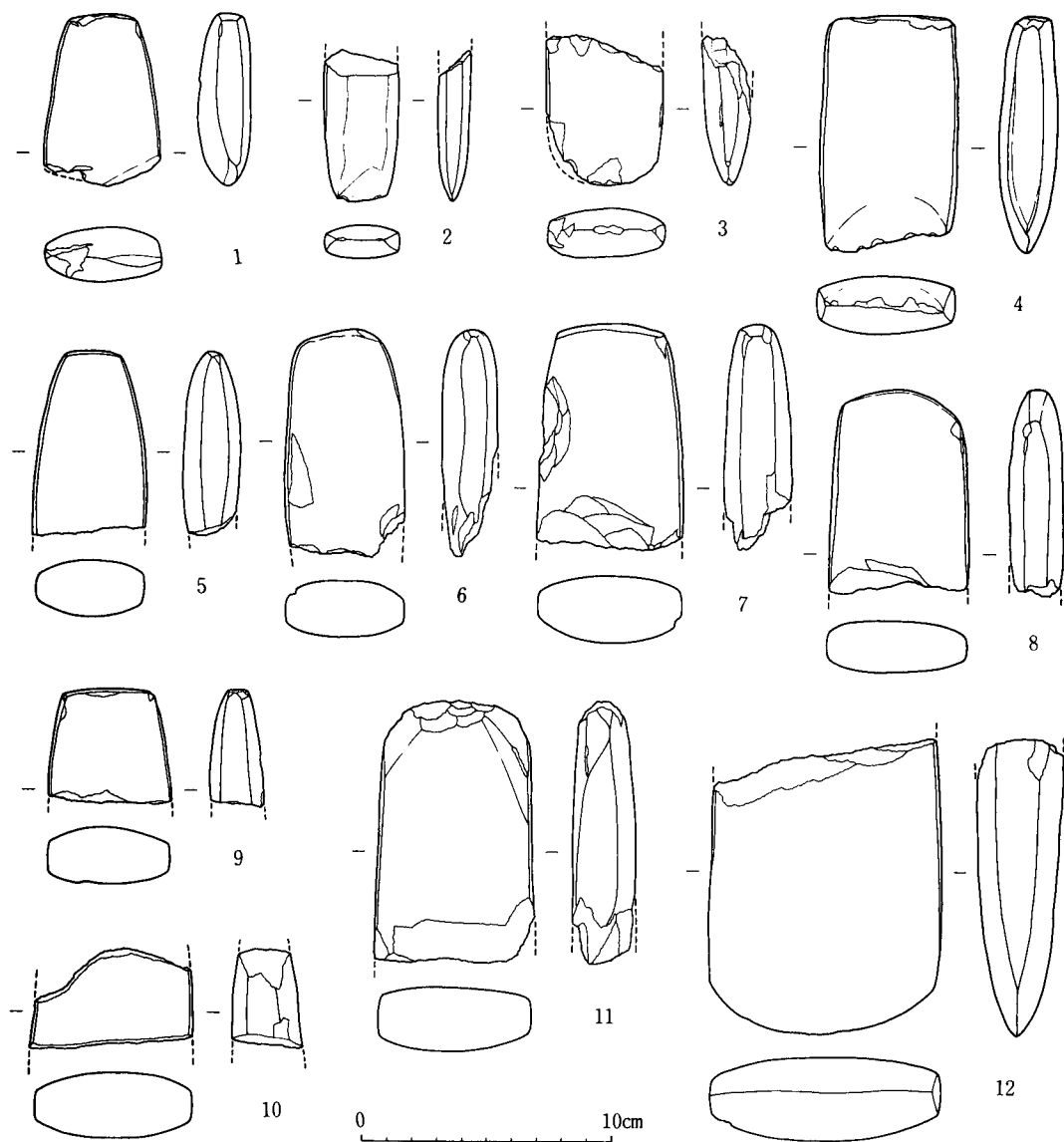
刃部の形態が特定できる4点については、刃部が中心線で線対称となって刃縁がゆるく外湾するもの2点(同図2・12)、偏刃で刃縁が丸いもの1点(同図3)、偏刃で刃縁がV字状を呈するもの1点(同図1)が認められる。

13. 小 結

中海遺跡からは縄文時代中期後半の石器が総数110点出土しており、これらについて石器器種の機能や石器全体に占める割合についてみてみることにする。植物質食料の採集・加工用具としての打製石斧・石皿・磨石・敲石は53点出土しており、石器全体の48.18%を占めている。狩猟具としての石鏃は8点出土しており、わずか7.27%である。確実に漁網錘と認められる切目石錘・有溝石錘は7点検出されており、6.36%を占めるにすぎない。漁網錘であるという説ともじり編みの錘具であるという説の2つの機能の存在が考えられている礫石錘は12点、10.91%を占めている。石匙・石錐・不定形石器は16点出土しており、これらの石器は有機物や無機物を材料にした

道具類の製作・加工に関与したと考えられる。樹木の伐採・加工具としての磨製石斧は14点である。

また、遺物包含層の土壌を調査現場で水洗選別するとしないとでは、石鏃などの小型石器の出現率が大幅にかわってくる事が明らかにされている(山本1986)。本遺跡の調査では水洗選別を実施しておらず、短絡的に数値を比較して結論を下すことはできないが、これらのことを考慮して生業活動に関する石器についてみる。縄文時代の生業は植物採集・狩猟・漁業から成り立っており、植物採集に関する石器は48.18%と高率であるのに対し、狩猟・漁業の石器はそれぞれ8点と7点であり、両者とも7%前後の割合をしめるにすぎない。このことを巨視的にみるならば、



第35図 磨製石斧実測図 (縮尺1/3)

植物食への依存度が大きかったと言えるであろう。

石川県における縄文時代中期の打製石斧の一般的な大きさは、長さ8～15cm、幅3.5～6cm、厚さ1.5～3cm、重さ80～350gである（山本1985）。本遺跡の打製石斧の大きさは、長さ9～14cm、幅5～6cm、厚さ1.5～2.5cm、重さは85～430gであり、両者を比較すると、非常に似かよった数値を示しており、本遺跡の打製石斧は大きさの面では極めて縄文中期的な特徴を備えていると言えるであろう。また、縄文中期の打製石斧の刃部の形態ではA類とB類が同じ比率を示している（山本1985）。それに対して本遺跡ではB類がA類のほぼ2倍となっており、中期遺跡では例外的であり、本遺跡の打製石斧の特色である。

磨石・敲石は形状的に比較的整った円形・楕円形を呈しており、重量も150～650gと手に持つてちょうど良いくらいの重さである。こうした条件を満たす円礫を河原で捜してみると、なかなか見つからないものである。石質・形状・重量の面でかなり選択された河原石が磨石・敲石に使用されていることが推測され、けっして「手頃」な河原石が使われたわけではなく、河原石なら何でもよかったというわけではないと考えられる。

引用文献

- 山本直人 「加賀における縄文時代の網漁について」『石川考古学研究会々誌』26 199～217頁 石川考古学研究会（1983）
- 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』28 35～56頁 石川考古学研究会（1985）
- ・本田秀生・他 『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター（1986）

第6節 石製品

石製品は2点出土している（第34図6・7）。同図6は欠損品であり、現存値で長さ4.8cm、幅8.0cm、厚さ0.5cm、重さ22.2gである。表面には摩耗痕が認められ、光沢を帯びている。同図7は勾玉形を呈し、腹部に16個所の切り込みがみられる。完形品で長さ2.5cm、幅3.9cm、厚さ0.7cm、重さ6.0gである。

第7節 動物遺体

11-514T区石囲炉の付近から獣骨片と推測される動物遺体が検出された。いずれも被熱によって脆くなり、チョーク状化している細かな小破片であるため、種・部位等は不明である。

第4章 第1次調査のまとめ

第1節 遺構

排水路部分での発掘調査では前述の通り縄文時代中期後葉の所産とみられる遺構を検出した。しかし、調査区が2m幅であったため、その全体を把握した遺構は少ない。加えて過去の土地改良工事の際に削平を受けた箇所もあって、排水路調査区での遺構の分布は多いとは言えない状況であった。それでも竪穴住居跡の一部とみられる浅い落ち込みや、土壌群と多数のピット群を発掘した。とりわけ問題となったのは、D区で検出した幅約10.5mの凹部であった。D-2区から3区にかけて最深となったが、最も深いところでも地表面から1.05cmしかなく、緩やかな傾斜をもって凹んでいた。この凹部では耕土下に黒茶褐色の包含層IIが50cmばかりの厚さで堆積し、その下に20~30cmの黒褐色土の包含層Iが確認された。凹部における凝灰岩礫の分布は比較的少なく、西の立ち上がり部分では地山に大量の礫が存在していた。凹部の東側のC区では、他の調査区と比較してピット群が集中して検出されたが、この段階ではまだ凹部の性格についての把握が不十分ながら、遺構の分布状況も考慮すると、これが遺跡の分布範囲の境界となり得ると推定していた。排水路調査区に直交して設定した再分布調査のトレンチでは、11-518T区で縄文中期後葉の土器が大量出土した。現地ではD区の凹地と11-518T区が関係するものと推定し、11-516T区でその凹部が立ち上がると考えた。11-516T区では中期後葉の遺物包含層の下に中期中葉の包含層が確認され、11-514T区では中期中葉の炉跡が検出された。前述のようにこの凹部が自然地形に人工の手が加った遺構である可能性もあり、中期後葉の集落跡の範囲と関係することは違いないであろう。

11-518T区で検出した炉跡は、本章第3節の山本論文にもある如く北陸の中期中葉の炉跡としては標準的な規模をもち、石囲炉I a類に分類されるという。炉跡の周辺を発掘すれば竪穴住居跡が完掘されることは間違いない。炉跡の周辺で少量ながら骨片が散布しており、縄文人の生活をほうふつとさせるものがあつた。11-516T区で検出した方形石組状遺構は炉となる可能性は少なく、確たる証拠は得られなかった。

第1次調査における排水路調査区と再分布調査のトレンチ調査結果からみると、中海遺跡A地区の縄文遺跡は中期中葉から後葉の集落遺跡であり、湊上川沿いの微高地上に立地する。その規模は南北方向に約170m、東西方向に約150m以上の分布範囲をもつとみられる。過去の耕地整理等によって一部削平された箇所もあるが、遺跡の遺存状態は良好であり、今回のほ場整備においても地元の理解と小松土地改良事務所の協力を得て、盛土工法の措置をとることができ、遺跡がほぼ現状で保存されたことを明記しておく。

第3節 北陸における縄文中期中葉の炉

中海遺跡で確認された炉が属する縄文時代中期中葉の炉について、北陸という地域に限定して検討を加えるものである（第13・14表、第36図）。ここでいう北陸とは富山・石川の2県をさすものであり、炉の所属時期に関しては、中期中葉前半の天神山式・上山田式、中期中葉後半の古府式、両者を包括した中期中葉の3通りで記述するものである。

炉はその形態により、地床炉、埋甕炉、石囲炉の3類に大きく分けられ、さらに石囲炉はⅠ～Ⅲの3類に分類される。

石囲炉Ⅰ類……一般的な石囲炉である。

石囲炉Ⅱ類……炉内部に土器が埋設されている石囲炉である。

石囲炉Ⅲ類……炉石の周囲が敷石状になっている石囲炉である。

これらは炉底の状態により、a・b・cの3類に細分される。

a類……b・c類以外のものである。

b類……石敷になるものである。

c類……土器片敷になるものである。

次に、第13表をもとに該期の炉について遺跡ごとにみていくことにする。番号は第13表・第36図の遺跡番号と一致する。

1. 朝日町不動堂遺跡（小島1974） 第1号住居跡の上部の炉は中期中葉に属し、長軸110×短軸70cmの長方形を呈する石囲炉Ⅰa類である。

2. 朝日町下山新遺跡（富山県教委1974） 第3地点の中期中葉の炉は、長方形の石囲炉Ⅰa類である。

3. 宇奈月町浦山寺蔵遺跡（酒井1977） 第04・08号住居跡の炉は、両者とも古府式期の石囲炉Ⅰa類である。第15号住居跡は中期中葉の石囲炉で、長軸55×短軸50cmのほぼ正方形を呈する。

4. 魚津市天神山遺跡（湊1959） 50×40cmの石囲炉Ⅰa類で、長方形を呈する。天神山式。

5. 魚津市大光寺遺跡（広田1967） Aトレンチの炉址は中期中葉の石囲炉Ⅰa類である。大きさは110×80cmを測り、楕円形を呈する。

6. 上市町永代遺跡（高慶1985） 1～3号住居跡の4基の炉は中期中葉前半に属し、石囲炉Ⅰa類・石囲炉Ⅰb類が各2例である。大きさは長軸が27～45cm、短軸が24～40cmの範囲に分布し、平均は約35×31cmである。

7. 立山町若宮A遺跡（狩野1981） 中期中葉の石囲炉Ⅰa類で、65×50cmの長方形である。

8. 立山町野沢狐幅遺跡（狩野1985） 第345号住居跡を除く、5基の住居址はいずれも天神山式である。第8号住居跡は炉址が3基あるために合計7基であり、石囲炉Ⅰa・Ⅰb・Ⅰc類の3種類が認められ、それぞれ1・5・1基となっている。大きさは、長軸25～42cm、短軸24～41cmの範囲に分布し、平均は35.7×31.6cmである。

第13表 北陸の縄文中期中葉炉一覧表

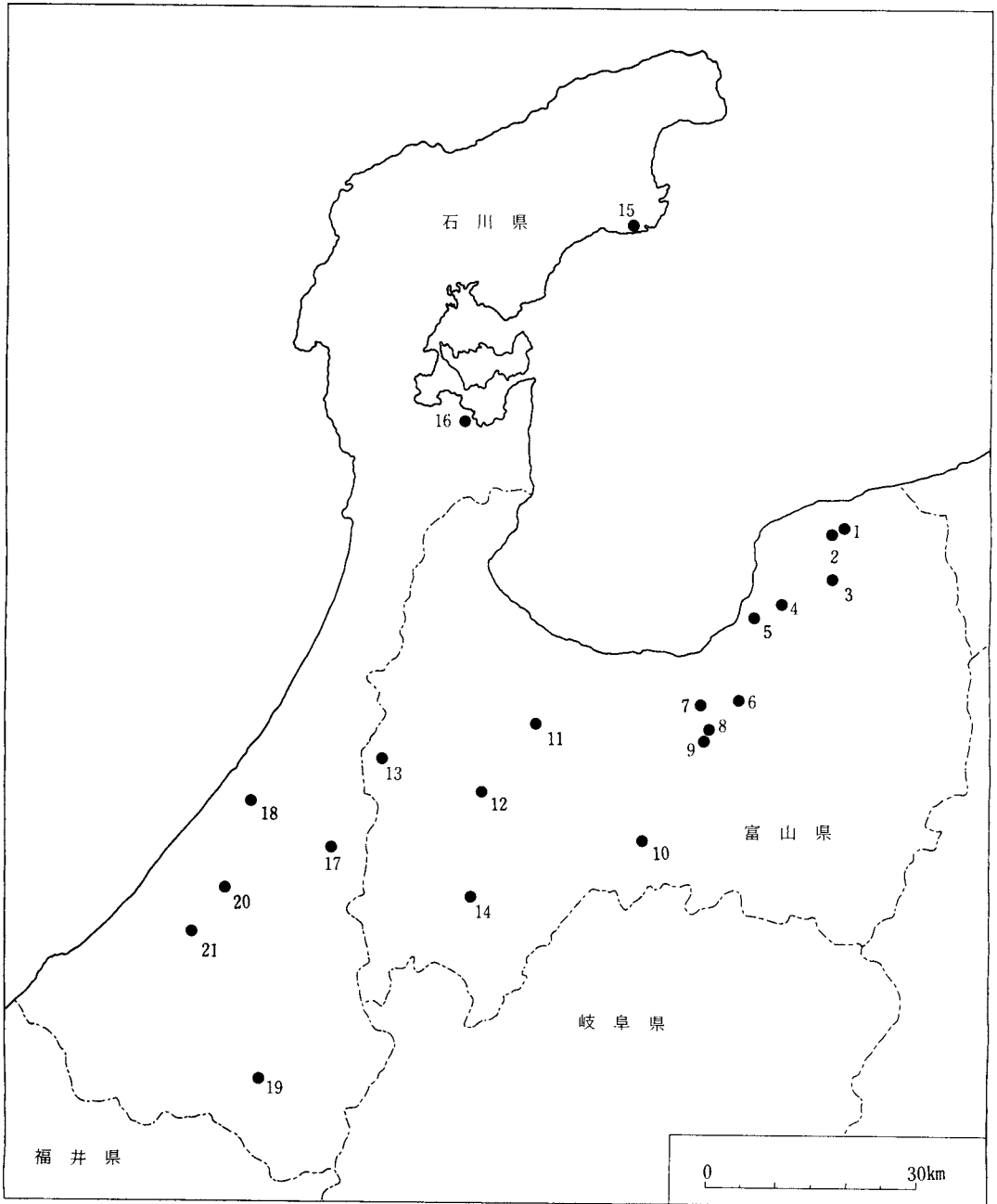
単位はcm。() は現存値、〔 〕 は推定値を表す。

遺跡番号	市町村名	遺跡名	遺構名	時期	分類	大きさ		形態	文献
						長軸	短軸		
1	朝日町	不動堂遺跡	第1号住居跡上部炉	中期中葉	石囲炉Ⅰa	110	70	長方形	小島 1974
2	朝日町	下山新遺跡	第3地点炉	中期中葉	石囲炉Ⅰa	—	—	長方形	富県教 1974
3	宇奈月町	浦山寺蔵遺跡	第04号住居跡	古府式	石囲炉Ⅰa	—	—	円形	酒井 1977
			第08号住居跡	〃	〃	—	—	五角形	〃
			第15号住居跡	中期中葉	石囲炉—	55	50	正方形	〃
4	魚津市	天神山遺跡		天神山式	石囲炉Ⅰa	50	40	長方形	湊 1959
5	魚津市	大光寺遺跡	Aトレンチ炉址	中期中葉	石囲炉Ⅰa	110	80	楕円形	広田 1967
6	上市町	永代遺跡	1号住居跡炉1	天神山式	石囲炉Ⅰb	27	24	円形	高慶 1985
			2号住居跡炉3	馬高式並行期	石囲炉Ⅰa	(45)	(40)	正方形	〃
			〃 炉5	〃	石囲炉Ⅰb	35	35	〃	〃
			3号住居跡炉4	上山田古式	石囲炉Ⅰa	32	26	〃	〃
7	立山町	若宮A遺跡		中期中葉	石囲炉Ⅰa	65	50	長方形	狩野 1981
8	立山町	野沢狐幅遺跡	第200号住居跡	天神山式	石囲炉Ⅰb	42	(30)	長方形	狩野 1985
			第125号住居跡	〃	〃	25	25	正方形	〃
			第70号住居跡	〃	石囲炉Ⅰc	30	28	円形	〃
			第93号住居跡	〃	石囲炉Ⅰb	28	24	正方形	〃
			第8号住居跡第1号炉址	〃	石囲炉Ⅰa	42	41	円形	〃
			〃 第2号炉址	〃	石囲炉Ⅰb	42	38	〃	〃
〃 第3号炉址	〃	〃	41	35	楕円形	〃			
9	立山町	竜ヶ鼻遺跡		中期中葉	石囲炉Ⅰa	—	—	—	酒井 1978
10	大沢野町	布尻遺跡	第8号住居跡	中期中葉	石囲炉Ⅰc	60	50	正方形	池野 1977
11	小杉町	水上谷遺跡	第1号住居跡1号炉	中期中葉(水上谷第Ⅰ期)	石囲炉Ⅰa	74	46	楕円形	橋本 1974
			〃 2号炉	〃	石囲炉Ⅲb	60	58	正方形	〃
			第2号住居跡	〃 (水上谷第Ⅱ期)	石囲炉Ⅰa	180	65	長方形	〃
			第3号住居跡1号炉	〃	石囲炉Ⅲa	120	60	〃	〃
			〃 2号炉	〃	石囲炉Ⅰa	55	40	〃	〃
			第4号住居跡	〃 (水上谷第Ⅰ期)	石囲炉Ⅰb	40	30	〃	〃
			第5号住居跡	〃 (水上谷第Ⅲ期)	石囲炉Ⅰa	100	100	円形	〃
			第11号住居跡1号炉	〃 (水上谷第Ⅰ期)	石囲炉Ⅰbc	55	45	楕円形	〃
			〃 2号炉	〃	石囲炉Ⅰc	50	35	長方形	〃
〃 第12号住居跡	〃 (水上谷第Ⅲ期)	石囲炉Ⅲa	95	70	〃	〃			
12	庄川町	松原遺跡	第1号住居跡(新)	古府式	石囲炉Ⅰa	100	40	長方形	岡崎 1968
			〃 (古)	中期中葉(松原Ⅱ期)	〃	90	70	正方形	池野 1975
			〃	〃	〃	95	50	長方形	〃
			第3号住居跡	〃 (松原Ⅲb期)	〃	70	60	〃	〃
			第4号住居跡	〃 (松原Ⅱ期)	地床炉	60	50	楕円形	〃
			第5号住居跡	〃 (松原Ⅲ期b)	石囲炉Ⅰa	80	40	長方形	〃
			第6号住居跡	〃	〃	90	—	〃	〃
			第7号住居跡	〃	〃	75	60	楕円形	〃
第8号住居跡	中期中葉(松原Ⅳ期)	〃	60	40	正方形	〃			
13	小矢部市	臼谷岡村遺跡		古府式	石囲炉Ⅰc	60	—	—	後藤 1982
14	平村	東中江遺跡	1号住居跡	中期中葉	石囲炉Ⅰa	80	70	長方形	宮田 1982
15	能都町	真脇遺跡	第3号住居址4号炉	中期中葉	石囲炉Ⅰc	120	90	長方形	加藤 1986
			〃 5号炉	〃	〃	—	—	〃	〃
16	七尾市	赤浦遺跡	第1号住居跡	古府式	石囲炉Ⅱa	75	60	長方形	桜井 1977
17	金沢市	東市瀬遺跡	第18号住居址	中期中葉	石囲炉Ⅰa	(75)	(60)	正方形	南 1985
			第22号住居址	〃	〃	(95)	(75)	楕円形	〃
			第31号住居址	〃	石囲炉Ⅰc	(93)	(75)	長方形	〃
			第32号住居址	〃	〃	(72)	(72)	正方形	〃
			第36号住居址	〃	石囲炉Ⅰa	77	70	正方形	〃
			第40号住居址	〃	石囲炉Ⅱa	(75)	45	長方形	〃
			第41号住居址	〃	石囲炉Ⅰc	63	50	〃	〃
第55号住居址	〃	石囲炉Ⅰa	(92)	(75)	〃	〃			
18	金沢市	古府遺跡		古府式	石囲炉Ⅰa	60	50	長方形	沼田 1970
			C6炉	〃	〃	—	—	—	南 1974
19	白峰村	桑島東島遺跡		古府式	石囲炉Ⅰa	80	50	長方形	中島 1976
20	辰口町	筋生遺跡	第1号住居址	古府式新	地床炉	90	80	円形	西野 1978
			第2号住居址	〃	埋裏炉	50	45	楕円形	〃
			第4号住居址	古府式古	地床炉	165	90	〃	〃
			第6号住居址	上山田式	石囲炉Ⅰa	80	56	長方形	〃
			第1号炉址	古府式新	石囲炉Ⅰa	85	75	円形	〃
21	小松市	中海遺跡	11-514T炉	古府式	石囲炉Ⅰa	86	53	長方形	本報告書

9. 立山町竜ヶ鼻遺跡（酒井1978） 中期中葉の石囲炉 I a 類である。

10. 大沢野町布尻遺跡（池野1977） 第8号住居跡の石囲炉 I c 類は中期中葉に属し、60×50cmを測り、ほぼ正方形を呈する。

11. 小杉町水上谷遺跡（橋本1974） 10基の炉址はいずれも中期中葉後半古府式期に位置づけられるものと考えられる。また10基とも石囲炉であり、その内訳は I a 類4基、I b 類1基、I



第36図 北陸の縄文中期中葉炉分布図

b c 類 1 基、I c 類 1 基、III a 類 2 基、III b 類 1 基である。大きさに関しては、長軸40~120cm、短軸30~100cmに分布し、平均は約83×55cmである。橋本正氏は第2号住居跡炉を祖形的な複式炉としている。しかしながら、長軸がゆるく「く」の字状に曲がり、長軸の長さが180cmに及ぶ類例はきわめて少ないことや、改築の可能性も考えられることから、ここでは一応石囲炉 I a 類とした。本報告書が刊行された段階で改めて考えてみたい。

12. 庄川町松原遺跡（岡崎1968、池野1975） 1968年の調査で古府式期の石囲炉 I a 類が検出されており、100×40cmの長方形をなす。また1974年の調査では、中期中葉に属する8基の炉址が確認されており、石囲炉 I a 類7基と地床炉1基である。法量については、長軸は60~95cm、短軸は40~70cmの範囲のなかにおさまり、平均値は77.5×52.9cmを測る。

13. 小矢部市白谷岡村遺跡（後藤1982） 古府式期の石囲炉 I c 類である。

14. 平村東中江遺跡（宮田1982） 中期中葉。80×70cmの長方形を呈する石囲炉 I a 類である。

15. 能都町真脇遺跡（加藤1986） 第3号住居址4・5号炉が中期中葉に属し、両者とも石囲炉 I c 類である。4号炉は120×90cmであり、長方形を呈する。

16. 七尾市赤浦遺跡（桜井1977） 第1号住居跡の炉は、75×60cmの長方形を呈する石囲炉 II a 類である。炉の時期は古府式期である。

17. 金沢市東市瀬遺跡（南1985） 第18・22・31・32・36・40・41・55号の8基の住居址が中期中葉に属する。いずれも石囲炉であり、I a 類4基、I c 類3基、II a 類1基である。法量に関しては、長軸60~95cm、短軸45~75cmの範囲に分布しており、平均値は約80×65cmである。

18. 金沢市古府遺跡（沼田1970、南1974） 1969年調査分の炉は、古府式期の石囲炉 I a 類である。長方形を呈し、60×50cmを測る。1972・73年調査のc 6炉も古府式期の石囲炉 I a 類である。

19. 白峰村桑島東島遺跡（中島1976） 古府式期の石囲炉 I a 類である。炉の大きさは80×50cmであり、長方形を呈する。

20. 辰口町筋生遺跡（西野1978） 第6号住居址は上山田式の石囲炉 I a 類であり、80×56cmの長方形を呈する。第1・4号住居址は古府式期の地床炉であり、第2号住居址は古府式期の埋壘炉である。第1号炉址は古府式期の石囲炉 I a 類で、直径約80cmのほぼ円形を呈する。

21. 小松市中海遺跡 古府式期の石囲炉 I a 類である。炉の大きさは86×53cmであり、長方形を呈する。

21遺跡から検出された中期中葉の炉62例をもとに、時期ごとの炉の形態と大きさについてみてみることにする（第14表）。

まず、中期中葉前半の天神山式・上山田式の時期では、石囲炉の I a・I b・I c の3類が

第14表 北陸の縄文中期中葉炉分類表

分類	時期	中葉前半 (天神山式 上山田式)	中葉後半 (古府式)	中 葉		合 計	
				中	葉	数	%
地床炉			2	1	3	4.84	
埋壘炉			1		1	1.61	
石囲炉 I a		5	12	17	34	54.84	
石囲炉 I b		7	1		8	12.90	
石囲炉 I b c			1		1	1.61	
石囲炉 I c		1	2	6	9	14.52	
石囲炉 II a			1	1	2	3.23	
石囲炉 III a			2		2	3.23	
石囲炉 III b			1		1	1.61	
石囲炉——				1	1	1.61	
合 計		13	23	26	62	100.00	

確認され、それぞれ5・7・1例ずつみられる。炉の大きさでは、立山町永代遺跡・野沢狐幅遺跡11例の平均値は約35×31cmである。辰口町筋生遺跡のものは80×56cmと比較的大型である。

次に、中期中葉後半の古府式期では、辰口町筋生遺跡で地床炉と埋甕炉が知られているが、他の8遺跡はすべて石囲炉である。I類16例のほかIII a類1例、IV a類2例、IV b類1例みられる。炉の大きさでは長軸60～100cm、短軸40～80cmに分布し、平均的な大きさは長軸80cm余り、短軸55cmぐらいである。

天神山式期・上山田式期と古府式期を包括する中期中葉では地床炉が1例みられるものの、残り25例はすべて石囲炉であり、I a類が17例で圧倒的多数を占め、I c類は6例あり、III a類はわずか1例ながら存在する。庄川町松原遺跡の平均値は77.5×53cmであり、東市瀬遺跡は80×65cmである。また、この2遺跡を除き、計測可能な7基の平均値は85.7×65.7cmである。

以上より中期中葉の炉の全般的傾向についてしてみると、形態については地床炉や埋甕炉もみられるが、石囲炉が主体となる。なかでもI類が多く、わずかながらIII a類・IV a類・IV b類も認められる。炉底では石敷となるものや土器片敷となるものが出現しており、中葉炉全体の約30%の割合である。大きさに関しては、長軸80±5cm、短軸60±5cmという状況である。中葉炉の大きさを比較する材料として複式炉のそれについてみると、なかには長軸が150cmを超えるものも存在するが、長軸は80～140cmに、短軸は50～100cmに分布・集中している。両者を比べると、中葉炉は複式炉の大きさの範囲のなかでもっとも小型の部類に属している傾向がうかがえる。北陸の中葉炉の大きさの変化はけっして一律ではなく、地域ごと、遺跡ごとで差異が認められ、同じ遺跡のなかでも住居址間で大きさに違いがある。全体の大きな流れとして中葉から後葉にかけて炉が大型化している。また、複式炉自体も大型炉であり、複式炉は炉の大型化のなかから生まれてくるものと考えられる。

炉の機能論の問題において、渡辺誠氏は新潟県津南町八反田遺跡第12号住居址の複式炉の状態から、複式炉の「埋設土器部分は燃焼部で生じた灰を一時的にプールする部分」であることを明らかにした(渡辺1984)。石囲炉を2個接続する形態の複式炉は少ないながら岩手県でもみられるが、どちらかというとな北陸特有のものであり、主炉が燃焼部、副炉が灰の一時的貯蔵部として使われていた可能性が高いと推測される。すなわち、中期中葉に炉が大型化する現象の背景には、1つの炉内で燃焼と貯蔵という異なる2つの機能が共存するということがあり、逆に言えば、大型化した石囲炉内では2つの機能の使いわけがなされていたと推測される。われわれの目の前には石囲炉という形でしか表れてこないのであり、燃焼部と貯蔵部の使いわけが明確な形をとって表れてきたのが複式炉である。主炉と副炉の複式炉は北陸の縄文中期後葉の文化的くせとして把握でき、北陸の独自性を表しているのではないかと考えられる。

引用文献

- 池野正男・神保孝造・他 『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』 庄川町教育委員会 (1975)
 ——・柳井 睦・他 『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』 大沢野町教育委員会 (1977)
 岡崎卯一 「庄川町松原遺跡の調査」『大境』4 6～8頁 富山考古学会 (1968)

- 加藤三千雄・他 『石川県能都町真脇遺跡発掘調査報告』 能都町教育委員会 (1986)
- 狩野 睦・他 『北陸自動車道遺跡調査報告—立山町遺構編—』 富山県教育委員会 (1981)
- ・森 秀典 『富山県立山町総合公園内野沢狐幅遺跡発掘調査概報』 立山町教育委員会 (1985)
- 高慶 孝 『富山県上市町永代遺跡緊急発掘調査概要』 上市町教育委員会 (1985)
- 小島俊彰 『富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概報』 富山県教育委員会 (1974)
- 後藤信祐・森 秀典・他 小矢部市埋蔵文化財調査報告書第7冊『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』27～31
頁 小矢部市教育委員会 (1982)
- 酒井重洋・橋本正春 『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会 (1977)
- ・他 『昭和52年度富山県埋蔵文化財調査一覧』 富山県教育委員会 (1978)
- 桜井憲弘・四柳嘉章・他 『赤浦遺跡』 七尾市教育委員会 (1977)
- 富山県教育委員会 『富山県朝日町下山新遺跡第2次発掘調査概報』 (1974)
- 中島俊一・他 『白峰村桑島・東島遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会 (1976)
- 西野秀和 『苜生遺跡』 辰口町教育委員会 (1978)
- 沼田啓太郎 『古府遺跡』 石川県教育委員会 (1970)
- 橋本 正・神保孝造 『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会 (1974)
- 広田寿三郎・大谷清瑞 『大光寺遺跡報告書』 魚津市教育委員会 (1967)
- 湊 晨・大谷清瑞・広田寿三郎 『天神山遺跡調査報告書』 富山県教育委員会・魚津市教育委員会 (1959)
- 南 久和 金沢市文化財紀要4『金沢市古府遺跡』 金沢市教育委員会 (1974)
- ・他 金沢市文化財紀要50『金沢市東市瀬遺跡』 金沢市教育委員会 (1985)
- 宮田進一・酒井重洋・他 『東中江遺跡』 平村教育委員会 (1982)
- 渡辺 誠・編 津南町文化財調査報告書14『新潟県中魚沼郡津南町八反田遺跡発掘調査報告書』 津南町教育委員会 (1984)

第4節 石川県における縄文時代の網漁業

石川県の縄文時代遺跡から出土している石錘のなかで、その機能が確実に漁網錘と認められる切目石錘・有溝石錘・土器片錘・有溝土錘をここではとり上げるものである。そして各種の漁網錘の検討を通じ、石川県における縄文時代の網漁業について考えてみることにする。

石川県内では25遺跡346点の漁網錘が確認されており(第15表、第37図)、切目石錘・有溝石錘・土器片錘・有溝土錘の4種類が認められる。ここでは渡辺誠氏の形態分類(渡辺1973)を基本にし、漁網錘の形態分類を行い、それぞれの漁網錘の状況についてみていくものである。

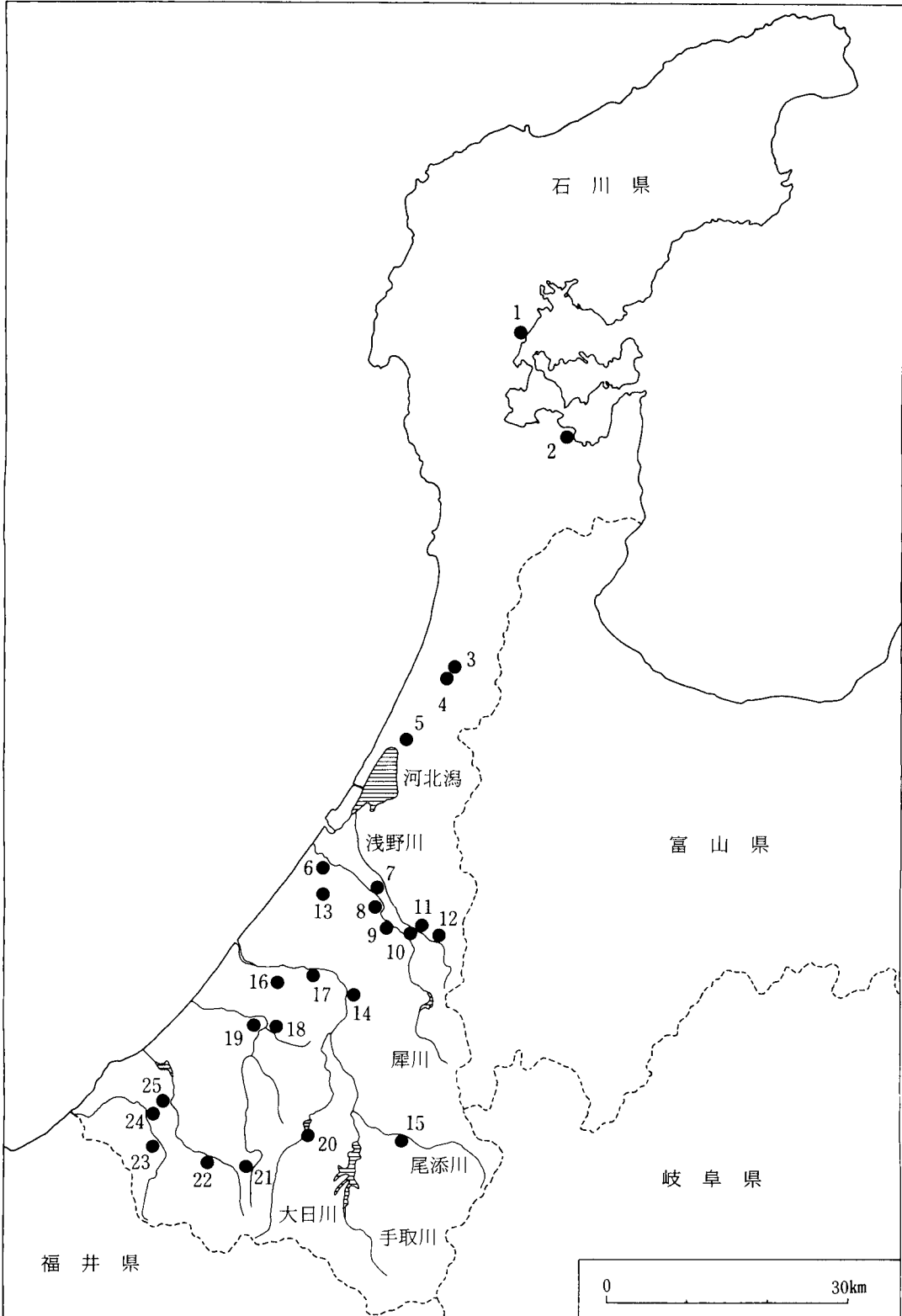
第15表 石川県における縄文時代の漁網錘出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	形態							合計		文献等	
			切目石錘			有溝石錘			土器片錘	有溝土錘	数		%
			A	B	C	A	A	C	A				
1	穴水町曾福遺跡	中期前葉～後期前葉					2	1		3	0.87	米沢 1980	
2	七尾市赤浦遺跡	中期前葉～後期中葉	1				1			2	0.58	四柳 1977	
3	押水町上田うまぼち遺跡	後期前葉～晩期前半							3	3	0.87	高堀 1983	
4	押水町紺屋町ぼんでん遺跡	中期後葉～後期前葉					2			2	0.58	沼田拓本集	
5	宇ノ気町上山田貝塚	前期末葉～後期初頭					1			1	0.29	平口 1979	
6	金沢市北塚遺跡	中期後葉～後期初頭	7				1			8	2.31	沼田 1969	
7	金沢市笠舞遺跡	中期中葉～後期初頭	167							167	48.27	南 1977 浅井 1968 岡本 1975 端野 1979 南 1981	
8	金沢市中平遺跡	中期	1							1	0.29	山本 1983 a	
9	金沢市天池遺跡	早期 ~ 中期			1					1	0.29	山本 1983 a	
10	金沢市瀬領遺跡	中期	1							1	0.29	山本 1983 a	
11	金沢市東市瀬遺跡	中期中葉～後期初頭	112	2						114	32.95	増山 1985	
12	金沢市東町遺跡	中期	1							1	0.29	山本 1983 a	
13	野々市町御経塚遺跡	後期中葉～晩期	1				3			4	1.16	山本 1983 b	
14	鶴来町白山上野遺跡	中期中葉～後期初頭	5							5	1.45	吉岡 1960 高堀 1968	
15	尾口村尾添遺跡	中期中葉～後期前葉	1					1		2	0.58	平田 1977	
16	辰口町茶白山古墳群縄文遺跡	後期初頭	2							2	0.58	西野 1982	
17	辰口町長滝遺跡	中期前葉～後期初頭	2							2	0.58	金大考研1976	
18	小松市中海遺跡	中期	6				1			7	2.02	本報告書	
19	小松市鬆海茶院遺跡	中期	1							1	0.29	沼田拓本集	
20	小松市小原遺跡	中期 ~ 後期中葉	9							9	2.60	沼田 1968	
21	小松市山崎遺跡	中期後葉	1							1	0.29	小松市博	
22	山中町荒谷鶴ノ口遺跡	中期中葉～後葉	5							5	1.45	加賀市教委	
23	山中町上原遺跡	不詳	1							1	0.29	〃	
24	加賀市保賀遺跡	不詳	1							1	0.29	〃	
25	加賀市津波倉遺跡	不詳	2							2	0.58	〃	
合計		数	327	2	1		4	8	1	3	346	100.4	
		%	94.51	0.58	0.29		1.16	2.31	0.29	0.87	100.01		

(1) 切目石錘

扁平な楕円礫を素材とし、網糸掛けの切込みを施した錘具である。長軸の両端に切込みのあるA種、長軸と短軸の両端に切り込みのあるB種、短軸の両端のみに切り込みが施されたC種が認められる。C種はこれまでに確認されていなかった形態である。

21遺跡から330点出土しており、漁網錘全体の95.38%を占め、本県の漁網錘のなかでもっとも重要な位置をしめている。種別ではA種が20遺跡から327点出土しており、圧倒的多数を占め



第37図 石川県における縄文時代の漁網錘出土遺跡分布図

ている。そのうち167点が金沢市笠舞遺跡から発掘・表採されており、次いで多いのが金沢市東市瀬遺跡114点であり、この2遺跡でA種全体の85.93%という高い割合を占めている。B種は東市瀬遺跡の2点のみであり、C種は金沢市瀬領遺跡の1点だけである。

時期的には、切目石錘は中期後葉に出現したものと推測され、遺跡数・点数ともに量的には減少しながらも後・晩期まで連続している。

(2) 有溝石錘

扁平な楕円礫の長軸を一周するA種のみであり、形態的には切目石錘A種との関連が深い。

小松市中海遺跡から1点、野々市町御経塚遺跡から3点出土しているに過ぎない。中海遺跡のものは中期後葉に属するが、御経塚遺跡の3例の所属時期は後期中葉～晩期であり、細かな時期は不詳である。

(3) 土器片錘

土器片を利用して周囲を打ち欠いたり、磨いたりして整形した錘具である。長軸の両端に網糸掛けの切り込みを有するA種と短軸の両端にそれを持つC種が認められる。

6遺跡から9点出土しており、漁網錘全体のわずか2.6%を占めるに過ぎない。種別ではA種が6遺跡8点であり、C種は穴水町曾福遺跡の1例のみである。

(4) 有溝土錘

溝が長軸と短軸をそれぞれ一周するC種であり、押水町上田うまばち遺跡出土の3例が知られるのみである。時期的には、後期前葉～晩期前半に属する。

本地域の漁網錘について形態別に述べてきたことを総括すると、中期後葉に土器片錘と切目石錘が出現し、盛行する。後・晩期には切目石錘は数量的に減少し、土器片錘はみられなくなり、新たに有溝土錘C種と切目石錘A種の形態的系譜を引く有溝石錘A種が現れる。

漁網の存在は、浮子・網・沈子などのうち沈子としての漁網錘や網針から知られ、網自体の検出はこれまでに愛媛県松山市船ヶ谷遺跡(金子1981)で報告されているだけで断片的であり、ほとんど皆無に等しい。このような状況のもとで漁網について知るには、錘具の重量の具体的数値化が必要であり、切目石錘の重量について表したのが第16表である。10遺跡264点についてみると、30g台が最も多くて全体の17.8%を占め、10～60g台で全体の約75%を占める。

第16表 切目石錘重量分布表

(遺跡番号は第 表と一致する)

遺跡番号 重量(g)	7		11		6・9・12・13 15・16・17・18		合 計	
	0.0～9.9	1	0.7	1	0.9			2
10.0～19.9	19	13.9	7	6.1	2	15.4%	28	10.6
20.0～29.9	15	10.9	21	18.4	1	7.7	37	14.0
30.0～39.9	32	23.4	13	11.4	2	15.4	47	17.8
40.0～49.9	11	8.0	9	7.9	1	7.7	21	8.0
50.0～59.9	16	11.7	21	18.4	1	7.7	38	14.4
60.0～69.9	11	8.0	13	11.4	4	30.8	28	10.6
70.0～79.9	10	7.3	7	6.1			17	6.4
80.0～89.9	8	5.8	9	7.9			17	6.4
90.0～99.9	2	1.5	4	3.5	1	7.7	7	2.7
100.0～109.9	2	1.5	4	3.5	1	7.7	7	2.7
110.0～119.9	1	0.7	1	0.9			2	0.8
120.0～129.9	1	0.7	2	1.8			3	1.1
130.0～139.9	2	1.5	1	0.9			3	1.1
140.0～149.9	2	1.5					2	0.8
150.0～159.9	1	0.7					1	0.4
160.0～169.9								
170.0～179.9	1	0.7					1	0.4
240.0～249.9	1	0.7	1	0.9			2	0.8
250.0～259.9	1	0.7					1	0.4
合 計	137	99.9	114	100.0	13	100.1	264	100.2

阿玉台式期に東関東地方を中心に発達した内湾性漁業の影響は、中期後葉に本地域にも波及し、土器片錘・切目石錘が出現し、盛行した。低地性遺跡の北塚遺跡のように、底質が砂泥質な水域を背後にひかえた遺跡では土器片錘が盛行し、笠舞遺跡などのように底質が砂礫質の河川流域では切目石錘が盛行している。このことから、それぞれの漁場の環境に応じて漁網錘の選択がなされたものと考えられる。つまり、砂泥質の汽水・淡水域において、土器片錘はスズキ・クロダイ・コイ・フナなどを捕るための地引網の漁網錘として利用され、それが多分耐久性や漁場の流速の関係から切目石錘へ材質転換がなされたと考えられる。そして切目石錘は砂礫質の河川流域で、コイ・フナ・アユ・ウグイなどを捕獲する地引網の錘具として使用されたものと考えられる。

以上のように漁網錘の集成を通じ、石川県における縄文時代の網漁について考えてみた。捕獲対象魚については、上山田貝塚・赤浦遺跡などで確認されているだけであり、とくに河川流域では確認例がないために現生魚種と漁網錘の分布との比較から、類推せざるを得なくて不完全なものになってしまった。

北陸の縄文文化を考えるうえで石錘の機能を明確にすることは重要な課題である。そのうち切目石錘・有溝石錘は漁網錘として一般的に認められており、問題となるのは礫石錘である。礫石錘の機能を明らかにするためには、それ自体の個別研究を進めるとともに、一方ではそれに関連する考古資料の魚骨などの動物遺体やスダレ状圧痕の研究を進める必要性もあり、さらには民具資料との比較研究も必要である。こうした研究が進められ、漁網錘やもじり編みの錘具におけるそれぞれの全体的状況のなかで位置づけられ、総合的状況判断のもとでこそ礫石錘の機能が明らかにされるものと考えられる(山本1983a)。

引用文献

- 浅井勝郎・浅井哲夫 「金沢市笠舞縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌』11 55～63頁 石川考古学研究会 (1968)
- 岡本 晃 「金沢市笠舞遺跡」『石川考古学研究会々誌』18 43～55頁 石川考古学研究会 (1975)
- 金沢大学考古学研究会 金沢大学考古学研究会活動報告2 『能美丘陵および能登島の野外調査』 (1976)
- 金子裕之 「特殊な木漆器—愛媛県船ヶ谷遺跡の場合」『月刊文化財』218 (1981)
- 小島俊彰・平口哲夫・他 『上山田貝塚』 宇ノ気町教育委員会 (1979)
- 高堀勝喜・吉岡康暢 「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群第1・2次調査概報」『石川考古学研究会々誌』11 21～39頁 石川考古学研究会 (1968)
- ・西野秀和・他 『上田うまばち遺跡』 押水町教育委員会 (1983)
- 西野秀和・編 『辰口町下開発茶臼山古墳群』 辰口町教育委員会 (1982)
- 沼田啓太郎・上野与一 「大日川ダム水没小原遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』11 64～71頁 石川考古学研究会 (1968)
- 「金沢市北塚遺跡第2次調査報告」『石川考古学研究会々誌』12 45～48頁 石川考古学研究会 (1969)
- 端野英子 『金沢市笠舞A遺跡調査報告』 石川県立埋蔵文化財センター (1979)
- 平田天秋・他 『尾口村尾添遺跡発掘調査報告』 石川県立埋蔵文化財センター (1977)
- 増山 仁・南 久和・他 金沢市文化財紀要50『金沢市東市瀬遺跡』 金沢市教育委員会 (1985)
- 南 久和・他 金沢市文化財紀要14『金沢市北塚遺跡』 金沢市教育委員会 (1977)
- ・上田亮子・他 金沢市文化財紀要29『金沢市笠舞遺跡』 金沢市教育委員会 (1981)
- 山本直人 「加賀における縄文時代の網漁について」『石川考古学研究会々誌』26 119～217頁 石川考古学研究会 (1983a)
- ・他 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会 (1983b)

- 吉岡康暢・他 「石川郡鶴来町白山町（通称ウヘノ）遺跡」『手取川流域の縄文遺跡予報』 8～21頁 鳥越村
教育委員会（1960）
- 四柳嘉章・他 『赤浦遺跡』 七尾市教育委員会（1977）
- 米沢義光・他 『曾福遺跡』 穴水町教育委員会（1980）
- 渡辺 誠 『縄文時代の漁業』

第5章 第2次調査の層序と遺構

第2次調査は、中海工区の西側に広がる弥生時代後期から平安時代後期にかけての集落遺跡(B地点)を対象とした。その調査箇所は第1から第3地点に分かれる。最初に調査したのは第1地点で、遺跡のほぼ中央部を東西に縦断する排水路部分約257m²である。第2地点は、前年度に第1次調査を実施した縄文時代中期を中心とする集落遺跡の西端部分のトレンチ調査で、調査面積は約56m²である。第3地点は、第1地点の北約160mの所に平行する排水路部分で、この箇所は工区西側に広がる遺跡の北端にあたり、調査面積は約112m²である。さらに同地点で検出された遺跡の範囲を確認するために、周辺の田面部に35箇所のグリッドを設定して再分布調査を行った。調査面積は約35m²である。第1から第3地点の層序と遺構は地点ごとに説明したい。

第1節 第1地点の層序と遺構

この地点の調査区は幅約1.5mで、延長約164mを測る。調査区内を20m間隔で区分し、東側から西側(淳上川方向)に1区から9区と呼称した。遺構及び包含層は、調査区全域から検出されたのではなく、大きく3箇所に分かれて検出された。それは1区から4区の東側約8m地点まで、6区西側から7区東側まで、8区から9区西端までの箇所である。これ以外の箇所で特に4～6区の約42mの範囲では以前の耕地整理の時に地山面がすでに削平され、包含層や遺構は残っていなかった。また、9区の西端部は包含層以下の土層が過去の淳上川の洪水で削られていた。遺構の残っている地点の基本的な層序は、1区～3区と6区～9区では15～20cmの耕土の下に約5～60cmの厚さで床土や客土が存在し、包含層に至る。1～3区にかけては包含層は2層に分かれ、上部には暗茶褐色砂質土層の包含層Iが、その下部に暗褐色砂質土層の包含層IIが確認された。

包含層IとIIは1区と2区西端部分及び8区の一部で上下に重なっていた以外は、1～2区区には包含層Iが、3区と6区以西9区までは包含層IIがそれぞれ広がっていた。包含層Iは3区から検出された遺構の覆土として認められることから古墳時代前期以降に形成された層とみられる。包含層IIは古墳時代後期から奈良・平安時代を中心とした須恵器や土師器を含んでおり、古墳時代後期以降の包含層とみられる。1区で検出された遺構の時期は、包含層I層中から掘り込んでおり、その遺構も古墳時代後期以降のものと思われる。また、9区の竪穴状遺構から西側の範囲は、淳上川沿いに存在していた凹地状の所を人為的に埋めて遺構面を作っている。その埋めた土(第42図13層)からは多量の土師器の甕、鉢、甑等(第52図86～第54図100)に混ざり須恵器の杯蓋と杯身(第54図103～105)が出土した。

以下、1区から西の9区までの主要遺構の概要について説明したい。

1号溝(第38・40図、図版26) 1区の東端で検出した。溝の北側は調査区外に延びているが、

南側は地山の下がる所で途切れている。包含層Ⅰから同Ⅱと地山を切って掘り込まれている。長さ165 cm、幅19cm、深さ19cmを測る。覆土は包含層Ⅰの暗茶褐色砂質土となっている。

1号土壌（第38・40図、図版27） 3区で検出した楕円形の土壌。長軸94cm、短軸74cm、深さ12cmを測る。覆土は包含層Ⅱと同じ暗褐色砂質土で、覆土中からは第45図1の土師器の壺が出土している。

2号溝（第38・40図、図版27） 1号土壌の西側にあり、北西から南西に延びる溝。幅46cm、深さ16cmを測る。覆土は包含層Ⅱと同じで、覆土中から第45図8の土師器の甕が出土している。

2号土壌（第38・40図） 3区西端で検出した不整楕円形の土壌。長軸99cm、短軸90cm、深さ42cmを測る。内部の東側には平坦面がある。覆土は2層確認された。覆土中から第45図2、3の土師器の甕が出土している。

3号土壌（第38・40図、図版27） 4区の中央部から検出した楕円形の土壌。南側が調査区外に広がっているため完掘した訳ではないが、長軸118 cm以上、短軸で85cm以上、深さ20cmを測る。内部は平坦であるが、南側では一段深くなっている。覆土は2層確認され、上の層から第45図4、5の小型丸底壺と石製品が出土している。

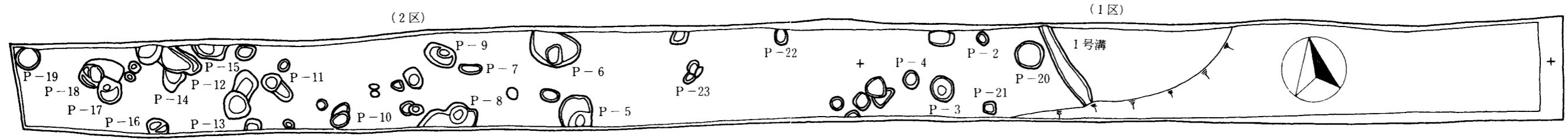
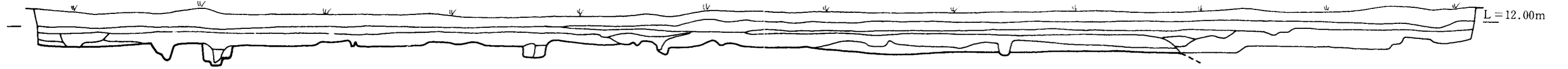
4号土壌・3号溝（第38・40図、図版28） 3区中央西寄りの地点から検出したもので、南北に延びている。両者は重複し、いずれも調査区外へ延びている。遺構の切り合関係から4号土壌が古く、3号溝が新しい。3号溝は確認長で257 cm、幅79～113 cm、深さは約10cm前後と浅い。覆土は1層のみである。4号土壌は確認長で256 cm、幅73cm、深さ50cmを測る。覆土は4層確認できた。土壌の底部近くから第45図6、7の土師器の甕が出土している。

6・7区落ち込み（第38・41図、図版31） これは6区西側から7区東側にかけてあった。落ち込みはトレンチと直行しており、東側の壁はまっすぐに延びるが、西側の壁はそれと対比的に曲線的に延びていた。深さ約30cm、幅約8.9～7 mを測る。内部は平坦になり、覆土は3層確認されたが、主に茶褐色砂質土が広がっていた。覆土上には包含層Ⅰの暗茶褐色砂質土が堆積し、包含層Ⅰから落ち込み覆土中にピットが掘り込まれていた。この包含層Ⅰとピットの周りの落ち込み覆土中から第49図72～第51図85の土師器の甕、鉢、甗と鉄滓等が出土した。落ち込み覆土中からは主に第48図62～第49図71の甕、壺、器台等が出土した。

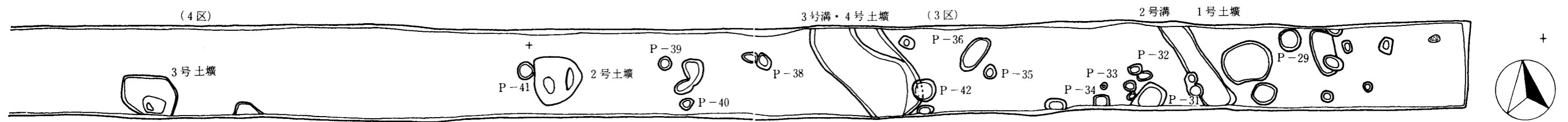
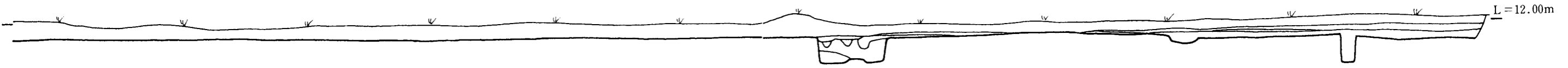
4号溝（第39・40図） 8区から検出され、南北に延びている溝。包含層Ⅰから包含層Ⅱを切って掘り込んでいる。確認長180 cm、幅58～98cm、30cmを測る。覆土は2層であった。第46図28、29の土師器の脚と須恵器の有台杯が出土している。

5号溝（第39・42図、図版29） 9区西端にあり、北東から南西に延びる溝。確認長で209 cm、幅45 cm、深さは12～22cmを測る。この溝は凹地を埋めた整地層上にあり、南西側は砂礫層に切られている。

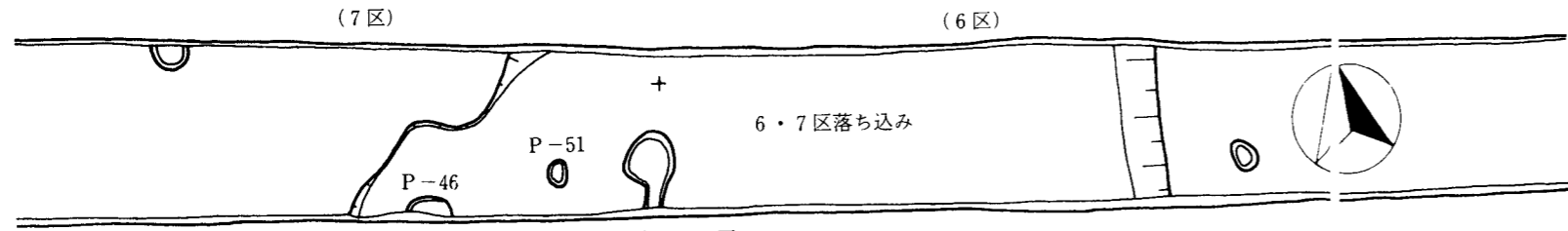
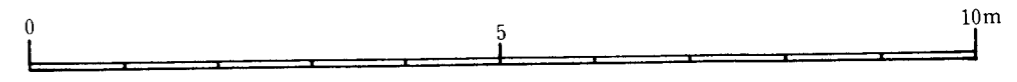
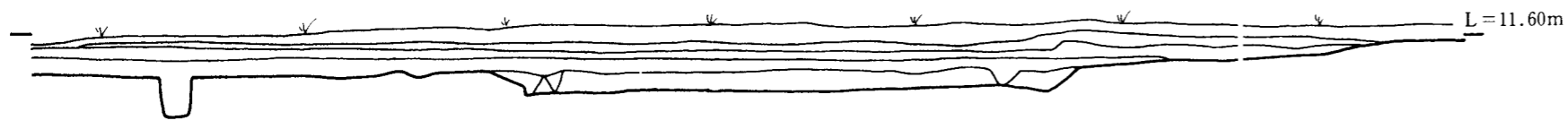
6号溝（第39・40図、図版29） 8区にあり調査区に直行する溝。幅52～55cmを測る。覆土は2層あるが、⑤層の暗茶褐色砂質土がほぼ全体に入っていた。この土層には多量の炭化物と骨片が含まれているのが特徴である。溝中央部と南側に深さ20cm前後のピットが2個ある。この溝か



第1地点1・2区

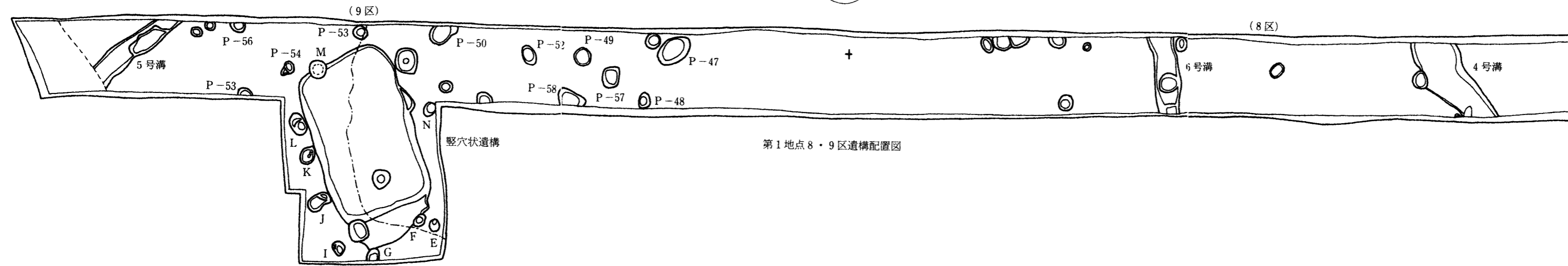
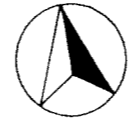
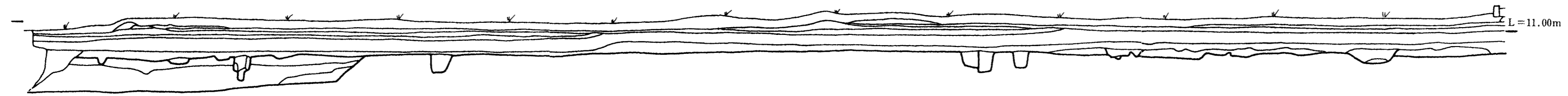


第1地点3・4区

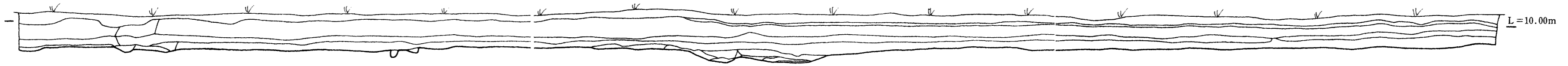


第1地点6・7区

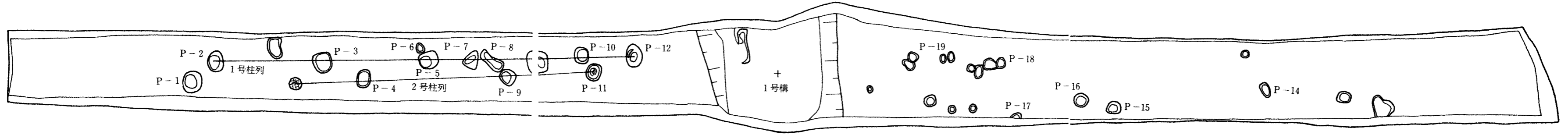
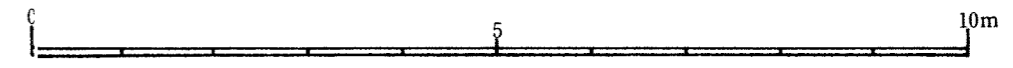
第38図 遺構配置図① (S=1/)



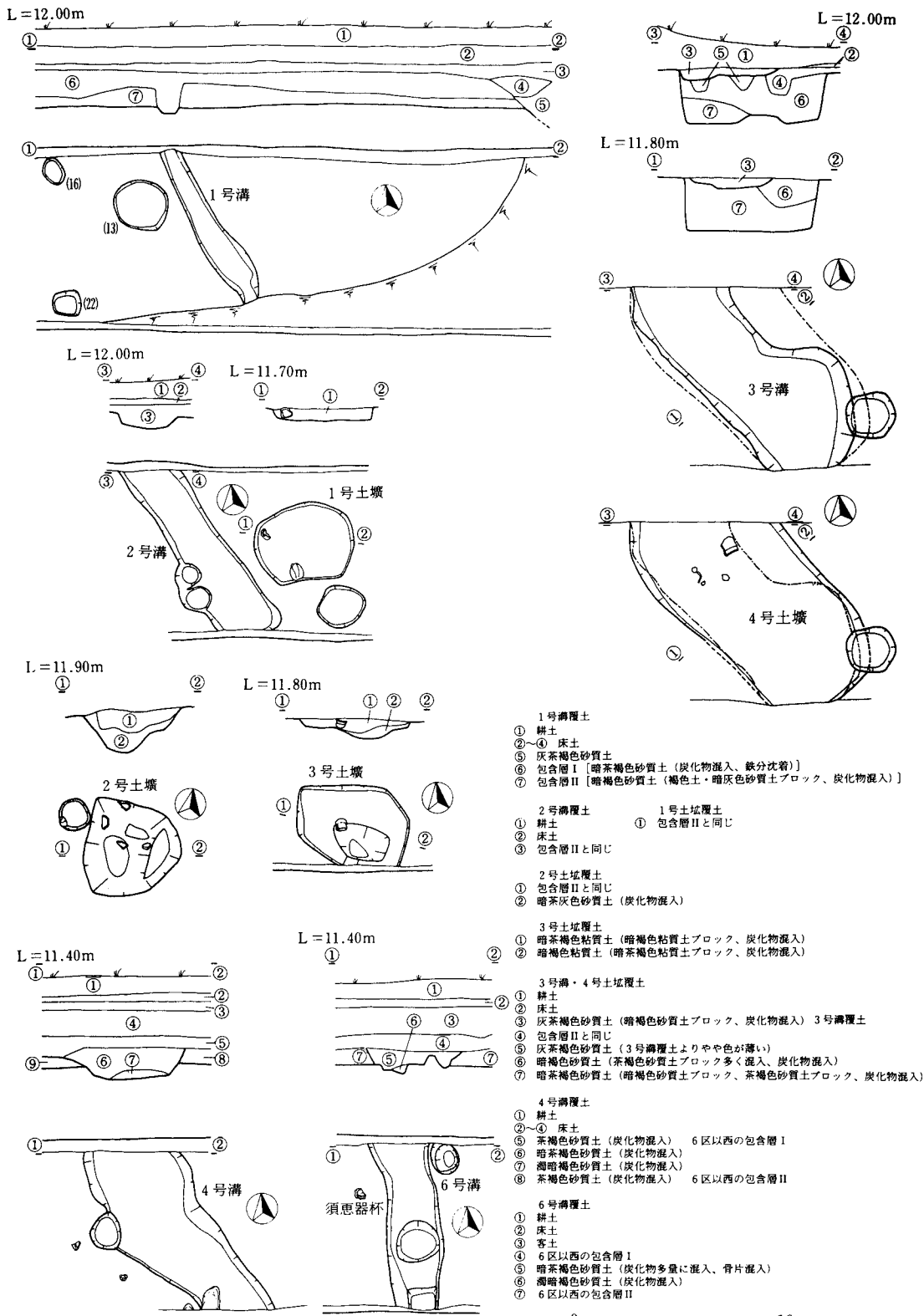
第1地点8・9区遺構配置図



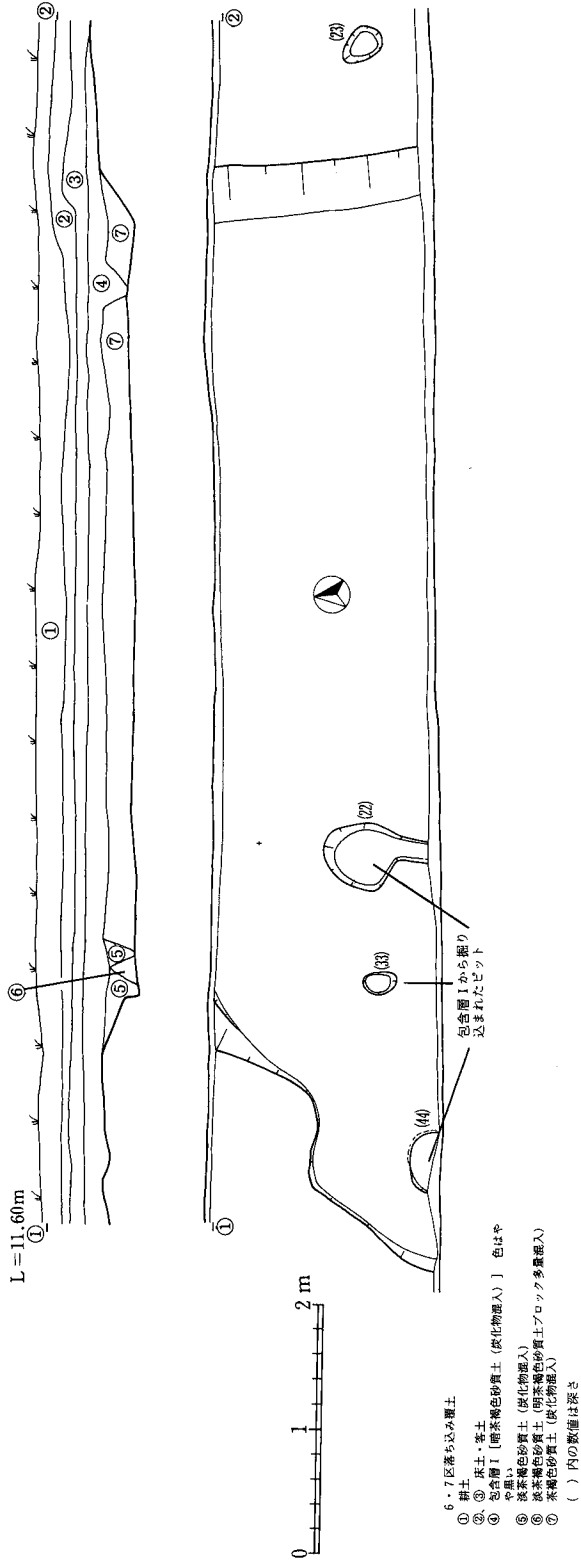
第3地点8・9区



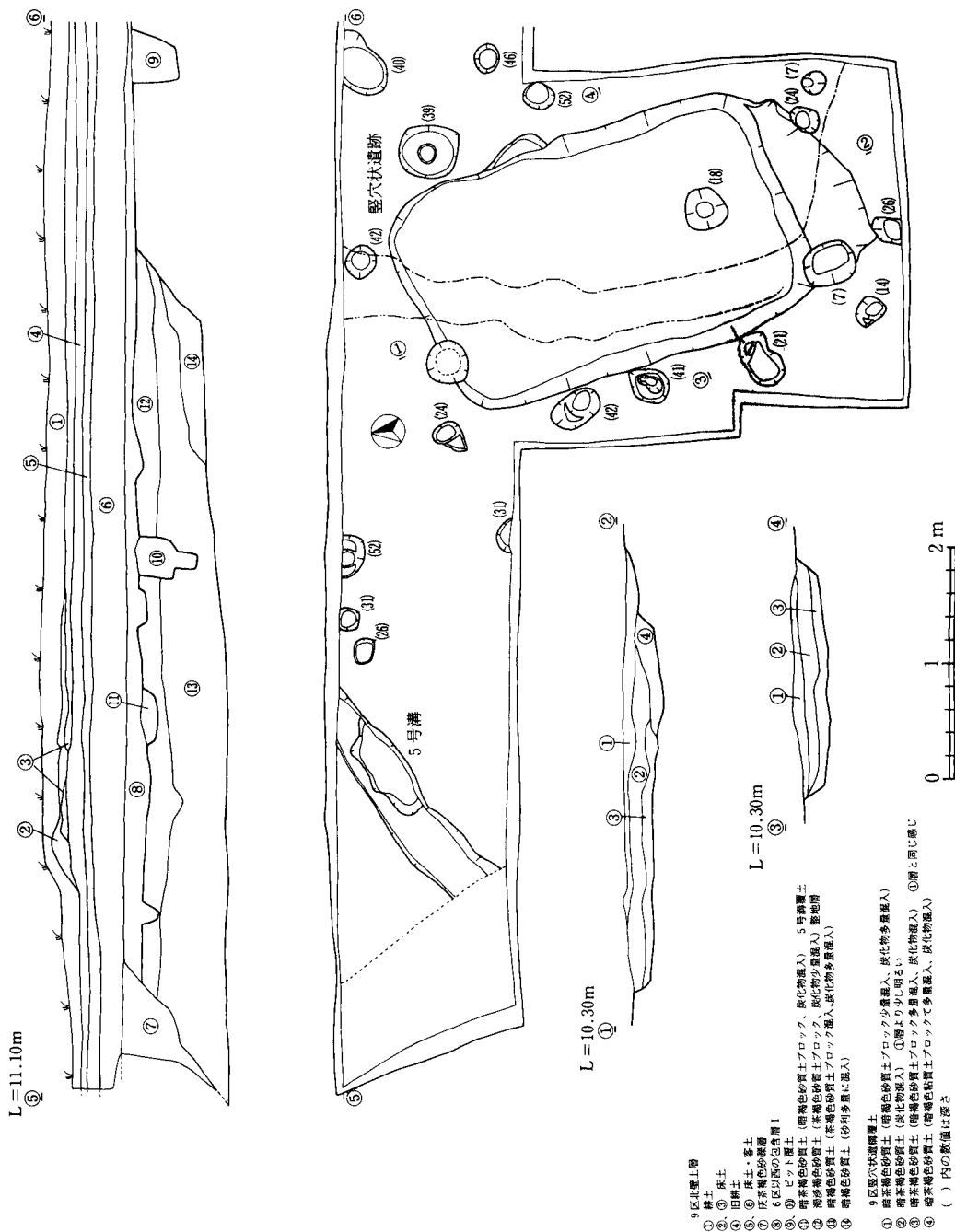
第39图 遺構配置図② (S=1/)



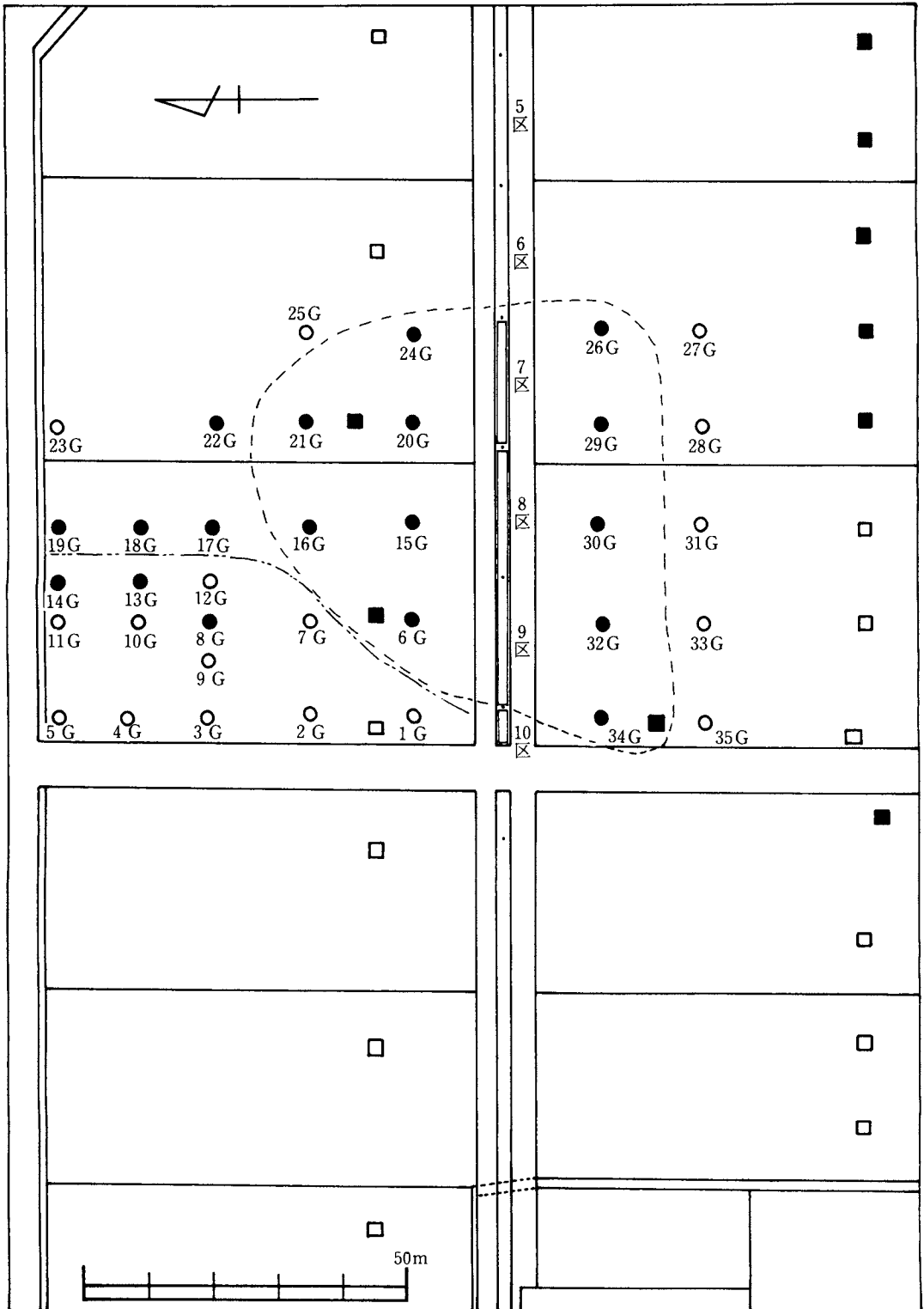
第40図 第1地点遺構実測図① (S=1/3) 0 10cm



第41図 遺構実測図 (S=1/3)

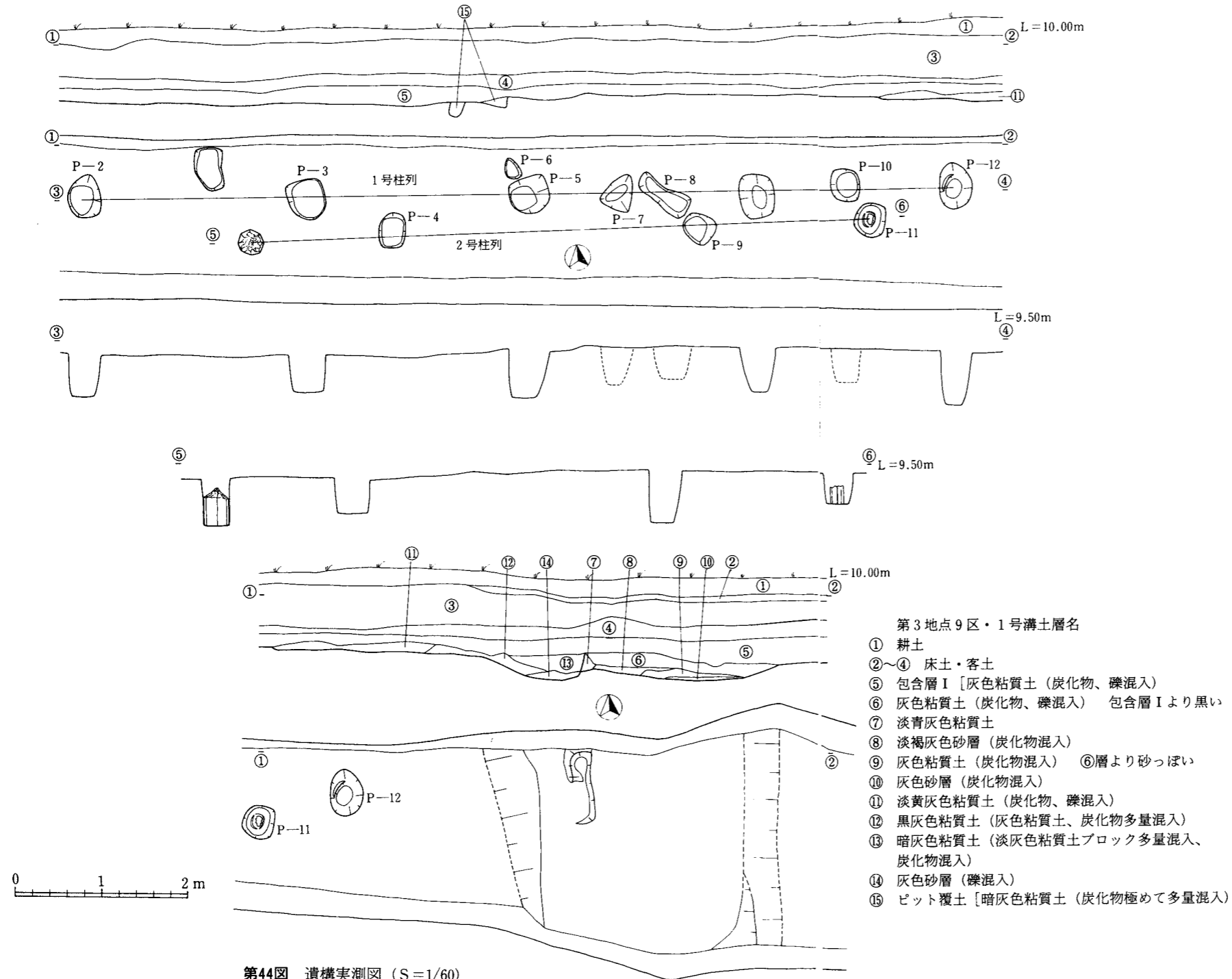


第42図 第1地点9区遺構実測図 (S=1/60)



第43図 第3地点遺跡範囲 (S=1/1,000)

□・■ 第1次分布調査グリッド
○・● 再分布調査グリッド



らは第46図30、31の土師器の甕が出土した。

竪穴状遺構（第39・42図、図版30） 9区西側から検出された。長軸で333 cm、短軸211 cm、深さ25cmを測り、形態的には隅円長方形を呈する。遺構外南側の地山面が遺構側へ下がっていた。床面はほぼ平坦で、床面南側に径36×34cm、深さ18cmの柱穴ピットが1個ある。覆土は4層認められるが、上の①層は包含層Ⅰの流れ込みであろう。この遺構は本来の地山と地山レベルまで埋めもどした土層の境界部分に作られている。1点破線がその境界にあたる。そのため床面が人為的に埋めた土の部分と地山の砂層の部分に分かれている。2点破線は凹地の下端のラインである。この遺構の出土遺物は、床面の柱穴内から第46図32の底部に糸切り痕を持つ土師器の椀と覆土中からは第46図33の土師器の小皿が出土している。

第2節 第2地点の層序と遺構

第2地点は第1次調査地の西端部に当たり、施工計画から削平されることになった水田部分である。調査はトレンチ調査をおこなった。その結果、耕土下から黒色土が検出され、遺物も古墳時代後期頃の土師器とその時期以降の須恵器が出土したが、ベースの礫層面から遺構は検出されなかった。このことから第1次調査地の遺跡の範囲から外れるのであろう。

第3節 第3地点の層序と遺構

この調査地点は通称チョウカンジあるいはチョガンジと呼ばれている所である。調査区は幅約2 m、延長約56mを測る。調査区内は第1地点同様に20m間隔で区分し、西側から東側へ10区から7区と呼称した。この調査区の基本土層は、約15～20cmの耕土の下に約35～40cmと約10～20cmの2層の床土が存在し、この下に約10～30cmの厚さの包含層が堆積していた。地山は淡灰色粘土層で、これが遺構の基盤となっている。包含層は9区西端では暗灰色粘質土であった以外は、7区まで灰色粘質土でその遺存状況も良好であった。特に9・8区では比較的多量の土器が出土し、地山面からも掘立柱建物の柱根や柱穴と溝等が検出された。東側の7区では土器は僅かに出土したが、遺構は認められなかった。7区で遺跡の東端になるのであろう。一方、西側の10区では耕土下で褐色礫層が広がり、包含層や遺構そのものが存在してはおらず、9区以東の層序と大きく異なっていた。9区と10区境界部分で遺跡の西端に当たるのであろう。この9区と10区の境界部分には、以前の耕地整理で埋められた暗渠排水が通っており、そこからの湧水が激しくて遺跡西端の状況を確認することができなかった。調査最終段階にこの遺跡の分布範囲と周辺の状態を把握するため、調査区周辺の田面部に35箇所の試掘グリッドを設定して土層観察を行った。その結果、平安時代後期の包含層の広がり第43図の破線範囲であることが確認された。

遺跡範囲内の地山の高さをみると、調査区の9区西端で標高9.4m前後、これが東側の8区東端へ行くにしたがい標高9.6m前後と少し高くなる。調査区北西側で包含層を確認したグリッドで

も、調査区と同様に標高9.4～9.6mの高さで推移している。それが北側から北東側のグリッドでいったん9.2m前後に下がり、東側で再び標高9.7m前後に上がっている。調査区の南東側から西側にかけてのグリッドでは標高約9.7m～9.3mと緩やかに下がっている。全体に遺跡は東側や南東側で高く、そこから南西側に向かって緩やかに低くなることが推定される。さらにこの遺跡を取り巻く周囲の状況も明らかとなった。遺跡西側では耕土下の標高9.8m～10.0m前後の高さで10区と同じ褐色礫層の地山が広がっていること、北西側でも耕土下の標高10m前後の高さで褐色砂質土や西側と同じ褐色礫層が存在することが確認された。地山面の高さが調査区に比べて高くなり、地山の状況も異なることが確認された。

北西側に位置する再分布調査のNo.8グリッドでは、約20cmを測る耕土・床土下の地山の褐色砂質土面から遺構と第62図267の土師器の器台が出土した。No.10グリッドからは第62図268の打製石斧が出土した。この北西側で検出された地山は調査区より約40～60cm程度高く、出土遺物の時期が異なることから別個の遺跡が存在しているのであろう。北東側では耕土・床土下の標高9.8～10m前後の高さで淡褐色粘質土から淡灰色粘質土が地山面となっている。地山上から包含層と推定される灰色粘質土層も検出されたが、遺物が出土せずレベル的にも高いため、調査区の遺跡とは別個のものとして判断した。南東から南西側にかけては、南東端に設定したNo.27グリッドで耕土下約65cmの標高10m前後の高さから淡青灰色粘土層を検出した。南西側のNo.33グリッドでは耕土下約70cmの標高9.6m前後の高さから礫混じりの淡褐色粘質土が検出された。南西端にあたるNo.35グリッドでも耕土下約50cmの標高9.7m前後の高さで礫混じりの淡茶褐色粘質土が検出された。この3箇所は調査区の地山と異なるが地山と推定した。この他のNo.28・31グリッドでは耕土下約85～90cmまで掘り下げたが、その間に何層もの床土と客土が堆積するだけで地山を確認することはできなかった。以上の再分布調査の成果からみると、第3地点の遺跡は周囲よりも約30～60cm程度低い凹地状の所に存在していることが明らかとなった。次に検出された遺構について説明したい。

1号柱列（第39・44図、図版32） 9区から検出された。4間（10.1m）の東西方向で柱間寸法は西から2.6m、2.5m、2.7m、2.3mを測る。柱穴は約40～50cmの不整形のもので、深さは検出面から約40～63cmを測る。遺物はP-2から第56図125の土師器の黒色椀が出土している。

2号柱列（第39・44図、図版32） 1号柱列の直ぐ南側にある。中央柱穴を確認できなかったが4間（7.2m）の東西で、柱間寸法は等間ではない。この柱列の西端と東端には柱根が残っていた。西端のものは長さ44cm、径は28cmを測り八角形を呈している。また、柱根の下端には1箇所穴が開けられている。この柱列の東端の柱穴P-11掘り方内にも径約15cm程度の柱根が残っていたが、それは側だけ残ったものであった（図版32）。

1号溝（第39・44図） この溝は9区と8区の境にあり、調査区と直行して延びている。幅は約300～345cm、深さ約30cmを測る。この溝の存在する箇所は本調査に先立つ分布調査の折りに、バックホーで試掘した箇所にあたり、その時深く掘りすぎたため溝の東西の壁も削ってしまった。それで破線は壁の推定線を表したものである。北壁や南壁の土層で見るとかぎり壁の立ち上が

りは全体に緩やかとなっている。溝の覆土はレンズ状で流れ込むように堆積しており、底部には灰色砂層が堆積していることから水流のあったことが分かる。溝は北壁土層の堆積状況から判断すると、最初この地点の東側にあった溝が埋まった後、新たに溝の位置を西側へずらして作り替えたことが窺われる。また、調査の過程でこの溝の南東側下端あたりから、北壁で溝の底部中央が少し高まっている部分にかけて、長さ約20～30cm 前後の礫が1列に並んでいたことを記憶しており、この礫を並べることで溝の東側の縁を形作っていたものと推定される。この礫の配置から溝の幅は北側では狭く、南側では広くなることが推定される。その新しい溝も底部に灰色砂層が堆積していることからやはり水流のあったことが分かる。灰色砂層の上には黒灰色粘質土が堆積していた。黒灰色粘質土の広がりを見ると、北壁では溝の西側約60cm の地山上から溝底部の灰色砂層の上にかけて薄く堆積していた。これが調査区中央部から南壁側では、溝底部の灰色砂層上に溝の幅いっぱいになり、厚く堆積していた。溝に水が流れていたある時点で黒灰色粘質土が一気に流れ込み、溝が再び埋まったものといえる。黒灰色粘質土の堆積状況から、溝は北から南へ流れていたのであろう。溝を埋めた黒灰色粘質土と灰色砂層中からは多くの遺物が出土している。溝の配置と性格もその方向から9区側で検出された柱列（掘立柱建物）と関係があるものと推定される。

第6章 第2次調査の出土遺物

第1節 第1地点の遺物

第1地点からは弥生時代後期から平安時代後期にかけての遺物が出土している。各遺構と包含層のものに分けて説明したい。

1号土壌出土遺物

1は胴部が算盤玉状を呈する壺で口縁の上部を欠いている。器面の磨耗が著しく調整は明らかではない。色調は淡褐色を呈している。

2号土壌出土遺物

2は口縁部がくの字に外反する甕で、口径19.7cmを測る。胴部外面はハケ調整をし内面には接合痕を残している。色調は淡黄褐色で、胎土は砂粒が少なく粘質のものとなっている。3は口径18.8cmを測る。胴部内面は下から上へヘラケズリをしている。色調は明褐色を呈している。胎土は砂粒を多く含むが、焼成は良好である。

3号土壌出土遺物

4は小型丸底土器で、口径11.8cm、器高7.2cmを測る。薄手に作られているが、器面は磨耗している。底部内面はヘラケズリする。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はあまい。5は長さ3.6cm、幅2.7cmの楕円形の礫中央部に溝を巡らしている。

4号土壌出土遺物

6は口縁内面端部が肥厚する甕で、口径16.5cmを測る。頸部内面には指頭圧痕やナデ調整を施している。色調は淡黄褐色を呈している。胎土は良好で、砂粒の他に赤色土粒を含んでいる。7は6と同じタイプの甕で、口径16.8cmを測る。頸部のくびれ方に違いがある。器面が磨耗しているため調整は明らかではない。色調は6と同じである。

2号溝出土遺物

8は口縁部がくの字に外反する甕で、口径11.2cmを測る。口縁部は強く外反しヨコナデ調整をしている。色調は淡白褐色を呈し、胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。

P-27出土遺物

ここからはファイゴの羽口の破片が1点出土している。

1～4区包含層出土遺物

土師器では椀、台付き椀、手づくね土器がある。9～11は内面を黒色処理した椀と台付き椀である。いずれも内面を丁寧なヘラミガキしている。9は口径13.8cmを測る。11の底径は7cmを測る。12は椀で底径は5.8cmを測る。底部は厚い平高台状を呈し、底部には糸切り痕が残る。胎土には精選された土が使用され、砂粒と赤色土粒が含まれる。色調は淡褐色を呈している。21～27は手づくね土器で、22の底部が上げ底になるもの以外はコップ状の形態を呈する。いずれも表面に

は指頭によるナデ調整を残している。22は口径2.5cm、底径2.1cm、器高2.7cmを測る。23は口径3cm、底径2.5cm、器高2.3cmを測る。24は口径3.9cm、底径1.9cm、器高2.7cmを測る。

須恵器では杯蓋、杯身、高杯、瓶・壺、甕がある。杯蓋には13、14がある。13は口径12.2cmを測り、ヨコナデ調整をしている。14は口径14.4cmを測り、外面にはヨコナデ調整の後ヘラケズリを加えている。杯身には15～17がある。口径は15が12.3cm、16は14.2cm、17は13cmを測る。高杯には18がある。19は瓶・壺の口縁部である。口径16.4cmを測り、口縁が外反している。20は甕の胴部である。

4号溝出土遺物

土師器の脚部28と有台杯29が出土している。29は口径7.8cm、高台径5.8cm、器高2.3cmを測る。内外面共ナデ調整を施している。

6号溝出土遺物

30、31は土師器の長甕の口縁部と胴部で、いずれも別個体のものである。30は推定口径20.2cmを測る。胎土には砂粒を含み、色調は褐色から暗茶褐色を呈する。この他にはフィゴの羽口の破片が5点出土している。

竪穴状遺構出土遺物

32は土師器の椀で、口径13.9cm、底径6.8cm、器高3.9cmを測る。底部には糸切り痕が残る。胎土は精選され微細な砂粒と粗い赤色土粒を含んでいる。色調は褐色を呈し、焼成はあまい。33は底径4.6cmを測る小皿で、底部には糸切り痕がある。これも胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を含んでいる。色調は淡褐色を呈し、焼成はややあまい。

P-47出土遺物

34は土師器の小皿で、口径9.6cm、底径5.9cm、器高2.2cmを測る。底部には糸切り痕が残っている。これも胎土は精選され微細な砂粒と粗い赤色土粒を含んでいる。

P-48出土遺物

38は口径33.2cmを測る土師器の鍋で、口縁がくの字に外傾している。口唇部も面取りされている。外面は縦方向のハケ調整後に指頭による押圧を加えており、表面の凹凸が著しい。また、ススも多く付着している。内面は横位のハケ調整をしている。胎土は精選され微細な砂粒を含み、焼成は良好となっている。

P-49出土遺物

35は土師器の小皿で、底径4.5cmを測る。底部には糸切り痕がある。胎土は精選され微細な砂粒と粗い赤色土粒を含む。色調は淡褐色を呈している。焼成はあまい。

P-50出土遺物

37は土師器の椀で、底径6.2cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒を含む。色調は淡白褐色から淡灰褐色を呈している。

P-56出土遺物

36は土師器の小皿で、底径4.4cmを測る。底部には糸切り痕がある。胎土、焼成、色調は35と類

似する。

P-61出土遺物

ここからフィゴの羽口の破片が1点出土している。

6～9区包含層出土遺物

弥生土器では57の甕があり、口径18.2cmを測る。口縁内面に段を持っている。頸部以下はヘラケズリをしている。

土師器には高杯、椀、有台椀、長甕、甗、手づくね土器などがある。39は高杯で脚部の破片である。全体に磨耗しており、焼成もあまい。色調は淡白褐色を呈している。41は椀で口径14.8cmを測る。42は有台椀の底部である。40は長甕で口径16.8cmを測る。43～45は甗の把手である。47～49は手づくね土器である。

須恵器では杯蓋、有台杯、盤、短頸壺蓋がある。50は杯蓋で口径14cmを測る。口縁部と天井部を分ける稜は僅かに外側へ突出している。口縁端部の稜線は鋭さに欠け丸みを持っている。51は蓋で口径13.8cm、器高1.8cmを測る。鈕は扁平なもので、天井部も水平に延び口縁端部を丸くおさめている。内面にはヘラ記号が残っている。胎土と焼成は良好で、色調は灰色から暗灰色を呈している。53も蓋で口径15cmを測り、内面にはカキメ調整を施している。短頸壺の蓋54は口径15.3cm、器高2.4cmを測る。口縁端部の稜線は丸味を持っている。焼成は良好なもので、色調は暗灰色から灰色を呈している。55は有台杯で、6号溝の直ぐ西側の包含層から出土した。口径11.4cm、底径6.7cm、器高4.2cmを測る。口縁部は緩く外反し、高台はやや片側に寄って貼付されている。胎土と焼成は良好で、色調は灰色から暗灰色を呈している。56は盤で、口径16.5cm、底径12.6cm、器高2cmを測る。胎土には砂粒を含むが、焼成は良好である。色調は灰色を呈している。

白磁には265の皿がある。胎土は白黄色を呈する。釉色はやや黄色がかっており、内面の釉には細かい貫入が入っている。

石製品では58は紡錘車で、上辺径が2.6cm、下辺径が4.6cm、高さ2.1cmを測る。中央部には径0.7～0.8cmの孔が穿いている。59は断面形が平行四辺形を呈する砥石で、磨り面にV字状の溝が掘られている。60は砥石である。土製品には土錘61のがある。長さ4.4cm、幅2.1cm、孔径は0.4cmを測る。

6・7区落ち込み出土遺物

この覆土中からは甕、壺、器台が出土している。

甕には62～67のものがある。いずれも大型の甕で口縁部に擬凹線を持つのが特徴である。62は口径29.4cmを測り、口縁部は直立して延び端部を丸くおさめている。胎土には砂粒を含み、焼成はややあまい。色調は茶褐色から淡黄褐色を呈している。口縁部の幅は他のものより短く、内面の段も緩い。63は口径34cmを測り、外反する口縁の端部は丸く先細りしている。内面には指頭圧痕が残り段も発達している。胴部外面はハケ調整をし、内面はヘラケズリしている。色調は2次の加熱を受けたためか全体的に淡桃褐色を呈している。64は口径34.2cmを測り、口縁部の傾きは63と同じで口縁端部を丸くおさめている。口縁部内面には段が発達せず、強いヨコナデ調整で凹ませている。65は口径29.8cmを測る。口縁部内面はヨコナデ調整で凹み、口縁端部は先細りして

いる。胴部内面は磨耗している。色調は淡黄褐色から淡灰褐色を呈し、外面には黒斑が認められる。66は口径27.9cmを測り、これも口縁端部が先細りしている。口縁部内面はヨコナデ調整をしているが指頭圧痕も残り、器壁も他のものより薄い。色調は淡黄褐色を呈しているが、2次の加熱を受けて淡桃褐色となっている。67は口径29.3cmを測り、口縁部は全体的に肉厚となっている。内面はナデ調整で凹んでいる。色調は淡黄褐色を呈し、外面には一部黒斑が残っている。

壺には68～70のものがあり、形態的には3タイプに分かれる。68は有段口縁の壺で口径16.4cmを測る。口縁部に擬凹線を持ち、胎土と焼成は良好で、色調も淡黄褐色を呈している。69は大型の有段口縁の壺で口径32.5cmを測る。口縁端部は内側へ下がっているが面を形成している。頸部を欠くが胴部側には擬凹線を数条巡らしている。この土器は器壁が約1.3cm前後の厚さとなっている。胎土と焼成は良好で、色調は淡黄褐色や淡灰褐色を呈している。口縁部と胴部の外面には黒斑がある。70は小型の壺で口径10cm、底径2.7cm、推定器高18.5cmを測る。球形の胴部に直線的に外傾する口縁部が付く。器壁の薄いものとなっている。色調は灰褐色や暗灰茶褐色を呈し、胴部外面には黒斑がある。

器台には71がある。脚部に透かし穴を持っている。

縄文土器の46が覆土中から出土している。

落ち込み上包含層 I 出土遺物

72～85はこの落ち込み覆土上に堆積していた包含層 I と一部落ち込み覆土中から出土した土器群である。甕、鉢、椀、甑が存在しているが、須恵器は検出されなかった。

甕は口縁部がくの字に外反するもので、胴部の形態が長胴のものと球形のものに分かれ、底部は丸底となっている。また、口縁部の幅の長いものと短いものに分かれる。胎土も砂粒を多く含む砂っぽいものと砂粒を含むが粘質のものに分かれる。72は長胴タイプの甕で口径18.8cm、推定器高33.5cmを測る。口縁部の幅はやや長くヨコナデ調整している。口縁は強く外反しており端部を摘み上げている。胴部外面は数段に分けてハケ調整しており、ハケ目も目の細かいものとなっている。内面には接合痕と指頭圧痕を削り残す程度の軽いヘラケズリを施している。胎土には砂粒を多く含み、色調も褐色から暗茶褐色を呈している。73は胴部以下を欠くが口径23.2cmを測る。口縁部は肉厚で強く外反し、ヨコナデ調整をしている。この口縁端部も丸くおさめている。胴部は肩部の張りから球形になるものと推定される。その胴部は磨耗しているため調整は明らかではない。胎土中に砂粒を多く含んでおり、色調は褐色から淡褐色を呈している。74は口径19cmを測る。口縁部は73のように強く外反せず、ヨコナデ調整で口縁端部を僅かに摘み上げている。胴部内面には指頭圧痕を残しており、この上を軽くヘラケズリしている。胎土や色調は73と同様である。75は口径18cmを測る。口縁部は肉厚で強く外反し、ヨコナデ調整をしている。胴部は磨耗のため調整は明らかではない。胎土と色調は74に似る。76は口径14.2cmを測る。その胴部の大きさから小型の甕であろう。内面には多くの指頭圧痕が残っている。色調は75と同じ。77は口径17.2cmを測り、口縁部は強く外反している。78は口径22.3cmを測り、口縁端部を強く摘み上げ、幅の狭いながらも口縁帯を形成している。色調は淡灰褐色を呈している。79は口径17cmを測り、口縁

部の幅は他のものと比べると短い。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は褐色や明褐色を呈している。80は小型の甕の底部である。

鉢には81がある。口径15.2cm、推定器高9.3cm程度を測るもので、口縁部は内湾ぎみに立ち上がっている。外面はヘラケズリしてヘラミガキをしている。内面端部は指頭によるナデ調整後ヘラミガキをしているが、底部近くになると雑なミガキとなっている。胎土には砂粒を多く含み、色調は褐色や茶褐色及び灰褐色を呈している。

椀では82がある。口径11cm、器高5cmを測る。外面は軽くヘラミガキをしているが、接合痕を残している。口縁部の内面は縦位方向に、底部は横方向にヘラミガキをしている。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡茶褐色や淡明褐色を呈している。83も椀であるがこれは6・7区の排土中にあり、この包含層Iから出土したものに伴う明らかではない。口径12cmを測る。内外面は指頭によるナデ調整をしているだけで、外面には接合痕も残っている。胎土には砂粒を含み、焼成はあまい。色調は淡褐色や淡黄褐色を呈している。

甗は2点存在している。84は口径24.3cm、底径8.6cm、器高31.8cmを測る。外面は口縁部と底部の両側からハケ調整をしている。把手はハケ調整後に取り付け、周りはヘラケズリや指ナデ調整をしている。内面は底部側から口縁部端へヘラケズリした後、その上を指頭によりナデ調整を施している。内面上部は横位のハケ調整をし、内外面の端部を強くヨコナデ調整している。胎土には砂粒を多く含み、色調は褐色や暗灰茶褐色を呈している。焼成も良好なものとなっている。85は口縁部から胴上部までを欠くが、胎土、焼成は84と同様なものである。色調は褐色や赤褐色及び明褐色を呈している。

他の遺物としては鉄滓数点が出土している。

9区下層（整地層）出土遺物

ここからは土師器の甕、椀、台付き椀、甗と須恵器の杯蓋、杯身も出土している。

甕には86～98のものがある。6・7区の落ち込み上包含層I出土のものと同様なもので、口縁部がくの字に外反する甕である。胴部の形態も球形のものと長胴のものに分かれる。86は口径19cm、器高27.4cmを測り、胴部が球形で底部も丸底となっている。口縁部は強く外反せず、端部は先細りぎみとなるが稜を持っている。胴部の外面は粗いハケ調整をし、内面も底部から中位あたりまではヘラケズリをしている。この胴部上位は指頭によるナデ調整をしてから、一部をヘラ状具でナデつけている。胎土には砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡黄白褐色や灰褐色を呈し、器面は2次的加熱で赤変したり、ススが一部付着している。87は口径21.7cmを測り、口縁部はやや強く外反させており端部も概ね丸くおさめている。外面はヨコナデ調整をし、内面はハケ調整をしてから軽くヨコナデ調整をしている。頸部内面には接合痕があり、粘土が盛り上がっている。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡灰褐色を呈している。88は口径19.3cmを測る。胴部下端から底部が存在しない。口縁部は内外面をヨコナデ調整をして、端部も丸くおさめている。内面はその後ハケ調整を加えている。胴部外面はハケ調整を何段にも分けて施している。内面は指頭によるナデ調整後、胴部中位から下をヘラケズリしている。胎土は

砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡灰褐色や淡褐色を呈している。89は口径18.2cmを測る。口縁部は長く延びて内外面をヨコナデ調整しているが、外面端部と頸部側を強くヨコナデしている。胴部外面はハケ調整をし、内面はヘラケズリの後にナデ調整をしている。胎土には砂粒を含み、色調は淡白黄褐色を呈している。外面に一部黒斑がある。90は口径19.6cmを測る。口縁部はくの字に外反し、口縁部の外面端部と頸部を強くヨコナデ調整し、端部も丸くおさめている。外面はハケ調整をしているが、内面は頸部側に僅かにヘラケズリ痕が残るが、他は磨耗のため不明。胴部形態も球形であるが長胴型に近い。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡灰褐色や淡黄褐色及び淡灰色などを呈し、焼成はあまい。91は口径20.2cmを測る。内外面共に磨耗している。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。92は口径18cmを測る。外反する口縁部の幅は長く、口縁部から緩やかに肩部に続き、なで肩の胴部を持つものと推定される。頸部外面には指頭圧痕が残るが、他は磨耗のため調整は不明である。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡褐色や淡白灰褐色を呈している。93は口径16.9cmを測り、口縁部は直線的に外傾している。内外面は磨耗しており調整は明らかではない。胎土は砂粒を含み、色調は明茶褐色や褐色を呈している。94は口径16.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整をしているが、内面端部を僅かに肥厚させている。胎土はやや精選された土に砂粒を含み、色調も淡褐色や淡赤褐色を呈している。95は口径16.8cmを測る。口縁が直線的に延び内面端部を強いヨコナデ調整で僅かに肥厚させている。胴部外面にはススが付着している。これも胎土には砂粒を含み、色調は明褐色を呈している。96は口径16cmを測る。口縁部の内外面はヨコナデ調整をし、外面には指頭圧痕が残っている。他の土器より口縁部幅は短い。胎土は90と同じで粘質のものとなっている。色調は淡灰色や淡灰褐色を呈し、焼成はあまい。97は口径15.9cmを測る。口縁は強く外反していないが、端部を外方へ延ばしている。口縁部には接合痕があり、頸部内面にも指頭圧痕が残る。胎土は精選されているが、焼成はあまい。色調は淡褐色を呈している。98は口径18.8cmを測る。胴部が長胴を呈する甕で、器高は実側図よりも高くなる可能性がある。口縁部はヨコナデ調整をしているが、その傾きは6・7区落ち込み上の包含層I出土の72と比べると緩い。胴部外面の縦方向にハケ調整をし、ハケ目も細かいものとなっている。内面は板状具でナデ上げてからヘラケズリを加えている。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡白褐色や赤褐色及び淡灰褐色を呈し、部分的に2次的加熱を受けて淡桃色に変色している。

甌では把手の部分の破片が99、100の2点出土している。100は把手の端部が上へ延びている。色調は褐色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。

椀では101がある。口径10.6cmを測る。外面はナデ調整をし、内面は横方向にヘラミガキを加えている。胎土には砂粒を含み、焼成はあまい。色調は淡褐色を呈している。

台付き椀では102がある。底径は6.4cmを測る。台の部分は指頭によるナデ調整をしている。内面の調整は磨耗しており明らかではない。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。色調は淡褐色を呈している。

須恵器では103～105のものがある。103は杯蓋で口径13.4cm、器高5cmを測る。天井部の約2/3

はヘラケズリされている。口縁端部は内傾して稜は鋭さに欠けている。天井部と口縁部を分ける稜は外方に突出している。胎土には砂粒が混入しているが、他は粒子が細かく精選された感じがする。色調は外面が明灰色と暗灰色をし、内面はやや青みを帯びた明灰色を呈している。焼成も良好なものとなっている。104は杯身で口径12.2cm、器高4.4cmを測る。立ち上がり、受け部共に先端を丸くおさめ、底部の約半分はヘラケズリをしている。全体にやや薄手の作りとなっている。胎土には砂粒を含んでいるが、焼成は良好なものとなっている。色調は外面が灰色や暗灰色をし、内面は灰色を呈している。両者のヘラケズリの方向は逆時計まわりとなっている。105も杯身で底部を欠くが口径12.3cmを測る。立ち上がり、受け部共に先端を丸くおさめている。胎土には砂粒を含んでいるが、焼成は良好なものとなっている。色調は内外面共に灰色を呈している。

第2節 第2地点の遺物

包含層出土遺物

この地点からは土師器の甕、鉢、手づくね土器と須恵器の甕が出土している。

土師器の甕には106～110のものがある。106は口径19.9cmを測る。口縁部の内外面はヨコナデ調整をしているが、端部には弱いながらも稜を持っている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成も良好。胎土は砂粒を含むが粘質のものとなっている。107は口径17.3cmを測る。これも外反する口縁部の内外面をヨコナデ調整し、端部には稜を持っている。色調は淡茶褐色や淡灰褐色を呈し、胎土と焼成は106と同様で良好なものである。108～110は甕の底部である。いずれも外面はハケ調整をしており、内面はハケ状具でナデつけしたり、ヘラケズリをしたりしている。いずれも胎土は粘質なもので、焼成も良好である。色調は淡褐色から灰褐色を呈している。

鉢には111がある。底径9.2cmを測る。胴部が丸くなりこれに直立ぎみに立ち上がる口縁部が付いている。胴部はハケ調整をし、底部はヘラケズリしている。胎土、焼成は甕のものと同じで、色調も淡褐色を呈している。

手づくね土器は112～116の5点であるが、破片はまだ他にもある。これらはいずれも指頭によるナデ調整をしており、形態的にはコップ型のものである。

須恵器は117～119で甕の胴部片である。

第1次調査地包含層出土遺物

手づくね土器には120～123の4点ある。形態的にはそれぞれ異なっている。

第3節 第3地点の遺物

この地点からは平安時代後期の遺物が多く出土している。8・9区の包含層と1号溝覆土中から主に出土している。土師器では小皿、皿、椀、有台椀、鉢などが多く、これに須恵器の甕と白磁の椀、皿類が伴っている。遺構と包含層出土のものを分けて説明したい。なお、白磁の椀、皿

の分類にあたっては横田賢次郎・森田 勉 1978年「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして」九州歴史資料館研究論集4に従った。

P-1 出土遺物

124は白磁皿V類にあたる。底径3.2cmを測る。全体に器肉は薄く底部は削り出している。底部は施釉されず、内面の見込みに段を有する。胎土はややあらく、白灰色を呈する。釉色はやや緑色がかっており、釉全体には細かい貫入が入っている。

P-2 出土遺物

P-2は1号柱列西端の柱穴にあたる。内面黒色処理した有台碗125が出土している。底径6.2cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒を多く含み、色調も淡白灰色を呈し、焼成は良好である。このピットからは他にも黒色処理した有台碗の破片が出土している。

P-8 出土遺物

126は碗で、口径13.5cmを測る。内外面はヨコナデ調整している。胎土も精選され微細な砂粒を多く、赤色土粒を僅かに含む。色調は明褐色や淡白褐色を呈している。焼成はやや良好なものとなっている。

P-15 出土遺物

127は底部が厚く平高台状を呈する小皿で、底部には糸切り痕がある。体部はヨコナデ調整をしており、焼成は良好なものとなっている。胎土は精選され微細なものとの粗い砂粒を含み、色調は淡白褐色を呈している。

P-17 出土遺物

128は碗で、口径12.3cmを測る。内外面をヨコナデ調整している。胎土は精選され微細なものとの粗い砂粒を含んでいる。色調は灰褐色を呈しており、焼成も良好なものとなっている。この土器と同一個体と推定される破片が1号溝覆土の灰色砂層中から出土している。

1号溝出土遺物

1号溝からは多くの土器が出土している。ここでは土師器から説明したい。

小皿で底部の薄いものから説明したい。129～138がそれに該当する。129は口径9.8cm、器高2.2cm、底径4.4cmを測る。底部から直線的に外傾し、口縁端部が丸く肥厚している。底部には糸切り痕があり、内面には黒色の付着物が残っている。胎土は精選され微細なものとの粗い砂粒を含み、色調は淡灰褐色や淡褐色を呈している。焼成は良好となっている。130は口径9.4cm、底径5.6cm、器高2.1cmを測る。底部から丸みを持って立ち上がり、内外面はヨコナデ調整して、口縁端部を先細りさせている。胎土は精選されているが、全体的に微細な砂粒を多く含んでいる。色調は口縁外面の灰褐色以外は暗茶褐色や黒褐色を呈している。131は口径8.6cm、底径5.6cm、器高1.7cmを測る。小皿で内面を黒色処理している。口縁部は短い外傾しており、底部のすぐ上でヨコナデ調整により凹ませている。底部の糸切り痕はナデあるいはミガキによって消されている。この土器の胎土は特に精選されており、粗い砂粒の混入も少ない。色調は暗茶灰色であるが、断面では淡褐色を呈している。焼成は良好で堅い。132は口径9.7cm、底径4.2cm、器高1.9cmを測る。口縁

部は外傾しているが全体的に薄手の作りのもので、底部のすぐ上をヨコナデ調整により凹ませている。胎土は精選され微細な砂粒を含んでいる。焼成はやや良好で、色調は淡白褐色を呈している。133は口径10.5cm、底径4.5cm、器高2.1cmを測る。形態的には132と同じであるが、底部が上げ底となっている点に違いがある。胎土も132と同じであるが、焼成は良好で堅い。色調は淡白褐色で褐色味が強く、部分的に褐色や淡褐色を呈している。134は底径3.6cmを測る。底部のすぐ上をヨコナデ調整で凹ませている。底部もやや厚くなっている。胎土は精選され微細な砂粒を含み、焼成は良好である。色調は淡白褐色を呈している。135は底径4.6cmを測り、内面の中央部が厚くなっている。胎土には微細な砂粒を多量に、粗い砂粒を少量含むことで砂っぽいものとなっている。色調は淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。136は底径3.7cmを測る。この底部中央には焼成前に細いヘラ状具で穴を開けている。胎土は粗い砂粒を少量含むが精選されている。焼成も良好で堅く、色調は淡褐灰色を呈している。137は底径4.4cmを測る。底部の厚さが薄く均等なもので、底部から体部が直線的に外傾している。胎土には微細な砂粒や粗い砂粒を多量に含み、この胎土の感じは135のものに似ている。色調は淡白褐色を呈し、焼成は良好である。138は底径4.9cmを測る。底部の厚さは均等で形態的には137と似ている。内面はナデ調整しているが、黒色の付着物が残っている。胎土は精選され微細な砂粒を含むが、その量はやや少ないようである。焼成は良好で、色調は暗灰褐色や淡灰褐色を呈している。この土器は皿や碗の底部の可能性もある。

小皿でも底部が厚く平高台状を呈するものに151～162のものがある。151は器形の判明するもので口径9.4cm、底径4.0cm、器高3.5cm、底部厚1.4cmを測る。内外面はヨコナデ調整をしているが器肉は薄い、底部には糸切り痕がある。胎土は精選されやや粗い砂粒と白褐色土粒を少量含む。色調は淡褐色や褐色を呈し、焼成は良好であるがやや柔らかい感じに焼き上がっている。152は底部を欠くが、口径10.5cmを測る。内外面はヨコナデ調整をしているが、器肉は薄く内面には油煙が付着し、燈芯も残っている。胎土は精選され微細な砂粒を含み、色調は淡白褐色を呈し、焼成も良好で堅い。153は底径4.2cm、底部厚2.1cmを測る。内外面はヨコナデ調整をし、底部には糸切り痕がある。胎土は精選され微細のものや粗い砂粒を含んでいる。色調は淡褐色や明褐色で表面の一部が赤褐色を呈し、焼成も良好で堅い。154は底径4.5cm、底部厚1.8cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒と粗い白色土粒を含んでいる。色調は淡白褐色でこれも表面の一部は褐色を呈している。焼成は良好で堅い。155は底径4.0cm、底部厚1.5cmを測る。これも胎土には微細と砂粒を含み、色調も淡白褐色で白色味が強い。焼成も良好である。156は底径4.0cm、底部厚1.7cmを測る。胎土は精選され微細や粗い砂粒と粗い白色土粒を含んでいる。表面は磨耗ぎみであるが色調は淡白褐色を呈している。157は底径4.0cm、底部厚1.4cmを測る。胎土には微細な砂粒や粗い砂粒を少量含む。色調は淡白褐色を呈し、焼成は良好で堅い。158は底径4.4cm、底部厚1.5cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は淡白褐色を呈している。159は底径3.8cm、底部厚1.6cmを測る。これも胎土は精選され微細なものや粗い砂粒を少量含んでいる。表面は磨耗しているが色調は淡白褐色を呈している。焼成は良好で堅い。160は底径4.3cm、底部厚1.9cmを測る。内面の中央部はヨコナデ調整で少し凹んでいる。胎土には微細な砂粒を多く含む

が、焼成は良好である。色調はこれも淡白褐色を呈している。161は内面を黒色処理した土器で底径4.1cm、底部厚1.3cmを測る。胎土は特に精選され微細な砂粒を少量含んでいる。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好で堅い。162は底径が4.8cm、底部厚が1.3cmを測る。この土器は他のものより底部厚が薄く、底径も一回り大きいことから皿か碗の底部の可能性がある。これも胎土には微細な砂粒を多く含む。色調は淡白褐色を呈するが、淡明褐色の部分もある。焼成は良好で堅い。

皿と推定されるものは少ない。163は口径16.5cmを測る。内外面はヨコナデ調整をし、外反する口縁端部は丸く先細りしている。胎土には微細なものや粗い砂粒と赤色土粒を含み、焼成も良好で堅い。色調は淡白褐色や明褐色を呈している。164は口径13.7cmを測る。外傾する口縁端部は丸くおさめ、内外面はヨコナデ調整をしている。胎土は精選されているが微細な砂粒を含む。焼成はややあまく柔らかい感じがする。色調は灰褐色や淡灰褐色を呈している。165は底部で底径5.4cmを測る。全体にやや磨耗ぎみであるが底部には糸切り痕が残っている。胎土は精選されているが、微細なものや粗い砂粒をやや多く含む。色調の表面は灰褐色をしているが、内面は淡白褐色を呈している。166は底径5.1cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒を少ししか含まず、焼成も良好である。色調は外面が淡灰褐色で内面が灰褐色を呈している。内面の色調は138のものに似ており、そこに黒色の付着物がある。

碗では178は口径13.4cm、底径5.4cm、器高4.7cm、を測る。器肉の厚い土器で口縁部は内湾ぎみに開いている。内外面はヨコナデ調整しているが、口縁端部は丸くおさめている。底部には糸切り痕も残している。胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を含み、焼成もややあまく柔らかい感じの土器となっている。色調は淡灰褐色を呈している。179は底径5.4cmを測る。内外面をヨコナデ調整している。胎土は精選され微細な砂粒を含むが少ない。焼成も良好で堅いものとなっている。色調は淡白褐色を呈している。180は底径5.1cmを測る。底部から体部にかけてはP-15の127や1号溝の134と同じように強いヨコナデ調整で凹ませている。胎土は精選され微細な砂粒を多く含むが、焼成は良好で堅い。色調は淡白灰褐色を呈するが灰色味が強い。181は底径5.4cmを測る。底部が平坦なもので、胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を少量含む。色調は淡白褐色を呈し、焼成はあまい。182は底径5.2cmを測る。底部内面は平坦にヨコナデ調整をしている。胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を少量含む、焼成は良好で堅い。色調は褐色や淡褐色を呈している。183は底径5.3cmを測る。底部の形態や胎土及び焼成は182などと同じであるが、色調が明赤褐色を呈している所に違いがある。184は底径5.8cmを測る。これも胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を少量含んでいる。表面は磨耗しているが色調は淡灰褐色を呈している。185は底径5.3cmを測る。底部が厚く平高台状を呈するもので、胎土には微細なものから粗いものまでの砂粒と赤色土粒を多量に含み、さらに淡褐色土の中に白褐色土が細長く含まれている。186は底径7.0cmを測る。胎土は精選されているが焼成があまいため、全体的に砂っぽい感じを受ける。これに微細な砂粒と粗い赤色土粒を含んでいる。色調は灰褐色や黒灰色を呈している。

有台碗では198は底径6.1cmを測る。高台は糸切り痕を残す底部に貼付している。胎土には微細な砂粒をやや多く含んでいる。色調は灰褐色を呈している。199は底径9.2cmを測る。高台はやや

高い。胎土は精選され微細な砂粒を含む。色調は器面では茶褐色を呈するが、断面では淡白灰褐色している。

有台の黒色土器では200は底径5.6cmを測り、底部には端部を摘み出して低い高台を作り出している。胎土は微細な砂粒を多量に含み、砂っぽいものとなっている。色調は淡白褐色を呈している。201は底径6.6cmを測り、底部には糸切り痕を残している。胎土には微細な砂粒を含み、色調は淡白褐色を呈している。焼成は良好。202は底径6.3cmを測る。203は口径6.0cmを測る。204は口径7.2cmを測る。これらの胎土、焼成、色調は201と同じである。さらにそれは小皿の胎土と類似している。

鉢型土器には205～207のものがある。205は推定口径27.8cmを測り、全体的に器肉の厚い大型品である。その内外面はヨコナデ調整をし、端部も丸くおさめている。胎土は精選され微細な砂粒を含み、色調は淡白褐色から明褐色を呈している。焼成も良好。206は底径7.4cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒を含み、色調は淡白褐色を呈している。焼成は良好。207は底径11.4cmを測る。内面には黒い漆状の付着物がある。胎土、焼成、色調は206と同じである。

8・9区包含層出土遺物

小皿で底部の薄いものに139～147がある。139は口径9cm、底径4.4cm、器高2.5cmを測る。口縁部の内外面はヨコナデ調整しているが直線的に外傾し、端部を先細りし稜を持っている。この土器の胎土は特に精選され微細な砂粒を僅かに含む程度で、焼成も良好で堅い焼きものとなっている。色調は外面が赤褐色で内面は褐色を呈している。140は口径8.8cm、底径3.8cm、器高2.2cmを測る。底部が上げ底となるがほぼ139と同タイプの小皿であるが、全体的に一回り小さくなっている。内外面は磨耗しているため調整は明らかではないが、ヨコナデ調整をしていたのであろう。胎土は精選され微細なものや粗い砂粒と赤色土粒を含む。焼成がややあまいため柔らかい感じのものとなっている。色調は淡白褐色を呈しているが、一部の磨耗していない内面部分では淡赤褐色を呈している。この両者は形態的にほぼ同じであるが、胎土、焼成、色調では大きく異なっている。141は推定口径9.7cm、底径4.9cm、器高2.3cmを測る。内外面はヨコナデ調整しており、底部から外傾し口縁端部を内湾させている。内面の中央部はナデ調整で凹んでおり、そこに穴を開けている。胎土は全体に精選され砂粒を殆ど含まないものであるが、焼成がややあまいため柔らかい感じがする。色調は淡白褐色や淡灰色を呈している。142は口径9cm、底径5.2cm、器高1.7cmを測る。底部は厚くそして上げ底になり、底部にはU字状に沈線が引かれている。口縁部は直線的に外傾するが短く、内外面はヨコナデ調整をしている。胎土には微細な砂粒を含み、焼成も良好で堅いものとなっている。色調は淡褐色で部分的に淡灰褐色を呈している。143は口径10.5cm、底径6.2cm、器高1.9cmを測る。底部は少し上げ底になり、底部の端を摘みだすようにしている。内外面はヨコナデ調整をし、端部を先細りにおさめている。胎土には微細なものや粗い砂粒を含み、焼成は良好で堅く、淡白灰色や淡灰色を呈している。144は口径8.5cm、底径5.3cm、器高2.1cmを測る。全体に薄手の作りの土器で、内外面はヨコナデ調整をしている。底部は糸切り痕をヘラケズリして消している。胎土は精選され微細なものや粗い砂粒と赤色土粒を含んでいる。焼成も良

好で堅い。この土器内面の色調は赤褐色や淡白褐色をしているが、他のものと違い両者の色の部分が入り混じっている。外面は2次的加熱を受けたためか淡桃色に変色している。145は底径5cmを測る。形態的には1号溝出土の132、133のタイプ小皿と同じで、底部のすぐ上をヨコナデ調整で凹ませている。胎土には微細な砂粒を多くやや含み、焼成は良好で堅い。色調は淡白褐色で内面には淡赤褐色の部分が認められる。146と147も同じタイプの小皿と推定される。146は底径3.7cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒を含む。色調が淡白褐色を呈し、焼成が良い割りに柔らかい感じがする。147は底径3.9cmを測る。胎土は146と異なり全体的に微細な砂粒を多量に含んでおり、砂っぽい感じのものとなっている。色調も淡灰褐色と異なっている。149は分布調査のNo.6グリッドから出土したもので、底径4.6cmを測る。137と同じ底部の薄いものである。胎土は精選され微細な砂粒を含んでいる。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好で堅い。

小皿でも底部が厚い平高台状を呈するものに167～175のものがある。167は全形が分かるもので口径9.8cm、底径4.4cm、器高3.6cm、底部厚1.7cmを測る。形態的には1号溝出土の151と同タイプの小皿である。色調も褐色や淡褐色と同じである。胎土は151とほぼ同じものを使用しているが、焼成があまりためか器面が薄く剝離している。それは水に入れると溶けるような胎土である。この胎土の点や151よりも口縁の器肉が厚いことからシャープさに欠けている。また、この土器の底部は表面の土の動きから、口縁部に対して横方向にひねっていることが分かる。168は底径4.2cm、底部厚1.4cmを測る。胎土は167と同じものが使用され、その土の表面に白褐色土が帯状に含まれている。その白灰色土の動きから、底部を横にひねっていることがわかる。色調は167と同じである。169は底径4.6cm、底部厚1.4cmを測る。底部が少し大きい端部が外側へせりだしている。色調は淡褐色や淡白褐色を呈し、胎土は粗い砂粒と微細な赤色土粒を含むが精選されきめ細かいものといえる。焼成は良好で堅い。170は底径4.3cm、底部厚1.5cmを測る。胎土は精選され微細な砂粒と赤色土粒を含み、焼成は良好で堅い。色調は淡白褐色を呈している。底部の糸切り痕上にはヘラ先で直線と楕円形に沈線が引かれている。171は底径3.5cm、底部厚1.7cmを測る。胎土は精選され砂粒を少量しか含まない。色調は淡白褐色と灰褐色を呈している。焼成は良好で堅い。172は底径4.3cm、底部厚1.7cmを測る。胎土は精選され砂粒を少量しか含まない。色調は淡白褐色を呈している。焼成は良好で堅い。173は底径4cm、底部厚1.4cmを測る。胎土、焼成、色調は172と同じである。174は底径4.5cm、底部厚1.3cmを測る。胎土は精選され砂粒や赤色土粒を含み、色調は淡褐色を呈している。焼成も良好で堅い。175は底径4cm、底部厚1.2cmを測る。胎土は微細な砂粒を含むが精選されている。色調は淡白褐色を呈している。焼成は良好で堅い。

皿では176は推定口径16.4cmを測る。胎土には微細な砂粒を含むが精選され、焼成は良好で堅い。色調は外面が暗灰茶褐色を、内面が淡灰褐色を呈している。177は底部で底径4.7cmを測る。これは碗の可能性もある。胎土には微細な砂粒を少量含み、焼成は良好で堅い。色調は淡白褐色や灰褐色を呈している。

碗では187は口径19.2cmを測る。外面はヨコナデ調整をして端部を丸くおさめている。胎土には微細な砂粒を多量に含む。色調は淡褐色や淡白褐色を呈している。焼成も良好で堅い。188は口径

13.3cmを測る。外面はヨコナデ調整をしており、端部を先細りぎみに丸くおさめている。胎土は精選され砂粒を殆ど含まないが、焼成があまり器面も磨耗しているため柔らかい感じのものとなっている。色調は淡灰褐色や暗茶灰色を呈している。189は口径13.2cm、底径5.4cm、器高4.3cmを測る。器面は磨耗しているが、口縁部は底部から直線的に外傾し、内外面をヨコナデ調整している。端部は外方へ延び丸くおさめている。また、底部の糸切り痕の上にはヘラ先でX状に沈線が引かれている。胎土には粗い砂粒を含むが精選されきめの細かいものとなっている。焼成もあまいため柔らかい感じを受ける。色調は淡灰褐色や淡白褐色を呈している。190は底径6.3cmを測る。内面はヘラケズリのようにナデ調整している。胎土には微細なものや粗い砂粒と赤色土粒を含んでいる。色調は外面が淡白褐色を、内面が暗灰褐色を呈している。191は底径5.9cmを測る。胎土は精選されきめの細かい土で赤色土粒を多く含むが、砂粒は僅かしか含まない。焼成はあまい。色調は淡灰褐色を呈している。192は底径7.2cmを測る。色調は暗灰色を呈する。胎土は精選されきめ細かく粗い砂粒を殆ど含まない。焼成はややあまい。193は底径6.7cmを測る。内面は強くヨコナデ調整をしている。胎土、焼成は小皿140と同じで赤色土粒を多く含んでいる。色調は灰褐色を呈している。194は底径6.2cmを測る。これも胎土は精選されており微細な砂粒や赤色土粒を含んでいる。色調は淡赤褐色を呈している。焼成は良好で堅い。195は底径5.8cmを測る。胎土には微細な砂粒を多量に含むが良好なものとなっている。色調は灰色や暗灰褐色を呈し、焼成も良好でどっしりとしたものとなっている。196は底径7.5cm、底部も厚さ2cmを測る。胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。色調は淡白褐色を呈する。197は底径7cm、底部厚は2.8cmを測る。胎土は精選され砂粒の量は少ない。色調では灰色から暗灰色を呈している。焼成があまり柔らかい感じのものとなっている。

有台碗では208がある。底径6.1cmを測り、高台も高いものとなっている。胎土は精選され微細なものから粗い砂粒を少量含むが、赤色土粒は含まない。また、胎土中に白褐色土を細く帯状に含んでいる。色調は1号溝出土の小皿151や包含層出土の小皿167と同じ褐色や淡褐色を呈している。焼成は良好で堅いが、器面が薄く剝離している。

有台の黒色土器には209～213のものがある。209は口径14.3cmを測る。内外面はヨコナデ調整をしている。胎土には微細な砂粒を多く含み、色調は淡白灰色を呈している。焼成は良好で堅い。210は底径5.3cmを測る。底部は丁寧にナデ調整している。胎土には微細な砂粒を多量に含み、色調は淡白灰色を呈している。焼成は良好で堅い。211は底径5.5cmを測る。底部の調整は磨耗のため不明である。胎土には微細なものや粗い砂粒を含むが、色調は淡白褐色を呈している。212は高台部を欠いているが、底部は他のものよりも少し厚く、指頭による押圧を加えている。胎土は精選され微細な砂粒を僅かに含む程度で、色調も淡褐色を呈している。213は底径5.7cmを測る。底部には粘土紐の接合痕の凹が残っている。胎土には微細な砂粒を多量に含み、色調は淡白褐色を呈している。焼成は良好で堅い。216は排土中からのもので、底径6.4cmを測る。底部は棒状のものでナデつけており、その後高台の縁を強く指ナデ調整している。胎土は精選され微細な砂粒を少量含んでいる。色調は灰褐色を呈し、焼成も良好である。

鉢では214は口径22.6cmを測る。椀型の形態をする土器で、内湾ぎみに開く口縁部は器肉が厚く、内外面をヨコナデ調整して口縁端部も丸くおさめている。胎土には微細な砂粒を多量に含み、色調は灰褐色や淡白灰褐色を呈している。焼成は良好で堅い。215は底径11.7cmを測る。内外面はヨコナデ調整をし、底部には糸切り痕を残している。胎土は精選され微細な砂粒を含み、色調は淡灰褐色を呈している。焼成は良好で堅い。

土師質土器は2点出土している。148は口径9cmを測る。内外面はヨコナデ調整をしているが、体部下端に明瞭な稜を持っておらず、器壁の厚さも均等ではない。口縁端部には等間隔に黒い油煙が付着している。胎土は精選されて良好で、焼成も良好で堅い。色調は淡灰褐色を呈している。150は口径6.3cmを測る。内外面はヨコナデ調整をし、内面は静止のナデを加えている。胎土は精選されて良好で、焼成も良好で堅い。色調は淡白褐色を呈している。

須恵器は数が少ないが、9～7区の包含層や1号溝から出土している。その器種は殆ど甕である。

1号溝出土遺物

245は甕の胴上部の破片で、外面は平行タタキの上をハケ調整している。内面は同心円タタキを施している。色調は外面が明灰色、内面は灰色で、断面でも外面側の明灰色と内面側の灰色に挟まれ、中が灰白色を呈し、胎土には石英等の砂粒と黒色の砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅い。246、249も245と同一個体のものと推定される。外面の調整は245と同じであるが、外面は自然釉が降灰して光沢を持ち暗灰色を呈している。断面の状態も同じで中が灰白色を呈し、黒い砂粒を含んでいる。247は外面は自然釉で暗灰色をし、内面は灰白色をしている。内面は使用により滑らかになっている。胎土も石英等の砂粒と黒色の砂粒を多く含む。断面では外面側が淡青灰色をする以外は明灰色を呈している。248は内外面に緑灰色の自然釉が降灰している。断面での色調は内外面側が明灰色をし、中は灰色と暗灰色及び白灰色の不規則な稿状となっている。

包含層出土遺物

252は器肉が厚い。外面には平行タタキをし、内面には同心円タタキを施している。色調は外面が暗灰色で光沢がある。内面も暗灰色で器面が点々と剝離し、一部に黒灰色の自然釉が降灰している。断面では内外面側が僅かに灰色となっているが、殆どが白灰褐色となっている。胎土には微細な灰色や白色及び黒色の砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅い。250も252と同じで器肉の厚さと外面に光沢がない点に違いがあるが、同一個体の可能性が高い。断面での色調と胎土の状態も同じで中央部が白灰褐色を呈している。251は外面に緑色の自然釉が降灰している。胎土には黒色の砂粒を含み、色調は灰色を呈している。252は内外面は暗灰色で、外面には光沢がある。胎土には石英粒を多く含んでいる。259は排土中からのもので、口径12cmを測る。天井部の2/3はヘラケズリ調整をしている。色調は灰色を呈している。

中世陶器は少量包含層から出土している。254は加賀で外面に刻印を加えている。色調は外面が暗灰褐色、内面が灰褐色を呈している。断面では淡灰色を呈している。255は外面に緑黄色の自然釉が降灰している。内面は暗茶灰色をし、断面では灰色を呈している。256は珠洲の壺で、外面に

は平行タタキを加えている。色調は淡灰色を呈している。260は排土中からのものであるが、珠洲の壺で外面には平行タタキ調整をし、内面には丸い押圧がある。257、258、261は珠洲の播鉢で、261は内面におろし目と口唇部に波状文を持っている。

手づくね土器は2点出土している。

白磁の碗、皿類も1号溝と包含層出土のものに分けて説明したい。

1号溝出土遺物

217は白磁碗Ⅱ類にあたる。口径15.6cmを測る。口縁部には小さな玉縁を持っている。胎土は良好で白灰色を呈する。釉色は薄い緑色で全体的に薄くかかり、釉全体には細かい貫入が入っている。218と219も白磁碗Ⅱ類の口縁部である。218は胎土は良好で白灰色を呈する。釉色はやや緑がかかり、薄く施している。219は胎土は灰白色でやや粗い。釉色はやや緑がかかり、薄く施している。ただ、口縁部の玉縁では青味がかっている。釉全体に細かい貫入が入っている。220は白磁の皿で胎土は灰白色を呈する。釉色はにぶい緑灰色で、薄く施している。釉全体に細かい貫入が入っている。221は灰釉の碗で、口径18cmを測る。胎土は良好で灰白色を呈する。内外面はヨコナデ調整をしている。釉は外面にはかかっておらず、内面に点々と残るだけである。

7～9区包含層出土遺物

222～226は白磁碗Ⅳ類の口縁部と底部である。222は口径15.3cmを測る。胎土は白灰色で黒い細粒を含む。釉色はやや緑色がかっているが、2次加熱による気泡が器面の所々にみられる。223は口径14.9cmを測る。玉縁も222より大きくなっている。胎土は灰白色で黒い細粒を含み、釉色はやや緑色がかっており、薄く施している。224は底径6.3cmを測る。胎土は粗くて灰白色を呈している。内面の見込み部分には沈線状の段を持ち、底部の高台も厚く、削り出しも僅かである。釉色はやや緑色がかっており、底部下端には施されていない。この底部は2次的加熱を受けており外面に気泡が認められる。225は底部の高台部分が欠けている。胎土は粗く灰白色を呈している。内面の見込み部分に沈線状の段を持っている。釉色はやや緑色がかっており、体部下端と底部以外に薄く施されている。226は底径5.4cmを測る。胎土は灰白色を呈するが、高台は前のものよりは高く削り出している。この土器は2次的加熱を受けており、胎土の色調が淡黄色色に変色している。釉は体部下端や底部には施されていないが、2次的加熱で淡緑色や淡黄白色に変色しており、細かい貫入が入っている。227、228は白磁碗Ⅴ類の口縁部と底部である。227は胎土は灰白色で粗い。内外面にヘラと櫛により文様を描いている。釉色はやや緑色がかかり、内外面に施されている。228は底径6.2cmを測る。胎土は灰白色でやや粗い。釉色はやや緑色がかかり、内面見込み部分と高台部分まで施されている。高台は高く削り出しており、高台内面には黒く墨が残っている。

皿には229～236のものがある。229、230は白磁皿Ⅳ類の口縁部である。229は口縁部を外反させ、端部を丸くおさめている。胎土は灰白色で、釉色は緑色がかかり、薄く施している。釉全体には細かい貫入が入っている。230も同じタイプのもので、胎土は灰白色を呈している。釉色は僅かに緑色がかかり、薄く施している。釉全体には細かい貫入が入っている。231は皿の口縁部である。胎土は白灰色で、釉色はやや緑色がかかり、薄く施している。釉全体には細かい貫入が入っている。

232、233は白磁皿VI類である。232は底径3.3cmを測る。底部は上げ底状にし、内面見込み部分に段を持っている。胎土は灰白色で灰色味が強い。釉は極めて薄く、その色調も薄い緑色がかっており、内面の見込み部分と体部下端まで施されている。釉調は他のもののような光沢を発してはいないし、貫入も認められない。233は底径3cmを測る。底部と体部の境は削り出しで区別し、底部もやや上げ底状にしている。釉色は薄い緑色がかり、内面の見込み部分と体部下端まで施されている。釉全体には細かい貫入が入っている。234、236は白磁皿V類である。234は底径4cmを測る。底部は上げ底ぎみになり、体部も内湾ぎみに立ち上がり、内面見込み部分に段を持っている。胎土は粗く、白灰色を呈している。釉色は緑色がかり、体部下端の一部と底部以外は施されている。釉全体には細かい貫入が入っている。底部には墨書痕が残っているが、判読でない。236は底径4.2cmを測る。底部は上げ底ぎみとなり、内面の見込み部分には段を持っている。胎土は粗く、白灰色を呈する。釉色はやや緑色がかり、体部下端の一部と底部以外に施している。釉全体には細かい貫入が入っている。235は平高台の皿で、底径3.2cmを測る。底部は削り出しで形成し、上げ底になると推定される。内面の見込み部分には段を持っている。胎土は白灰色で粗く、釉色はやや緑色がかり、体部下端と底部以外の部分に施している。釉全体には細かい貫入が入っている。

分布調査出土白磁

分布調査で出土した白磁もある。241はNo15グリッドから出土し、白磁碗IV類の口縁部である。胎土は白灰色で、釉色はやや緑色がかり、粗い貫入が入っている。242はNo.6グリッドから出土し、白磁碗IV類の底部で、底径5.4cmを測る。胎土は粗く灰白色を呈する。釉色はやや黄色味がかり、釉は内面に施されている。243、244はNo20グリッドから出土している。243は白磁碗IV類の口縁部で、口径15cmを測る。胎土は粗く、黒い細粒を含んでいる。釉色はやや緑色がかり、内外面に施されている。244は焼台で径5.1cm、厚さ1.2cmを測る。断面形は台形で、4箇所小さな円錐形をしたものを貼付しているが、この頂部は剥離している。胎土には石英粒を多量に含み、焼成も良好で堅い。色調は褐色や淡褐色を呈している。

包含層出土国産陶磁器

瀬戸・美濃系陶器には蓋237と天目茶碗240がある。蓋の237はつまみ部径3cm、高さ0.8cmを測る。胎土は白灰色で、釉色は薄い緑色がかり、細かい貫入が入っている。天目茶碗の240は口径12.3cmを測る。内外面には鉄釉を施している。

染付皿に239がある。底径5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、釉色はやや青味がかったもので、畳付部以外に施されている。内面には濃淡の呉須の滴が散らばっている。

杯には238がある。口径8.7cmを測る。外反する口縁端部を丸くおさめている。胎土は白灰色で粗く、釉はやや青みがかった白色で透明感があるが、粗い貫入が入っている。器面には2次的加熱による気泡が所々にみられる。

調査区出土石器

石器は2点ある。264は長さ18.8cm、幅16cm、厚さ4.1cmを測る。扁平な礫の表面には細長い凹部が5箇所ある。周りには敲打痕がある。石質は凝灰岩系のものである。265は1号溝から出土し

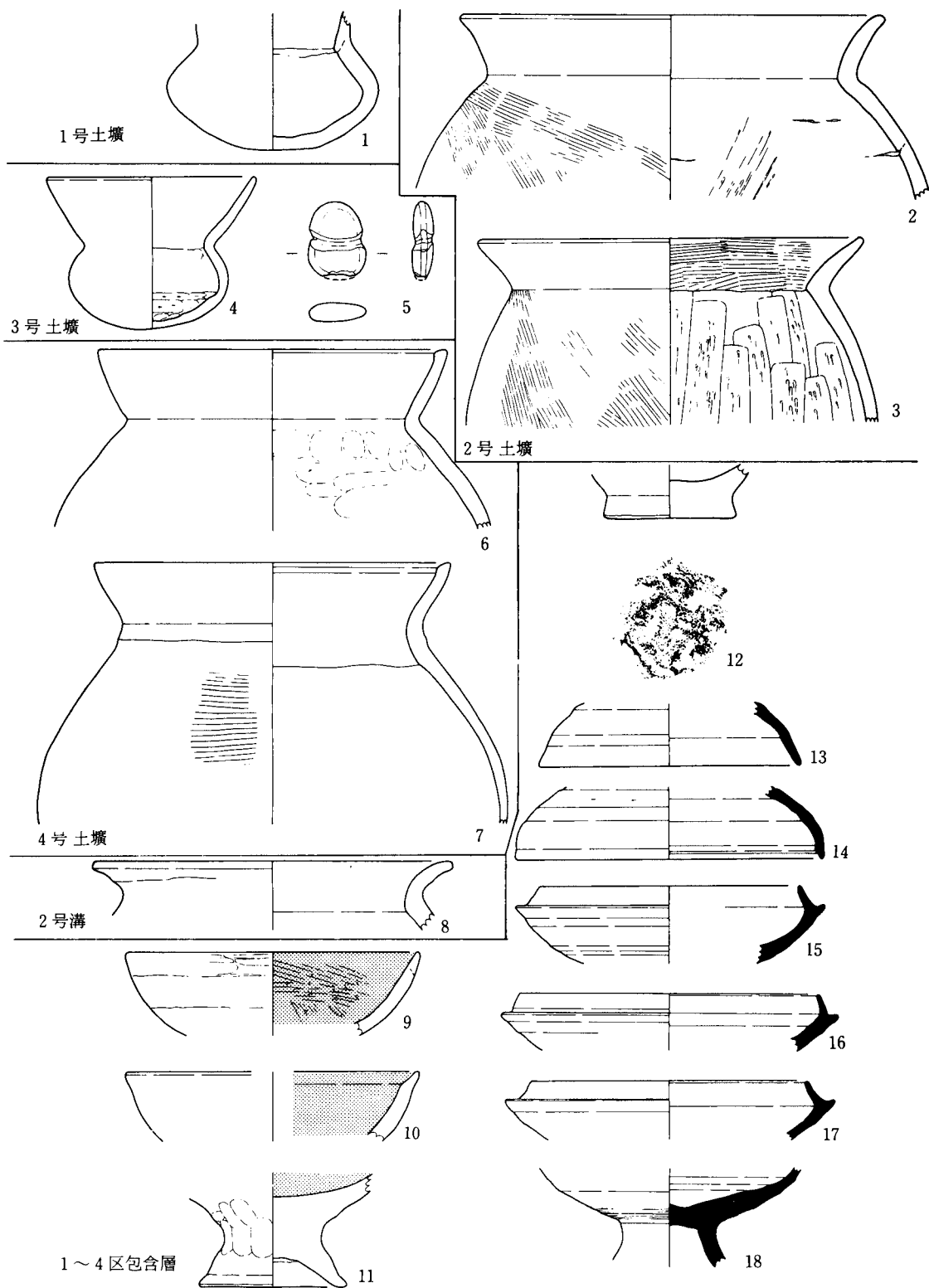
ている。扁平で細長い礫で、長さ11.4cm、幅5cm、厚さ2.3cmを測る。両面は磨かれており、周りには敲打痕がある。礫の左側で表面の剝離している部分は、2次的加熱を受けて黒色になっている。

調査区出土土製品

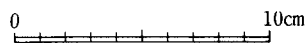
土製品には266のフイゴの羽口がある。これは1号溝から出土している。第3地点でこの他には包含層から鉄滓が数点出土している。

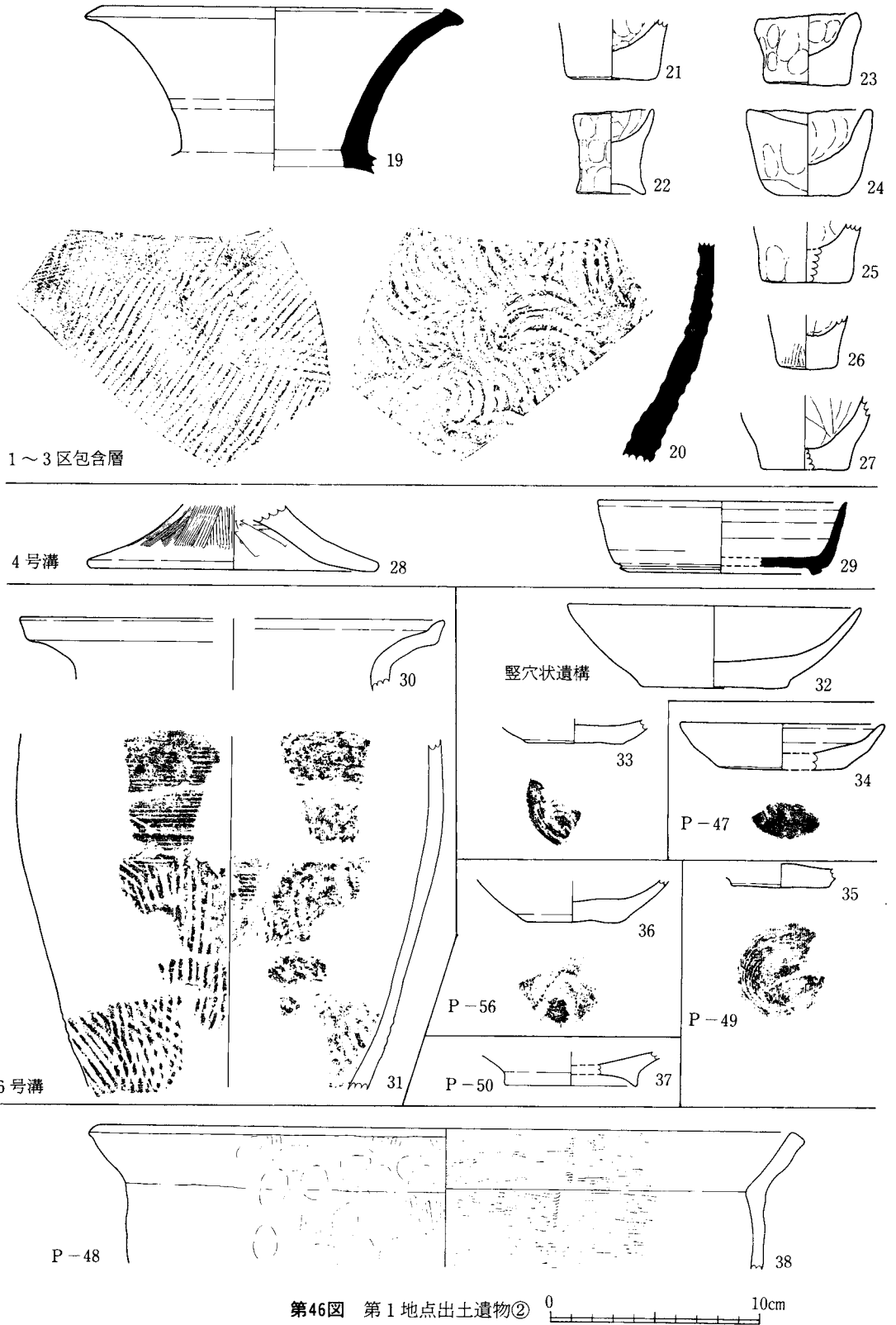
分布調査出土遺物

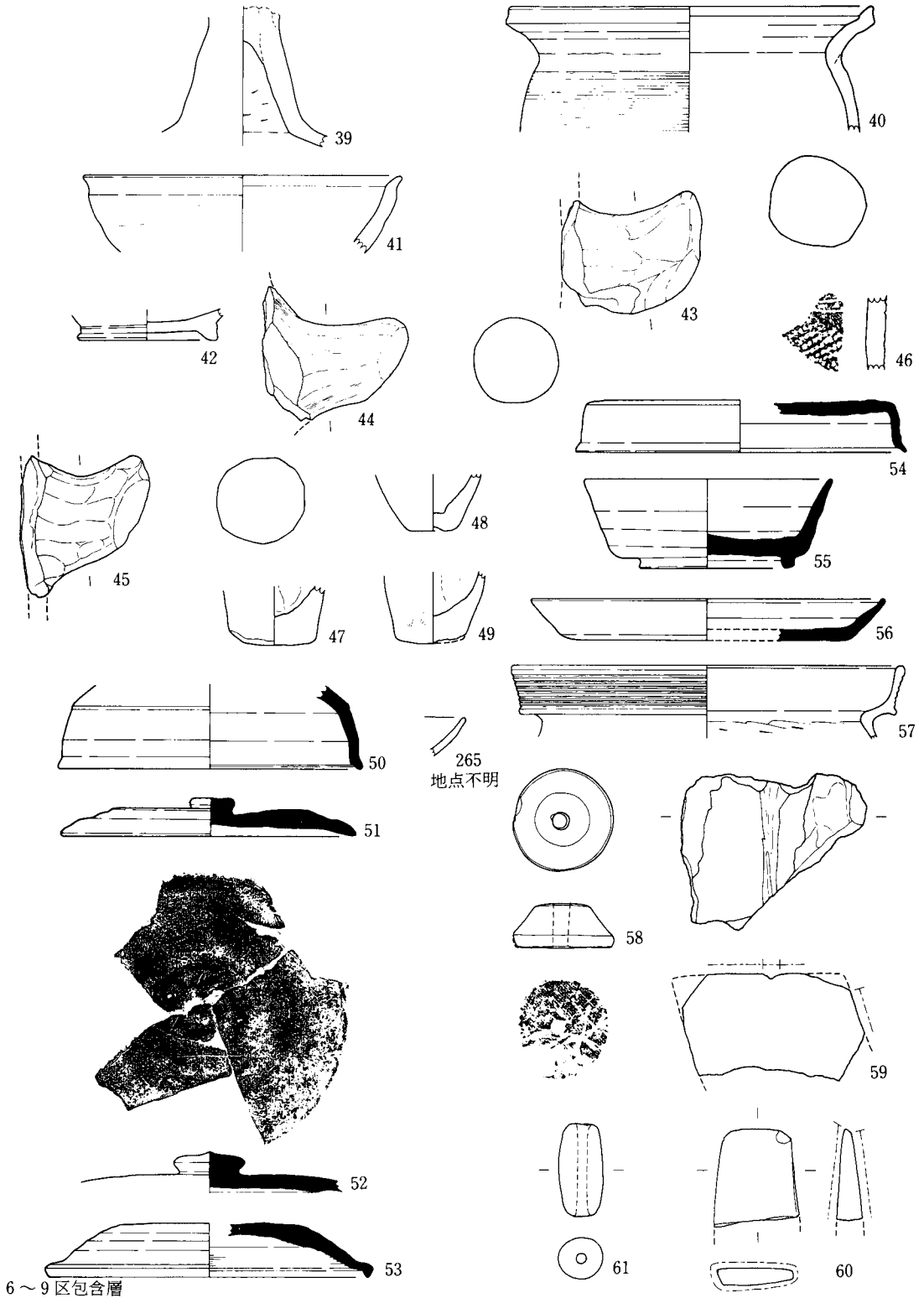
No8グリッドから267の器台が出土している。口径20cm、器高15.7cm、脚径14.4cmを測る。胎土には微細から粗い砂粒を含む。焼成はややあまい。色調は内外面共に淡白褐色を呈している。外面はやや磨耗ぎみであるが、受け部は少し膨らみぎみに開き、端部が外反している。ハケ調整やヘラミガキを施している。脚部は外面はハケ調整をし、端部はヨコナデ調整をしている。内面は磨耗のため調整は明らかではない。No10グリッドからは268の打製石斧が出土した。長さ16.8cm、幅9.7cm、厚さ4cmを測る。撥型のもので、刃部のスクリントーン部は使用により磨耗している。側縁部の破線部分は敲打して刃潰ししている。



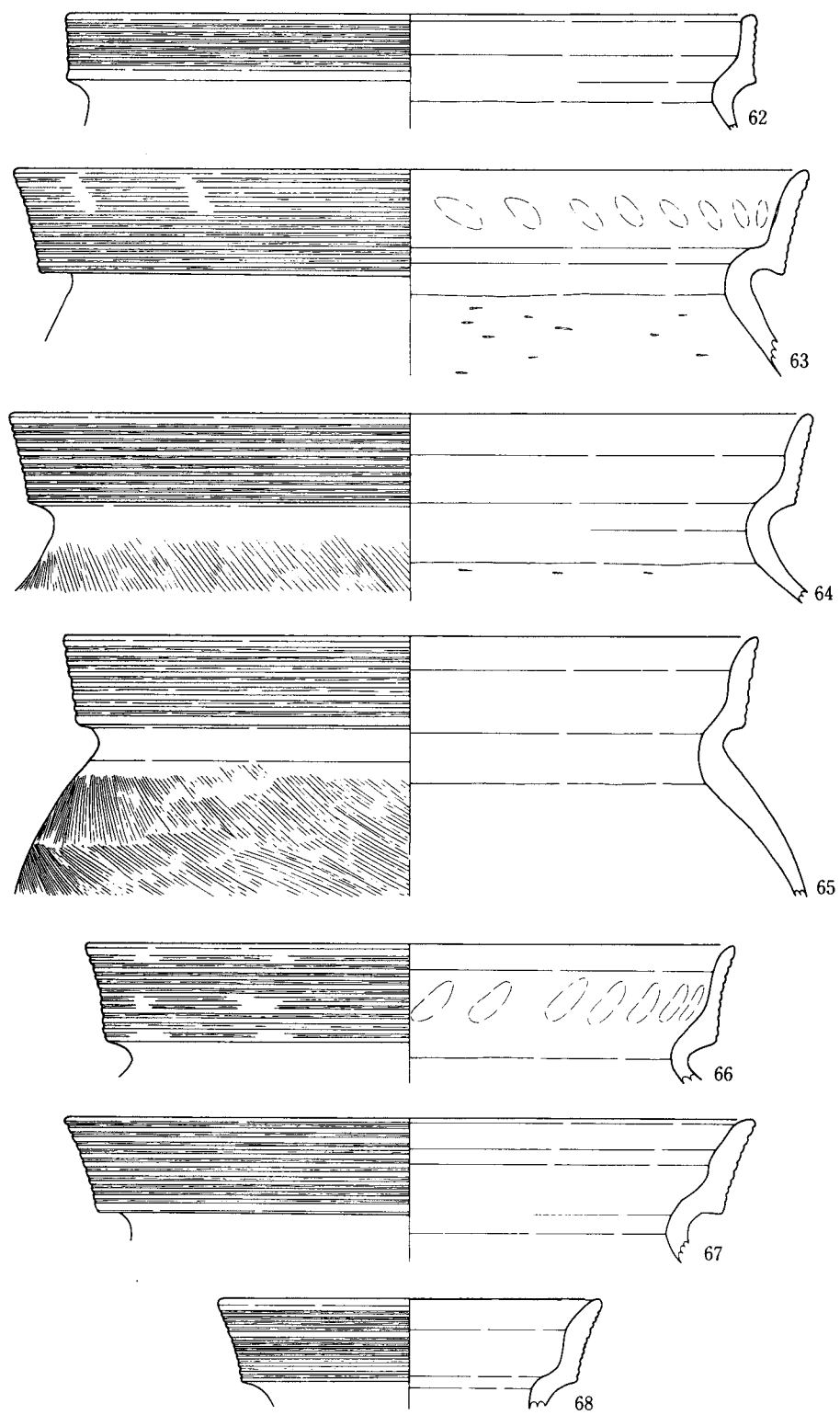
第45図 第1地点出土遺物①





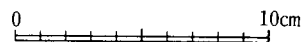


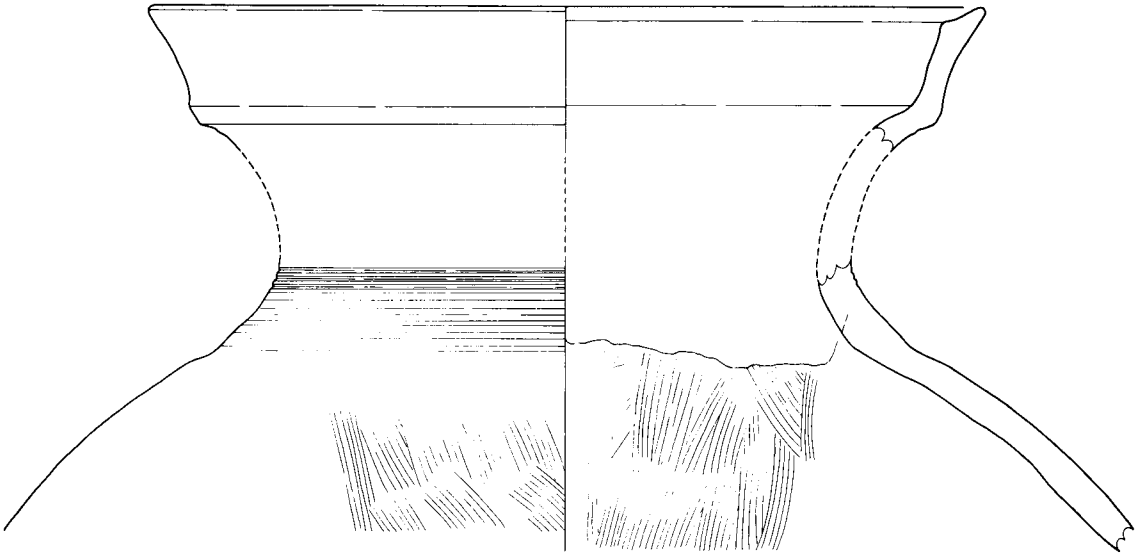
第47図 第1地点出土遺物③



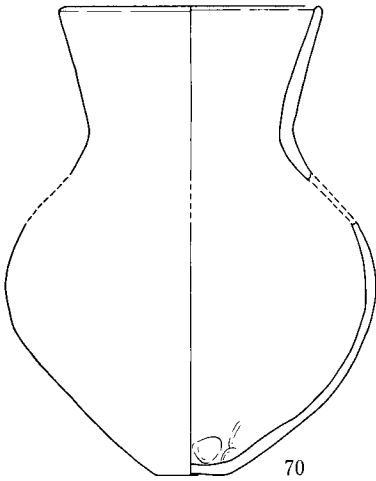
6・7区落ち込み覆土

第48図 第1地点出土遺物④

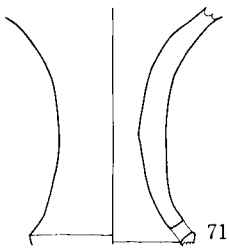




69

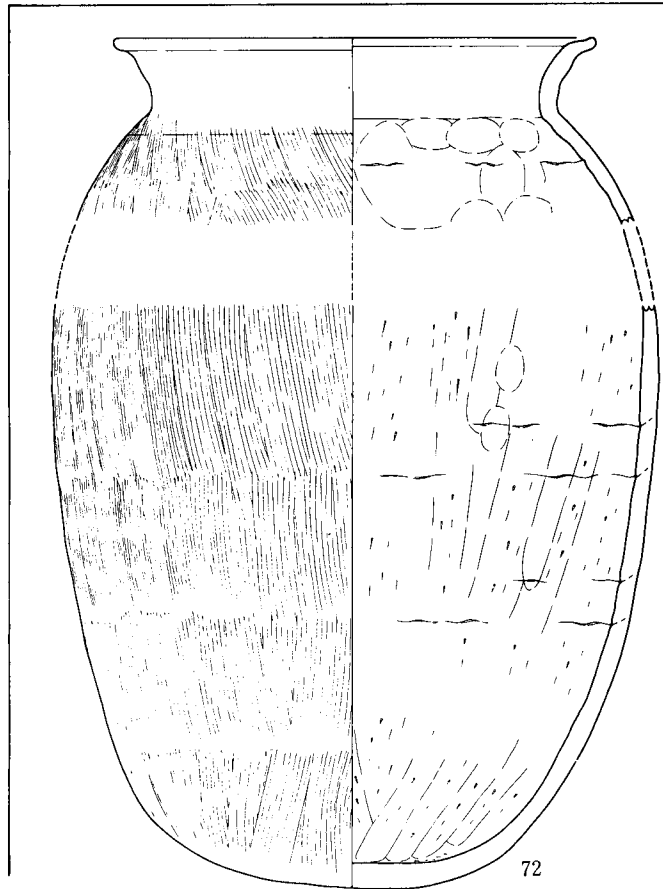


70



71

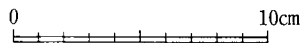
6・7区落ち込み覆土

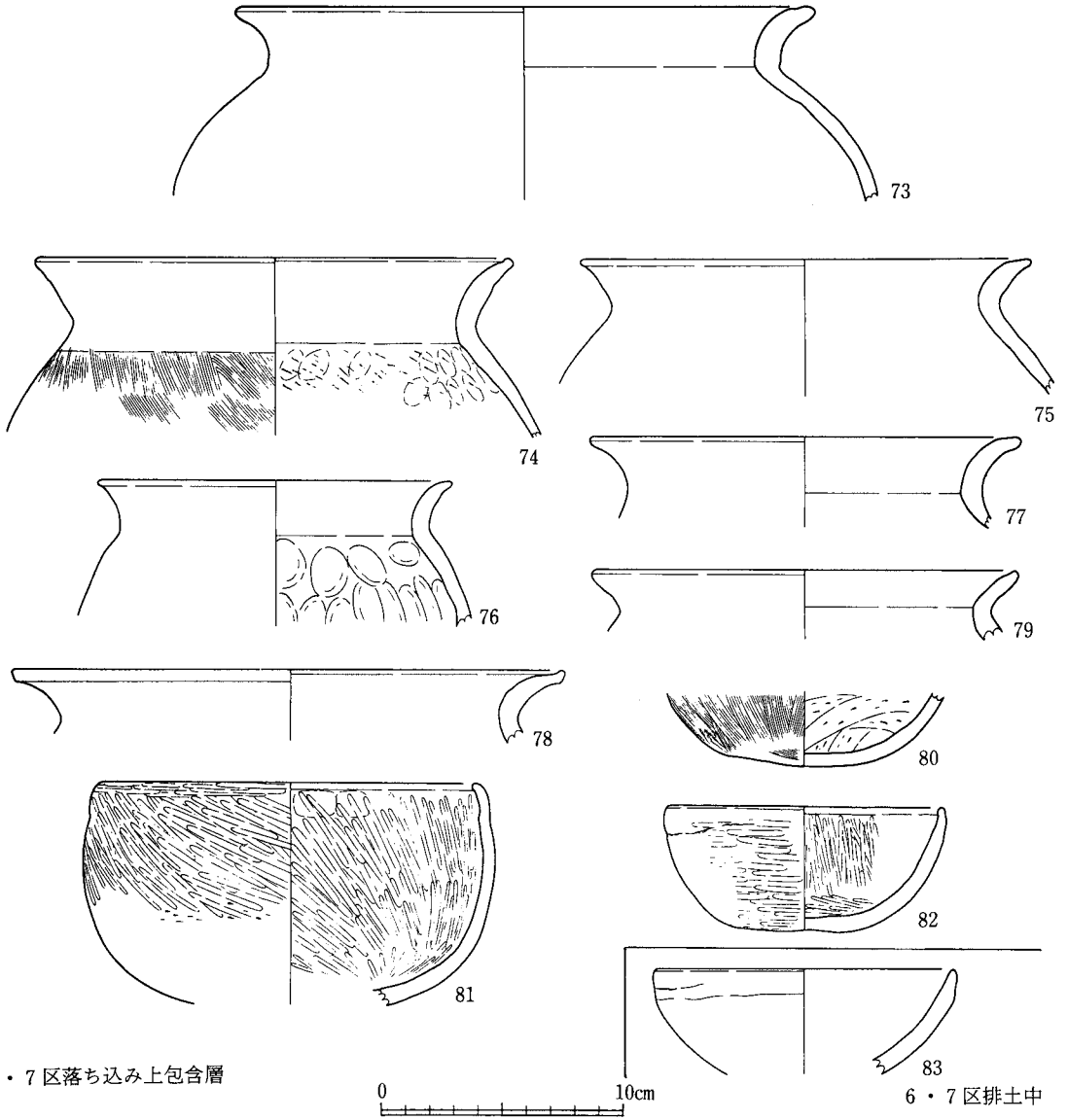


72

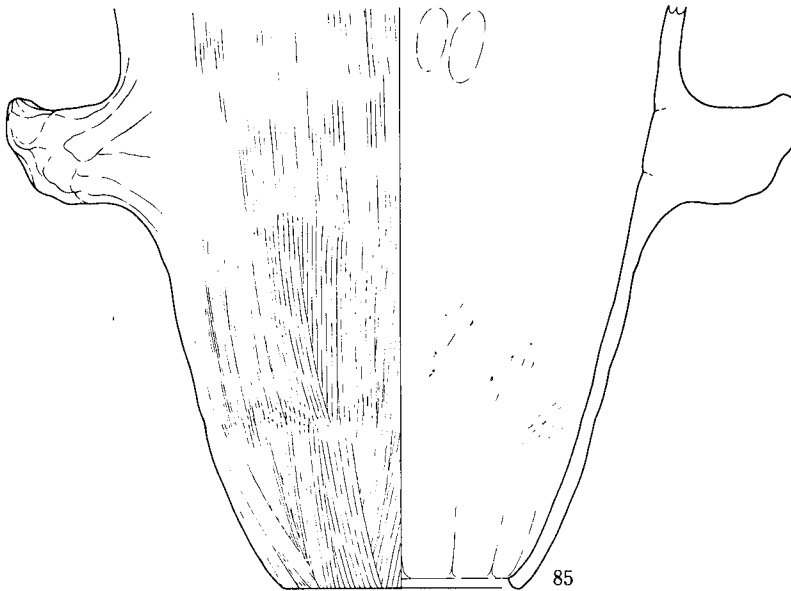
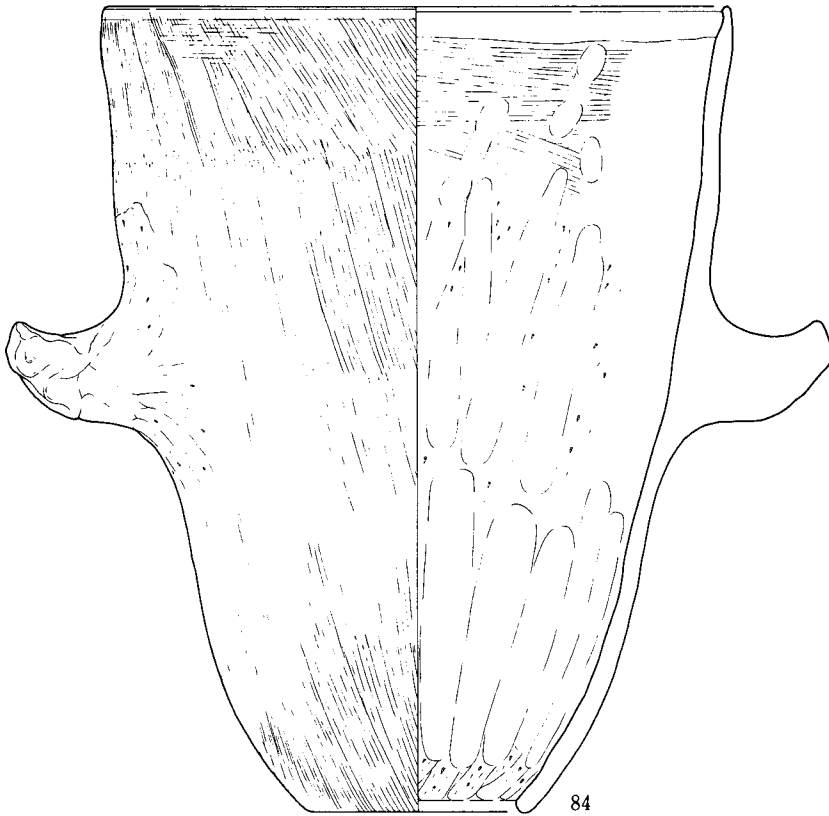
6・7区落ち込み上包含層 I

第49図 第1地点出土遺物⑤



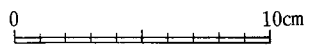


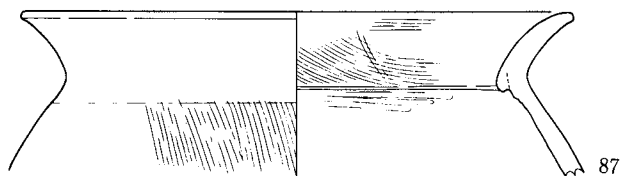
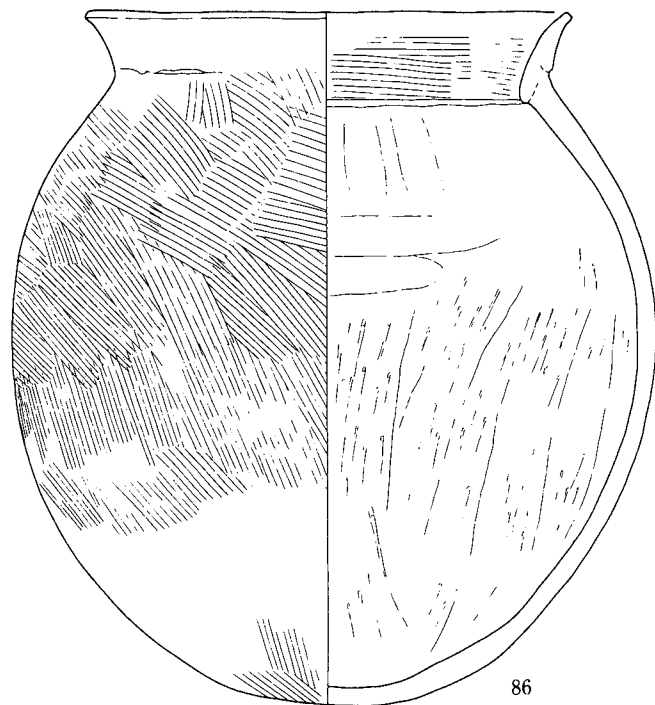
第50図 第1地点出土遺物⑥



6・7区落ち込み上包含層

第51図 第1地点出土遺物⑦

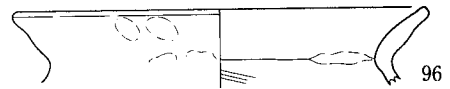
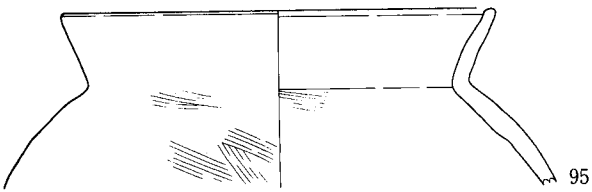
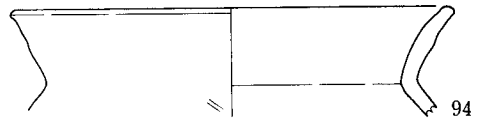
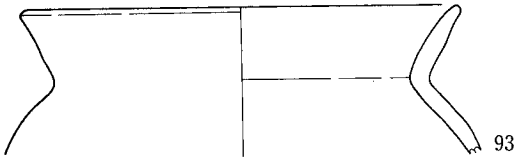
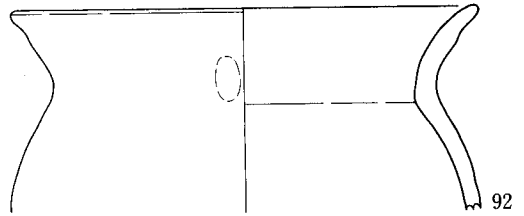
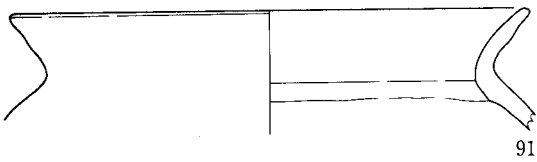
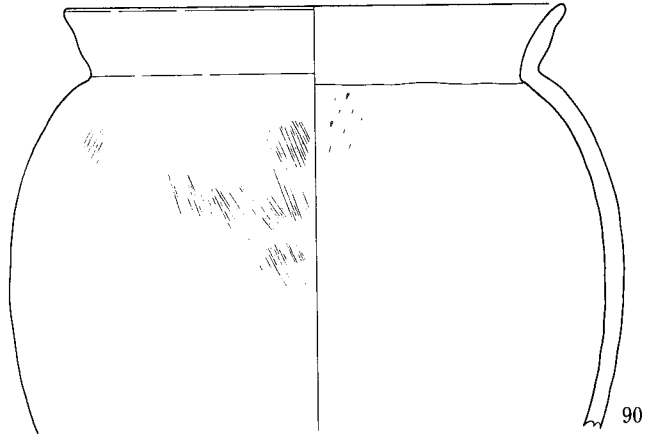
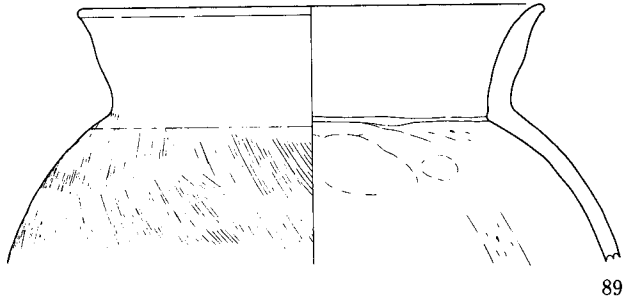




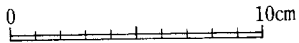
9区下層 (整地層)

第52図 第1地点出土遺物⑧

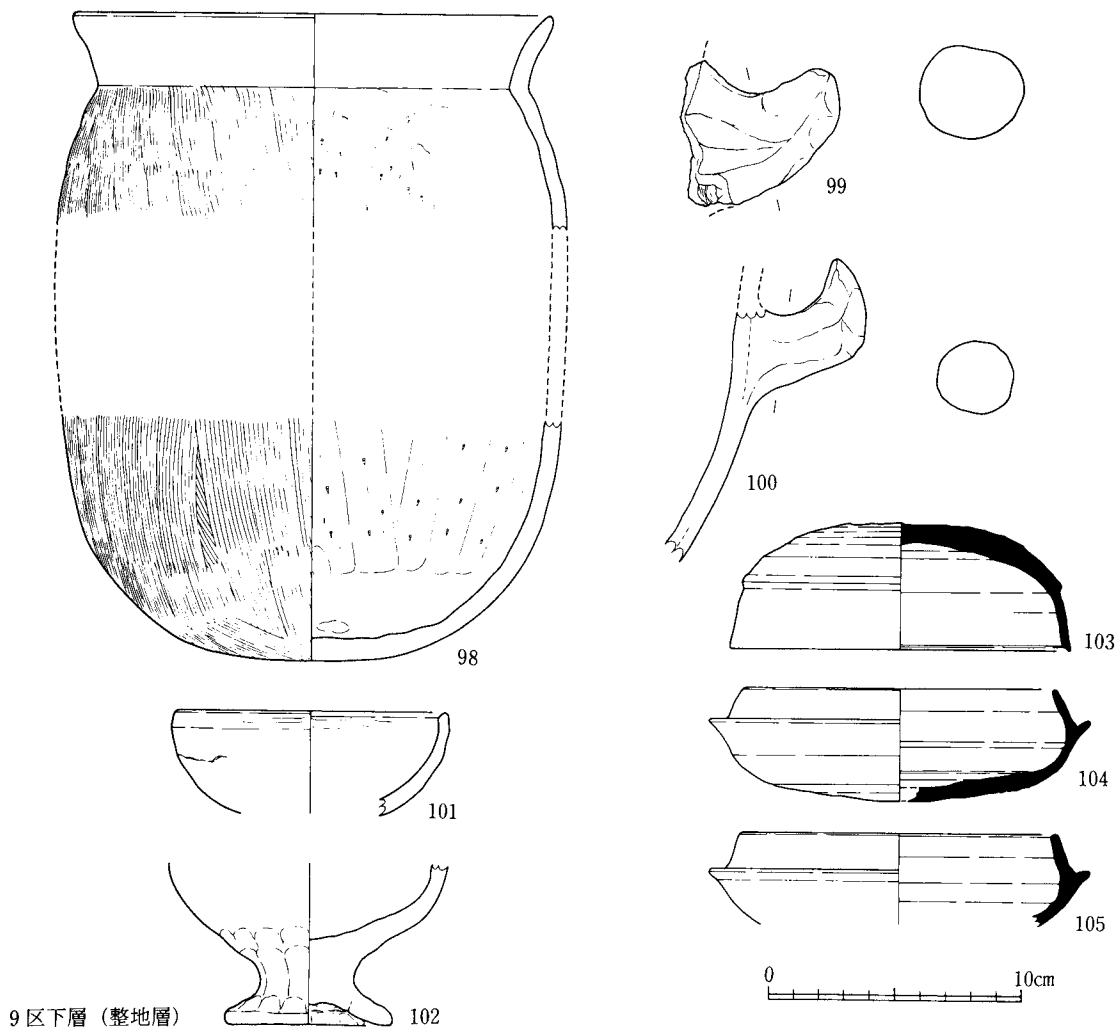
0 10cm



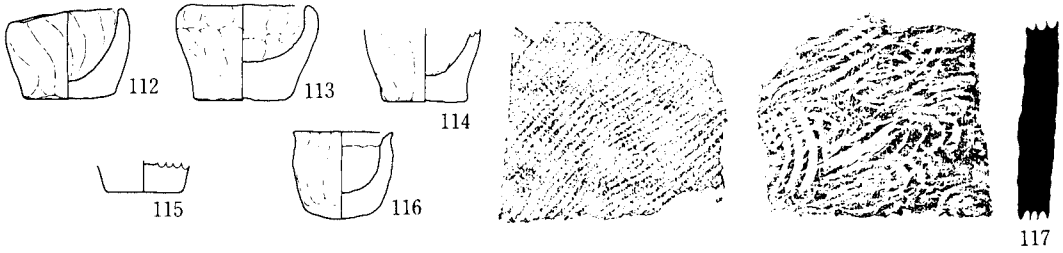
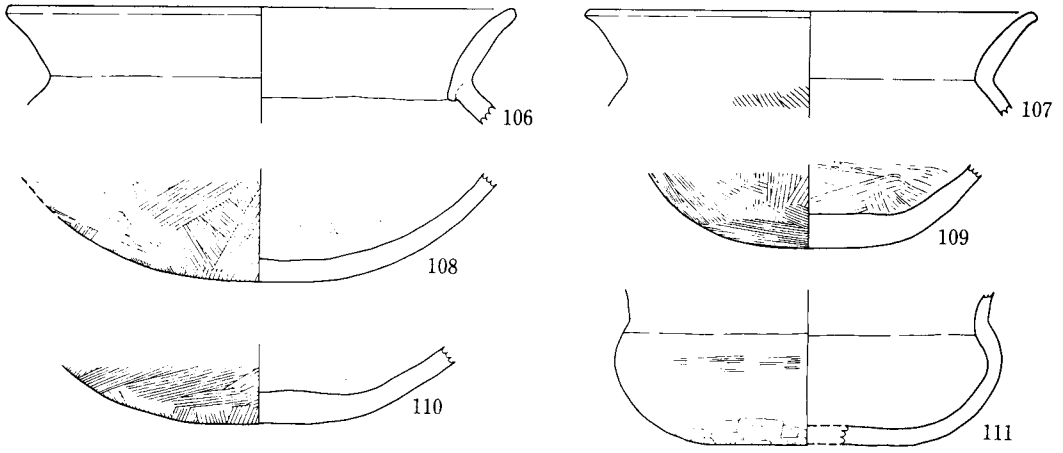
9区下層(整地層)



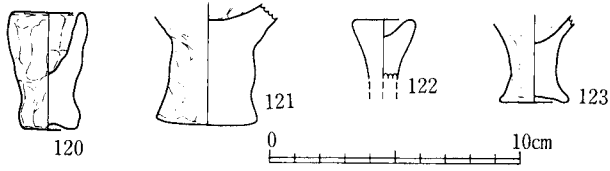
第53図 第1地点出土遺物⑨



第54図 第1地点出土遺物⑩

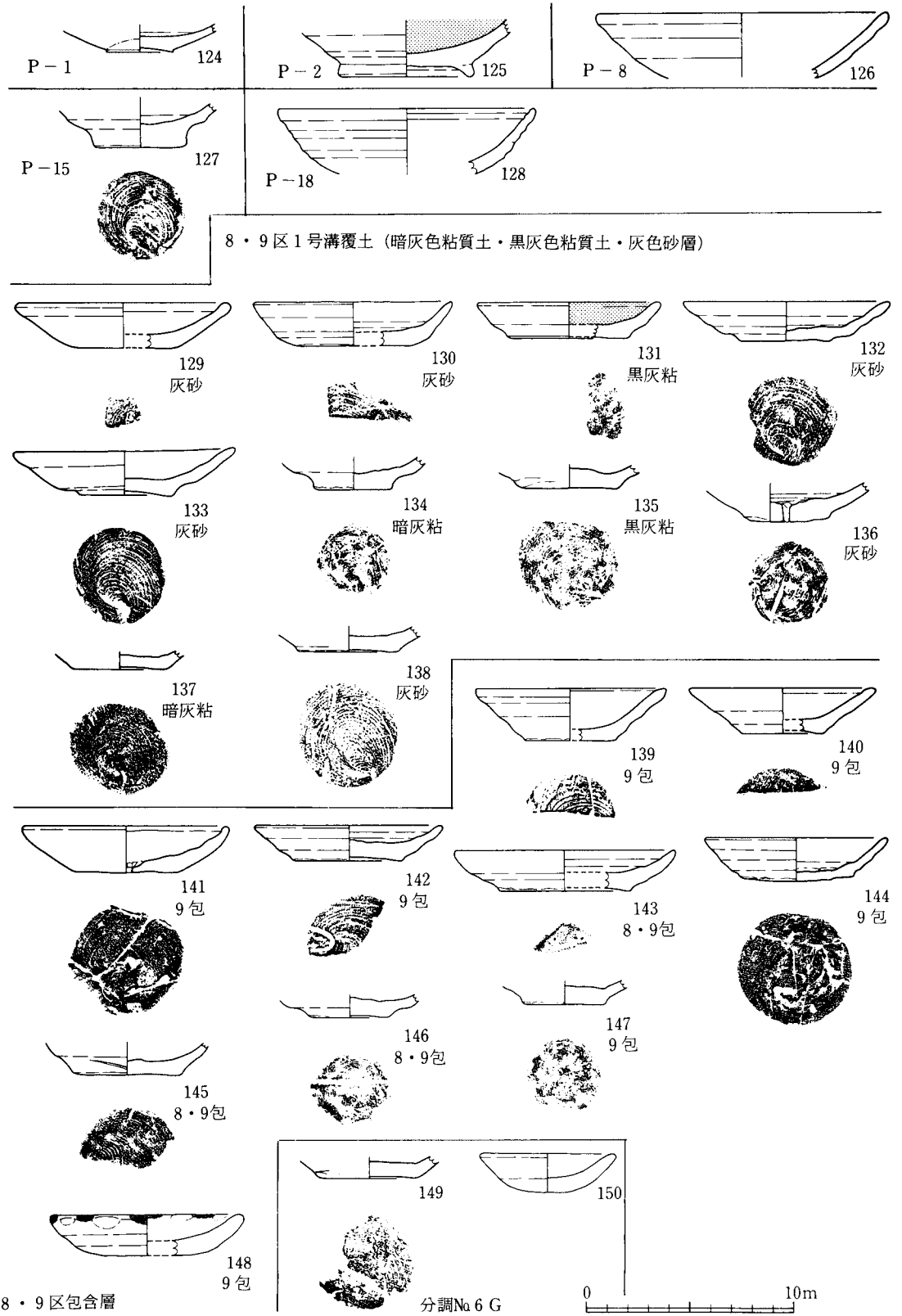


第2地点包含層

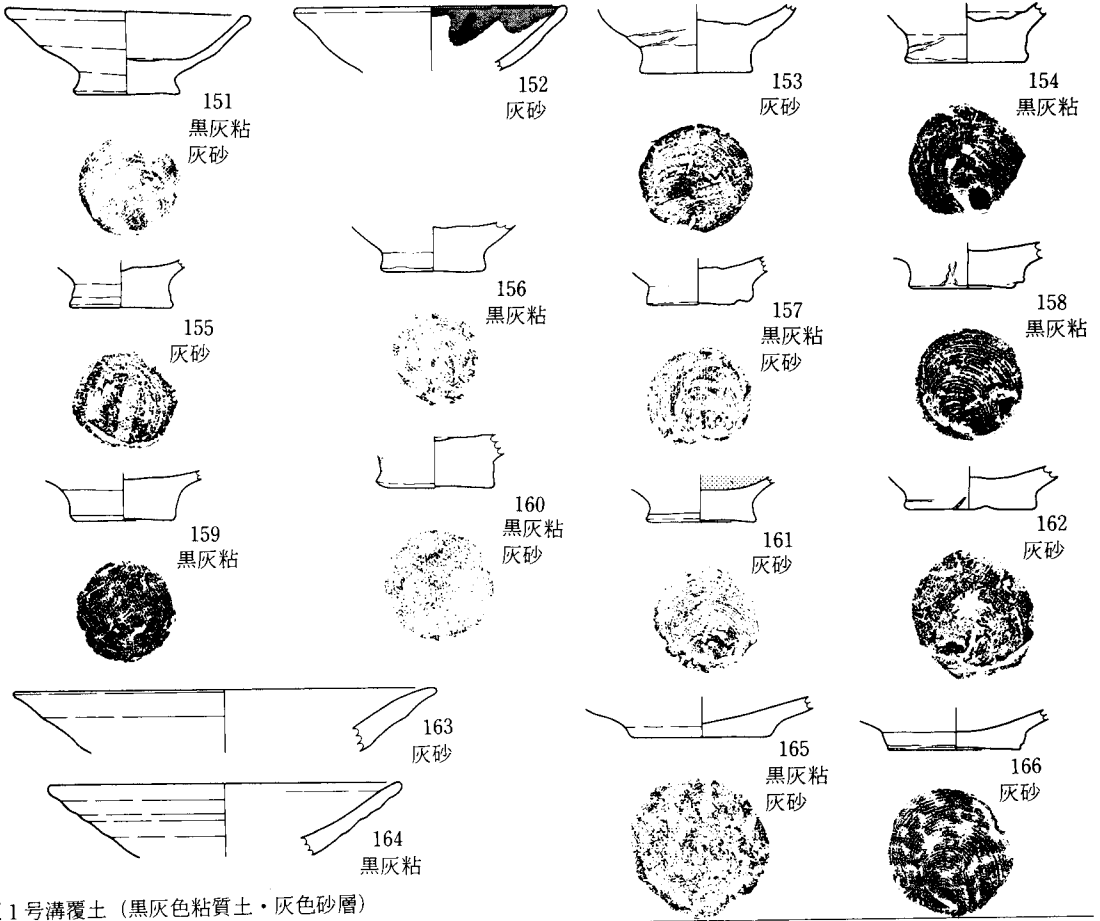


第1次調査包含層

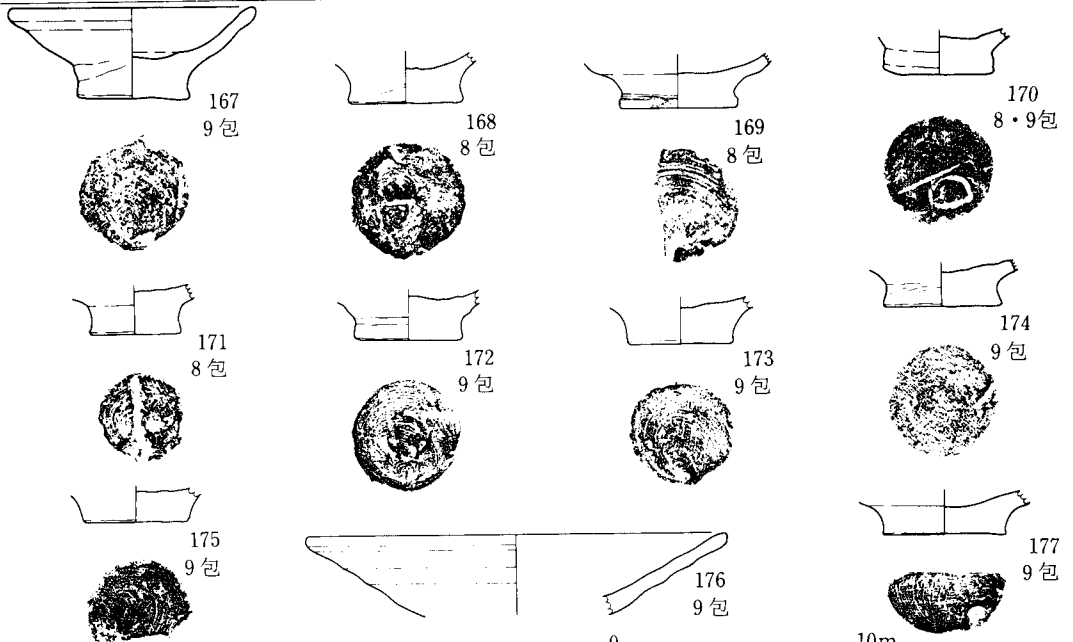
第55図 第2地点出土遺物①



第56図 第3地点出土遺物①



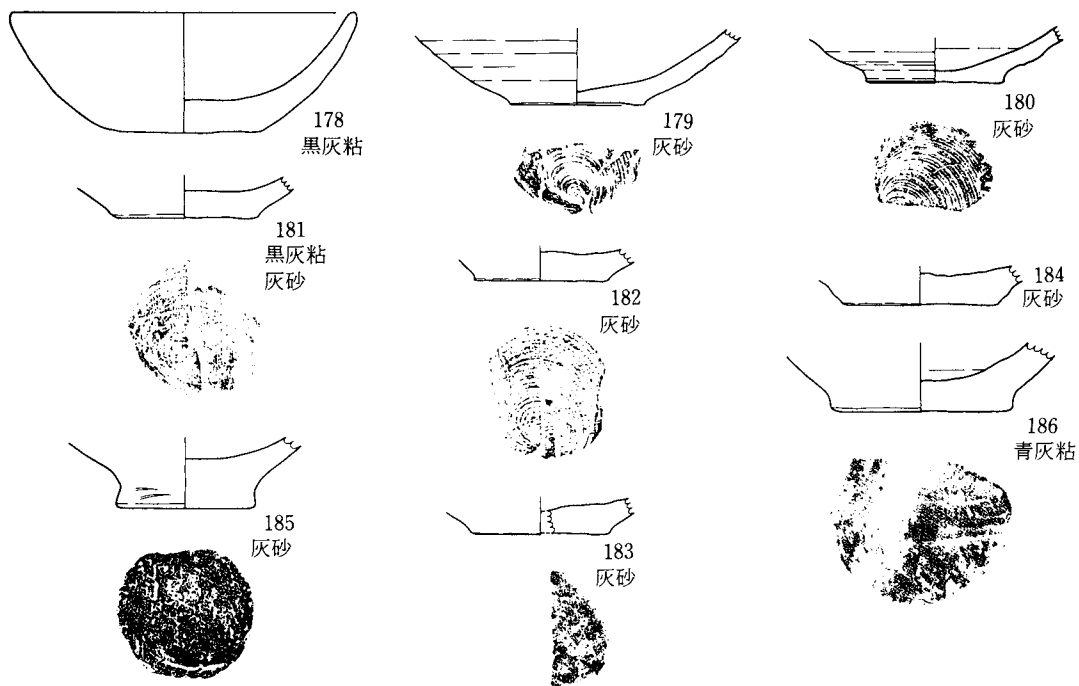
8・9区1号溝覆土（黒灰色粘質土・灰色砂層）



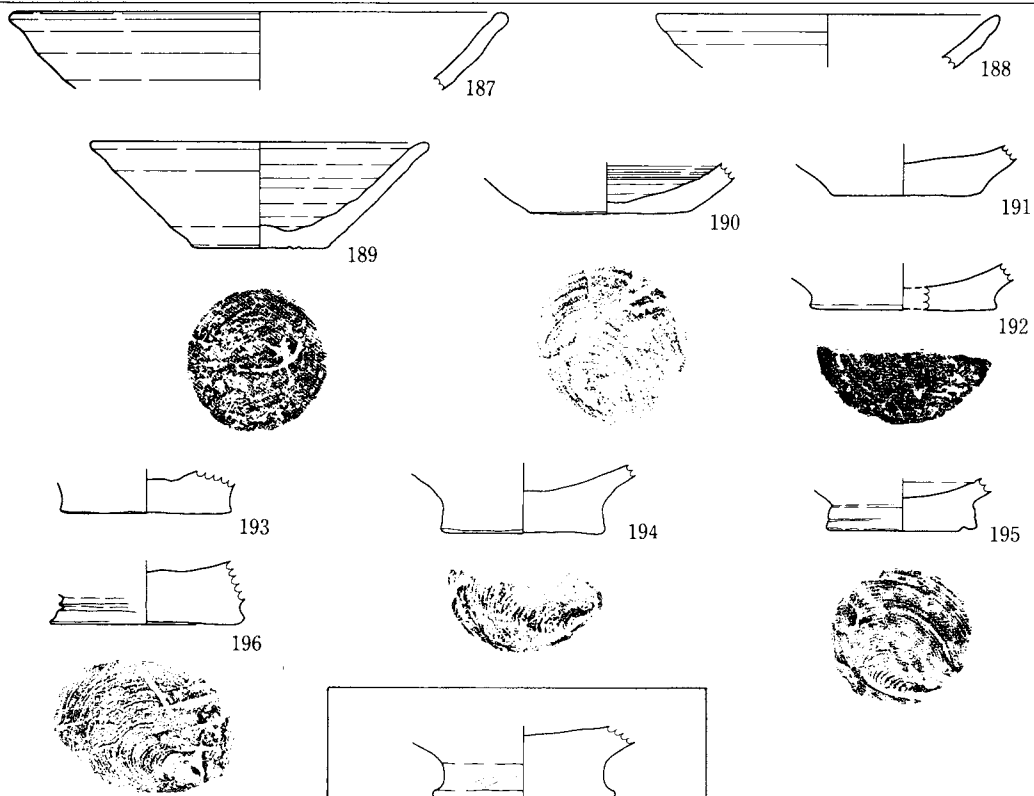
8・9区包含層



第57図 第3地点出土遺物②



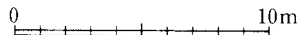
8·9区1号溝 (青灰色粘質土·黑灰色粘質土·灰色砂層)

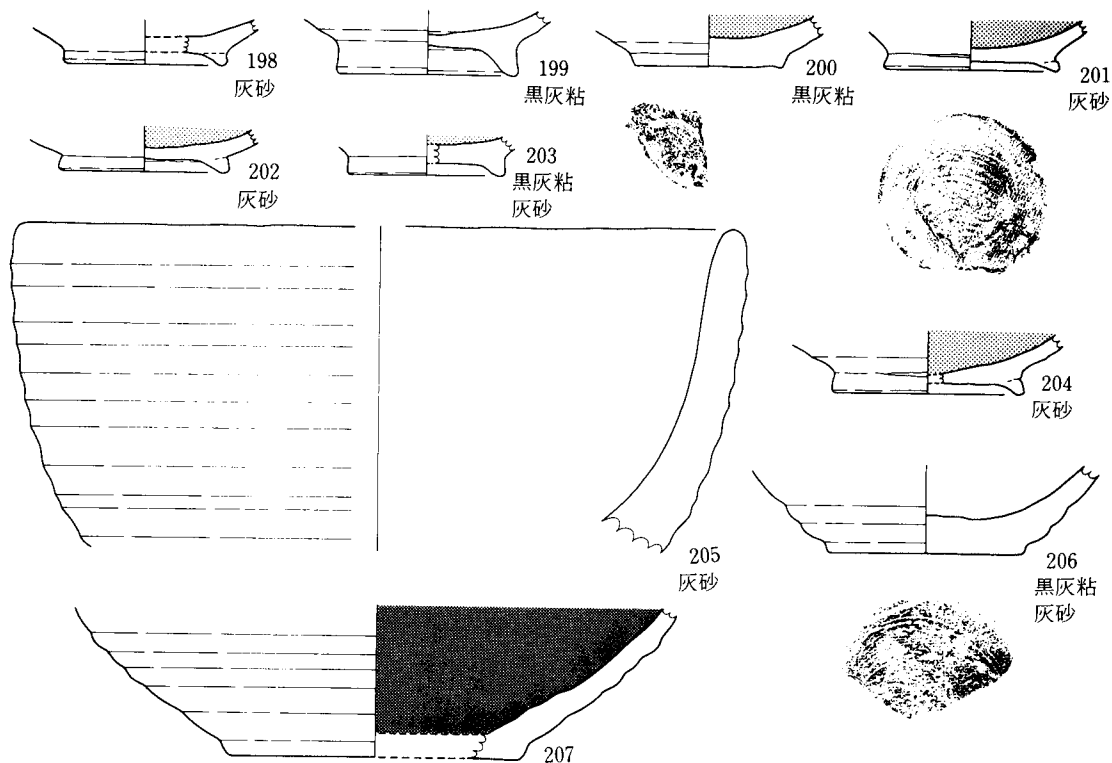


9区包含層

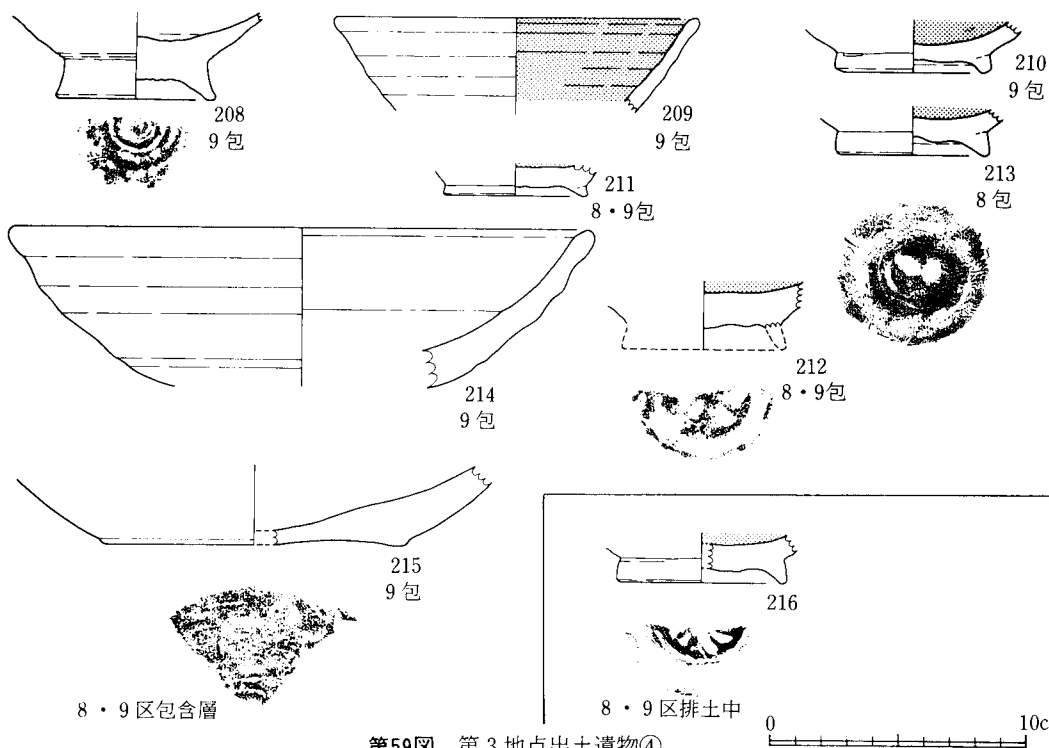
排土中

第58圖 第3地点出土遺物③





8・9区1号溝 (黒灰色粘質土・灰色砂層)

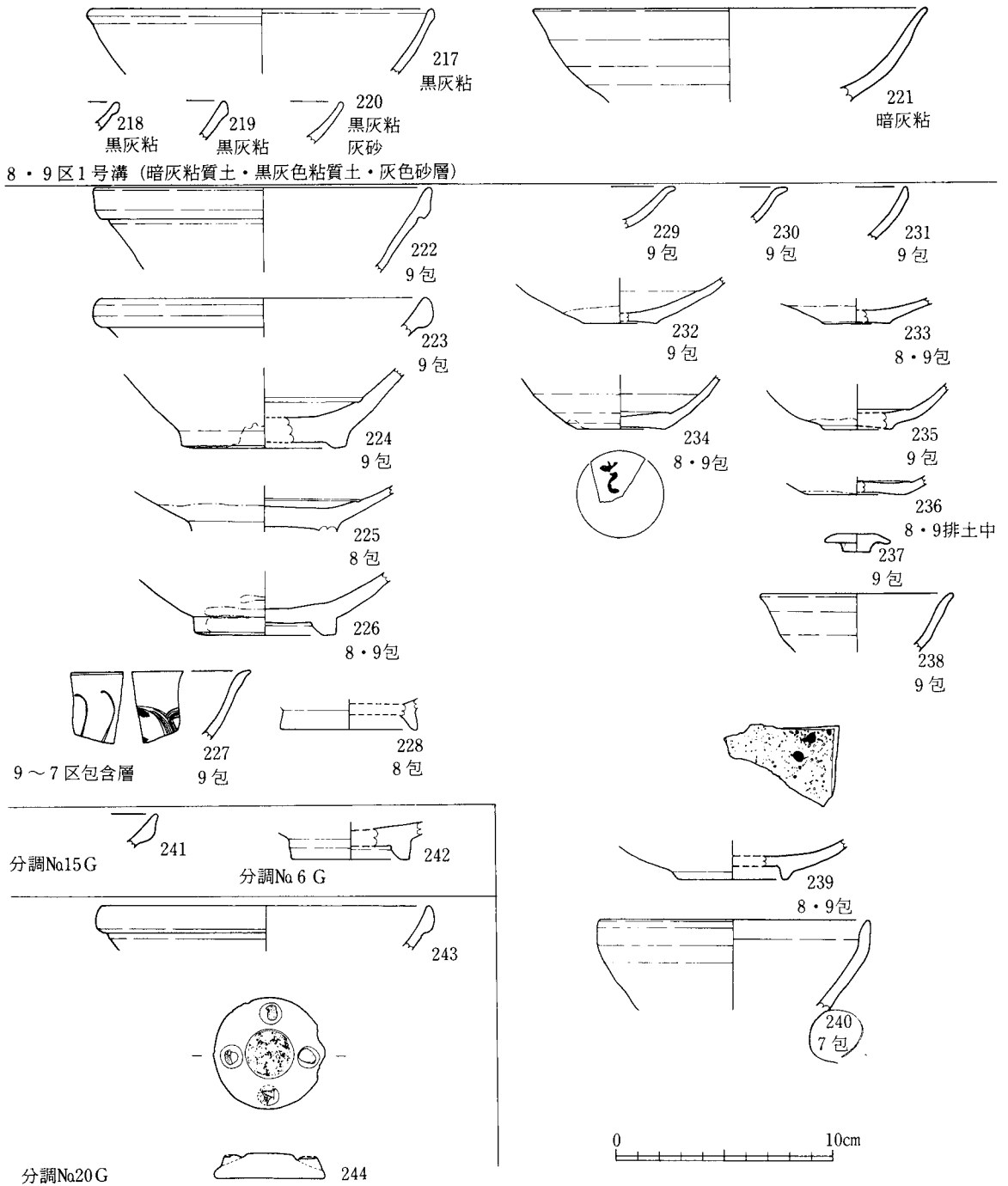


8・9区包含層

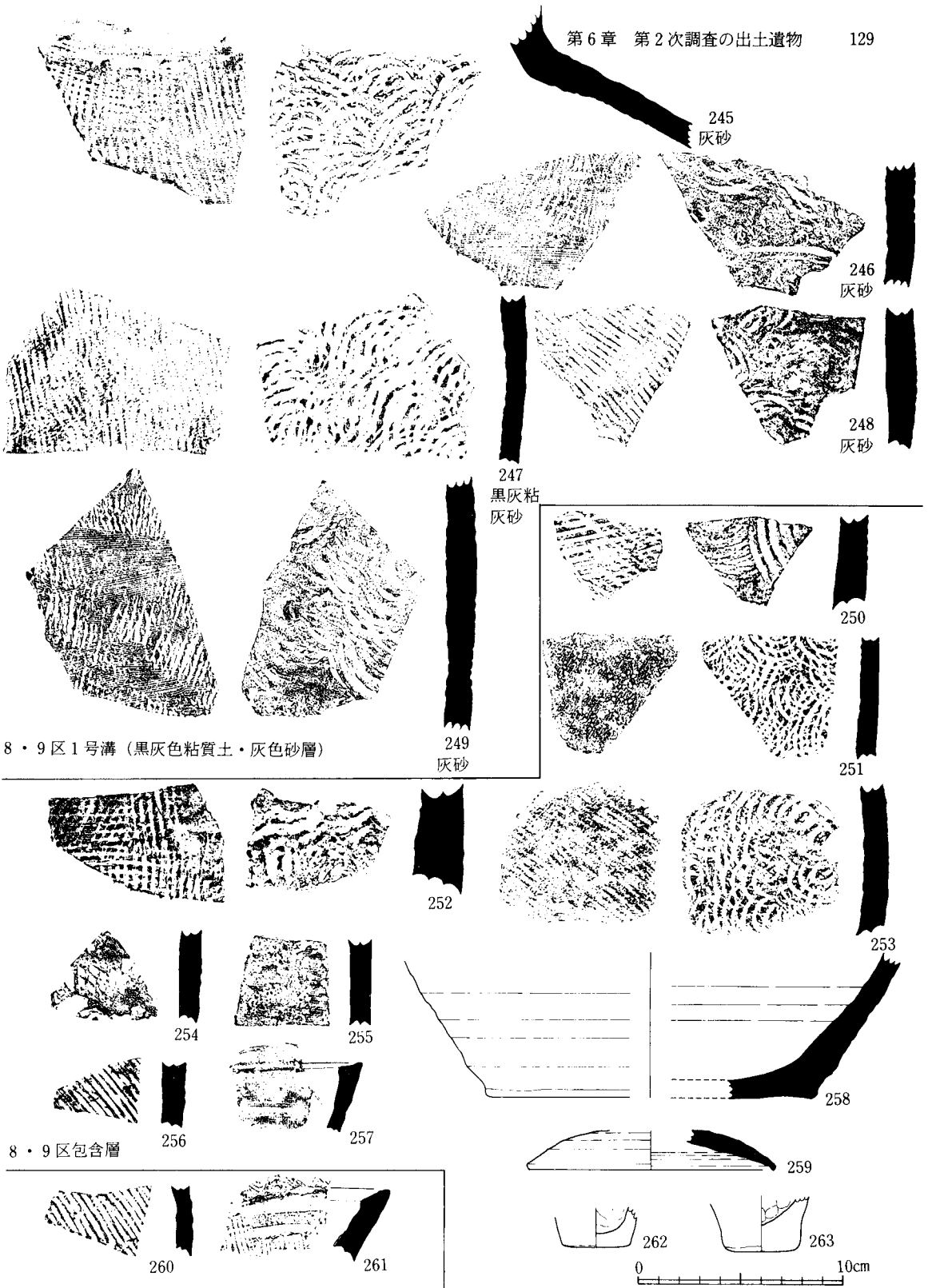
8・9区排土中

第59図 第3地点出土遺物④

0 10cm



第60図 第3地点出土遺物⑤

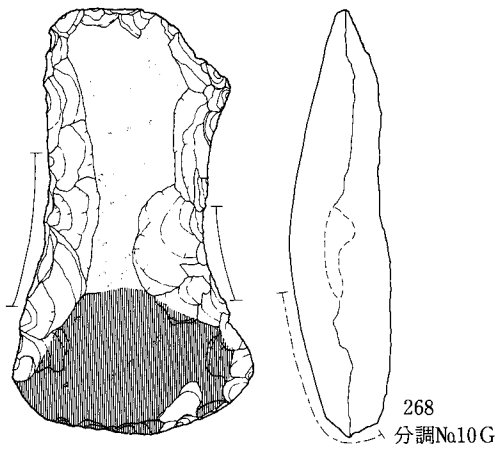
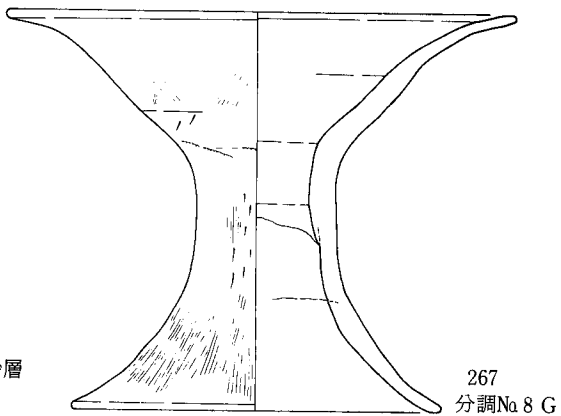
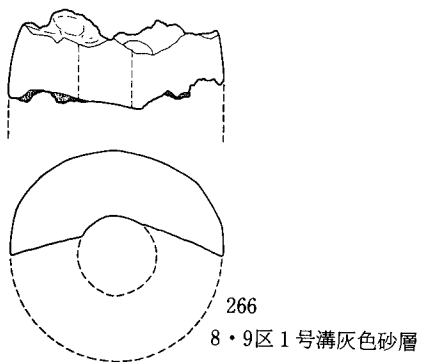
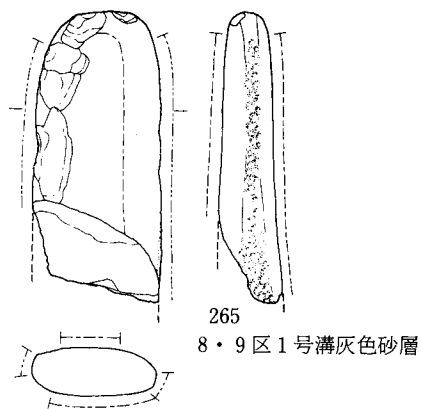
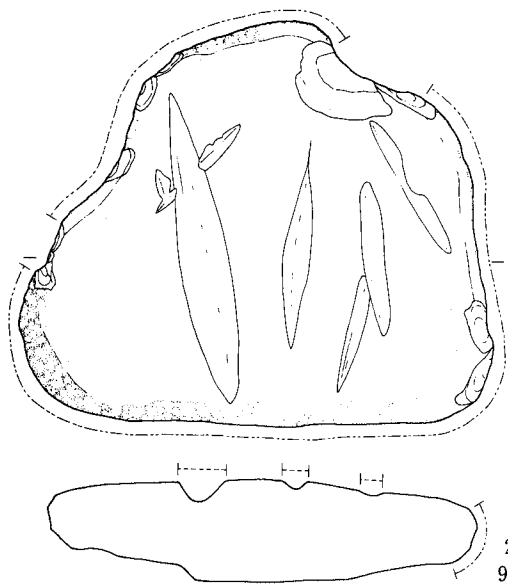


8・9区1号溝（黒灰色粘質土・灰色砂層）

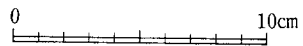
8・9区包含層

7～9区排土中

第61図 第3地点出土遺物⑥



第62図 第3地点出土遺物⑦



第7章 第2次調査のまとめ

中海遺跡の第2次調査では、弥生時代後期から中世にかけての遺構と遺物が検出された。調査地点は3箇所に分かれていたが、その中で第1地点と第3地点が主体となるものであった。ここではその検出された遺構と遺物について、第1地点と第3地点の調査で得られた成果をまとめてみたい。

第1節 第1地点の遺構と遺物について

この第1地点は中海工区西側に広がる弥生時代後期から平安時代後期にかけての集落遺跡であった。調査の結果、3箇所から遺構と包含層が検出された。まず、トレンチ東側の1区から4区では古墳時代前期から後期にかけてのものであった。遺構としては土壇4基、溝3条、その他ピットが存在している。1号、3号、4号土壇からは古墳時代前期の土器が、2号土壇、2号溝からは古墳時代後期の土器が出土している。

6・7区落ち込みの覆土中からは弥生時代後期の土器が出土している。第48図62から第49図71の土器群が出土した。62から67は口縁部に擬凹線を持つ大型の甕である。62は口縁部が直立して端部を丸くおさめている。その形態から月影式に先行するいわゆる法仏式に該当するものであろう。63～67はいわゆる月影式の大型甕である。これらは口縁部が外反し、口縁端部を丸く先細りしている。内面もヨコナデ調整をして指頭圧痕を残すものもある。この甕の他には、壺、器台も存在している。68は口縁部に擬凹線を持っているが、口径が甕よりも小さいことから壺の可能性が高い。この甕と壺には有段脚になると推定される71の器台が伴うのであろう。70の壺も伴う可能性があるが、大型の壺69が伴うかどうかは明らかではない。

古墳時代後期の土器群としては、6・7区落ち込み覆土上の包含層I出土のものと同9区下層(整地層)出土のものがある。後者では土師器の甕を主体とした第52図86～第54図102のものと同、それに須恵器の杯蓋と杯身第54図103～105が出土している。須恵器はその形態から陶邑田辺編年のMT15型式からTK10型式に比定される⁽¹⁾。土師器の甕は胴部が球形を呈するものが多く、長胴タイプのもものは1点しか存在しない。口縁部もくの字に外反するものが殆どであり、口縁部が直立ぎみに立ち上がり端部で強く外反するものは認められない。胎土の上からも粘質のものが多く、砂質のものがやや少ない。これらの土器群は小松市漆町遺跡出土土器の編年に当てはめれば、須恵器が漆・15群土器⁽²⁾に並行するが、土師器の甕は漆・15群土器よりも古く先行する様相を示している。前者の6・7区落ち込み覆土上の包含層I出土の土師器は、須恵器を伴っていない。土師器の甕では全形の判明するものは胴部が長胴型を呈する72の1点だけと少ないが、口縁部は直立ぎみに立ち上がり端部で強く外反するものが多い。甕でも胴部のしまったものとなっている。この土器群は9区下層(整地層)出土の土器群より新しく、6世紀末から7世紀初め頃にかけてのもの

といえる⁹⁾。

次に9区の竪穴状遺構とその周りのピットから出土した土師器の椀と小皿は数量的には少ないが、その形態から小松市漆町遺跡金屋ヤシキダ地区4号井戸・金屋サンパンワリ地区100号井戸出土品⁴⁾に近く、12世紀中葉頃で田嶋編年の2段階Ⅷ₂期⁶⁾に該当するものであろう。

第2節 第3地点の遺構と遺物について

第3地点からは遺構としては柱列と溝が検出された。この1・2号柱列は掘立柱建物の柱穴と推定される。調査区が限られているため掘立柱建物の規模は明らかではない。2号柱列西端の柱は径約28cmで八角形に面取りされ、下端には筏穴が1箇所存在していることは注目される。1号溝はこの柱列の東側に存在しているが、1度埋まったのを新しく掘り替えている。また、この第3地点の遺跡が周囲よりもレベルの低い地点に存在していることも特徴といえる。

遺物では土師器の小皿、皿、椀、有台椀、鉢等があり、これに須恵器の甕と白磁の碗、皿類が伴っている。土師器では椀、有台椀、鉢の数量は少なく、逆に小皿と皿の量が多数を占めている。小皿では底部の薄いタイプと底部が厚く平高台状を呈するものに大きく分けられる。前者のものをさらに形態的にみると①は129・139、140の口縁部が直線的に外傾するもの。②は141の底部から直線的に外傾するが端部を内湾させるもの。③は142、143の底部が厚くて上げ底ぎみになり、口縁部が短く先細りぎみのもの。④は130の底部から丸みを持って外傾するもの。⑤は131の底部の直ぐ上をヨコナデ調整し短い口縁をもつもの。⑥は132・133の底部のすぐ上をヨコナデ調整し、口縁部が長く延びるもの。これには底部が上げ底になるものとならないものがある。⑦は144の口縁部と底部が薄く、口縁部が底部から直線的に外傾するものに分けられる。その中で⑥としたものが多く、他は少ない。口径は約9cm～10cm前後のもので、器高も約1.7cm～2cm前後を測る。底部が厚く平高台状を呈するものは底部片が多いが、151と167のタイプになるのであろう。皿では全形の判明するものはない。椀では全形の窺える資料は、178の口縁部が内湾ぎみに開くものと189の直線的に外傾する2点以外は存在しないが、口縁部や底部からみて何タイプかありそうである。有台椀では内面を黒色処理したものが多い。小皿で黒色処理したものは131と161の2点存在している。小皿のものはこれらの土器群に伴うのであろうが、有台椀は前時期より一般的に少なくなる傾向があり、それが比較的多く出土しているのは混ざりの可能性もあろう。鉢は数量も少ないが何タイプかに分けられる。鉢207の内面に黒い漆状の付着物が残っている。小松市古府遺跡の2区SX-2出土の鉢でも内面に漆状の付着物が残っており注目したい。

以上の小皿、皿、椀、鉢では底部に糸切り痕を残す。ロクロ成形品であるが、糸切り痕を消しているものは小皿131と144と有台椀に認められるが少ない。胎土は精選された土に微細な砂粒だけを含むもの。これに赤色土粒を含むもの。微細な砂粒や赤色土粒を含まないものなどに分けられる。全体的には精選された微細な砂粒を含むものが多いといえる。焼成は良好で堅いものとあまく柔らかい感じのものがある。どちらかといえば砂粒をあまり含まないものは焼成もあまくな

っている。色調では全体的に淡白褐色や淡白灰褐色のものが多く、褐色や淡褐色を呈するものは少ない。この褐色系の色調は燈色ともいえる。これ以外のものでは灰褐色系の暗いものもある。

白磁の碗や皿の陶磁器類では、一部新しい時期のものを含むが、ほぼ土師器に近い時期を示すものであろう。須恵器では甕が存在する。その甕のすべてではないが断面の色調が灰白色を呈し、胎土中に黒い細粒を含むものがある。それはあたかもお菓子の落雁のような感じを示している。これが土師器に伴うものと言われている⁽⁶⁾。珠洲系陶器や越前系陶器なども僅かに存在しているが、土師質土器の148、150と共に時期が離れている。この第3地点から出土した遺物の時期は、漆町遺跡金屋ヤシキダ地区4号井戸・金屋サンバンワリ地区100号井戸からの出土品の時期に近く、田嶋編年の2段階Ⅷ₂期で12世紀中葉頃⁽⁷⁾のものとしてされている。さらにこの土器群には初期の中世陶を伴っておらず、まだ須恵器が存在していることから、12世紀中葉でも1150年を下がらない時期と推定されている⁽⁸⁾。

この平安時代後期の梯川流域には、軽海郷が存在している。軽海郷はすでに承平5年(935年)の「和名類聚抄」に表れている。平安時代後期の長寛元年(1163年)に成立したとされる「白山之記」によれば、同郷は白山信仰の拠点である白山宮加賀馬場のうち上白山三社(中宮、佐羅、別宮)の中心であった中宮の支配下にあった。中宮には末寺8ヶ所があり、それが中宮八院⁽⁹⁾と呼ばれていた。この中宮八院のうち7ヶ寺が軽海郷内に存在し、同郷の山間部に国衙を取り囲むように配置され、梯川の水源を押さえ、在地有力者として勢力を強めていた。この中宮八院の勢力伸張は国司との対立を深め、安元事件へと発展している。それは安元2年(1176年)加賀国司近藤師高の目代として赴任した弟の近藤師経が白山宮の圧力を排除するために中宮八院の一つ鶴川湧泉寺へ強制的に立ち入り、これを焼き打ちにした事件である。目代近藤師経と白山宮との抗争は延暦寺をも巻き込み、白山宮と延暦寺の強訴により近藤師高・師経兄弟の解任、配流という結果となっている。この中宮八院の一つに長寛寺が存在している。その位置については明らかではないが、今回の調査箇所の第3地点は通称チョウカンジあるいはチョガンジと呼ばれており、その地名が類似していることに注目したい。この長寛寺等の中宮八院が存在した軽海郷は、その後嘉暦4年(1329年)から康暦2年(1380年)までの約50年間は武蔵国金沢の称名寺領となっている。その間も領地境の問題などで白山宮との対立抗争が続いている。元徳2年(1330年)に記され、称名寺の金沢文庫に所蔵されている「白山八院衆徒等申状案」⁽¹⁰⁾に他の寺院名と共に長寛寺のことが出てくる。同文書ではその長寛2年(1164年)に長寛寺の四至を定めたことが記載されている。ただし、長寛寺の建立地点は記載されていない。この寺域の四至を定めたという長寛2年(1164年)の年代と出土遺物の推定年代との間には、時間的なズレが存在しているが、文書の年代以前に長寛寺が存在していたことは考えられる。本遺跡は全面調査した訳でもなく、出土遺物と遺構から寺院跡と直接結びつけるだけのものは無いが、その調査地点の地名と出土遺物の推定年代から長寛寺に比定される可能性があるだろう。

註(1) 田辺昭三 1966年 『陶邑古窯社群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ

(2) 田嶋明人 1986年 「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財セ

ンター

- (3) 田嶋明人氏からの教示による。
- (4) 田嶋明人 1986年 「第2節 9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」 『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- (5) 註4 田嶋と同文
- (6) 田嶋明人氏からの教示による。
- (7) 註4 田嶋と同文
- (8) 田嶋明人氏からの教示による。
- (9) 湧泉寺・護国寺・昌隆寺・松谷寺・蓮花寺・善興寺・長寛寺・隆明寺の八寺をいう。
- (10) 浅香年木 1981年 『治承・寿永の内乱論序説』法政大学出版局 130～143頁 および加能史料編纂室の伊林永幸氏からの教示による。

参考文献

- 横田賢次郎・森田 勉 1978年 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心にして—」 『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
- 横田賢次郎・森田 勉他 1978年 「太宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報」九州歴史資料館
- 田嶋明人他 1979年 『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会
- 浅香年木・田川捷一他 1981年 『角川日本地名大辞典—17 石川県』角川書店
- 吉田 淳 1984年 『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』石川県野々市町教育委員会
- 藤田邦雄他 1986年 『軽海遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司他 1986年 『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

図 版

(図版中の遺物番号は本文挿図および遺物番号に一致する)



遺跡周辺の航空写真



第1次調査区遠景（東より）



第1次調査区全景（西より）



第1次調査区全景（東より）



排水路調査区A区遺構発掘状況（西より）



第1号住居跡（南より）



排水跡調査区C区ピット、土壌群（西より）



排水路調査区C区10～13号土壌（北より）



排水路調査区D区凹部と分布調査トレンチ（北より）



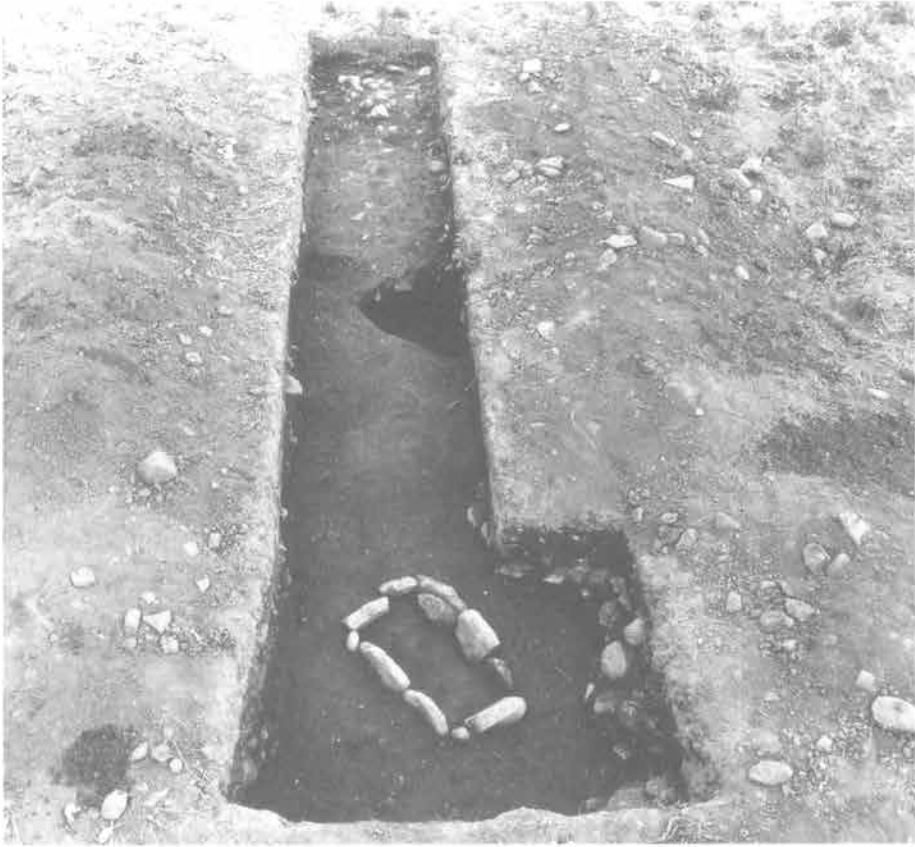
D区凹部全景（西より）



D区凹部全景（北より）



D区凹部全景（西より）



11-514T区全景（北より）



11-514T区炉跡検出状況



11-514T区炉内浅鉢出土状態



11-514 T区炉跡完掘状況



11-514 T区炉跡完掘状況



11-514 T区炉跡土の礫群



11-514 T区炉迹周边土器出土状态



11-514 T区土器出土状态



11-514 T区土器出土状态



11-516T区方形石组状遺構



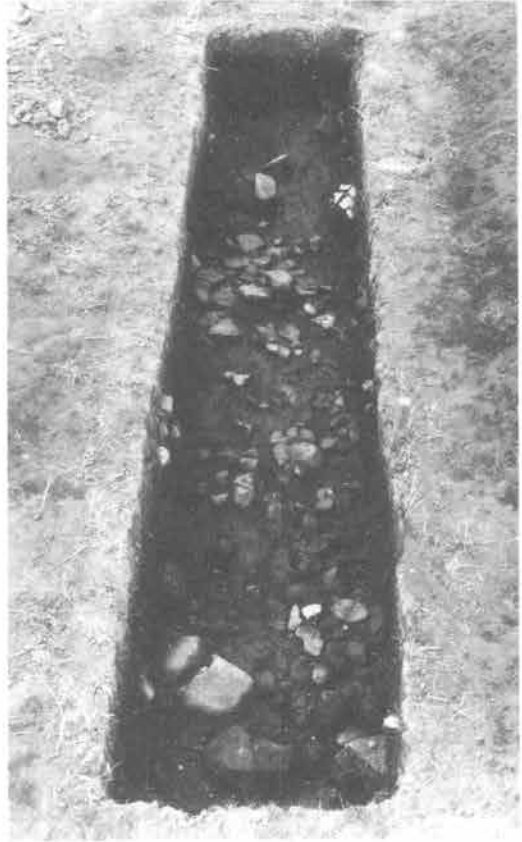
11-516T区土器出土状态



11-516T区土器出土状态



11-518T区土器出土状態（北より）



11-518T区土器出土状態（南より）



11-518T区完掘状況



11-518T区土器・石器出土状態



11-518T区包含層II（上層）断面（西より）



11-518T区土器出土状態（東より）



11-518T区土器出土状態



11-518T区土器出土状態



深鉢 (第14類)



深鉢 (第25類)



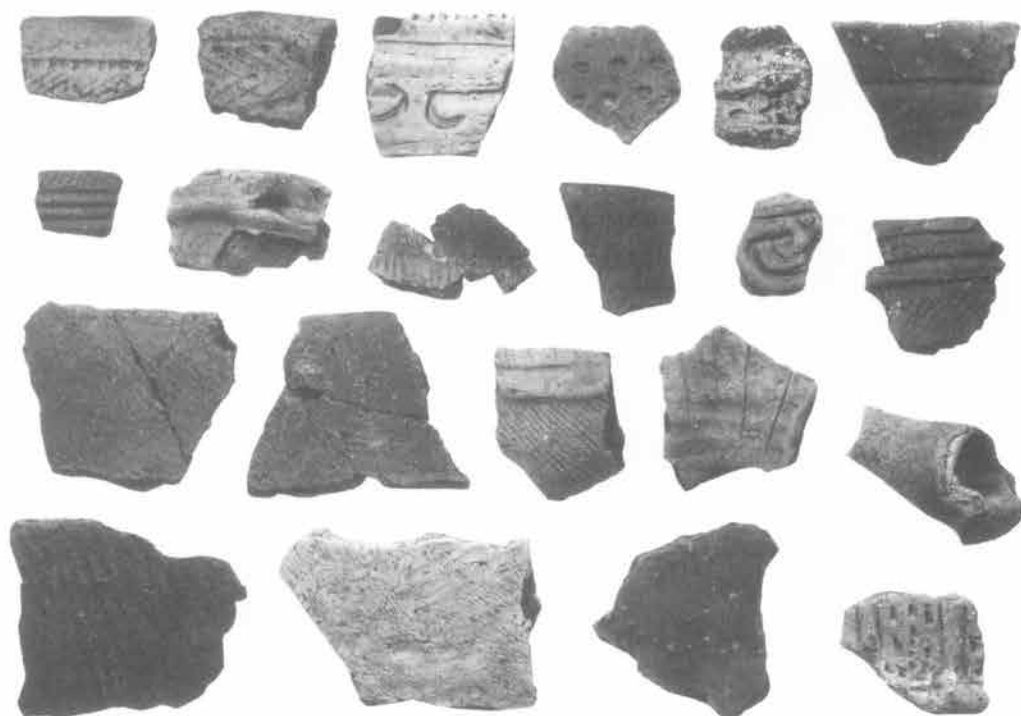
浅鉢 (第9類)



台付土器の台部分



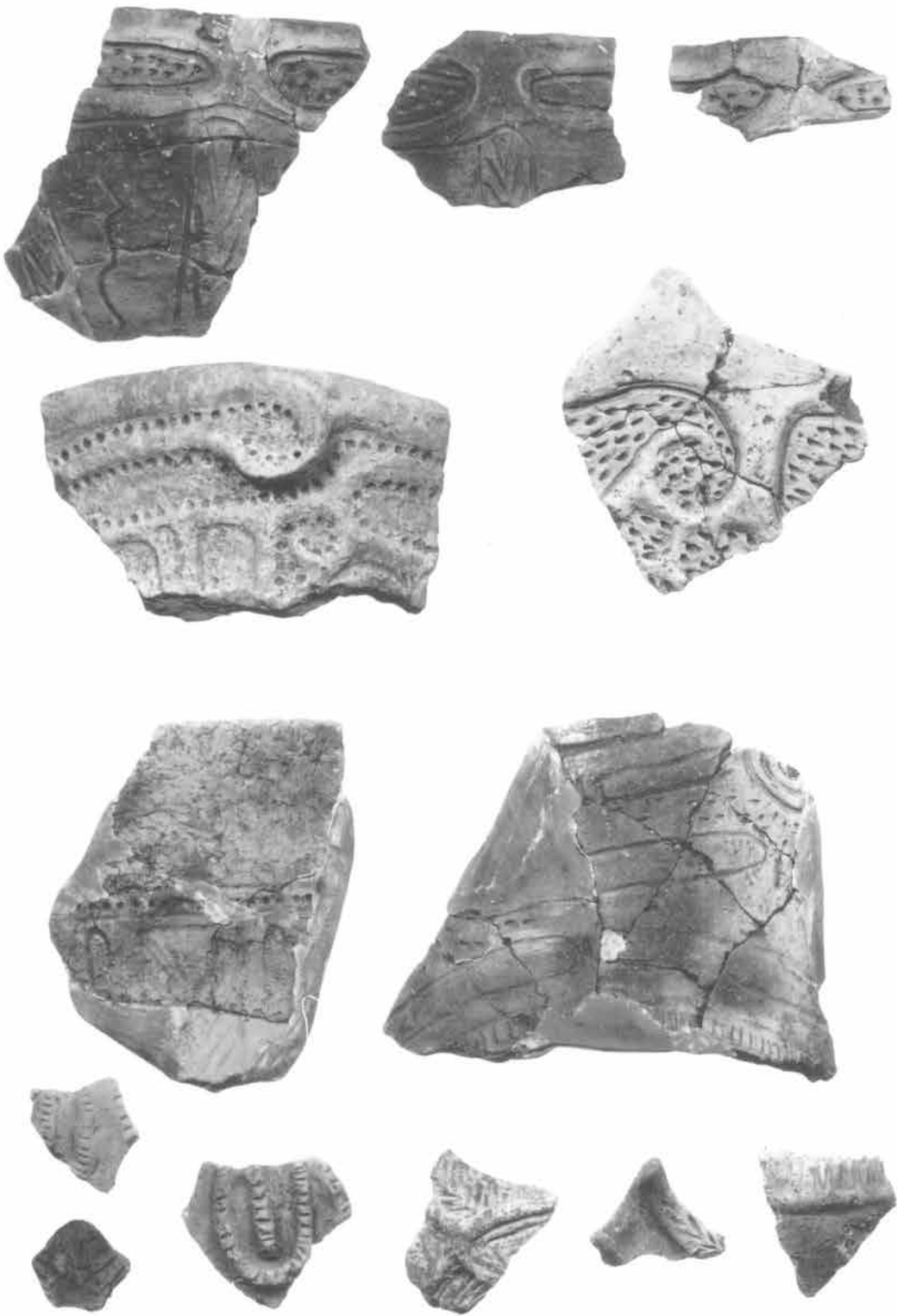
11-514 T区出土土器 (縮尺 1/3)



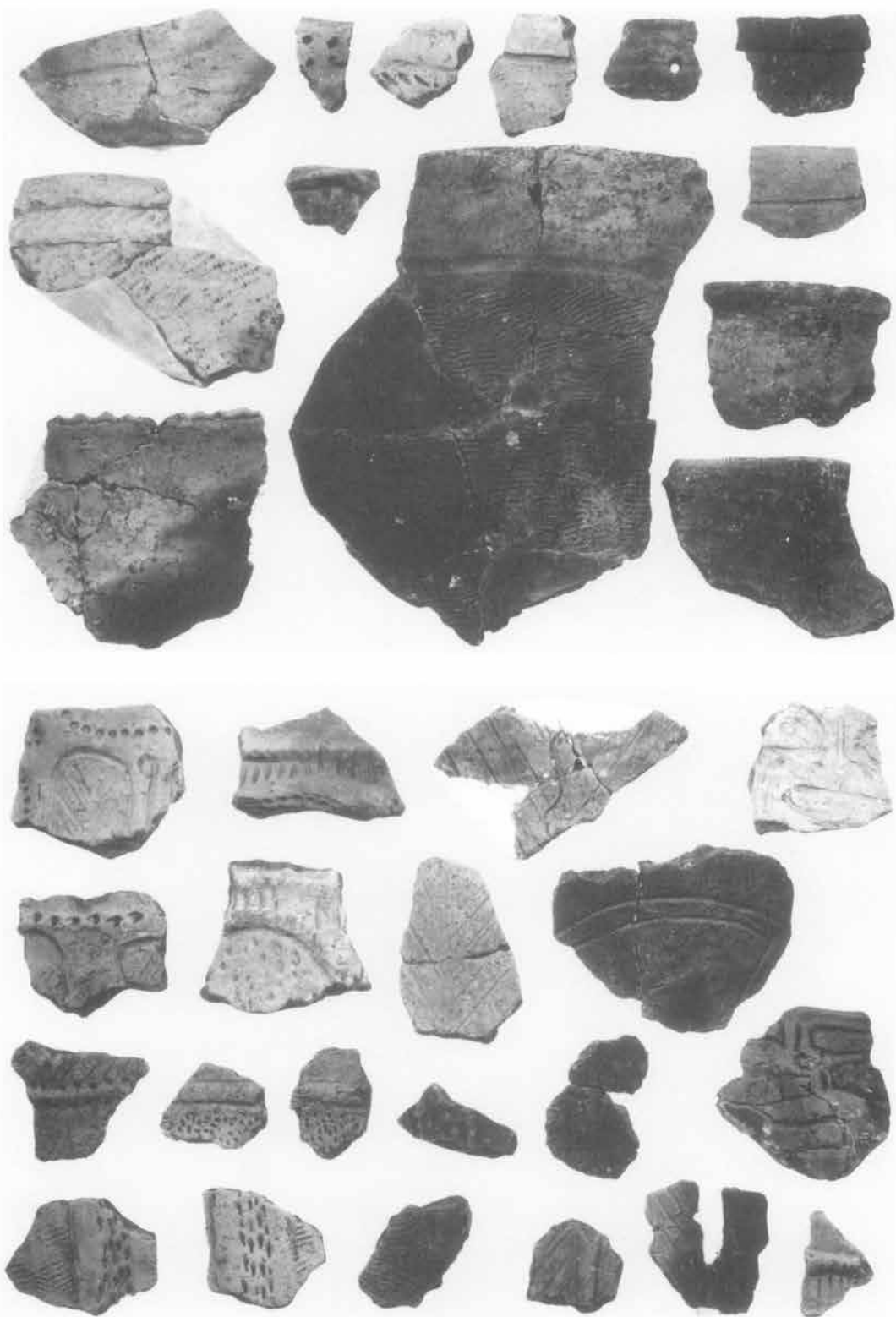
その他の試掘区出土土器 (縮尺 1/3)



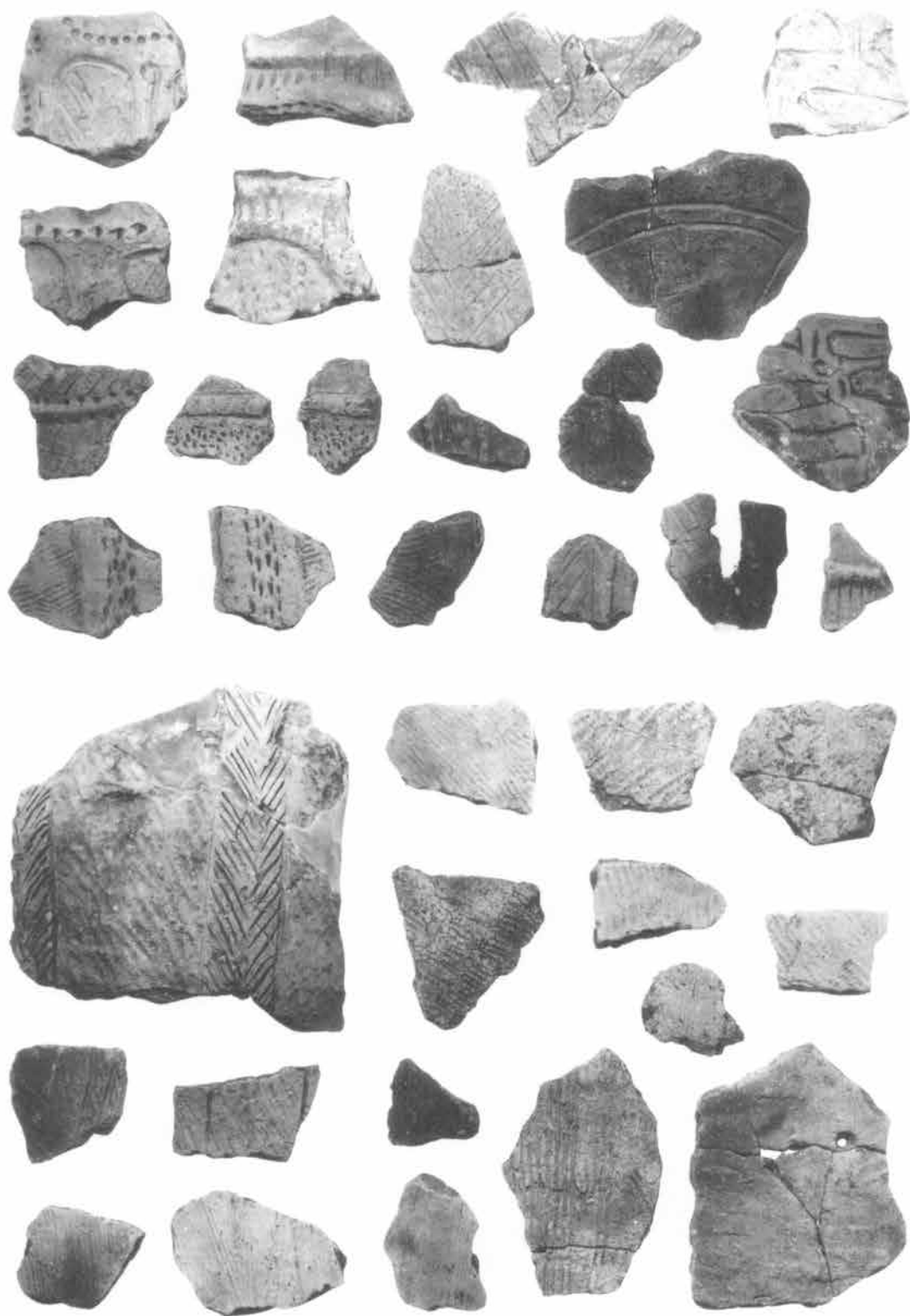
11-516T区出土土器(縮尺 1/3)



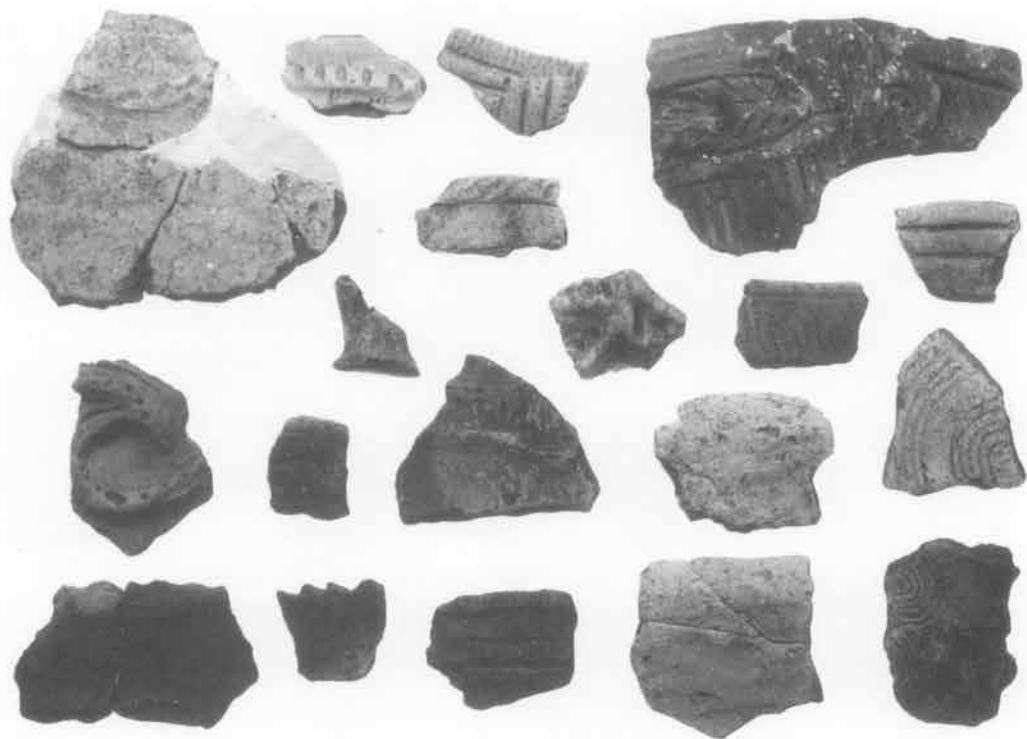
11-518T区出土土器1(縮尺 1/3)



11-518 T区出土土器 2 (縮尺 1/3)



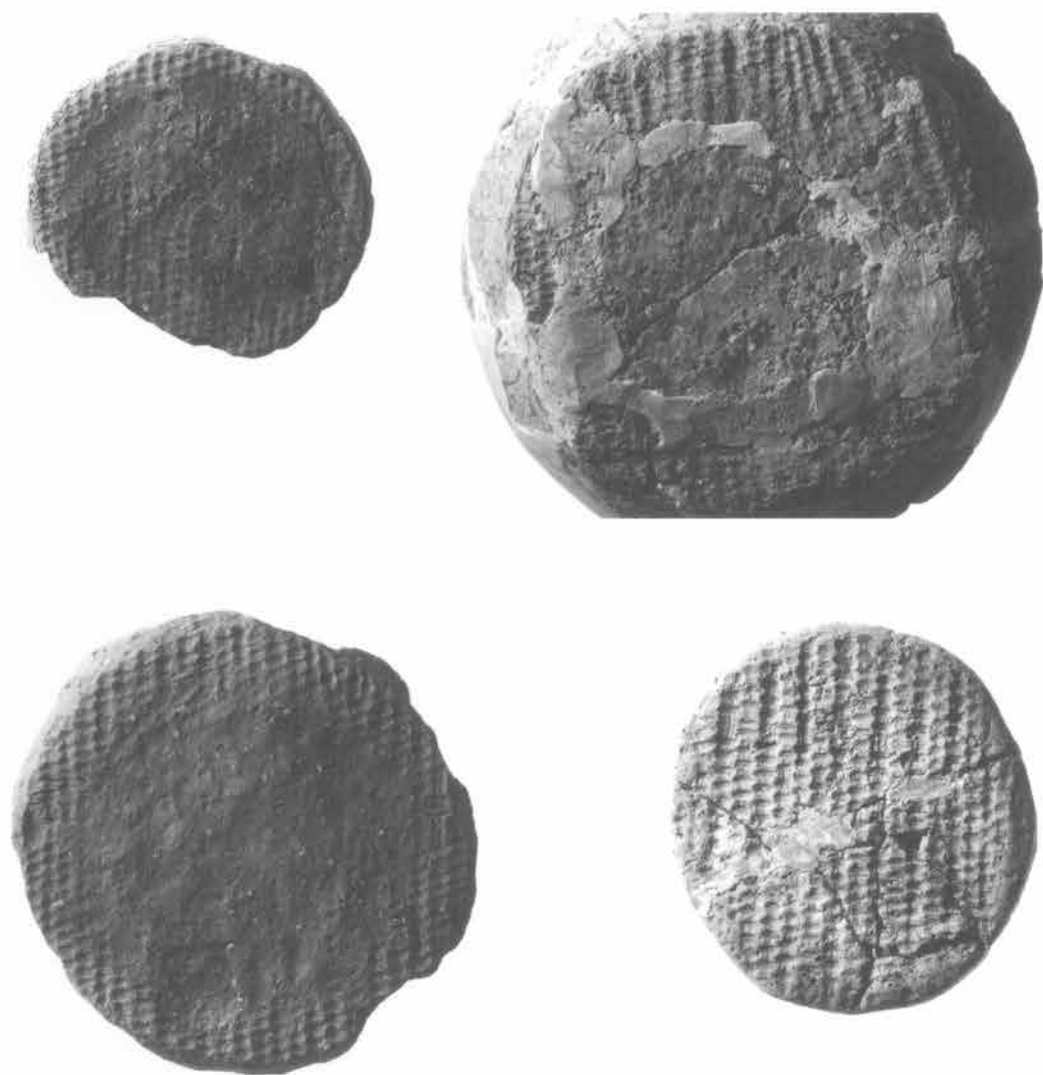
11-518T区出土土器3 (縮尺 1/3)



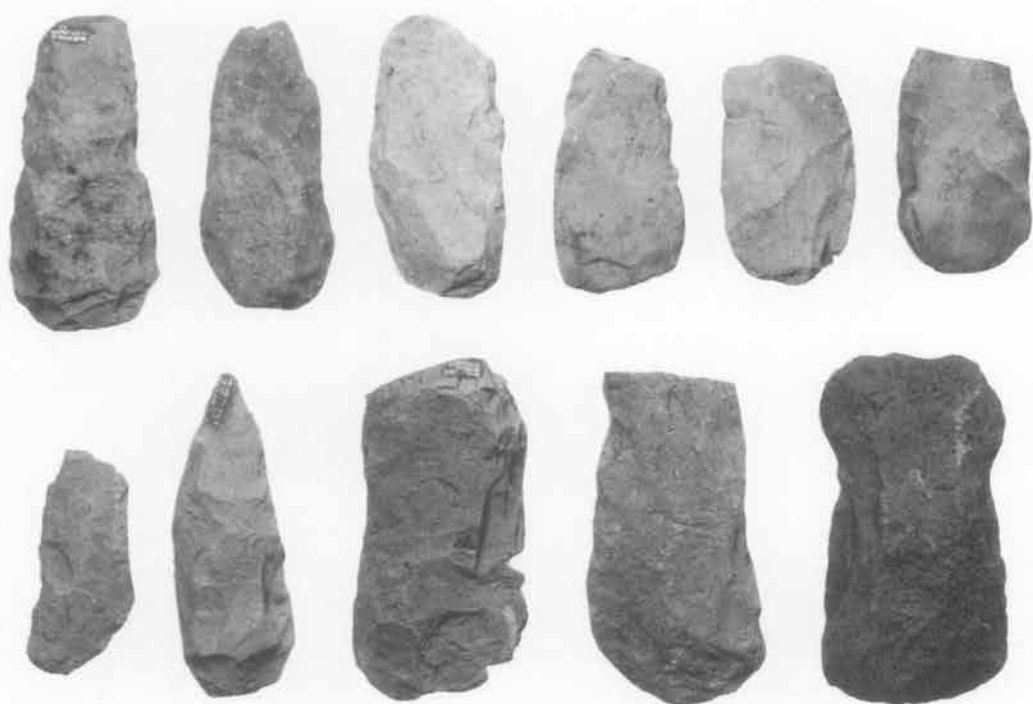
C・D区出土土器(縮尺 1/3)



土製品・手捏土器(実大)



網代庄痕 (1 I類 2・4 II類 3 IV類 縮尺 1/3)



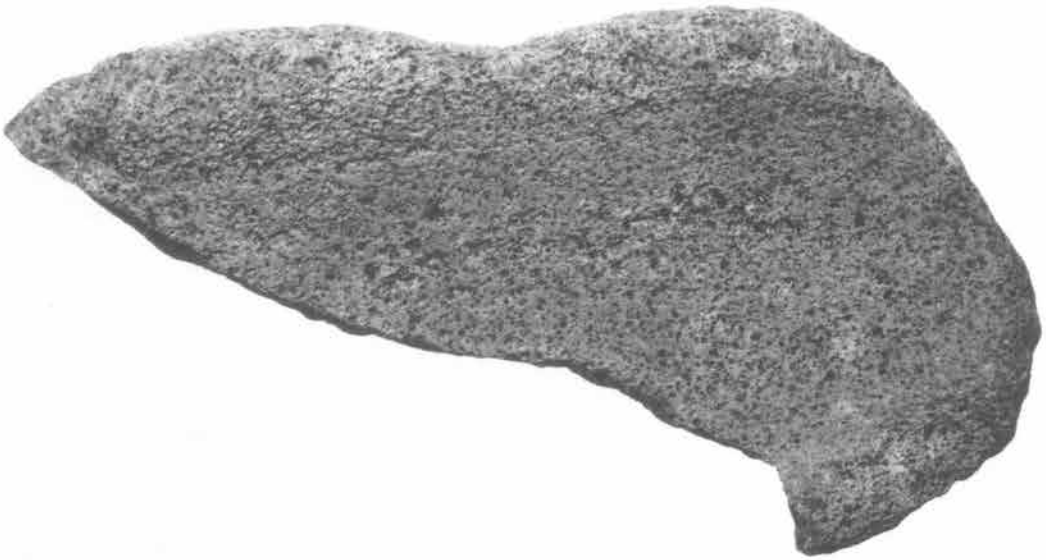
打製石斧 (縮尺 1/3)



磨製石斧 (縮尺 1/3)



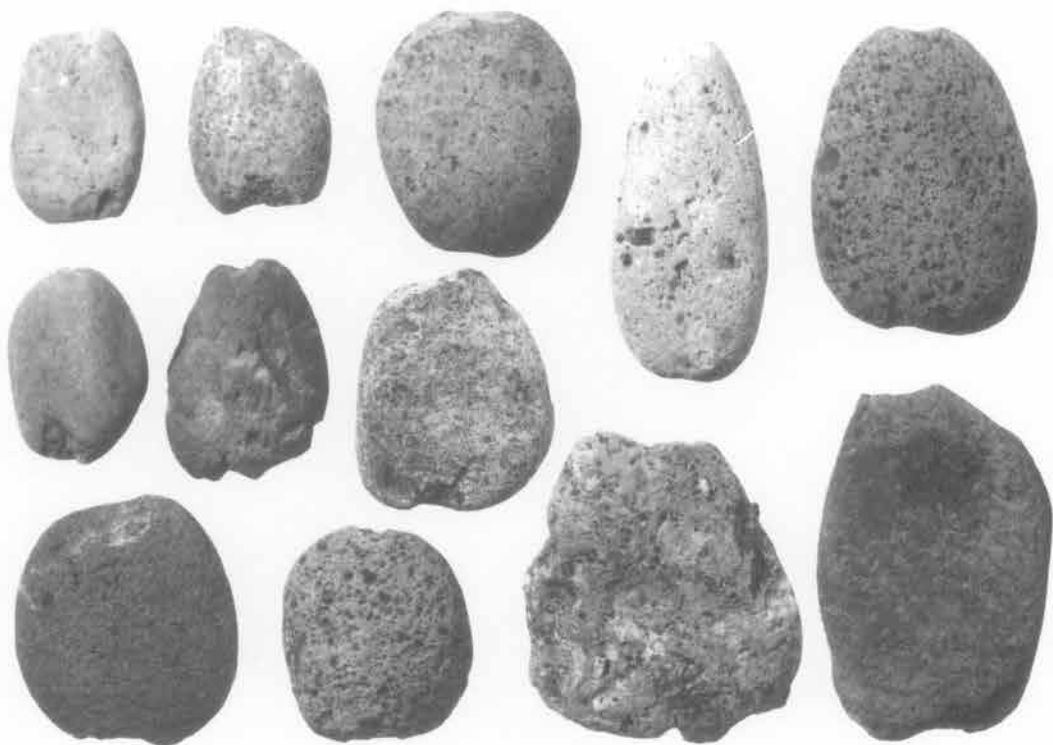
磨石・敲石(縮尺 1/3)



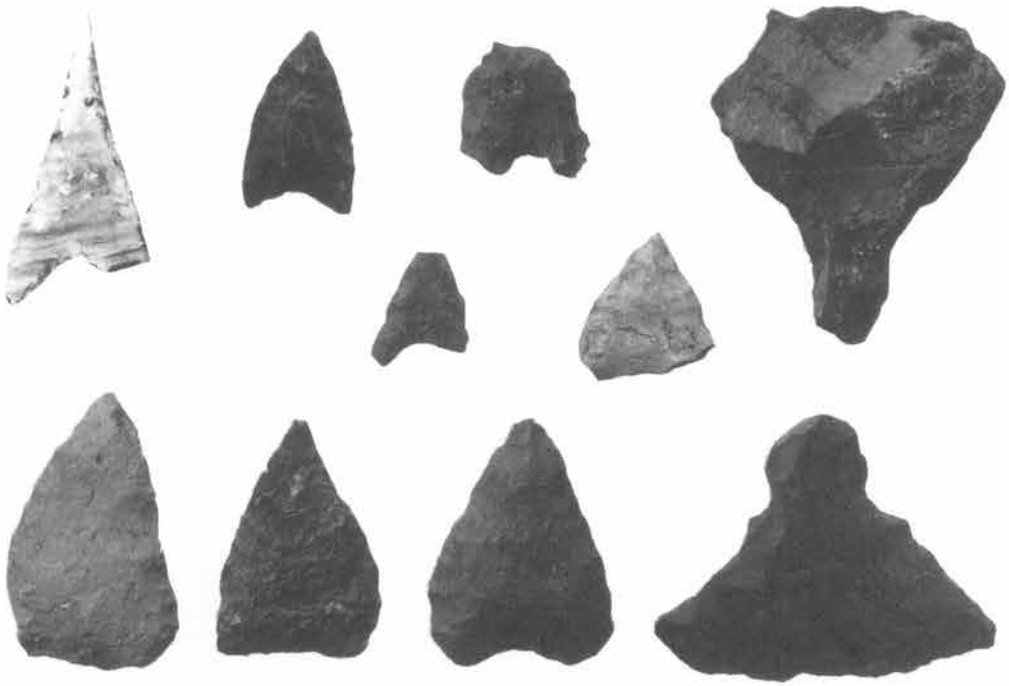
石皿(縮尺 1/3)



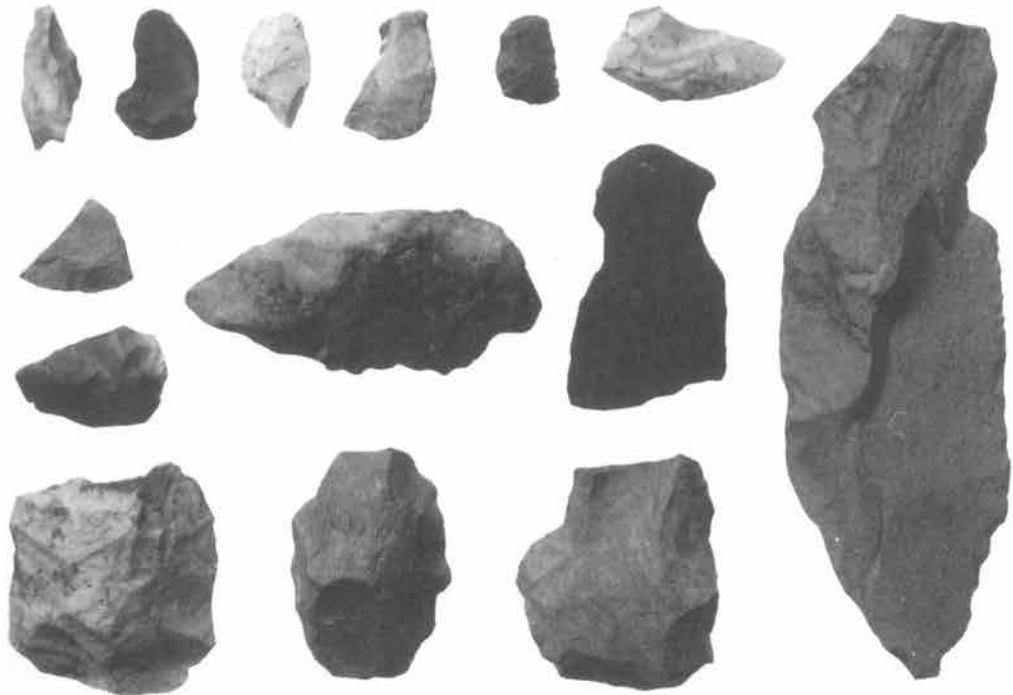
切目石錘(縮尺 1/2)



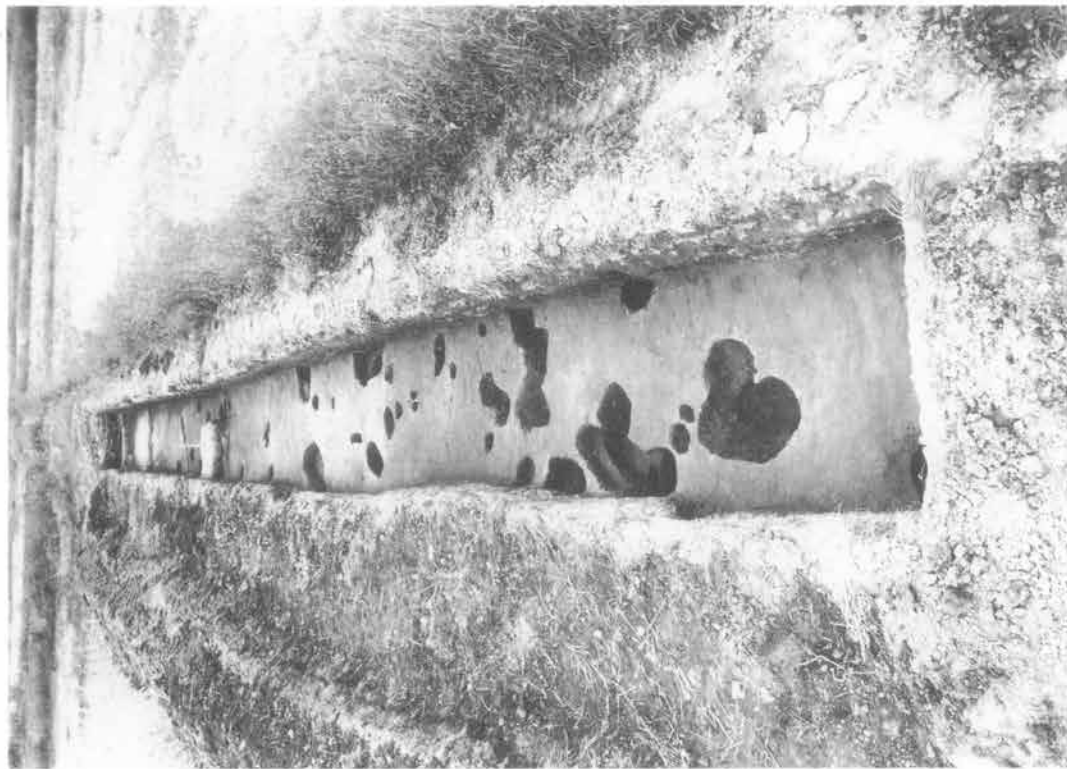
礫石錘(縮尺 1/2)



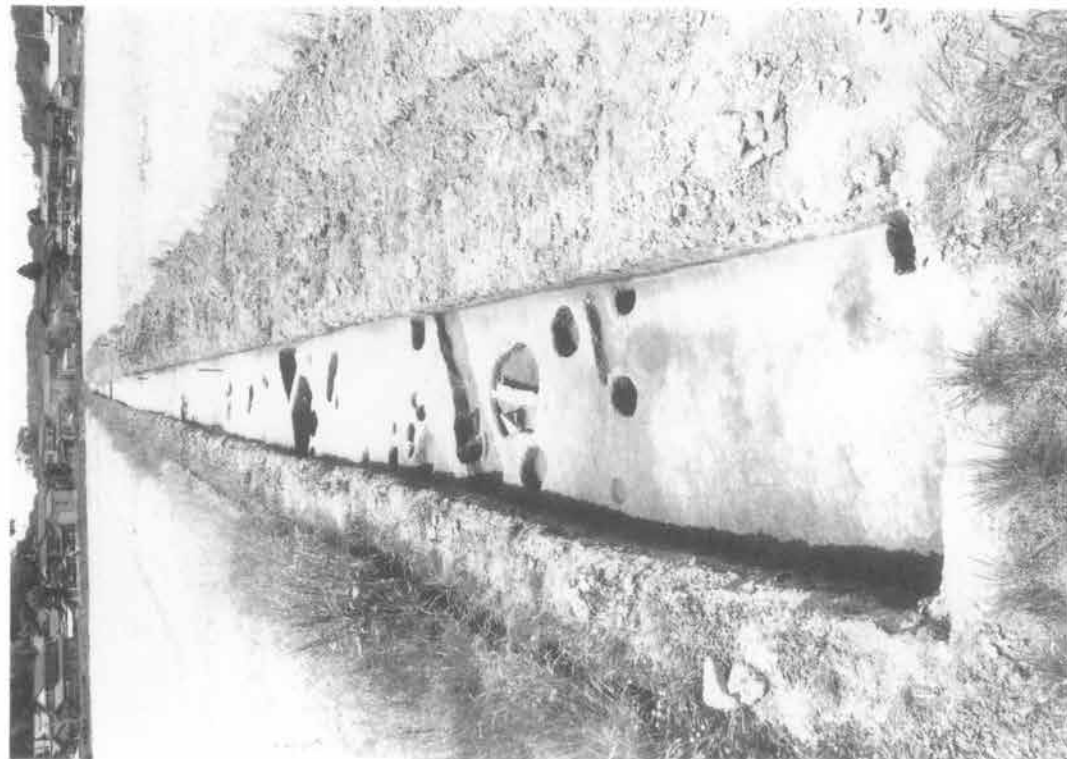
石鏃・石錐・石匙(実大)



器種・用途不明石器・不定形石器(縮尺 1/2)



第1地点1・2区(西より)



第1地点3・4区(東より)



第1地点1号土坑·2号沟



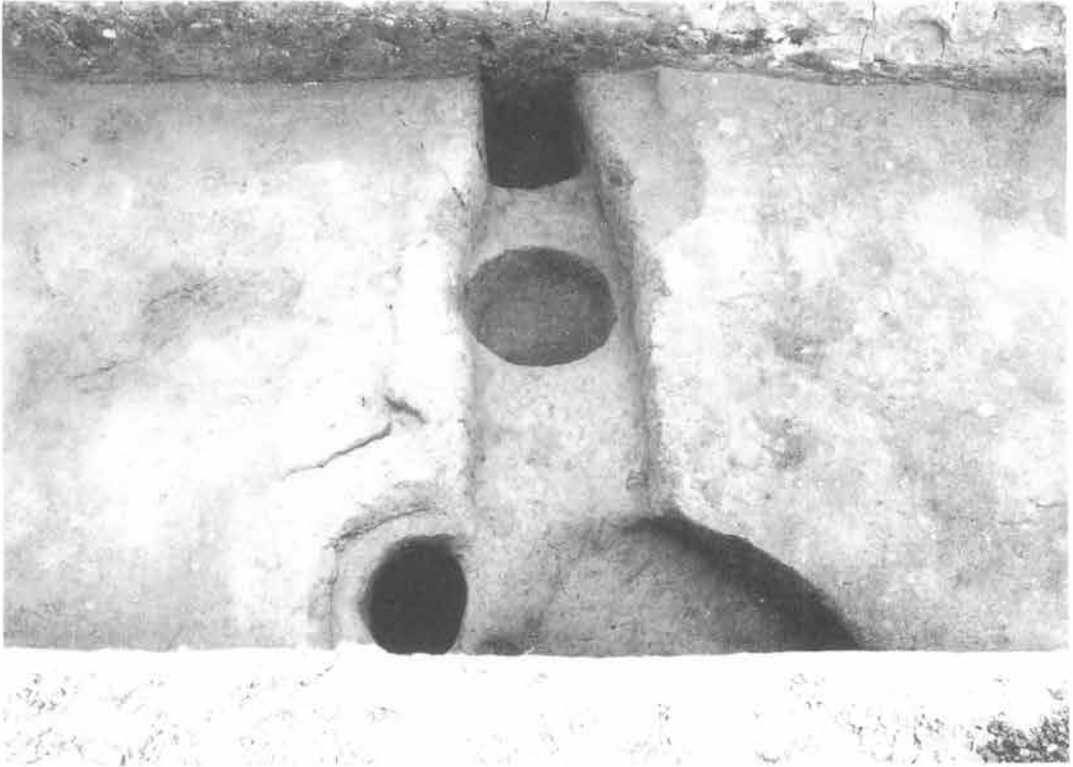
第1地点3号土坑



第1地点4号土壇(東より)



第1地点4号土壇遺物出土状況(西より)



第1地点6号溝(北より)



第1地点5号溝(西より)



第1地点竪穴状遺構(南より)



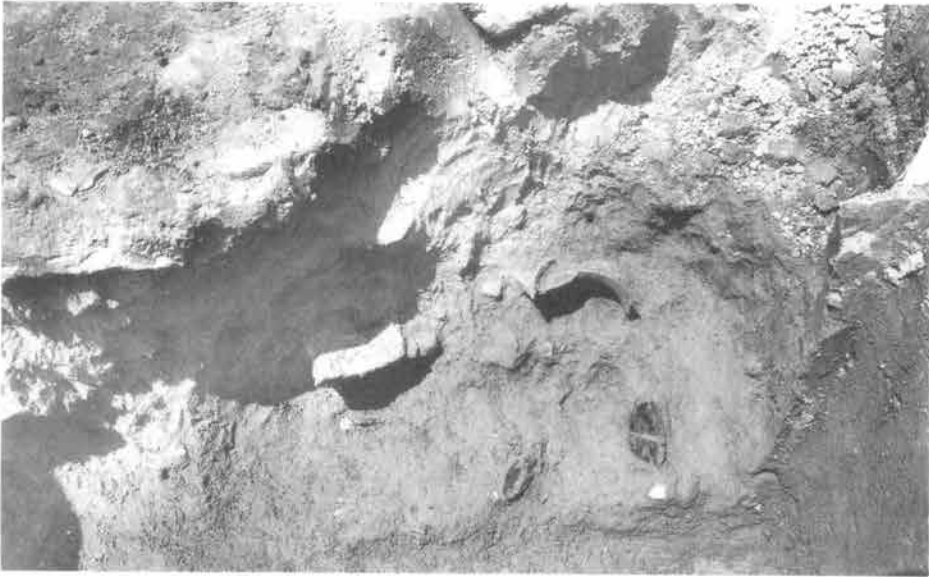
第1地点9区下層(整地層)完掘状況(東より)



第1地点9区下層（整地層）土師器出土状況



8区包含層I須恵器出土状況



第1地点9区下層（整地層）土師器出土状況



6・7区落ち込み遺物出土状況



第3地点9区完掘状況（西より）



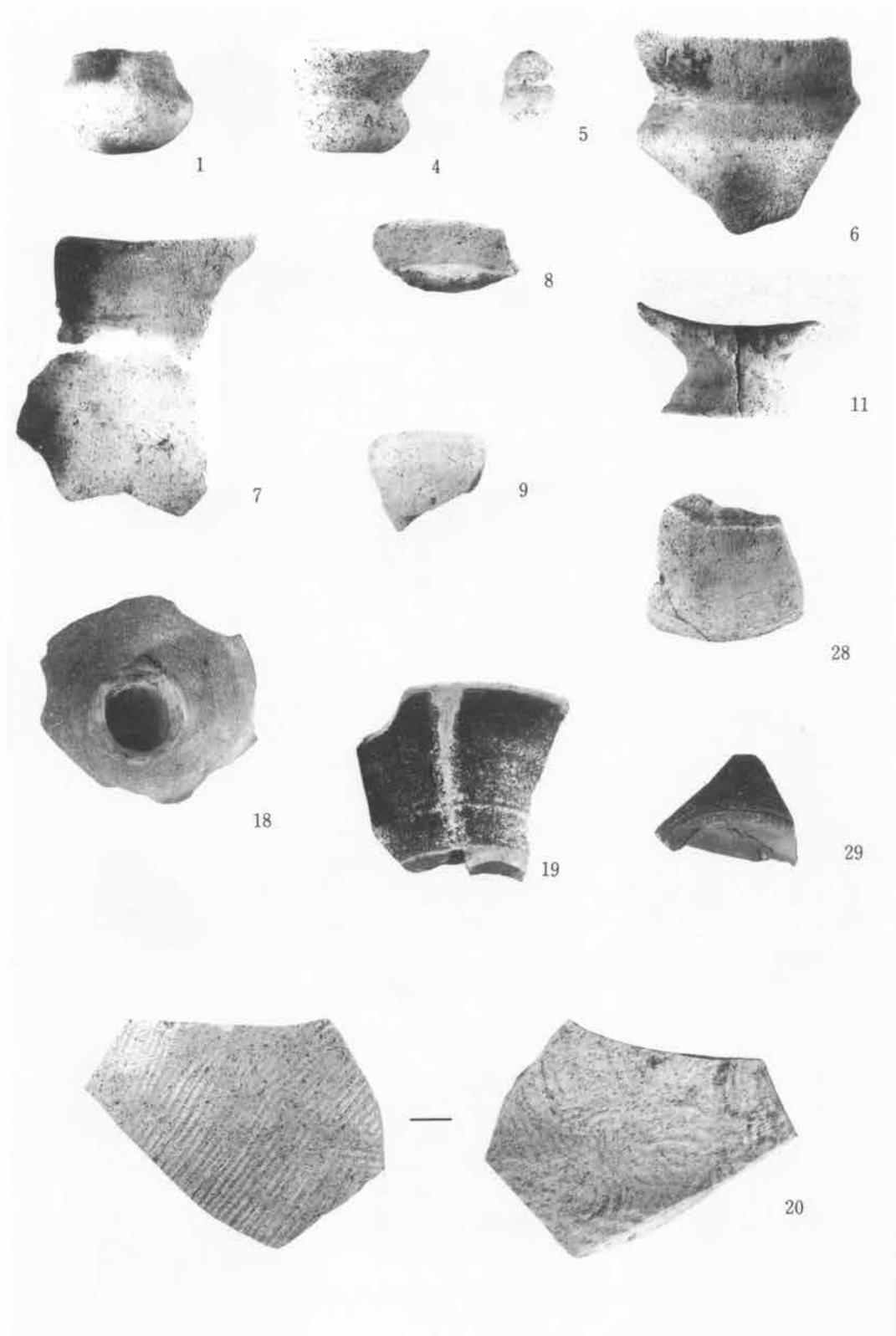
2号柱列東端P-11柱根出土状況



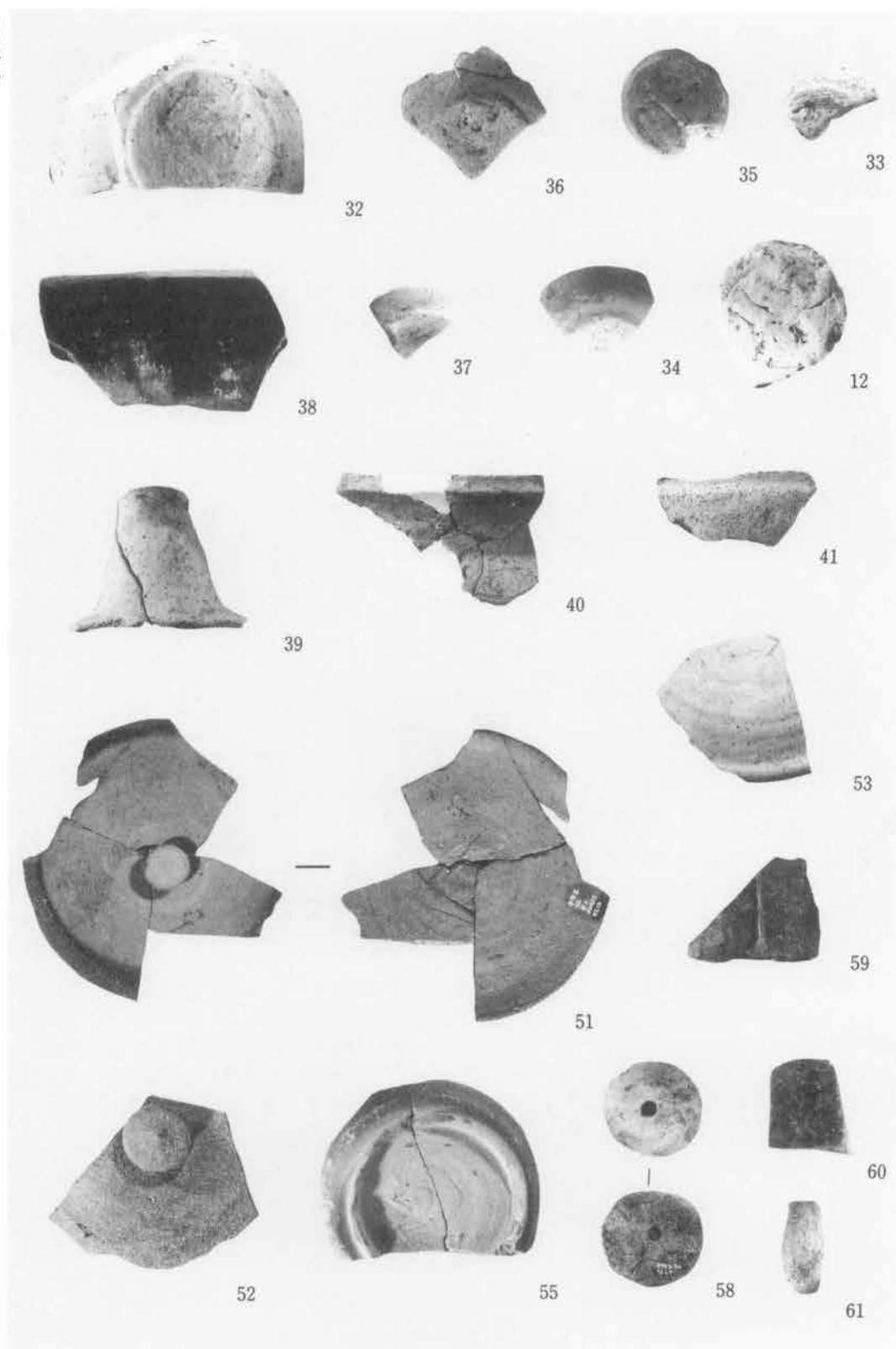
2号柱列西端柱根



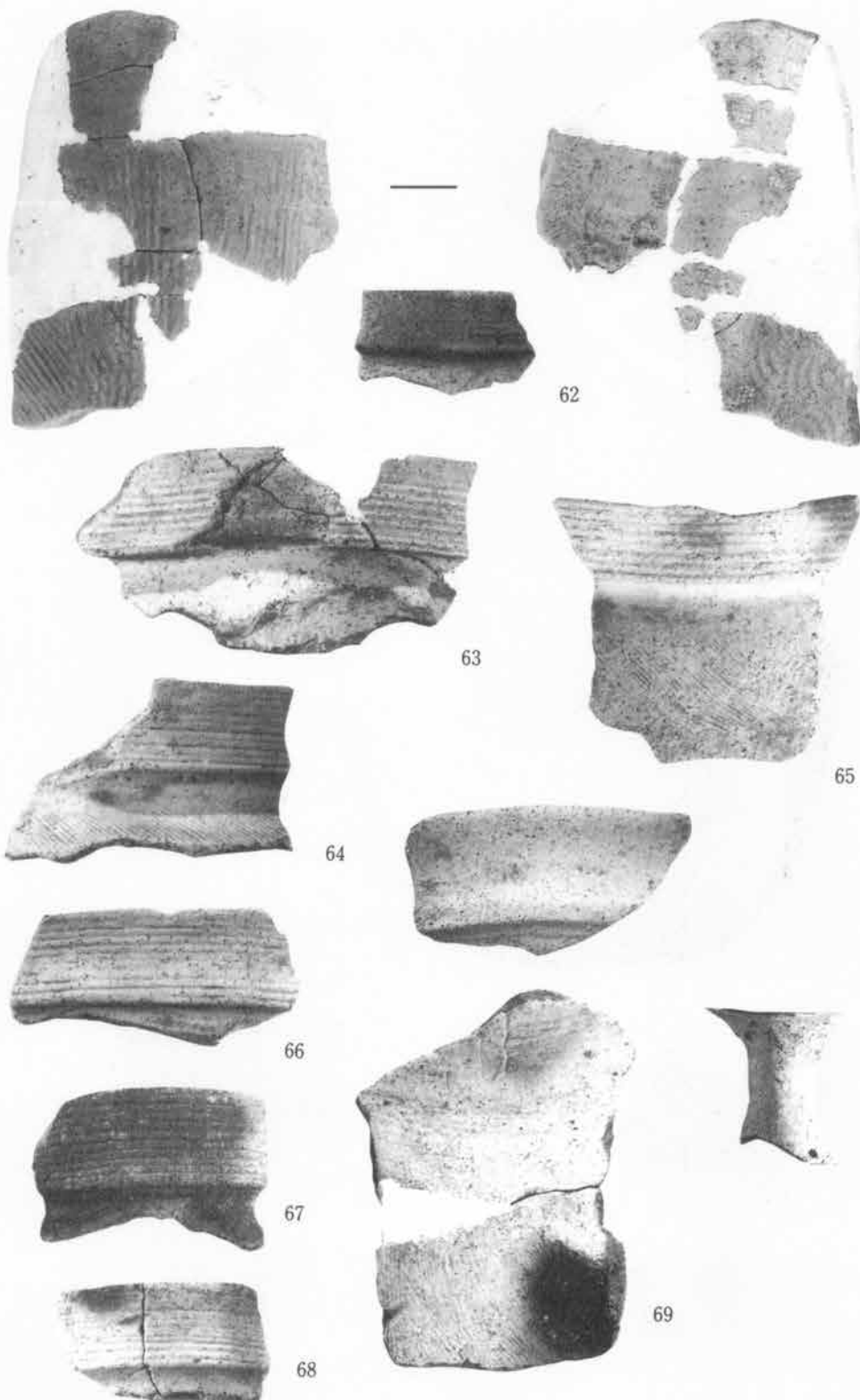
9区遺物出土状況



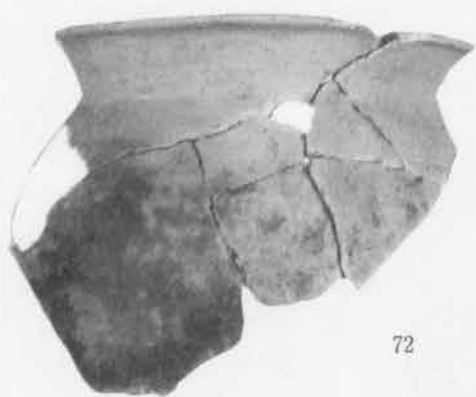
第2次調査出土土器



第2次調査出土土器



第2次調査出土土器



72



74



73



72



76



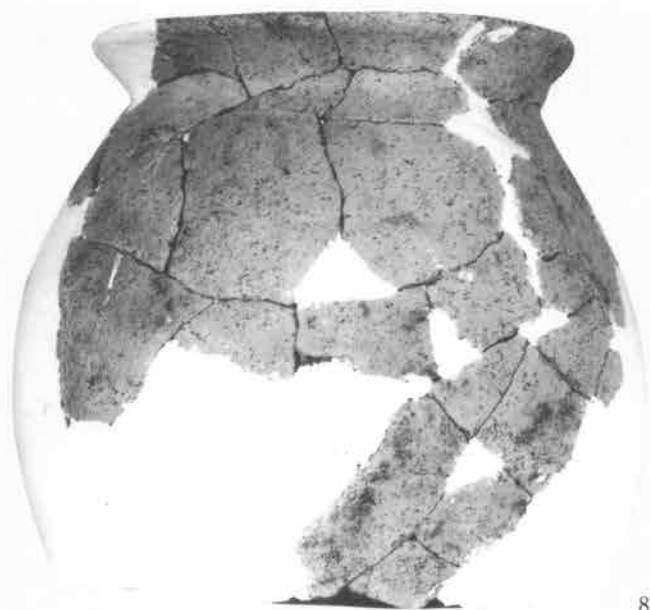
81

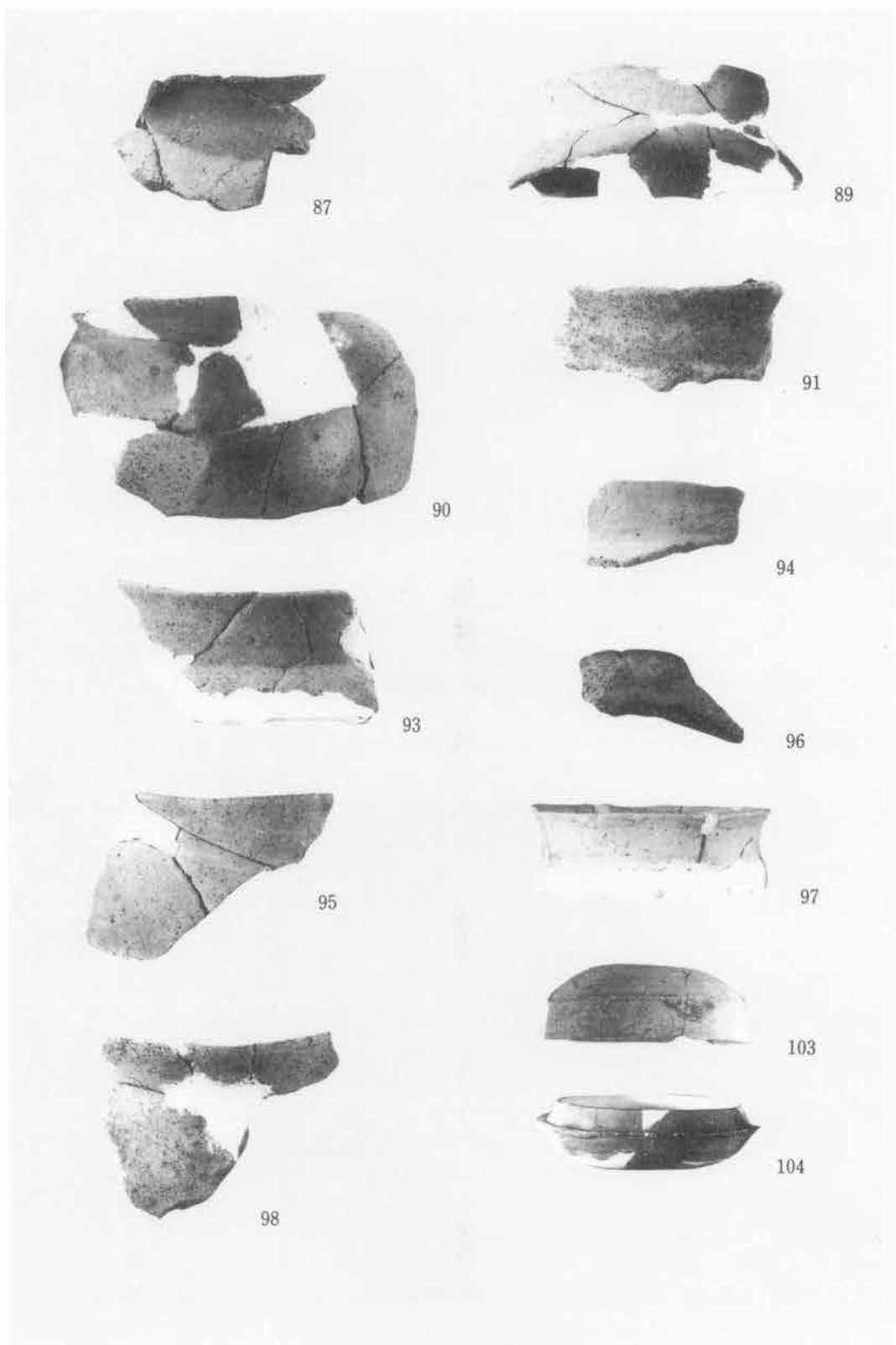


78

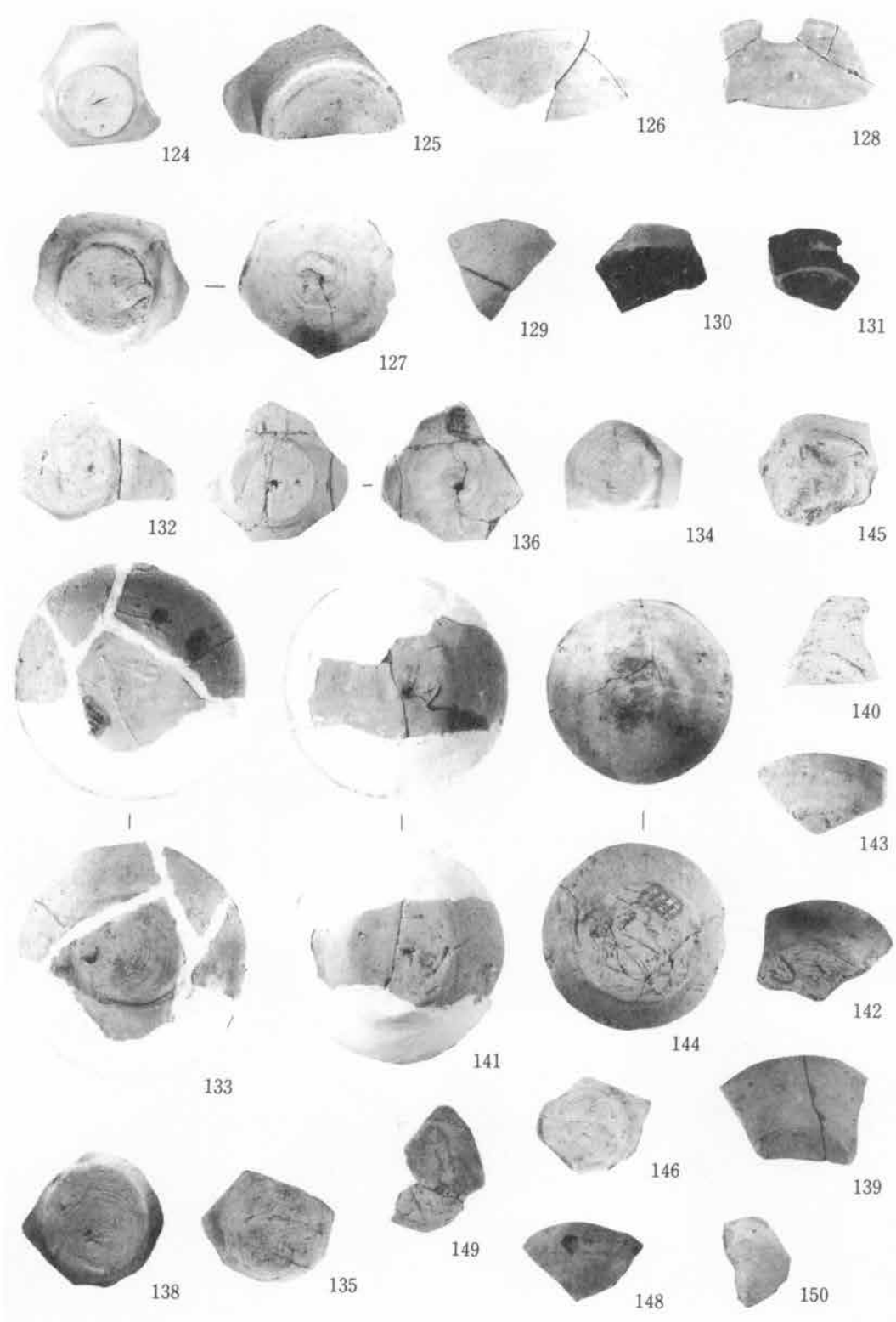


82

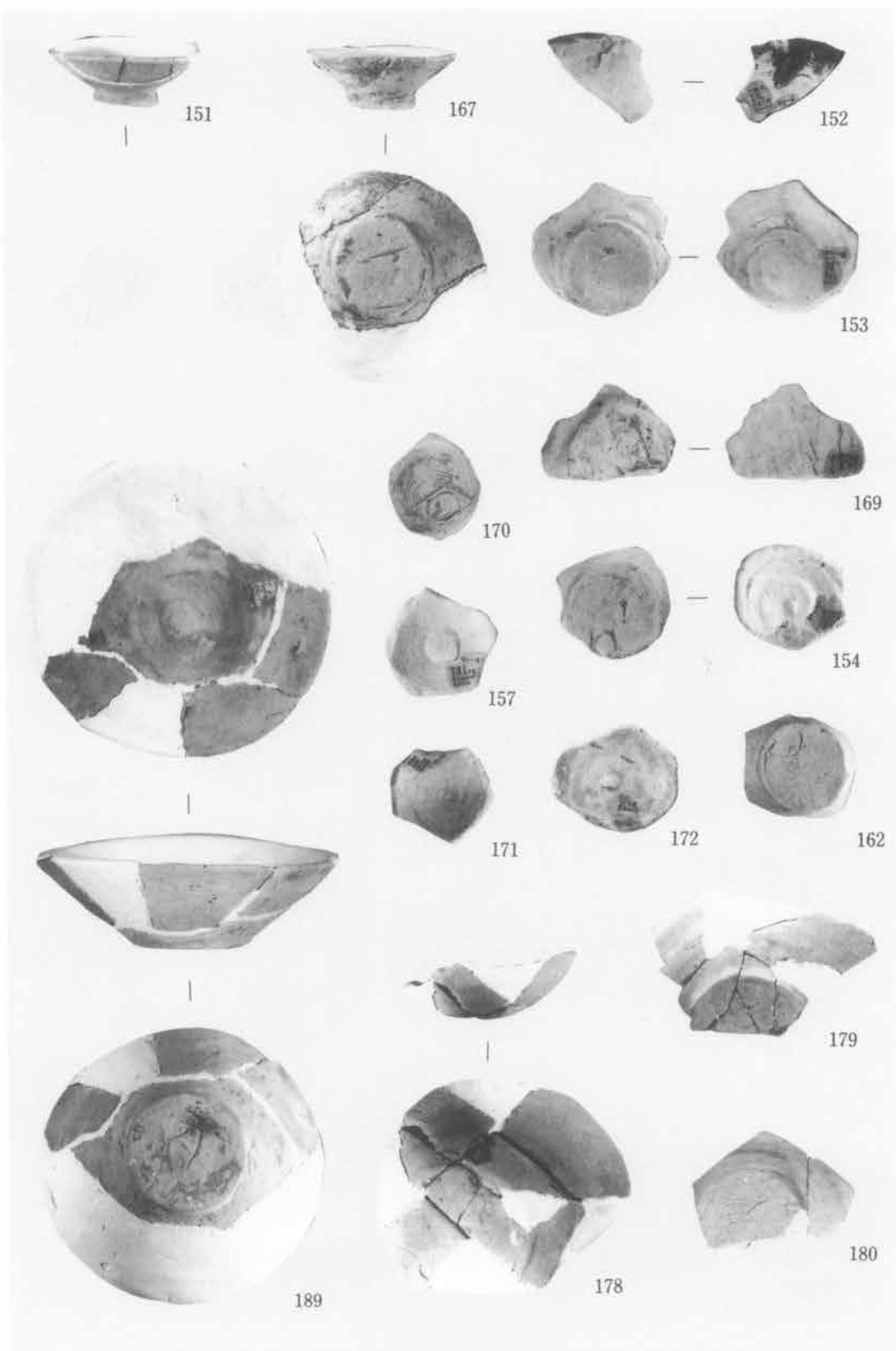




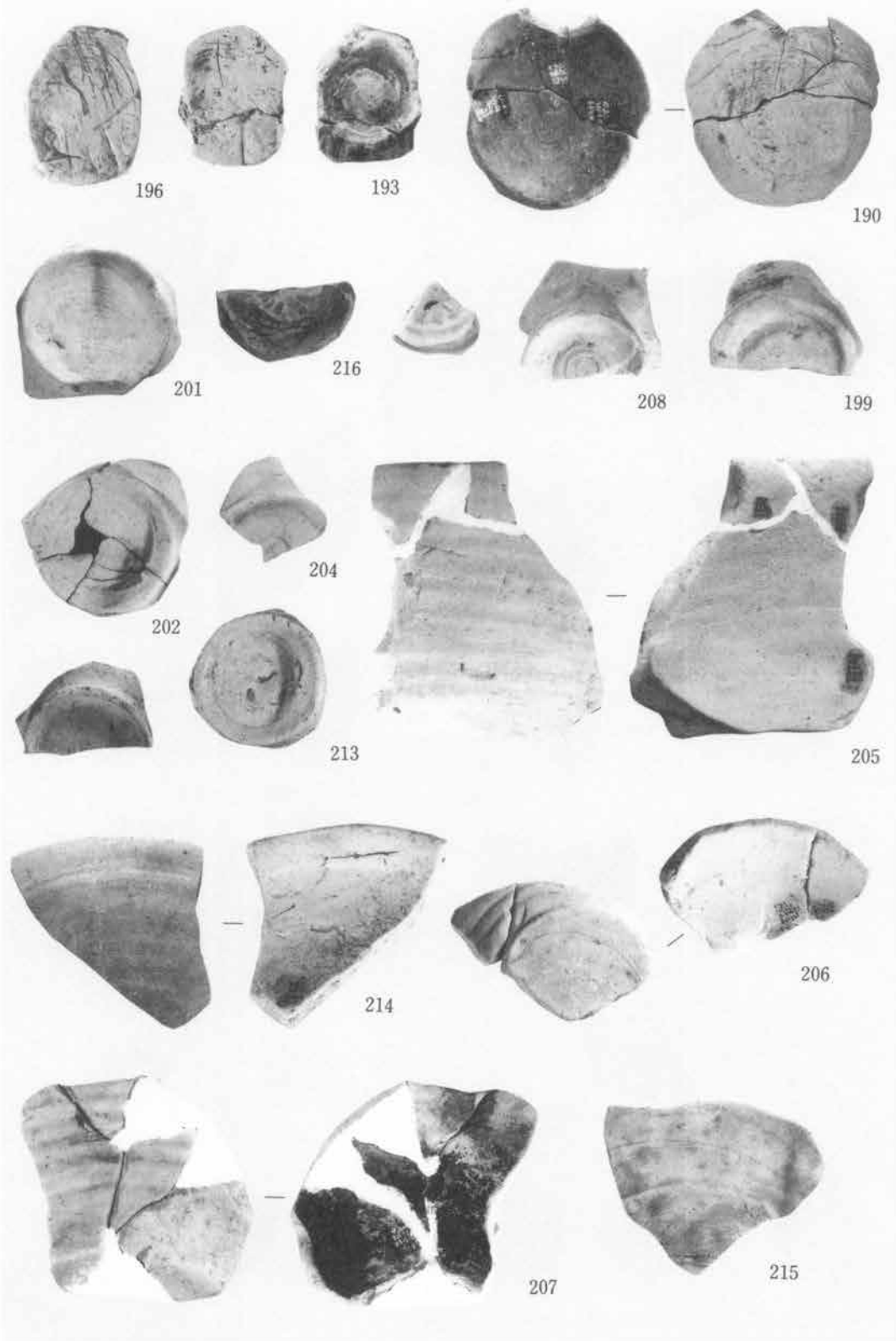
第2次調査出土土器



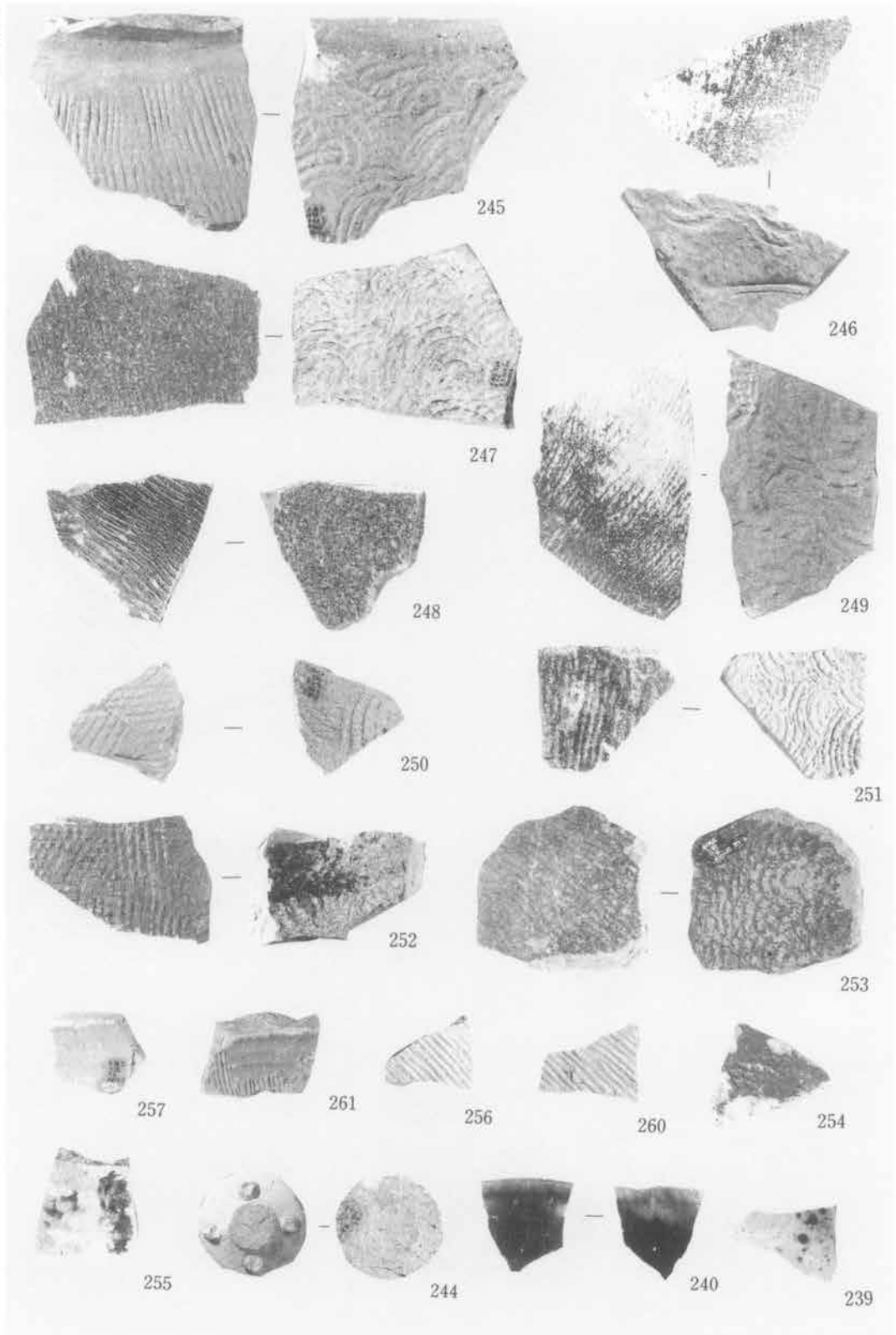
第2次調査出土土器



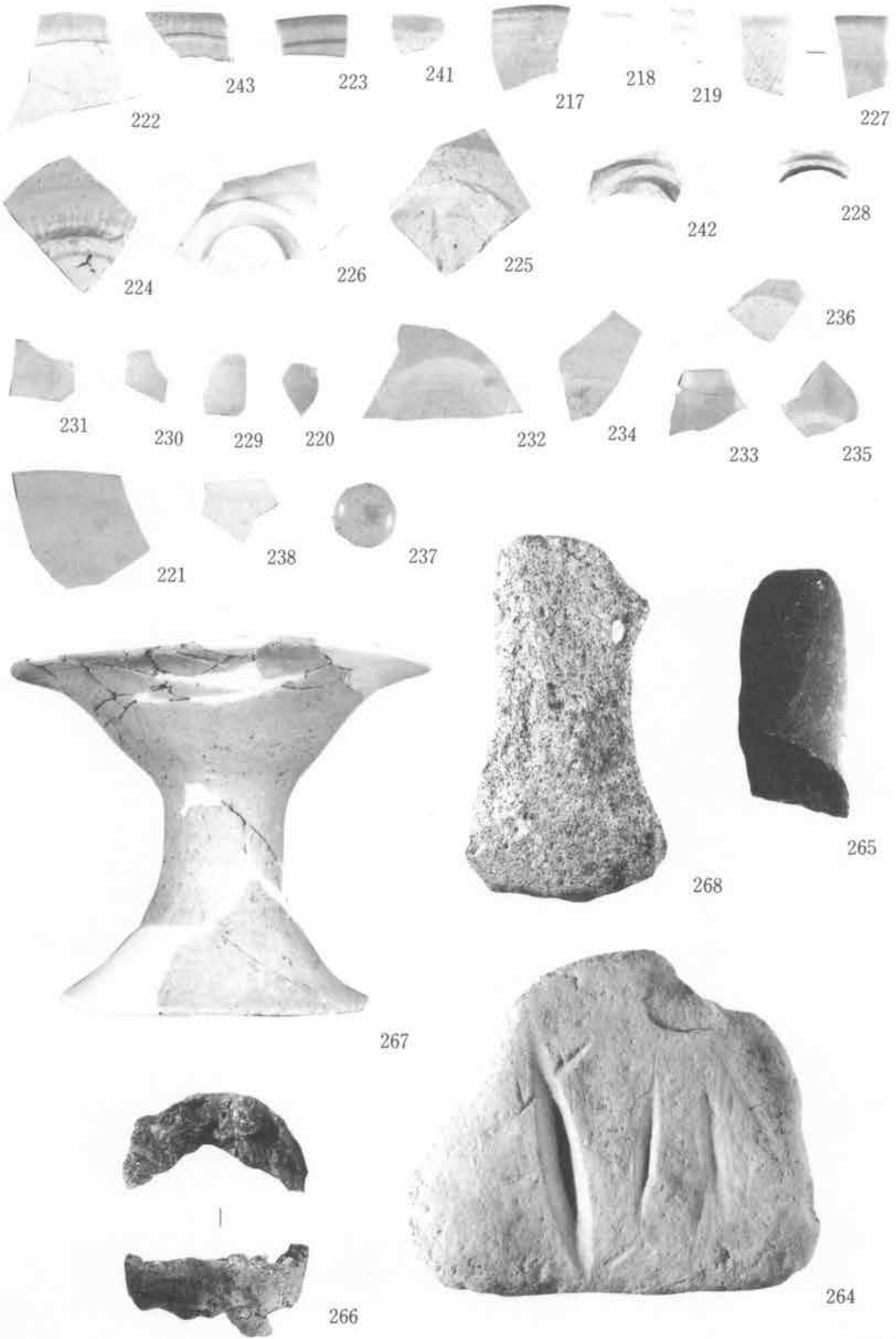
第2次調査出土土器



第2次調査出土土器



第2次調査出土土器



中 海 遺 跡

昭 和 62 年 3 月 25 日 印刷

昭 和 62 年 3 月 30 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町4丁目133番地

〒921 電話(0762)43-7692番(代)

印 刷 中 川 大 正 印 刷 株 式 会 社
